

—嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7 —

平畠遺跡 大野遺跡2
フルタ遺跡 音無瓦窯跡



平成24(2012)年3月

佐賀県教育委員会

—嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7 —

平畠遺跡

大野遺跡 2

フルタ遺跡

音無瓦窯跡

平成 24 (2012) 年 3 月

佐賀県教育委員会

序

本書は、国土交通省九州地方整備局による嘉瀬川ダム建設事業に伴い、佐賀県教育委員会が実施している埋蔵文化財発掘調査の記録をまとめたものです。

今回の報告は、平畠遺跡、大野遺跡、フルタ遺跡と音無瓦窯跡に関するもので、縄文時代の集落跡、中世の居館跡、近世の集落跡、近代の瓦窯跡等を調査しました。いずれも地域の歴史を物語る貴重な資料であり、先人の生活や文化を偲ばせるものです。

本書が学術文化の向上に幾分なりとも寄与し、併せて地域の歴史を学ぶ資料のひとつとして生涯教育や学校教育の場で活用されるものになれば幸いに存じます。

発刊にあたり、埋蔵文化財の保護に深い御理解と多大な御協力を賜った国土交通省嘉瀬川ダム工事事務所並びに関係各位に対し衷心より厚くお礼申し上げ、御挨拶といたします。

平成24年3月

佐賀県教育委員会
教育長 川崎俊広

例 言

- 本書は、嘉瀬川ダム建設事業に伴い佐賀県教育委員会が平成17・19・20・22年度に実施した佐賀市富士町所在の平畠遺跡・大野遺跡4~8区・フルタ遺跡・音無瓦窯跡の発掘調査報告書で、嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第7冊である。
- 発掘調査は、佐賀県教育委員会が主体となり、国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所の委託を受けて実施した。
- 発掘調査にあたっては、国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所、佐賀県土木部ダム対策課・河川砂防課ダム対策室（現・佐賀県土づくり本部水資源調整室）、富士町教育委員会（現・佐賀市教育委員会）、富士町ダム対策課（現・佐賀市富士支所嘉瀬川ダム対策課）、及びに地元各位の協力を得た。
- 本書の表紙と写真図版の一部に用いた平成4年撮影の航空写真は、嘉瀬川ダム工事事務所から提供を受けた。
- 大野遺跡1区については、平成8年度当時の富士町教育委員会により発掘調査が行われたが、同じ嘉瀬川ダム建設に伴う調査であり、隣接する調査区と一連の内容であるため、嘉瀬川ダム工事事務所・佐賀市教育委員会と協議のうえ併せて報告することとした。
- 平畠遺跡・大野遺跡4~8区・フルタ遺跡・音無瓦窯跡の現地調査から報告書作成までの作業に従事したもののは下記のとおりである。

発掘作業：	市丸利光 岡本和子 川原清美 時松紗喜子 東川福代 吉原俊輔 岩熊素子 川崎恵美子 坂井義人 千錦一夫 光武宣子 荒木聖剛 古賀芳子 野中賢之	嬉野サツキ 岡本君子 坂口久江 中田政信 藤田一雄 吉原文代 内川さつき 川崎はつえ 實松政秀 千錦伸義 藤井千枝子 井手口昇 副島正義 野中静枝	大塚信代 小川川千代恵 佐保マリ子 中山博司 豆田正秀 吉原松美 嬉野みつ代 川原トシ子 重松敏行 野田美恵子 古川 紲 江口敏郎 下川利信 諸角敏子	大塚弥生 貝野啓子 下津浦理恵 納富弘子 丸山民江 吉原美智子 遠藤啓輔 北島裕司 進藤睦美 丸内隆康 杠 義臣 江喜 章 竹下政征	岡部禎宏 嘉村末人 庄島信子 野中清輝 宮添廣海 糸山禎一 大谷節子 坂井和子 杉原茂子 三角憲一郎 新井英雄 柿本由紀子 長倉眞美子
遺構実測：	市田佳奈子 柿本由紀子 時松紗喜子 森幸一郎	内田真一郎 下津浦理恵 長倉眞美子 吉田大輔	嬉野サツキ 白木原 宣 西野元勝 (株)埋蔵文化財サポートシステム	嬉野みつ代 竹内奈央 野田美恵子	加藤吾郎 津田 文
遺構写真撮影：今泉好孝 津田 文	内田真一郎 西野元勝	加藤吾郎 森幸一郎	白木原 宣 吉田大輔	竹内奈央 渡部芳久	
遺跡空中写真撮影：(有)空中写真企画					
遺物整理：植木玲子 谷澤裕美	坂本明子 堀田香澄	佐保敦子 松尾三枝子	重田正子	柴村悦子	

遺物実測： 江島美恵子 江副朋子 大串早苗 指山美江子 渋谷 格
上瀧光子 谷澤裕美 辻 静子 鶴田啓子 徳永智恵子
西野元勝 兵動美紀 平山とし 村里育子 山浦美香
山口美佐子 (株)埋蔵文化財サポートシステム

整図（デジタルトレース）： 今泉好孝 白木原 宜 徳永智恵子 西野元勝
藤井菜穂子 (株)とっぺん (株)埋蔵文化財サポートシステム

遺物写真撮影： 渋谷 格 西野元勝

写真整理・編集： 市田佳奈子 奥 知恵子 西野元勝 藤井菜穂子 吉田大輔

調査記録整理： 平畠遺跡）遺構：今泉好孝・西野元勝・吉田大輔
遺物：市田佳奈子・吉田大輔

大野遺跡）遺構：市田佳奈子・竹内奈央・津田文・森幸一郎・吉田大輔・渡部芳久
遺物：市田佳奈子・渋谷 格・徳永貞紹

フルタ遺跡）遺構：内田真一郎・白木原 宜
遺物：市田佳奈子・渋谷 格

音無瓦窯跡）遺構：今泉好孝・白木原 宜・西野元勝
遺物：市田佳奈子・西野元勝

7 本書の編集は藤井菜穂子の協力を得て渋谷 格が行った。執筆分担は下記のとおりである。

第1章、第2章：渋谷 格・徳永貞紹
第3章1・3・4：吉田大輔
第3章2、第4章、第5章：渋谷 格
第6章：西野元勝

8 平畠遺跡・大野遺跡1・4～8区・フルタ遺跡・音無瓦窯跡の整理・報告にあたって、下記の方々から御教示・御協力をいただいた。

熱田貴保 姉川伝 姉川文代 家田淳一 梅木茂雄 大橋康二
徳永貞紹 東中川忠美 日高正幸 平尾和久 水ノ江和同 宮武正登
森田孝志 安武憲史 (五十音順)

本書の記載方法

1 嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の対象遺跡には英大文字3文字の略号を与え、実測図・写真等の記録類や出土遺物の注記等に使用している。本書で報告する平畠遺跡はH T B、大野遺跡はO O N、フルタ遺跡はF R T、音無瓦窯跡はO T Nの略号で示される。

2 個々の遺構名は、遺構の種別を表す英大文字2文字の分類記号（下記参照）と4桁の遺構番号の組み合わせで示す。遺構番号の千の位には、各遺跡の地区名を示す数字を付けている。

なお、小穴・柱穴は遺物の出土したものに限り、Pの略号を用いて他の遺構とは別個の遺構番号を与えている。このうち掘立柱建物や柵列などの遺構を構成するものについては英大文字を用いてP A、P B、…の要領で示し、それ以外の柱穴・小穴については算用数字4桁の一連番号を付け、千の位で地区名を示す。

S A : 柵列・壠・土塁・石塁 S B : 掘立柱建物・礎石建物 S C : 石棺墓・石蓋土坑墓

S D : 堀・溝・流路 S E : 戸門 S F : 道路 S G : 園池・庭園

S H : 穴穴住居・竪穴建物 S J : 瓦棺墓・土器棺墓 S K : 土坑

S P : 土坑墓・木棺墓 S T : 古墳・その他の墳墓 S X : その他・不明遺構

3 出土遺物の○○形土器は、○○とのみ表現する。例) 豊形土器→豊

4 実測した出土遺物には8桁の遺物登録番号を1点ずつ付し、挿図中には各章ごとの通し番号を付した。

5 表で示した出土遺物の計測値は、復元値に*、残存値に+を付けて表現する。表中のMFは微細剥離痕ある剥片を意味する。

6 平成14年4月に改正測量法が施行されたが、調査時の記録類は全て日本測地系による旧国土地標であることから、混乱を回避するため、嘉瀬川ダム建設事業に伴う文化財発掘調査では今のところ世界測地系による座標を使用していない。

本書で示す方位は旧国土地標第II系の座標北で、磁北はこれより西偏約6°30'である。

7 出土遺物に関して、本文・表中で記述の煩雑さを避けるため下記の分類・編年を使用・参照したものがある。

また、陶磁器に関して佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二・家田淳一氏より多くのご教示を賜った。

・中世前期の中国陶磁：

太宰府市教育委員会（2000）『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集

・中世後期の中国陶磁：

森田 勉（1982）「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

上田秀夫（1982）「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

小野正敏（1982）「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

・中世の土器鍋：

徳永貞紹（1990）『肥前における中世後期の在地土器』『中近世土器の基礎研究VI』 日本中世土器研究会

目次

本文目次

第1章 調査の経過.....	1
1 調査の経緯.....	1
2 調査組織.....	1
3 発掘調査の経過.....	2
 第2章 位置と環境.....	7
1 地理的環境.....	7
2 歴史的環境.....	8
 第3章 平畠遺跡.....	13
1 平畠遺跡の概要.....	14
2 縄文時代の遺物.....	17
3 中世の遺構と遺物.....	28
1) 1区中世の遺構と遺物	28
2) 2区の調査	75
4まとめ.....	84
 第4章 大野遺跡1・4～8区.....	93
1 大野遺跡1・4～8区の概要.....	94
2 縄文～古墳時代の遺物.....	98
3 中世の遺構と遺物.....	107
1) 1区中世の遺構と遺物	107
2) 5E区中世の遺構と遺物	122
3) 6B・C区中世の遺構と遺物	126
4) その他中世の遺構と遺物	131
4 近世以降の遺構と遺物.....	145
1) 1・4・5・8区近世以降の遺構と遺物	145
2) 代官所跡周辺の遺構と遺物	160
5まとめ.....	168

第5章 フルタ遺跡	171
1 フルタ遺跡の概要	172
2 縄文時代の遺物	175
3 中世の遺構と遺物	178
1) 遺構と遺構に伴う遺物	178
2) 遺構に伴わない遺物	178
4 近世の遺構と遺物	184
1) 遺構	184
2) 遺物	184
5 まとめ	189
第6章 音無瓦窯跡	191
1 音無瓦窯跡の概要	192
2 近代の遺構と遺物	195
3 旧石器～縄文時代の遺物	210
4 まとめ	216

挿図目次

図 1	嘉瀬川ダム水没地区周辺と埋蔵文化財調査地区（1/25,000）	3
図 2	大野遺跡・平畠遺跡・フルタ遺跡・音無瓦窯跡の位置（1/600,000）	9
図 3	嘉瀬川ダム建設予定地周辺の遺跡（1/100,000）	10
図 4	平畠遺跡周辺の地形（1/5,000）	15
図 5	平畠遺跡1・2区の位置（1/2,500）	16
図 6	試掘坑の位置（1/1,000）	17
図 7	縄文時代土器の平面分布（1/300）	18
図 8	縄文時代土器類別の平面分布（1/250）	19
図 9	縄文時代石器の平面分布（1/300）	20
図 10	縄文時代定形石器の平面分布（1/250）	21
図 11	1区の土層（1/60）	22
図 12	縄文時代の土器1（1/3）	23
図 13	縄文時代の土器2（1/3）	24
図 14	縄文時代の石器（34～48は2/3、49・50・52は1/2、51は1/3）	25
図 15	1区の遺構分布、試掘坑の位置（1/500）	29
図 16	1区北半部の遺構分布（1/250）	30
図 17	1区北半部の遺構集中部（1/250）	31
図 18	1区北半部の遺構分布詳細1（1/150）	32
図 19	1区北半部の遺構分布詳細2（1/150）	33
図 20	1区北半部の遺構分布詳細3（1/150）	34
図 21	1区中世の掘立柱建物1（1/80）	36
図 22	1区中世の掘立柱建物2（1/80）	37
図 23	1区中世の掘立柱建物3（1/80・1/100）	39
図 24	1区中世の掘立柱建物4（1/100）	40
図 25	1区中世の掘立柱建物5（1/100）	41
図 26	1区中世の掘立柱建物6（1/100）	43
図 27	1区中世の掘立柱建物7（1/80）	44
図 28	1区中世の掘立柱建物8（1/100）	45
図 29	1区中世の掘立柱建物9（1/100・1/80）	47
図 30	1区中世の掘立柱建物10（1/100）	49
図 31	1区中世の掘立柱建物11（1/80）	50
図 32	1区中世の掘立柱建物12（1/100）	51
図 33	1区中世の掘立柱建物13（1/100）	53
図 34	1区中世の掘立柱建物14（1/80）	54
図 35	1区中世の掘立柱建物15（1/80）	55
図 36	1区中世の掘立柱建物16（1/80）	57
図 37	1区中世の掘立柱建物17（1/80）	59
図 38	1区中世の掘立柱建物18（1/100・1/80）	60

図 39 1区中世の掘立柱建物 19 (1/80)	61
図 40 1区中世の掘立柱建物 20 (1/100)	63
図 41 1区中世の掘立柱建物 21 (1/80)	64
図 42 1区中世の掘立柱建物 22 (1/100)	65
図 43 1区中世の掘立柱建物 23 (1/80)	67
図 44 1区中世の掘立柱建物 24 (1/80)	69
図 45 1区中世の掘立柱建物 25 (1/80)	70
図 46 1区中世の掘立柱建物 26 (1/80)	71
図 47 1区中世の柵列 (1/80)	73
図 48 1区性格不明遺構・溝の土層 (1/60・1/20)	74
図 49 2区の遺構分布、試掘坑の位置 (1/300)	76
図 50 1区中世の遺物 1 (1/3)	77
図 51 1区中世の遺物 2 (1/3)	78
図 52 1区中世の遺物 3 (1/3)	79
図 53 1区中世の遺物 4 (1/3)	80
図 54 A群の遺構配置 (1/250)	86
図 55 B群の遺構配置 (1/250)	87
図 56 C群の遺構配置 (1/250)	88
図 57 D群の遺構配置 (1/250)	89
図 58 大野遺跡周辺の地形 (1/5,000)	95
図 59 大野遺跡 1・4～8区の位置 (1/2,500)	96
図 60 大野遺跡の調査範囲 (1/2,500)	97
図 61 繩文～古墳時代の遺物 (1～8は1/3、9～13は2/3、14～17は1/2)	99
図 62 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 1 (1/300)	100
図 63 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 2 (1/300)	101
図 64 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 3 (1/300)	102
図 65 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 4 (1/300)	103
図 66 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 5 (1/300)	104
図 67 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 6 (1/300)	105
図 68 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 7 (1/300)	106
図 69 1B区中世～近世の遺構分布 (1/200)、土層 (1/40、1/60)	109
図 70 1B区中世の溝出土遺物 (1/3)	110
図 71 1B区中世の包含層F出土遺物 1 (1/3)	111
図 72 1B区中世の包含層F出土遺物 2 (74は1/3、75・76は1/2)	112
図 73 1B区中世の柵列 (1/80)	113
図 74 1区中世の土坑 (1/40)	115
図 75 1・5B区中世の土坑 (1/40)	116
図 76 1区中世の土坑出土遺物 (1/3)	117
図 77 1A区中世の自然流路出土遺物 (127は1/4、他は1/3)	119
図 78 1区中世の出土遺物 1 (1/3)	120

図 79 1区中世の出土遺物2（159～166は1/3、167・168は1/2、169・170は1/4）	121
図 80 5E区の遺構分布（1/100）、SX5008（1/40）	123
図 81 5E区の土層（1/50）	124
図 82 5E区の出土遺物（1/3）	125
図 83 6B区の遺構分布（1/100）	127
図 84 6B区の遺構分布（1/100）	128
図 85 6C区の遺構分布（1/125）	129
図 86 6C区の遺構分布（1/125）	130
図 87 6C区中世の掘立柱建物（1/60）	131
図 88 6C区中世の柵列（1/60）	132
図 89 6B・C区の出土遺物（224は1/2、他は1/3）	133
図 90 5B区中世の出土遺物（1/3）	134
図 91 中世の出土遺物（291・292は1/2、他は1/3）	135
図 92 4B・5B区の土層（1/60）	146
図 93 1A区近世の溝・石列（1/100）、土層（1/40）	147
図 94 1A区近世の掘立柱建物1（1/80）	149
図 95 1A区近世の掘立柱建物2（1/80）	150
図 96 1A区近世の掘立柱建物3（1/80）	151
図 97 5B区SB5013（1/80）	152
図 98 4B区SA4007（1/60）、8区SK8001（1/40）	154
図 99 1A・4B・5B区の鍛冶関連遺構（1/20・1/40）	155
図 100 近世の出土遺物1（314・315は1/2、他は1/3）	157
図 101 近世の出土遺物2（1/3）	158
図 102 近世の出土遺物3（361～346は1/2、365・366は1/6、他は1/3）	159
図 103 大野代官所跡周辺調査区の位置（1/500）	161
図 104 5C区の遺構分布（1/150）	162
図 105 5C区の土層（1/60）	163
図 106 5C区近世の出土遺物（367～382は1/3、383・384は1/2、358～390は1/5）	164
図 107 フルタ遺跡周辺の地形（1/5,000）	173
図 108 フルタ遺跡1～3区の位置（1/2,000）	174
図 109 繩文時代の遺物（1～8は1/3、9～18は2/3、19・20は1/2）	176
図 110 1区の遺構分布（1/500）	177
図 111 1区・SD1001の土層（1/60）	179
図 112 1・3区の土層（1/60）	180
図 113 SX1002（1/60）	181
図 114 中世の遺物（1/3）	182
図 115 2区の遺構分布（1/100）	185
図 116 2区の土層（1/60）	186
図 117 近世の遺物（1/3）	187
図 118 音無瓦窯跡周辺の地形（1/5,000）	193

図 119 音無瓦窯跡の位置 (1/2,000)	194
図 120 音無瓦窯跡遺構の分布 (1/300)	195
図 121 SX001 の平面・立面 (1/60)	196
図 122 SX001 の土層 (1/50)	197
図 123 調査区北壁・試掘坑1の土層 (1/100)	198
図 124 焼成室計測箇所・各部の名称	200
図 125 SX002・SX003 (1/20)	203
図 126 出土遺物1 (1/6)	204
図 127 出土遺物2 (1/6)	205
図 128 出土遺物3 (19~23は1/3、24~27は1/6)	206
図 129 出土遺物4 (1/6)	207
図 130 出土遺物5 (1/6)	209
図 131 出土遺物6 (1/6)	211
図 132 出土遺物7 (59~63は1/6、64~67は1/2)	212

表目次

表 1 嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	2
表 2 平畠遺跡縄文時代の出土土器	26
表 3 平畠遺跡縄文時代の出土石器	27
表 4 平畠遺跡中世の出土遺物	81
表 5 大野遺跡縄文～古墳時代の出土遺物	98
表 6 大野遺跡中世の出土遺物	136
表 7 大野遺跡近世以降の出土遺物	165
表 8 フルタ遺跡縄文時代の出土土器	175
表 9 フルタ遺跡縄文時代の出土石器	177
表 10 フルタ遺跡中世の出土遺物	183
表 11 フルタ遺跡近世の出土遺物	188
表 12 焼成室各部の計測表	200
表 13 音無瓦窯跡近代の出土遺物	213
表 14 音無瓦窯跡旧石器～縄文時代の出土石器	215

写真目次

写真図版 1	嘉瀬川ダム予定地周辺（真俯瞰合成）	221	
写真図版 2	平畠遺跡遠景（南から）	222	
写真図版 3		223	
	平畠遺跡全景（上が北東）	平畠遺跡全景（南西から）	
写真図版 4		224	
	1区全景（上が西）	1区北半部（南東から）	
写真図版 5		225	
	遺構集中部（上が北東）	遺構集中部 中央から東側（上が北東）	
写真図版 6		226	
	遺構集中部 中央から南側（上が北東）	遺構集中部 中央から西側（上が北東）	
写真図版 7		227	
	SB3001・SB3007周辺（上が北東）	SB3018周辺（上が北東）	SB3040周辺（上が北東）
写真図版 8		228	
	SB3052周辺（上が北東）	SB3046周辺（上が北東）	SX1874、SD1001・1002、SB3052周辺（南東から）
写真図版 9		229	
	SX1874（東から）	SB3010PG 調出土状況（北から）	
	試掘坑3の土層（南東から）	試掘坑11の土層（北から）	
	1区東壁の土層（北から）	試掘坑14の土層（東から）	
	SD1001・SD1002（南東から）	試掘坑8の土層（北から）	
写真図版 10	平畠遺跡縄文時代の出土遺物 1	230	
写真図版 11	平畠遺跡縄文時代の出土遺物 2	231	
写真図版 12	平畠遺跡中世の出土遺物 1	232	
写真図版 13	平畠遺跡中世の出土遺物 2	233	
写真図版 14	平畠遺跡中世の出土遺物 3	234	
写真図版 15	大野遺跡遠景（南から）	235	
写真図版 16		236	
	1区 遠景（北から）	1区 遠景（北西から）	
写真図版 17		237	
	1A区 南半部（真上から）	1B区 全景（真上から）	
写真図版 18		238	
	4B区 全景（真上から）	4A区 全景（真上から）	
写真図版 19		239	
	5B区 全景（北東から）	8区 全景（北から）	6A区 全景（北から）
写真図版 20		240	
	1B区 SD1246・1835土層（南西から）	1A区 SK1016（東から）	
	1B区 SK1727（南西から）	1B区 SD1835（北東から）	
	1B区 SD1246（北東から）	1B区 SD1246・1835・SD1851土層（南東から）	
	1A区 SK1014（北西から）	1A区 P1023杓子状陶製品出土状況（北から）	

写真図版 21		241
5E 区 東壁土層（東から）	5E 区 全景（南東から）	5E 区 SX5008（東から）
写真図版 22		242
5E 区 西壁土層（東から）	5E 区 SX5008（西から）	
6B・C 区 遠景（南西から）	6B 区 SA6008（東から）	
5E 区 SX5008 と東壁土層（北西から）	5E 区 SX5008 土師器小皿出土状況（北から）	
6B 区 植出状況（北東から）	6B 区 SB6004 敷石出土状況（東から）	
写真図版 23		243
6C 区 全景（北から）	6B 区 全景（北から）	
写真図版 24 大野遺跡縄文～古墳時代の出土遺物、中世の出土遺物 1		244
写真図版 25 大野遺跡中世の出土遺物 2		245
写真図版 26 大野遺跡中世の出土遺物 3		246
写真図版 27 大野遺跡中世の出土遺物 4		247
写真図版 28 大野遺跡中世の出土遺物 5		248
写真図版 29 大野遺跡中世の出土遺物 6		249
写真図版 30 大野遺跡中世の出土遺物 7		250
写真図版 31 大野遺跡中世の出土遺物 8		251
写真図版 32		252
4B 区 西壁土層（東から）	1A 区 SD1009・1862（東から）	
5B 区 SB5013（北から）	1A 区 SK1005（南東から）	
5B 区 南壁土層（東から）	1A 区 SD1009・1862 土層（南から）	
8 区 SK8001（北から）	1A 区 SX1244（東から）	
写真図版 33		253
1A 区 SX1024 土層（北西から）	5B 区 SX5009（南から）	
5C 区 全景（南から）	5CS 区 道路構造土層（南西から）	
5C 区 全景（北西から）	5CS 区 全景（南西から）	
5C 区 試掘坑 20（南から）	1A 区 SX1024（北から）	
写真図版 34 大野遺跡近世以降の出土遺物 1		254
写真図版 35 大野遺跡近世以降の出土遺物 2		255
写真図版 36 大野遺跡近世以降の出土遺物 3		256
写真図版 37 フルタ遺跡遠景（南から）		257
写真図版 38		258
道路 遠景（北東から）	道路 全景（東から）	
写真図版 39		259
1 区 全景（北東から）	1 区 南壁土層（西から）	
2 区 全景（北から）	2 区 P2065 土層（南から）	
1 区 試掘坑 4 土層（北西から）	1 区 SX1002（西から）	
3 区 試掘坑 1 土層（から）	2 区 P2062 土層（北から）	
写真図版 40 フルタ遺跡縄文時代・中世の出土遺物		260
写真図版 41 フルタ遺跡縄文・中世・近世の出土遺物		261

写真図版 42	263	
	調査区全景 調査前（南西から）	調査区全景 伐採後（南から）	SX001 全景 棲出時（南から）
写真図版 43	264	
	SX001 全景（南から）	調査区全景（南から）	
写真図版 44	265	
	SX001 全景（東から）	SX001 南北土層断面（南西から）	調査区北壁・試掘坑1 土層断面（南西から）
写真図版 45	266	
	SX001 焚き口土層断面（南西から）	調査区北壁土層断面西側（南東から）	
	SX001 東西土層断面西側（南から）	調査区北壁土層断面東側（南東から）	
	SX001 燃焼室土層断面（南西から）	SX001 東西土層断面東側（南西から）	
	試掘坑1 上層断面（南東から）	調査区北壁土層断面（南東から）	
写真図版 46	267	
	SX001 燃焼室・第1焼成室出入口（南東から）	SX001 第2～第4焼成室出入口（南東から）	
	第1・第2焼成室のロストル構造（南から）		
写真図版 47	268	
	SX001 燃焼室（南から）	SX001 第1焼成室（南東から）	
	SX001 第2焼成室（南東から）	SX001 第2焼成室染付磁器出土状況（南東から）	
	SX001 燃焼室内側の煉瓦積（東から）	SX001 第1焼成室ロストル部（東から）	
	SX0001 第2焼成室ロストル部（東から）	SX003 第3焼成室ロストル部（東から）	
写真図版 48	269	
	SX001 第3焼成室（南東から）	SX002（南西から）	
	SX004・SX005・SX006 全景（南から）	SX005 近景（北東から）	
	SX001 第4焼成室（南東から）	SX003（南東から）	
	SX006・SX007 全景（南西から）	SX004 近景（北東から）	
写真図版 49	音無瓦窯跡の出土遺物 1	270
写真図版 50	音無瓦窯跡の出土遺物 2	271
写真図版 51	音無瓦窯跡の出土遺物 3	272
写真図版 52	音無瓦窯跡の出土遺物 4	273

第1章 調査の経過

1 調査の経緯

嘉瀬川ダムは、嘉瀬川水系嘉瀬川の総合開発の一環として佐賀県佐賀市富士町（平成17年10月1日に佐賀市、佐賀郡富士町、同郡大和町、同郡諸富町、神埼郡三瀬村が対等合併した）で建設が進められており、洪水調節をはじめ、流水の正常な機能の維持、灌漑用水及び都市用水の補給、及び水力発電に供される多目的ダムである。

嘉瀬川ダム建設事業とこれに伴う文化財調査の詳しい経緯については既刊の『東畠瀬遺跡1・大野遺跡1』に記しているので参照されたい。平成23年度は事業の最終年度であり、本書を含め3冊の発掘調査報告書を刊行する予定である。

本書は、嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第7冊目となるもので、りらばけい　ひづれ 平畠遺跡、おほの 大野遺跡1・4～8区、フルタ遺跡、音無瓦窯跡の4地区を収録した。

2 調査組織

調査主体 佐賀県教育委員会

調査協力 国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所

富士町教育委員会（現・佐賀市教育委員会）

佐賀県土木部ダム対策課・河川砂防課ダム対策室（現・佐賀県土づくり本部水資源調整室）

富士町ダム対策課（現・佐賀市富士支所嘉瀬川ダム対策課）

地元各位

調査組織（平成23年度）

総括	佐賀県教育委員会教育長	川崎俊広
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課長	瀬戸口義郎
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課副課長	森田孝志
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課副課長	徳富則久
調査総括	佐賀県教育庁社会教育・文化財課係長	白木原 宜
調査員	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	梶山裕史
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	今泉好孝
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	渡谷 格
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	市田佳奈子
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	西野元勝
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課嘱託	藤井菜穂子
事務局	佐賀県教育庁社会教育・文化財課副課長	古川英生
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	井手弘幸
	佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査	黒田康裕

調査指導・助言 文化庁記念物課 佐賀県文化財保護審議会

3 発掘調査の経過

嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、関連工事に伴って富士町教育委員会（当時）により平成7～9年に断続的に行われたが、平成11～12年度の水没地区内確認調査の結果を踏まえ、平成12年度以降は佐賀県教育委員会が継続して実施している。水没地区内及び付替国道・付替市道など嘉瀬川ダム工事事務所所管工事に伴って発掘調査が必要な遺跡は、13遺跡にのぼり（表1、図1）、平成22年度前半までに東畠瀬遺跡、知瀬城跡、西畠瀬遺跡、垣ノ内遺跡、小ヶ倉遺跡、入道遺跡、音無瓦窯跡、地蔵平遺跡、九郎遺跡、大串遺跡、平畠遺跡、フルタ遺跡、大野遺跡のすべての本調査対象地区で発掘作業を終了しており、調査報告書を6集刊行している。

表1 嘉瀬川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

番号	遺跡名	略号	対象面積 (m ²)	遺跡の時代	遺跡の種類
①	東畠瀬遺跡	HHT	121,300	縄文～近世	集落・城郭 神社・墓地
②	知瀬城跡	HTJ	12,800	中世～近世	城郭・墓地
③	西畠瀬遺跡	NHT	58,800	縄文～近世	集落
④	垣ノ内遺跡	KNU	21,000	弥生～古墳	集落
⑤	九郎遺跡	KRO	17,950	旧石器～近世	集落
⑥	大串遺跡	OOK	3,000	中世	集落
⑦	大野遺跡	OON	35,200	縄文～近世	集落・官衙

番号	遺跡名	略号	対象面積 (m ²)	遺跡の時代	遺跡の種類
※	フルタ遺跡	FRT	11,700	縄文～近世	集落
※	小ヶ倉遺跡	KKA	47,000	旧石器～近世	集落
※	地蔵平遺跡	JZD	20,000	旧石器～縄文	集落
※	平畠遺跡	HBT	13,000	縄文～近世	集落
※	音無瓦窯跡	OTN	1,500	近世	生産遺跡
※	入道遺跡	NYD	400	旧石器～縄文	集落

本書で報告する平畠遺跡の発掘調査は、平成20年度に実施した。調査は、まず掘削機によって表土などを除去して、遺構の確認を行った。その結果、1区北部で多数の小穴が検出され、中世の屋敷地であることが明らかとなつた。詳細に検討すると、多くの掘立柱建物を復元することができ、敷地の広さや建物の配置などから在地領主クラスの有力者層の屋敷地であると推定される。ただ、当初上層の遺構密度がこれほど高いことが予想されていなかつたため、下層の縄文時代の遺物包含層については、充分に調査の期間を取ることができなかつた。

平畠遺跡

略号：HTB

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字大野字二本松

調査対象面積：13,000m²

調査担当：今泉好孝・吉田大輔（平成20年度）

大野遺跡4～8区は、平成17年度に4区、平成19・20年度に5～8区の発掘調査を行った。多くの地区が厚い造成土と石垣を伴う現代の屋敷地であり、隣接して国道があったため、広い調査区を設定することはできなかつた。

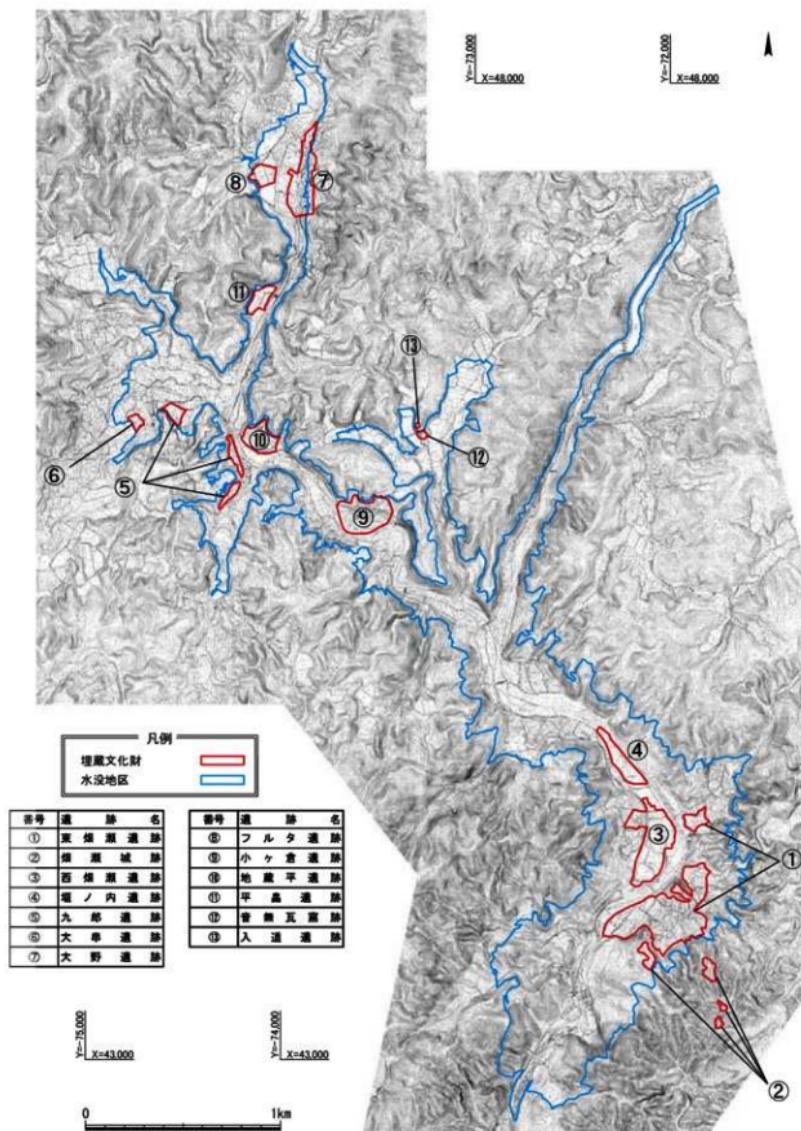


図1 嘉瀬川ダム水没地区周辺と埋蔵文化財調査地区 (1/25,000)

調査の経過

た。調査は主として、それぞれの屋敷地にまず試掘坑を設け、遺構面が確認された部分を拡張するという方法を探り、拡張した調査区には区ごとに A・B…と小地区を示す番号を付した。調査の結果、中世～近世の遺構・遺物を確認し、大野代官所関連の遺構も検出した。なお、本書では時代別に記述したため、個々の調査区・試掘坑の説明を省略したものがある。

また、1区の調査は平成8年度に富士町教育委員会（当時）が実施している。1区は現代の水路により調査区が分かれており、南側を1A区、北側を1B区として報告する。1区については、調査内容の簡単な報告があるが（佐賀県文化財譜1998）、整理・報告段階において遺構の時期を大きく変えている。なお、1区の調査では、遺物が出土した小穴も含めたすべての遺構に一連の番号を付している。

大野遺跡1区

略号：OON 1

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字大野字一本松

調査対象面積：3,500m²

調査担当：宗像剛（富士町教育委員会：平成8年度）

大野遺跡4区

略号：OON 4

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字大野字一本松

調査対象面積：10,700m²

調査担当：加藤吾郎・市田佳奈子（平成17年度）

大野遺跡5区

略号：OON 5

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字大野字一本松

調査対象面積：11,900m²

調査担当：竹内奈央・森幸一郎（平成19年度）

大野遺跡6区

略号：OON 6

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字大野字一本松

調査対象面積：3,000m²

調査担当：津田文・吉田大輔・渡部芳久（平成20年度）

大野遺跡7区

略号：OON 7

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字大野字一本松

調査対象面積：3,200m²

調査担当：白木原宣（平成20年度）

大野遺跡8区

略号：OON 8

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字大野字一本松

調査対象面積：400m²

調査担当：白木原宣・津田文（平成20年度）

フルタ遺跡の発掘調査は平成 20 年度に実施したが、北山中学校の移転時期と重なったこともあり、調査対象地区全域を同時に調査することはできなかった。調査の結果、縄文時代・中世の遺物包含層、中世後期と思われる自然路、近世の小穴群などを確認した。

フルタ遺跡

略号：F R T

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字大野字二本松^{ヒコツマツ}

調査対象面積：11,700m²

調査担当：白木原宜・内田真一郎（平成 20 年度）

音無瓦窯跡は、聞き取りにより江戸時代に遡る可能性がある瓦窯が存在が知られたが、確認調査では瓦などの遺物が出土しただけで、窯体について残存しているかは不明であった。発掘調査は平成 22 年度に実施し、窯体の有無を確認するため、人力で表土掘削を行った。その結果、近代の瓦窯跡が比較的良好に残っていることが判明し、物原・瓦溜などを確認した。

音無瓦窯跡

略号：O T N

所在地：佐賀県佐賀市富士町大字大野字古賀^{コガ}

調査対象面積：1,500m²

調査担当：今泉好孝・白木原宜・西野元勝（平成 22 年度）

調査記録や出土遺物の整理は発掘作業と並行して順次進めたが、本格的な報告書作成作業は平成 22 年度から着手し、平成 23 年度に本書を作成刊行した。

第1章 参考・引用文献

嘉瀬川ダム環境検討委員会・国土交通省嘉瀬川ダム工事事務所（2003）『嘉瀬川ダム事業における環境保全への取り組み』国土交通省嘉瀬川ダム工事事務所
佐賀県教育庁文化財課（1998）『大野遺跡（1区）』『佐賀県文化財年報3』

第2章 位置と環境

1 地理的環境

嘉瀬川は、佐賀県と福岡県の分水嶺をなす脊振山地の金山に源を発し、山間部を流下して神水川、天河川、名屋川などの支流を合わせ、肥前国府や肥前国一宮河上神社のある山地を抜け、佐賀平野のほぼ中央を貫流して有明海に注ぐ、幹線流路延長 57km、流域面積 368km²の一級河川である。上流部には灌漑用水を主な目的とする北山ダムが昭和 32（1957）年に完成しているが、すぐ下流にあたる佐賀市富士町の中央部に多目的ダムとして建設され、平成 23 年度に完成予定のが嘉瀬川ダムである。ダム予定地の下流には古湯温泉と熊の川温泉があり、県内外から多くの人が訪れている。

佐賀市富士町（旧佐賀郡富士町）は、佐賀県の北端部に位置し、北は県境の分水嶺を境に福岡県前原市・福岡市早良区と、東は佐賀市三瀬村（旧神埼郡三瀬村）・佐賀市大和町（旧佐賀郡大和町）と、西は唐津市七山・厳木町（旧東松浦郡七山村・嚴木町）と、南は天山山地の尾根筋で小城市小城町・多久市とそれぞれ接している。旧富士町役場、現在の佐賀市役所富士支所の位置で言うと、東経 130° 12' 03"、北緯 33° 22' 58" に位置し、東西 10 km、南北 17 km、面積 143.25 km² である。気候は、温暖湿潤な佐賀県内の中でも平均気温が低く、降水量が多い。山間部特有の日照時間の短さともいって冬季の寒さが厳しい地域である。

地勢は、福岡県との県境をなす脊振山地の東西脊梁のうち羽金山・雷山・井原山・金山の峰々を北に仰ぎ、南に脊振山地の一部でもある天山山地がそびえ、両山地の間は高原状の丘陵地・山地とその間を流れる河川により開析された谷底平野・河岸段丘などからなっている。西側には羽金山から龜岳を経て天山に連なる南北方向の分水界峰があり、これより東側が有明海に注ぐ嘉瀬川水系、西側が玄界灘に注ぐ玉島川・松浦川水系となっている。佐賀市富士町地域は、東側の佐賀市三瀬村や更に東側の神埼郡脊振町（旧神埼郡脊振村）と大小の谷や峠を介して連続しており、このような一体的な地勢の特徴が、「山内」という独自の地域圈を育んできた。

表層地質は中世代白亜紀に生成した花崗岩類を主体とし、雷山や天山周辺に局地的に三郡變成岩の塩基性深成岩類及び蛇紋岩と結晶片岩類が分布する。土壤は、南北の大起伏山地は礫質・粗砂質であるが、中央部の小起伏山地・丘陵地では風化が進んでやや粘土質の土壤に覆われている。山麓部や斜面には礫質・中粗粒の黄色土壤、河川沿いの谷底平野に中粗粒の黄色土壤や礫質・中粗粒・細粒の灰色低地土壤などが分布する。また、嘉瀬川上流域の北山ダム（北山湖）を中心とする一帯には北山層と名付けられた泥炭層を挟む湖成層が分布していて、第四期更新世末期頃に存在した「古北山湖」の湖底に堆積したものと考えられている。

旧富士町域の 8 割以上が森林で、更にその 8 割以上がスギ・ヒノキの人工林である。人工林以外の植生は、ほとんど常緑広葉樹林帯に属するが、標高 900 m 級の南北山地の山頂部近くには夏緑広葉樹林帯が僅かに認められる。動物相は、大型哺乳類ではイノシシ、キツネ、ニホンザル、タヌキ、アナグマ、イタチ、ノウサギ、テンなどが生息し、ニホンザルやキツネは減少傾向にあるが、イノシシは近年急増しており、発掘調査中にも遭遇することがある。鳥類では主な留鳥として大小のサギ類、キジ、コジュケイ、キジバト、カワセミ、ヤマセミなどが見られ、国指定天然記念物のカササギ（カチガラス）は古湯地区より上流部には生息しておらず、嘉瀬川ダム地区内では確認されない。

2 歴史的環境

本地域の歴史的環境全般については、『富士町史』などを参照していただくとして、ここでは近年の遺跡調査により急速に充実してきた考古学的な所見を中心概述する。

旧石器時代の遺跡は、地蔵平遺跡（10）、小ヶ倉遺跡（9）、九郎遺跡（5）などでナイフ形石器などの示準石器が出土している。特に、地蔵平遺跡では以前から旧石器～縄文時代の遺物が多く採集されていて、この地域の拠点的な遺跡と目されていたが、平成18年度から着手した発掘調査で姶良Tnテフラ（AT）の堆積層が部分的に良好な状態で検出され、その堆積層の上下から多様な石器が出土しており、北部九州地域の旧石器時代の様相が今後の研究によってより明らかになることが期待される。周辺地域まで目を向けると、唐津市七山の馬川谷口遺跡ではナイフ形石器文化期から細石刃文化期の多数の遺物が、佐賀市三瀬村田ノ宇曾（床並）遺跡でもナイフ形石器・彫器が出土しており、旧石器時代の遺跡は脊振山地山間部一帯に広く分布するものと思われる。

縄文時代の遺跡として知られる箇所は非常に多く、近年の発掘調査で縄文時代各時期の遺物が竪穴住居やかまどなどの遺構と共に検出され、遺跡の内容が明らかになりつつある。早期前葉の資料としては、小ヶ倉遺跡、地蔵平遺跡で円筒形刺突文土器や石槍、人道遺跡（13）で刺突文土器が出土している。早期中葉では、入道遺跡で当該時期と推定される集石炉が確認され、中原遺跡、平島遺跡（11）、九郎遺跡、垣ノ内遺跡（4）、貝野遺跡などで稲荷山式～手向山式期の遺物が出土している。早期後葉では、中原遺跡、平島遺跡、九郎遺跡、垣ノ内遺跡、西畠瀬遺跡（3）で平底式、塞ノ神A式・B式、轟A式系土器などが出土しており、西畠瀬遺跡では地床がと思われる焼土遺構と焼礫集積遺構が検出されている。前期では九郎遺跡や小ヶ倉遺跡、西畠瀬遺跡で轟B式・西唐津式・曾畠式土器が出土しており、西畠瀬遺跡では鬼界アカホヤテフラ（K-A h）を含む層が部分的にはあるが広がっていて、下層から塞ノ神B式・轟A式期、上層から轟B式・曾畠式期の遺構・遺物が確認されている。早期～前期の資料は、採集品も含めて山間部各地で比較的多く知られ、佐賀市三瀬村天塙遺跡で集石遺構や土坑と共に早期～前期の資料が出土しているほか、同村狂言平遺跡などで押型文土器、同村宿北方遺跡では1個体分の曾畠式土器が採集されている。中期の資料はやや少ないが、平島遺跡、九郎遺跡、西畠瀬遺跡で船元式・春日式・阿高式系土器が出土している（平島遺跡については本書）。後期初頭では東畠瀬遺跡（1）で坂の下式土器、西畠瀬遺跡から中津式系土器が出土している。後期中葉～末では、西畠瀬遺跡で鐘崎式～広田式土器が確認され、鐘崎式期頃の遺物集中部から石製垂飾が出土している。また、大野遺跡（7）で三万田式期の集落で竪穴住居などの遺構が確認され、三瀬村吉野山遺跡では北久根山式～太郎迫式期頃の遺物が多数採集されている。晩期では、東畠瀬遺跡で黒川式期～弥生時代前期まで集落が断続的に営まれているほか、西畠瀬遺跡でも黒川式期の遺物群が出土している。また、フルタ遺跡では少量ではあるが、刻目突帯文土器が出土している（本書）。

縄文時代と比べると、当地域における弥生時代から平安時代までの様相を知る手がかりは非常に少ない。標高が高く寒冷地であるこの地域では水稻耕作を基盤とする生活が成り立ちにくかったようで、弥生時代の遺跡数は極端に減少している。それでも、近年の埋蔵文化財調査の進展によって、これまで不明であった山間部の弥生時代～古代の様相が少しずつ知られるようになってきた。

弥生時代では、東畠瀬遺跡で弥生時代前期の竪穴住居らしき遺構が検出されているが、弥生時代特有の大陸系磨製石器は検出されておらず、縄文時代的な生活が続いているようである。大野遺跡でも、前期の土器が少数ながら出土している（本書）。西畠瀬遺跡では中期の土器埋納遺構や後期の小堀表棺墓が検出されており、1点ずつではあるが石包丁（磨製鍛錬具）・磨製石斧も見つかっている。また、垣ノ内遺跡でも中期～後期の遺物が出土している。

古墳時代では、古墳はもちろん竪穴住居などを伴う集落の広がりも確認されていないが、同時代の土器は発掘調査や採集資料で散見され、西畠瀬遺跡では完形の土師器壺と土師器高杯の杯部2点を埋納した何らかの祭祀に関わる小穴が発見され、垣ノ内遺跡でも土師器壺や壺の埋納遺構が検出された。また、大野遺跡では土坑が確認されて

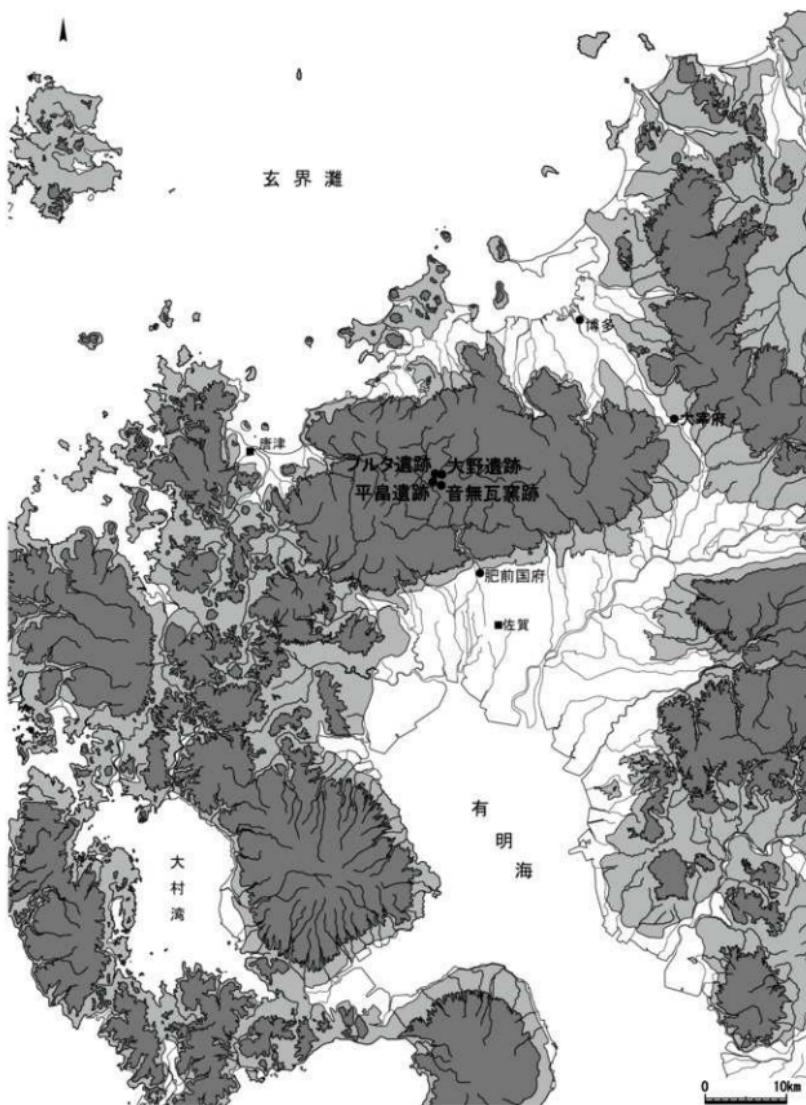


図2 大野遺跡・平島遺跡・フルタ遺跡・音無瓦窯跡の位置 (1/600,000)

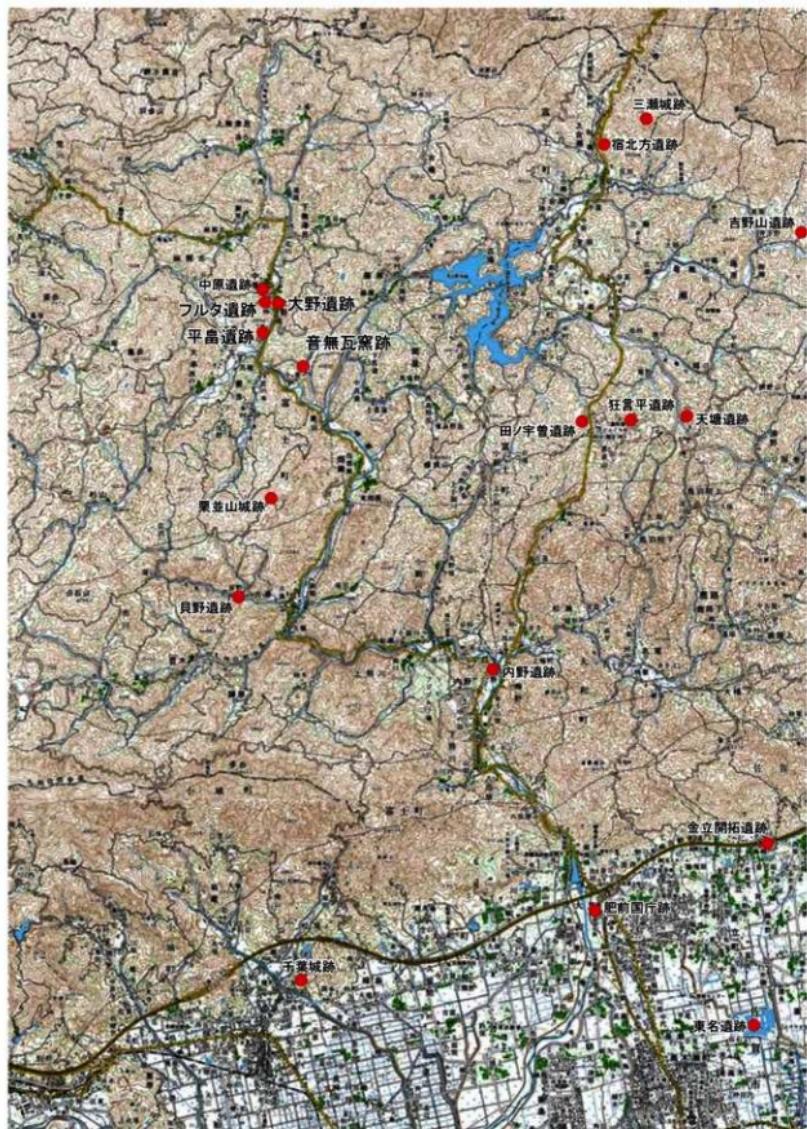


図3 嘉瀬川ダム建設予定地周辺の遺跡（1/100,000）

国土地理院の数値地図 50,000（地図画像）『佐賀・長崎』を使用

いる。

律令制下の当地域は肥前国佐嘉郡の範囲であったと思われ、嘉瀬川沿いの脊振山間部と佐賀平野部との結節点に肥前国府が置かれていることを考えると、嘉瀬川上流域も律令国家の関心外であったとは思えないが、具体的な様相を知る史料はなく、遺跡にても内野遺跡で平安時代前期頃の土師器、西畠瀬遺跡で越州窯系青磁碗や須恵器等の平安時代前半期に遡る遺物が数点出土している程度である。

古代末以降においても、富士町域の各所がどの莊園公領に含まれていたかを示すことが難しいが、少なくとも肥前安富荘領があったことは史料上で確認できる。南北朝初期の暦応2（1339）年4月25日石志定阿諱状案（石志氏家文書）は中世前期の富士町域を知る貴重な史料で、松浦党一族の石志氏が恩賞として配分された所領を子孫に伝えたものであるが、その中に「安富庄内烟瀬村、同村内火桶」と「安富庄烟瀬村内上於河原」が記されている。肥前安富荘に関しては宮武（1991）に詳しいが、佐賀郡一帯に散在的に散らばる荘領のうち、富士町烟瀬・上小瀬川、佐賀市大和町東山田・佐保・久留間、佐賀市久保田町北部で確認される遺跡地については、嘉瀬川流域に分布している点が注目される。古代末～中世前期の遺跡としては、東畠瀬遺跡、西畠瀬遺跡、九郎遺跡、大野遺跡、中原遺跡で屋敷地・土坑墓などの遺構が見つかっており（大野遺跡については本書）、特に東畠瀬・西畠瀬遺跡の屋敷地は安富荘烟瀬村との関連で重要である。また、フルタ遺跡で中世前期の遺物が出土し（本書）、中原遺跡では土師器・皿を40点ほど集積した遺構が検出されている。

安富烟瀬の名は、近世初期まで鍋島直茂所領目録（杠家文書）の「安富烟瀬山」や東畠瀬宗源院半鐘銘の「佐賀郡安富庄烟瀬山」などで確認できるが、中世後期には烟瀬、栗並、藤瀬、菖蒲、等々の山内の各地を名字とする在地勢力の台頭によって荘園としては実態の伴わないものへ変化していったものと思われる。大串遺跡（6）では14～15世紀代の在地有力層に関わると思われる遺構群が見つかっており、平畠遺跡でも中世後期の領主居館と考えられる建物群が検出されている（本書）。

戦国期に至ると、神代勝利が各地に割拠した小領主をまとめあげて山内を統一し、佐賀市三瀬村三瀬城を本城として佐賀の龍造寺隆信と朝を競った。富士町域にも烟瀬城、熊川城、谷田城などを構えたとされる。戦国期の城館については近年の中世城館跡分布調査によって、山内では三瀬城の規模が際立って大きく、それ以外の在地領主のものと考えられる山城は規模・構造とも簡素なものが多いこと、個々の集落単位で領主居館跡、城郭、領主の墓址、菩提寺、氏神がセットで残っている例が数多く確認できることなど、この地域の独自性が徐々に明らかになりつつある。東畠瀬遺跡・烟瀬城跡（2）では、勝利が居館所として築いたとされる烟瀬城に関連すると考えられる居館跡や城郭遺構が確認されており、総体としての烟瀬城の実態がかなり把握できるようになってきている。

勝利の嫡子長良は龍造寺氏と和睦し、龍造寺氏の重臣で鍋島藩祖となる鍋島直茂の甥を養子に迎えた。神代氏は小城臼刈、更に佐嘉川久保へと転封されたが、川久保邑主として1万石の大身を保持した。山内は鍋島氏の所管となったが、元和3（1617）年の小城鍋島家（小城支藩）創設にあたって嘉瀬川以西の地域が分け与えられた。これ以降、明治維新を迎えるまで、それぞれ佐賀山内、小城山内として郷村支配が続いた。佐賀山内郷では松瀬三反田に、小城山内郷では大野に代官所が設置された。このうち大野地区に現存する大野代官所跡は、近年の調査によりその様相が徐々に明らかになりつつある。城郭を思わせる本格的な石垣造りの遺構で、單に一支藩が山間部の經營のために設けた代官所としては破格の規模であり、隣藩との国境に近い軍事上の重要地であることが、その背景として想定される。代官所前面では江戸時代後期の絵図に描かれた道路遺構が確認された（本書）。また、隣接する大野遺跡では近世初期と前期の役所的施設と見られる建物群が検出されており（本書）、これが大野代官所の前身のような施設であった可能性がある。東畠瀬遺跡では神代勝利の菩提寺である宗源院跡で近世から現代までの寺院跡が4面重複して確認され、付属する墓地では多数の近世墓が調査されている。また、集落部の調査によって近世の開発の様相が明らかになりつつある。

明治維新の後、伊万里県の設置や長崎県への統合などの糾余曲折を経て、明治16（1883）年に現在の佐賀県が

成立した。これに先立つ明治 11（1878）年の郡区町村編成法により、富士町域にあたる範囲では、佐賀郡小関川村、関屋村の 2ヶ村、小城郡 篠原村、苣木村、市川村、杉山村、大串村、栗並村、大野村、中原村、麻那古村、上無津呂村、下無津呂村、上合瀬村、下合瀬村、古場村、古瀬村、烟瀬村、古湯村、上熊川村、内野村、下野村、上無瓦窯跡の 20ヶ村が行政単位となっていたが、明治 22（1889）年の市制町村制により上記の各村は佐賀郡小関川村と小城郡北山村・南山村の 3村に統合され、旧村名は大字として残ることになった。近代の遺跡として、音無瓦窯跡（12）の調査を実施し、石見地方と間連が深い瓦窯の実態が明らかとなった（本書）。

昭和 31（1956）年には佐賀郡小関川村と小城郡北山村・南山村の 3村が対等合併して富士村となり、昭和 41（1966）年 10月 1日の町制施行により佐賀郡富士町となった。その 39 年後にあたる平成 17（2005）年 10月 1日に、佐賀市・佐賀郡大和町・同郡諸富町・神埼郡三瀬村と対等合併して佐賀市富士町となった。なお、佐賀市は平成 19 年 10月 1日に、佐賀郡川辺町・東与賀町・久保田町を編入合併している。

第2章 参考・文献

- 嘉瀬川ダム建設に伴う作業調査委員会（2000）「嘉瀬川ダム建設に伴う作業調査報告書」富士町教育委員会
 佐賀県企画室（1979）「土地分類基本調査 沢崎」
 佐賀県教育委員会（1997）「佐賀県の地質記述」佐賀県文化財調査報告書第 134集
 佐賀県教育委員会（1994）「佐賀県の道路」佐賀県文化財調査報告書第 13集
 佐賀県教育委員会（2007）「東瀬浦道路 1・大野道路」佐賀県文化財調査報告書第 170集
 佐賀県教育委員会（2008）「西瀬浦道路 1」佐賀県文化財調査報告書第 176集
 佐賀県教育委員会（2009）「西瀬浦道路 2・大申道路」佐賀県文化財調査報告書第 180集
 佐賀県教育委員会（2010）「東瀬浦道路 2・祇園城跡」佐賀県文化財調査報告書第 185集
 佐賀県教育委員会（2011a）「小ヶ谷道路・入道道路・九郎道路」佐賀県文化財調査報告書第 186集
 佐賀県教育委員会（2011b）「東瀬浦道路 3」佐賀県文化財調査報告書第 190集
 佐賀県教育庁文化課（1998）「大野道路（1区）」佐賀県文化財年報 13|
 佐賀県教育庁文化課（2008a）「地蔵平道路（1区）」佐賀県文化財年報 13|
 佐賀県立図書館（1986）「佐賀縣史料集成古文書編」第 27巻
 佐賀市教育委員会（2007a）「大串道路」佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 16集
 佐賀市教育委員会（2007b）「中原道路—2・3区の調査」佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 19集
 七田忠志（1949）「三瀬村出土の鶴文式土器」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告 第 8編佐賀県教育委員会
 全国神代ゆかりの会（1980）「神代家伝記」「神代家とその一族」1号
 他承認（1995）「神埼郡三瀬村田ノ宇曾道路の田石跡踏跡遺物」佐賀考古誌 第 2号 佐賀考古談話会
 七山村教育委員会（2001）「馬川谷口道路 1区・2区」七山村文化財調査報告第 2集
 富士町教育委員会（1999）「貝野道路 1区」富士町文化財調査報告書第 1集
 富士町教育委員会（2003a）「富士町内部分発掘調査報告書平成 7年度～13年度」富士町文化財調査報告書第 2集
 富士町教育委員会（2003b）「中原道路 1区」富士町文化財調査報告書第 3集
 富士町教育委員会（2005）「烟瀬城跡」富士町文化財調査報告書第 4集
 富士町誌編さん委員会（1968）「富士町誌」富士町教育委員会
 富士町史編さん委員会（2000）「富士町史」富士町
 三瀬村誌編纂委員会（1977）「三瀬村誌」三瀬村
 宮武正登（1991）「本村道路をめぐる中世世界—安富臼内村落としての位置付け—」『本村道路』佐賀県文化財調査報告書第 102集佐賀県教育委員会

第3章 平畠遺跡

第3章 平畠遺跡

1 平畠遺跡の概要

平畠遺跡は、佐賀市富士町大字大野字二本松に所在する（図4）。

遺跡周辺は、大野地区と大串地区の中間地点にあたり、嘉瀬川の支流で南流する神水川を挟んで、東側と西側の山麓が迫っている場所である。調査に着手する前は、神水川東側の山麓に集落が、また西側のわずかに開けた河岸段丘上と山麓部の斜面には耕地が営まれていた。

近年の文化財調査によって、嘉瀬川支流の大串川左岸の大串遺跡、右岸の九郎遺跡、また神水川右岸の中原遺跡、左岸の大野遺跡で中世集落の存在が明らかになってきている。大串遺跡では中世後期の在地有力者層の屋敷地跡、九郎遺跡では中世前期の掘立柱建物・鍛冶関連遺構・土坑墓等、大野遺跡では中世の集落跡がそれぞれ確認されている。また、平畠遺跡から北東約200mの地点（国道323号線沿い）には、中世後期の石塔が集積されており、これらは元々遺跡の周辺地域にあったものが集められたとされている。

江戸時代初期に描かれた「慶長國絵図」には、大串を通る小副川・佐賀方面、杉山方面及び七山方面への道が記されており、中世以降この周辺が交通の要衝であったことが窺える。藩政期には、大野・大串地区周辺は小城鍋島家（小城支藩）領の山内郷に属し、江戸時代後期に山内支配のため設置された大野代官所の支配下にあった地域である。また、江戸時代後期に描かれた「小城郡山内郷大野村見取図」では、平畠遺跡の場所は田畠とされている。

平畠遺跡は、神水川右岸の標高295m前後の河岸段丘上に位置する。遺跡の東側には開析された谷底を神水川が南流し、西側には急峻な山麓が迫るが、大野・大串地区の中間地域では最も開けた場所で、現況は水田であった。調査は中央を南北に通る農道を境に西側を1区、東側を2区として実施した（図5）。調査の結果、下層で縄文時代の集落跡、上層で中世後期の領主居館跡などを確認した。

縄文時代では、試掘坑での部分的な調査となったため遺構は確認できなかったものの、遺物包含層から縄文時代早期中葉～後葉の押型文土器・平柄式系土器、中期前葉の船元式系土器や石器などが出土した。土器の分布状況や石器組成などから、狩猟のため一時に居住した場所であったと考えられる。

中世の遺構としては、掘立柱建物55棟、柵列6条、性格不明遺構1基、溝2条を確認した。遺構は1区北半部の中央付近から南東側に分布しており、特に中央付近の遺構密度が高い。掘立柱建物は柱穴の重複が著しい部分も多く、同一箇所あるいは若干位置をずらして建て替えが行われていることが窺え、長期間にわたって継続して営まれていたことがわかる。敷地の広さや建物群の配置と構造、さらに「前庭」や被官屋敷の付随が推定されることなどから、在地領主クラスの有力者層の屋敷地（領主居館）である可能性が考えられる。出土遺物は、15～16世紀の中国・朝鮮産の陶磁器や在地系土器が主体である。また、朝鮮王朝期の灰青陶器皿や防長系足錆が出土するなど、玄界灘沿岸地域の遺跡に近い様相も示している。

なお、17～18世紀代の遺物もわずかに出土している。近世後期の絵図によると、平畠遺跡は田畠として利用されており、近世の遺物の出土は、近世におけるこの周辺の土地利用を知る上で手がかりになるものと考えられる。

2区については、小穴64基を検出したが、後世の擾乱が多く、掘立柱建物や柵列のような遺構は確認できず、1区で確認された建物群との関連を窺わせるような遺構は検出されなかつた。また、試掘坑では縄文土器・石器がわずかに出土しただけである。



図4 平畠遺跡周辺の地形 (1/5,000)



図5 平畠遺跡1・2区の位置 (1/2,000)

2 縄文時代の遺物

平畠遺跡では、確認調査で押型文土器が出土しており、縄文時代の遺跡としても認識されていた。しかし、調査期間の都合などにより、縄文時代の調査は部分的にしか行うことができなかった。調査状況からすると、調査を行った試掘坑外にも遺物包含層が広がっていることが推測される。なお、縄文時代の遺構は確認されなかった。

縄文時代の遺物は、調査範囲の北部から出土したが（図7・9）、2区の遺物は1区からの流れ込みと考えられ、縄文時代の遺物包含層は1区北半部に限られる。遺物包含層は中世の遺構検出面以下の層であるが、時期的に層位的な区分ができる堆積状況ではないようである。1区北端から早期中葉の押型文土器、試掘坑14から早期後葉の平格式系土器、中期前葉の船元式系土器が出土しており（図8）、時期により分布域が異なっている。定形石器の中では石鏃の比率が高い。このような様相は九郎遺跡1区、入道遺跡1区など周辺の遺跡と類似しており、これらの遺跡と同様、主に早期中葉～後葉において狩猟のため一時的に居住した場であったことが推定される。

縄文土器（図12・13）

1～20は押型文土器で、楕円押型文を施すものが大部分を占め、器面調整はいずれもナデである。1～6はほぼ直線的な器形の口縁部で、内面にはすべて押型文や原体条痕が施される。4は波状口縁のものである。7～16の胴部を含め、外面の楕円押型文は縦位あるいは斜位方向に施文されている。17・18は山形文が横位に施文されている。19・20は底部で、19の外側にはやや粗大な楕円押型文が施される。楕円文の大きさ、施文方向などから、

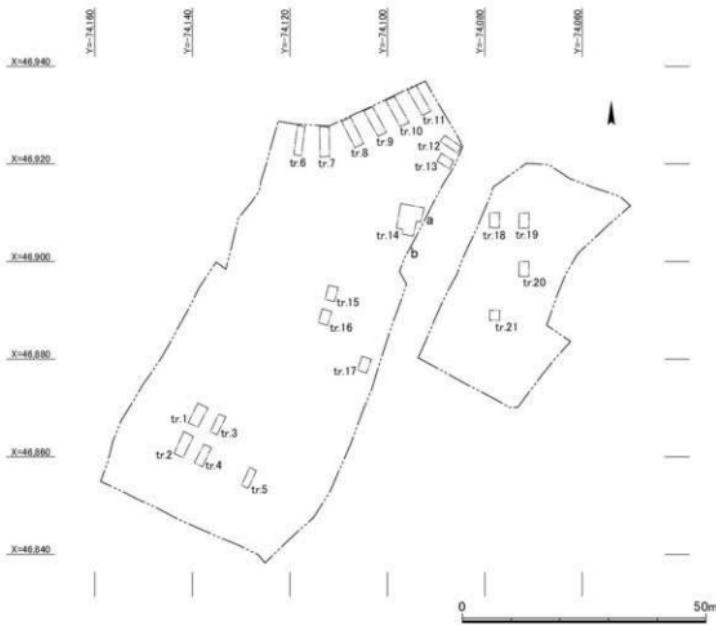


図6 試掘坑の位置 (1/1,000)

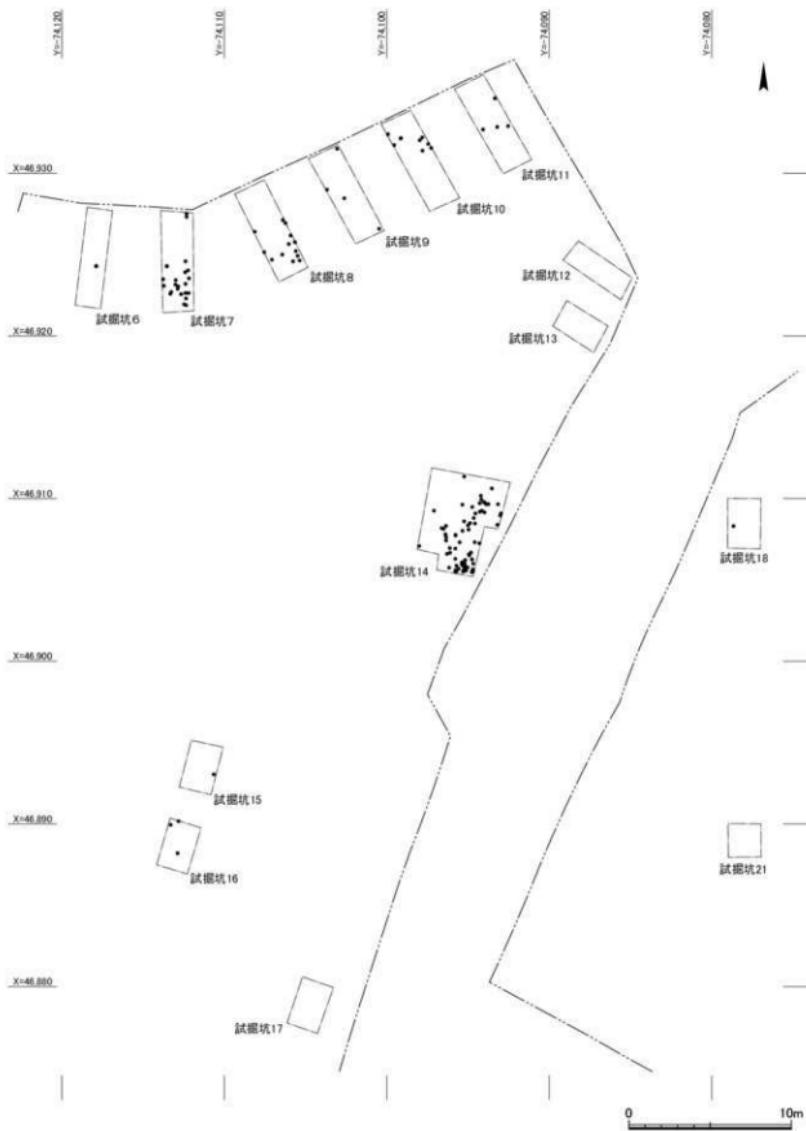


図7 縄文時代土器の平面分布 (1/300)

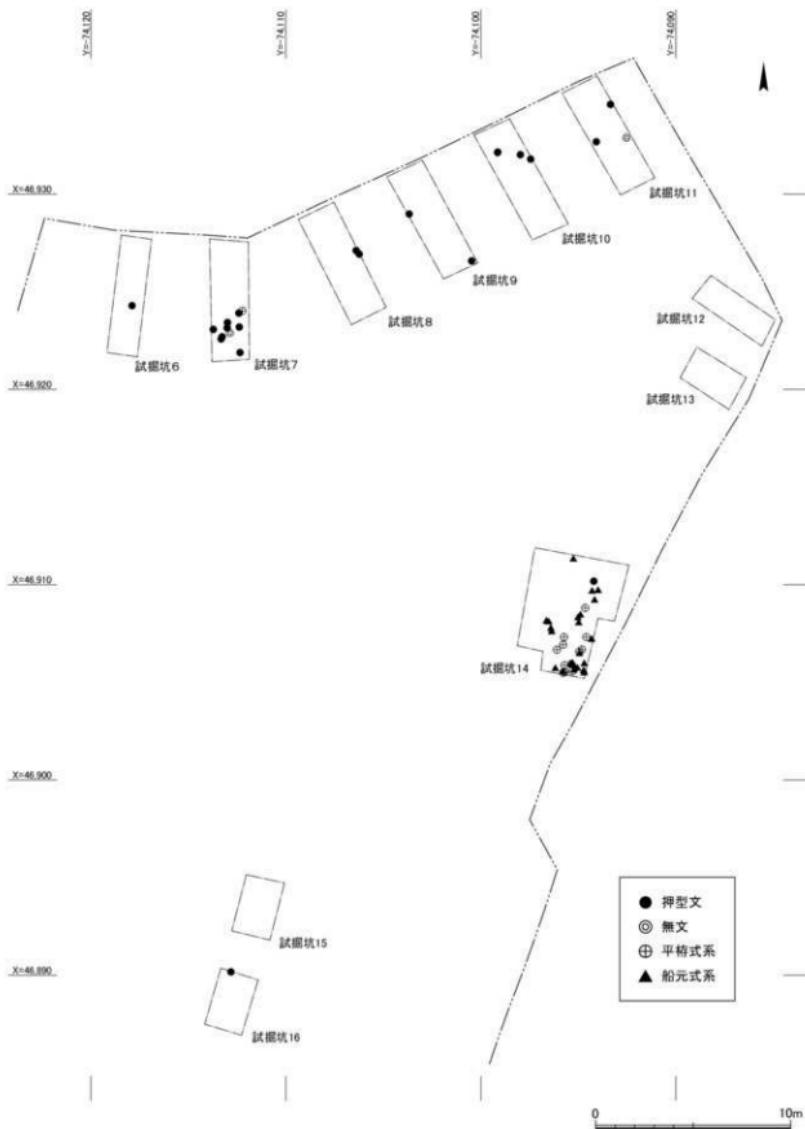


図8 繩文時代土器類別の平面分布 (1/250)

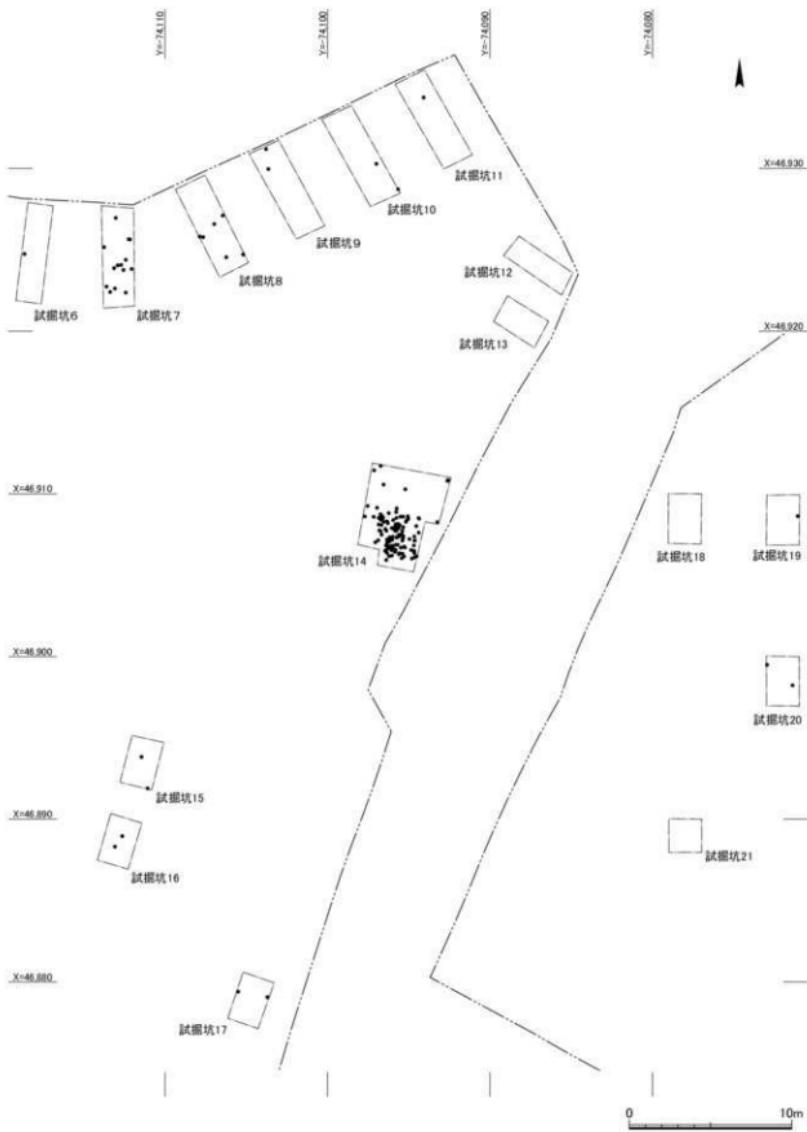


図9 繩文時代石器の平面分布（1/300）

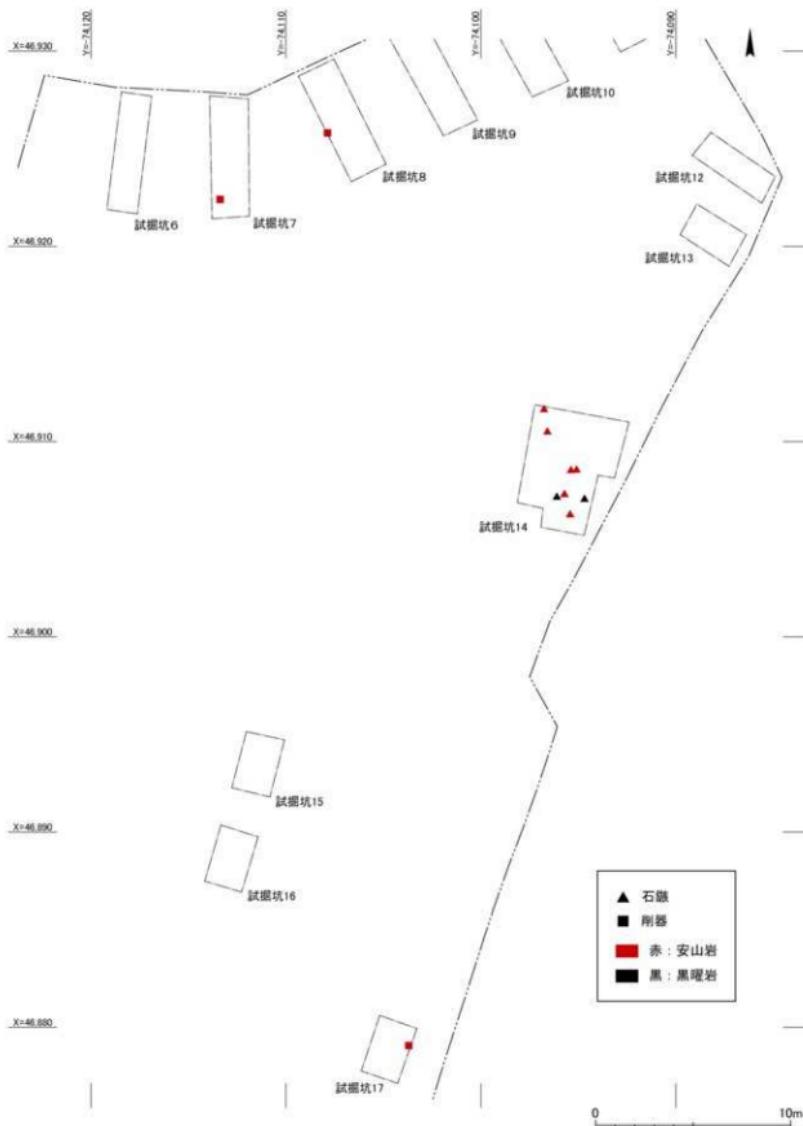
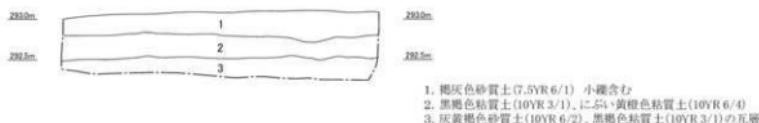
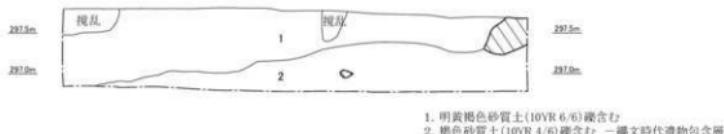


図10 繩文時代定形石器の平面分布 (1/250)

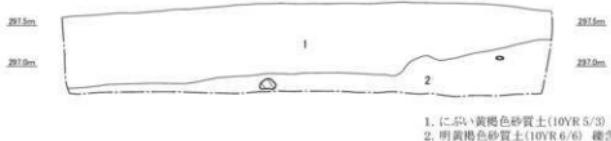
試掘坑3西壁



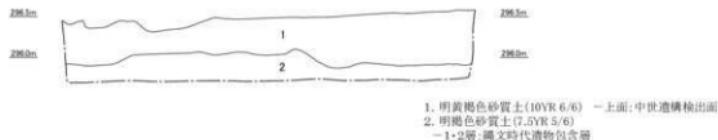
試掘坑8西壁



試掘坑11西壁



試掘坑14西壁



1区東壁

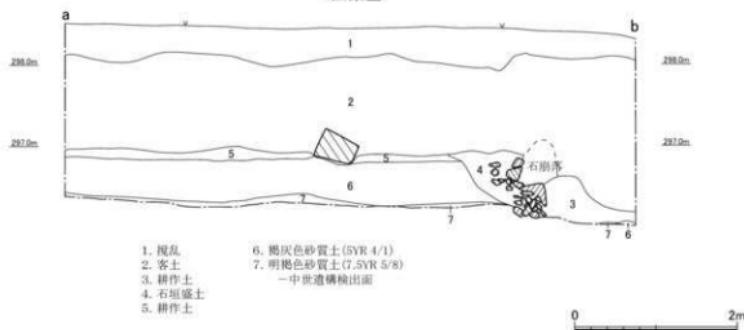


図11 1区の土層 (1/60)

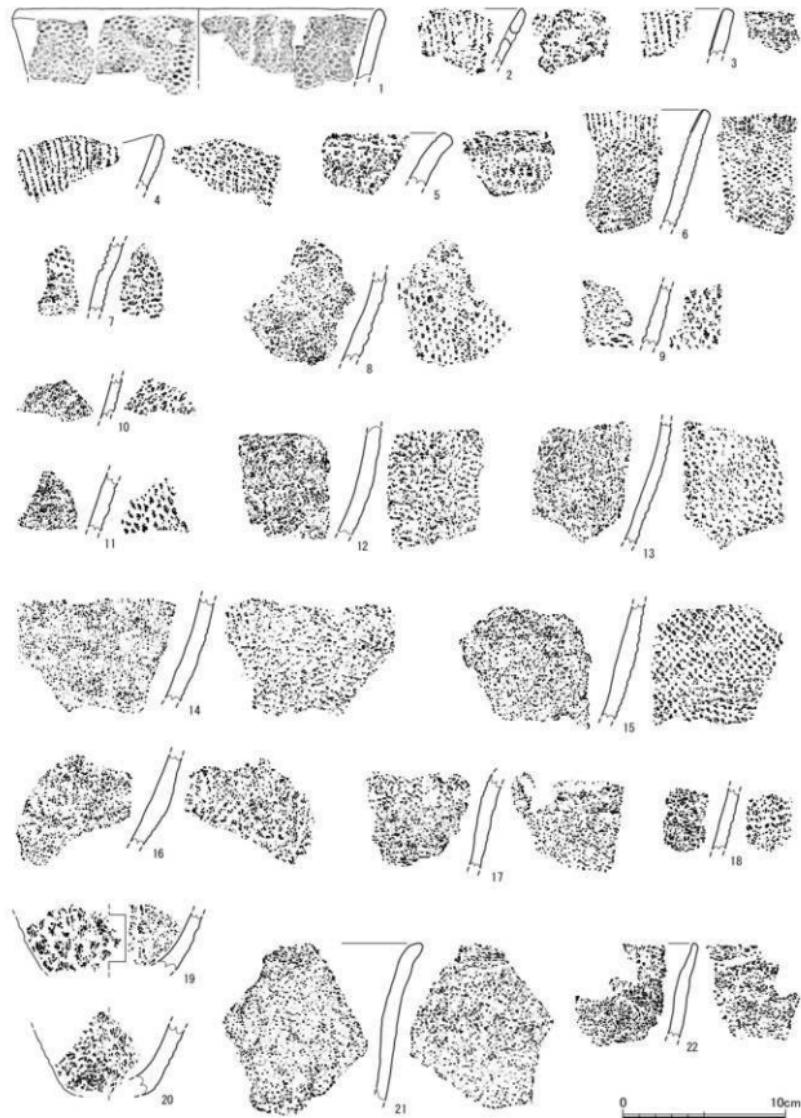


図12 縄文時代の土器1 (1/3)

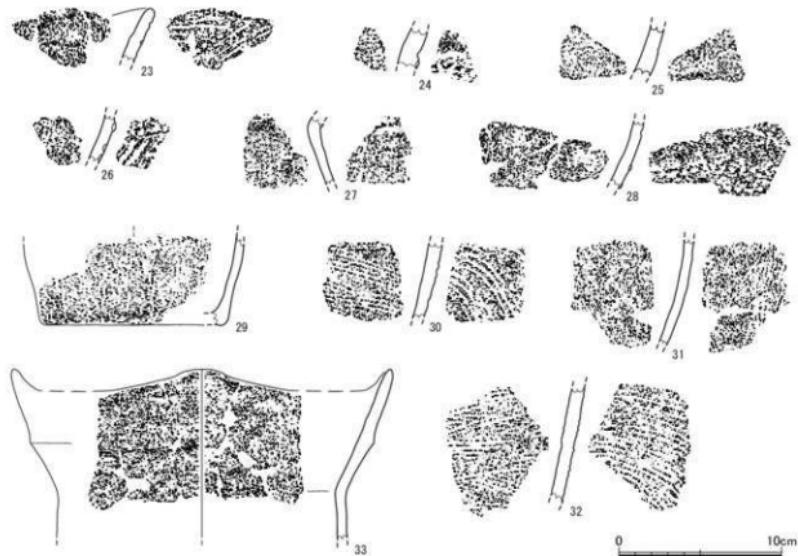


図13 繩文時代の土器2 (1/3)

19は田村式並行期、それ以外は下菅生B式並行期のものと考えられる。21・22は無文土器で、器面調整はナデである。出土位置が押型文土器の分布域であることや器形などから、押型文土器に作るものと思われる。

23～28は平柄式系土器と考えられ、器面調整はナデである。23は波状口縁で、沈線文と刺突文が施され、やや不明瞭であるが口縁端部に刻みが施されているようである。24・28は刻目を施す突帯と波状の沈線文、25は波状の沈線文、26は刻目を施す突帯と沈線文、刺突文、27は刻目を持つと思われる突帯が施される。

29は外面に燃系文を施したもので、平底と考えられる。手向山式～塞ノ神式古段階並行期のものであろうか。中世の遺構検出面から出土した。30～32は条痕文土器である。30・32は外外面に条痕が施され、外面は文様を意識している可能性がある。31は外面の一部に縦方向の条痕が施され、内面の器面調整はナデである。

33はキャリバー形の器形を残している船元式系土器と思われ、波状口縁で、頸部外面に低い突帯が施される。器面調整はナデである。

石器（図14）

出土した石器のうち、ほとんどが剥片石器類で、磨製石器は石斧1点のみである。部分的な調査であるため、全体的な組成の詳細は不明であるが、製品が非常に少なく、剥片・石核類が多いという点、定形石器の中では石礫が大部分である点などの特徴は、嘉瀬川ダム建設に伴って調査した縄文時代の遺跡における石器組成と同様の傾向にあることを示しているものと推測される。剥片石器に用いられた石材は、無斑品質安山岩が約9割を占めており、黒曜岩は約1割に過ぎない。

34～48は石鏃で、両面に丁寧な調整剥離を施すものがほとんどである。34～42は平面の形状が二等辺三角形のものである。34・35は小型のもので、基部の抉りがやや深く、いずれも黒曜岩製である。36は基部が微凹

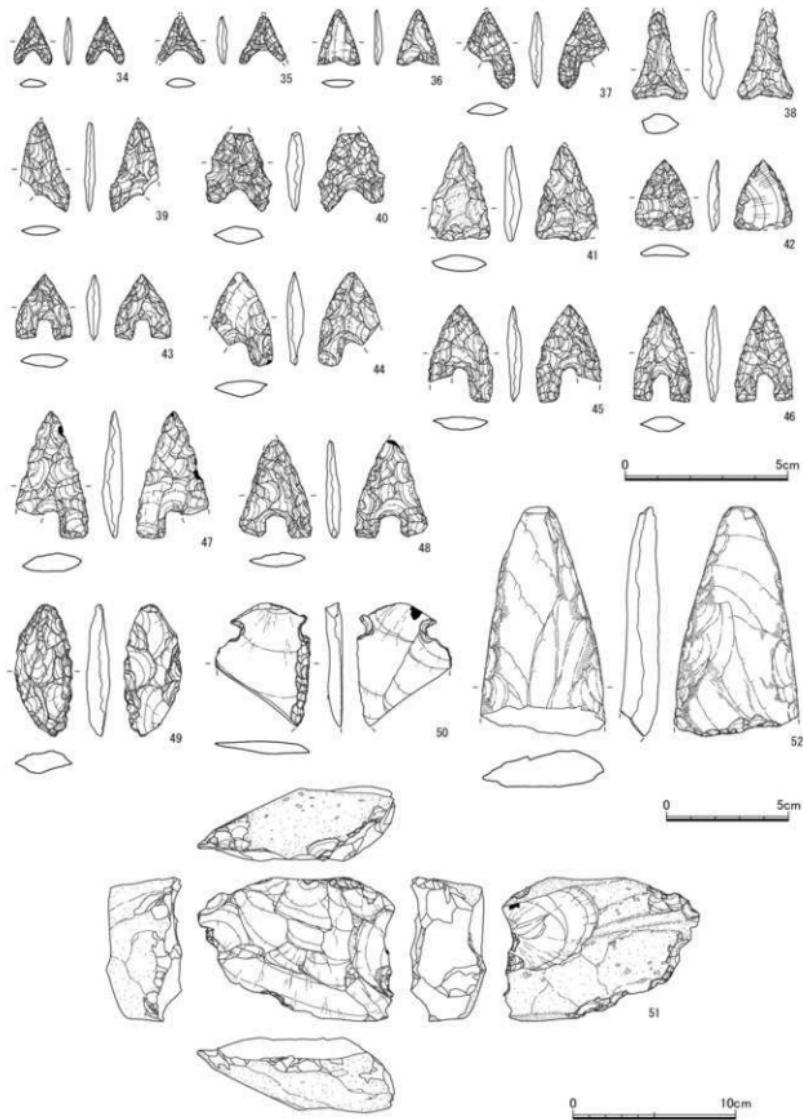


図14 縄文時代の石器 (34～48は2/3、49・50・52は1/2、51は1/3)

基の小型のもので、片面に素材面を残している。37は基部の抉りがやや深く、長脚気味になる。38は基部が微凹基の細長い形状で、側縁が内湾し、未製品の可能性がある。39・40は基部が凹基のもので、39は平面五角形に近い平面形である。41・42は平基と思われるが、ともに素材面を残す部分があり、製作途中で放棄された未製品の可能性がある。43～48は鍾形鑿で、側縁がやや膨らむものが多く、基部の抉りは比較的浅く、いずれも無斑晶質安山岩製である。44は片面に素材面を残している。これらの鍾形鑿は、ほとんどが試掘坑14から出土しており、早期後葉の平柄式並行期における石鑿の特徴を示す資料であると思われる。

49は小型の削器で、縁部に両面から調整剥離を施し、刃部を作出している。50は縦型の石匙で、縁部に片面から調整剥離を施し、刃部を作出している。51は無斑晶質安山岩製の石核である。

52は磨製石斧の基部から装着部で、刃部は欠失している。表面も大部分が剥離しており、研磨面を残している部分はわずかである。

表2 平畠遺跡縄文時代の出土土器

横4・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	厚さ			
国12-1 10000084	試掘坑8 2層	縄文土器 深鉢	23.0*	-	-	外:に赤・灰褐色 内:褐色		写真図版 10-1 20112026-2027
国12-2 10000095	P1443	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:に赤・黄褐色 内:明褐色	外面剥付着	写真図版 10-2 20112012-2013
国12-3 10000082	試掘坑9 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:に赤・褐 内:黒褐色	外面剥付着	写真図版 10-3 20112005-2006
国12-4 10000088	試掘坑14 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:に赤・赤褐色 内:褐	外面剥付着	写真図版 10-4 20112007-2008
国12-5 10000094	試掘坑6 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:灰褐色 内:褐色	外面剥付着	写真図版 10-5 20112010-2011
国12-6 10000089	試掘坑8 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	に赤い黄褐色		写真図版 10-6 20112031-2032
国12-7 10000083	試掘坑7 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	梢・に赤い黄褐色		写真図版 10-7 20112020-2021
国12-8 10000080	試掘坑10 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:に赤・褐・灰褐色 内:褐色	外面剥付着	写真図版 10-8 20112024-2025
国12-9 10000081	試掘坑7 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:に赤い褐色 内:褐色	内外面炭化物付着	写真図版 10-9 20112018-2019
国12-10 10000076	試掘坑10 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:梢 内:灰褐色・に赤褐色	外面剥付着	写真図版 10-10 20112003
国12-11 10000078	試掘坑10 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	に赤い褐色	外面剥付着	写真図版 10-11 20112004
国12-12 10000091	試掘坑7 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:梢・に赤い黄褐色 内:黄褐色		写真図版 10-12 20112033
国12-13 10000086	1区 表採	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:に赤い褐色 内:赤褐色・梢・梢	外面剥付着	写真図版 10-13 20112029
国12-14 10000087	試掘坑7 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:梢・に赤い黄色 内:黒褐色		写真図版 10-14 20112030
国12-15 10000085	試掘坑9 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:梢・に赤い黄褐色 内:黄褐色		写真図版 10-15 20112028
国12-16 10000093	試掘坑7 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:梢・に赤い黄褐色 内:褐色	外面剥付着	写真図版 10-16 20112036
国12-17 10000092	試掘坑10 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:灰褐色・に赤い黄褐色 内:黒褐色	内面炭化物付着	写真図版 10-17 20112034-2035
国12-18 10000090	試掘坑16 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:に赤い黄褐色 内:灰褐色		写真図版 10-18 20112009
国12-19 10000077	試掘坑7 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:梢・に赤い黄褐色 内:淡褐色		写真図版 10-19 20112016
国12-20 10000079	試掘坑7 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:梢 内:褐色		写真図版 10-20 20112017
国12-21 10000075	試掘坑7 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:梢・に赤い黄褐色 内:黄褐色		写真図版 10-21 20112040
国12-22 10000070	試掘坑11 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	褐色	口縁部炭化物付着	写真図版 10-22 20112023
国12-23 10000067	試掘坑14 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	に赤い梢・灰褐色	外面剥付着	写真図版 11-23 20111999

表2 平畠遺跡縄文時代の出土土器

持国・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
岡13-24 10000068	試掘坑7 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外：棕 内：灰・棕		写真図版 11-24 20112000
岡13-25 10000071	試掘坑14 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外：明赤褐 内：灰・褐		写真図版 11-25 20112002
岡13-26 10000069	試掘坑14 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	灰褐	外面糊付着	写真図版 11-26 20112001
岡13-27 10000074	試掘坑14 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	に赤い赤褐・灰褐		写真図版 11-27 20112015
岡13-28 10000072	試掘坑14 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	浅黄・棕		写真図版 11-28 20112037
岡13-29 10000073	1区 検出面	縄文土器 深鉢	-	11.6*	-	外：褐灰・に赤い黄褐 内：褐灰・黒	内外面糊化物付着	写真図版 11-29 20112038
岡13-30 10000066	試掘坑9 2層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外：に赤い褐・褐 内：褐灰・に赤い棕	外面糊付着	写真図版 11-30 20112014
岡13-31 10000100	C2区両 検出面	縄文土器 深鉢	-	-	-	外：灰褐 内：灰黄褐	外面糊付着	写真図版 11-31 20112039
岡13-32 10000065	試掘坑9 1層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外：灰褐 内：に赤い黄褐	外面糊付着	写真図版 11-32 20112022
岡13-33 10000099	試掘坑14 1・2層	縄文土器 深鉢	23.2*	-	-	外：に赤い黄褐・褐灰 内：に赤い棕・灰黄褐		写真図版 11-33 20112041

表3 平畠遺跡縄文時代の出土石器

持国・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 mm			重 量 g	石 材	備 考	写真図版 写真登録番号
			長さ	幅	厚さ				
岡14-34 10001583	試掘坑14 1層	打製石器 石鏟	1.5	1.2	0.2	0.2	黒曜岩	完形	写真図版 11-34 20112231
岡14-35 10001588	P1387	打製石器 石鏟	1.4*	1.4*	0.3	0.4	黒曜岩	先端部と脚部の先端をわずかに欠損	写真図版 11-35 20112234
岡14-36 10001593	検出面	打製石器 石鏟	1.7	1.3*	0.2	0.4	無斑晶質安山岩	脚部先端をわずかに欠損	写真図版 11-36 20112238
岡14-37 10001591	P1518	打製石器 石鏟	2.3*	1.5*	0.4	0.8	黒曜岩	先端部と脚部片方欠損	写真図版 11-37 20112236
岡14-38 10001590	P1420	打製石器 石鏟	2.7*	1.7	0.6	1.8	無斑晶質安山岩	先端部欠損 未製品力	写真図版 11-38 20112235
岡14-39 10001587	1区 検出面	打製石器 石鏟	2.7*	1.5*	0.3	1.0	無斑晶質安山岩	脚部片方と先端部をわずかに欠損	写真図版 11-39 20112233
岡14-40 10001592	P1297	打製石器 石鏟	2.4*	2.0	0.5	1.8	黒曜岩	先端一部欠損	写真図版 11-40 20112237
岡14-41 10001589	P1398	打製石器 石鏟	2.9*	1.9*	0.5	2.4	無斑晶質安山岩	先端部と脚部の一部を欠損	写真図版 11-41 20112244
岡14-42 10001582	試掘坑14 1層	打製石器 石鏟	2.2	1.8	0.3	1.0	黒曜岩	脚部一部欠損	写真図版 11-42 20112207
岡14-43 10001586	試掘坑14 2層	打製石器 石鏟	2.0	1.7	0.4	1.0	無斑晶質安山岩	完形	写真図版 11-43 20112232
岡14-44 10001581	試掘坑14 1層	打製石器 石鏟	2.9	1.9*	0.5	2.2	無斑晶質安山岩	脚部片方欠損	写真図版 11-44 20112241
岡14-45 10001584	試掘坑14 1層	打製石器 石鏟	3.0	2.0*	0.4	1.8	無斑晶質安山岩	脚部片方欠損	写真図版 11-45 20112242
岡14-46 10001585	試掘坑14 1層	打製石器 石鏟	2.9	1.8	0.4	2.0	無斑晶質安山岩	完形	写真図版 11-46 20112243
岡14-47 10001579	P1190	打製石器 石鏟	3.9	2.2*	0.6	3.6	無斑晶質安山岩	脚部片方欠損	写真図版 11-47 20112239
岡14-48 10001580	試掘坑14 1層	打製石器 石鏟	3.0*	2.2	0.4	2.4	無斑晶質安山岩	先端一部欠損	写真図版 11-48 20112240
岡14-49 10001594	試掘坑7 1層	打製石器 削削器	6.1	2.6	1.1	14.8	無斑晶質安山岩	完形	写真図版 11-49 20112245
岡14-50 10000700	2区 検出面	打製石器 石鏟	5.1*	3.9	0.7	11.2	無斑晶質安山岩	下半部欠損	写真図版 11-50 20112246
岡14-51 10001595	試掘坑14 1層	打製石器 石核	8.8	12.1	4.6	450.4	無斑晶質安山岩	完形	写真図版 11-51 20112247
岡14-52 10000851	1区 表採	磨製石器 石斧	9.4*	5.1*	1.6*	74.4		刃部欠損	写真図版 11-52 20112248

3 中世の遺構と遺物

1) 1区中世の遺構と遺物

平畠遺跡1区で検出された中世の遺構は、多数の柱穴・小穴と性格不明遺構1基、溝2条である。検出した柱穴・小穴について検討した結果、掘立柱建物55棟、柵列6条が復元された。

掘立柱建物・柵列等は、調査区北半部の中央付近から南東側にかけて集中する（以下、遺構集中部と呼ぶ）。この範囲は北から南に向かった緩斜面で、大きく二つ（上295.00～296.75m、下294.25～295.00m）の平坦面からなる。上下の平坦面の間には高低差0.5m程の段差があり、後述する居館の内と外の境界と考えられる。掘立柱建物と柵列は、遺構集中部の中央付近を中心に、重複しながら分布しており、同一箇所あるいは位置をずらしながら建て替えが行われている状況が窺え、継続して建物群が営まれていたことがわかる。建物のうち、大型の建物は、遺構集中部の中央付近に集中して分布し、遺構集中部の西端および東端に近い場所では、建物の規模が小さくなる傾向があり、遺構密度も低い。これらは、後述するようにA・B・C・Dの四つの群に分別できる。

調査区北半部の北端周辺（296.75～297.75m）では、小穴が疎らに分布していたが、掘立柱建物や柵列等は検出されなかった。削平されているうえ、後世の攪乱を受けているため正確には分からぬが、遺構集中部より一段高い面であることから、この部分には建物等が営まれていなかつたと判断される。

調査区の南半部（標高294.00mより低い部分）では遺構が検出されなかつたため、試掘坑を5本設定し、土層の堆積状況と遺物の確認を行った。南半部は、北半部に比べ2～3mほど低く、西側の山裾から湧いた水が當時流れ、低湿地と呼んで差し支えないほど、水分を多く含むエリアである。試掘坑からは遺構・遺物は確認されなかつたが、土層の堆積状況をみると、泥流と考えられる層と、植物遺体由来すると考えられる黒色系統の比較的安定した層が交互に堆積しており、この一帯が水の影響を多分に受けていることが想定される（図11）。南半部の地形を考慮すると、上述した建物群に伴い、いわゆる「前田」「前畠」と称され、領主居館の至近で直接經營される「手作地」の類の耕地が営まれていた可能性はあるが、推測の域を出ない。

掘立柱建物（図18～46）

1区で検出された掘立柱建物群については、著しく遺構密度が高い部分もあり、調査時における重複関係の認定に曖昧さが残ることは否めない。整理にあたっては、調査によって把握された柱穴の重複関係を考慮しながらも、規則的な配置をとり、柱穴の平面形・規模・深さが類似することを優先し、建物を復元した。そのため、復元した建物の柱穴によっては、重複する他の柱穴との新旧関係が、逆転するものも存在する。

各建物の柱穴は整然と並んでおらず、実際には平面形の歪んだ建物も多いものと思われる。建物の個別図については、梁・桁それぞれ一辺の軸（外側の柱穴同士を結んだ線）の延長線を四隅に示し、これとは別に、建物の概略がつかめるように、およその形を四角形で表している。

なお、記述にあたっては、掘立柱建物を構成する柱穴に、北東隅から時計回りにPA、PB、PC…の要領で番号を付した。柱穴の断面図は現地で作成したものもあるが、大部分は平面図から作図した。

SB3001（図21）

遺構集中部の北東側に位置している。梁行2間（3.08m）×桁行2間（3.54m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN83.5°W、柱間は梁行1.54m、桁行1.60～1.90m、床面積は10.90m²である。柱穴は、PD・PG・PHが布掘り状に掘り込まれ、PA・PBは南北に細長い形状をしている。このような掘方は、溝状に掘りくぼめた中に、個々の柱穴を掘り込むような工法であったか、あるいは同一箇所での建て替えが行われ、複数の柱穴が重複した結果、布掘り状の掘方となった可能性も考えられる¹⁾。重複するSB3002・SB3003・SB3004より新しいと考えられるが、



図 15 1区の遺構分布、試掘坑の位置 (1/500)

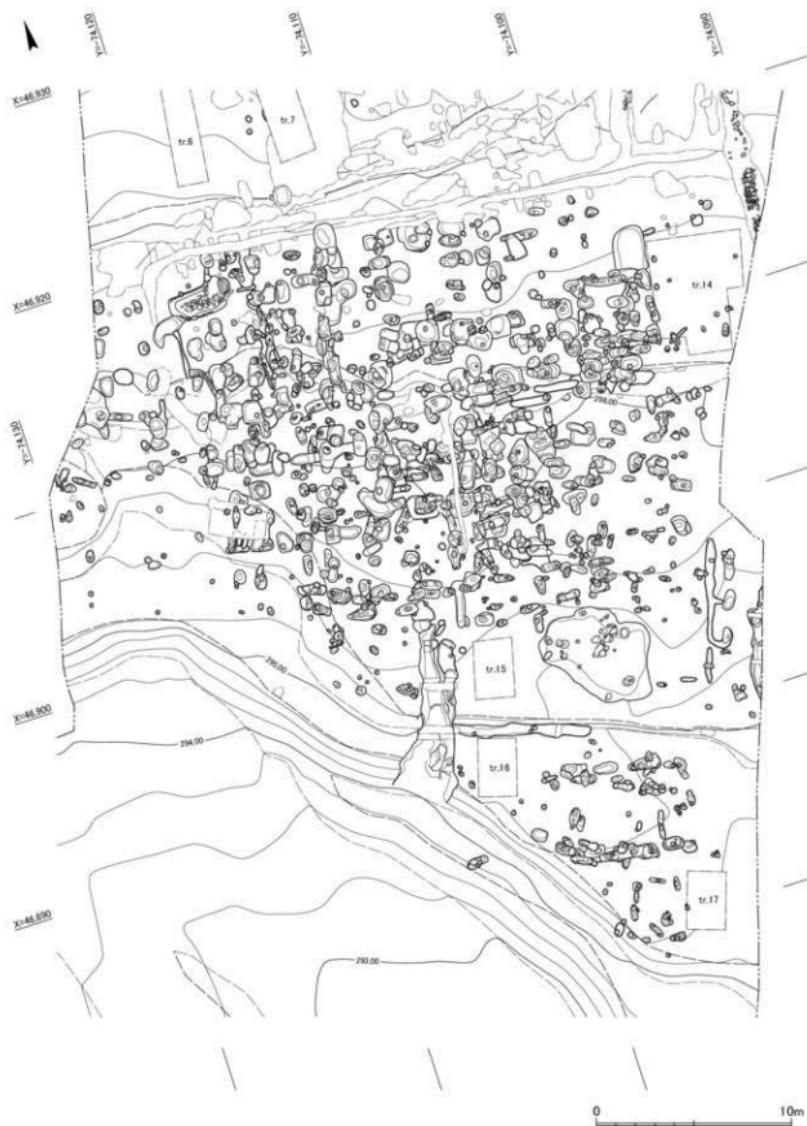


図 16 1区北半部の造構分布 (1/250)

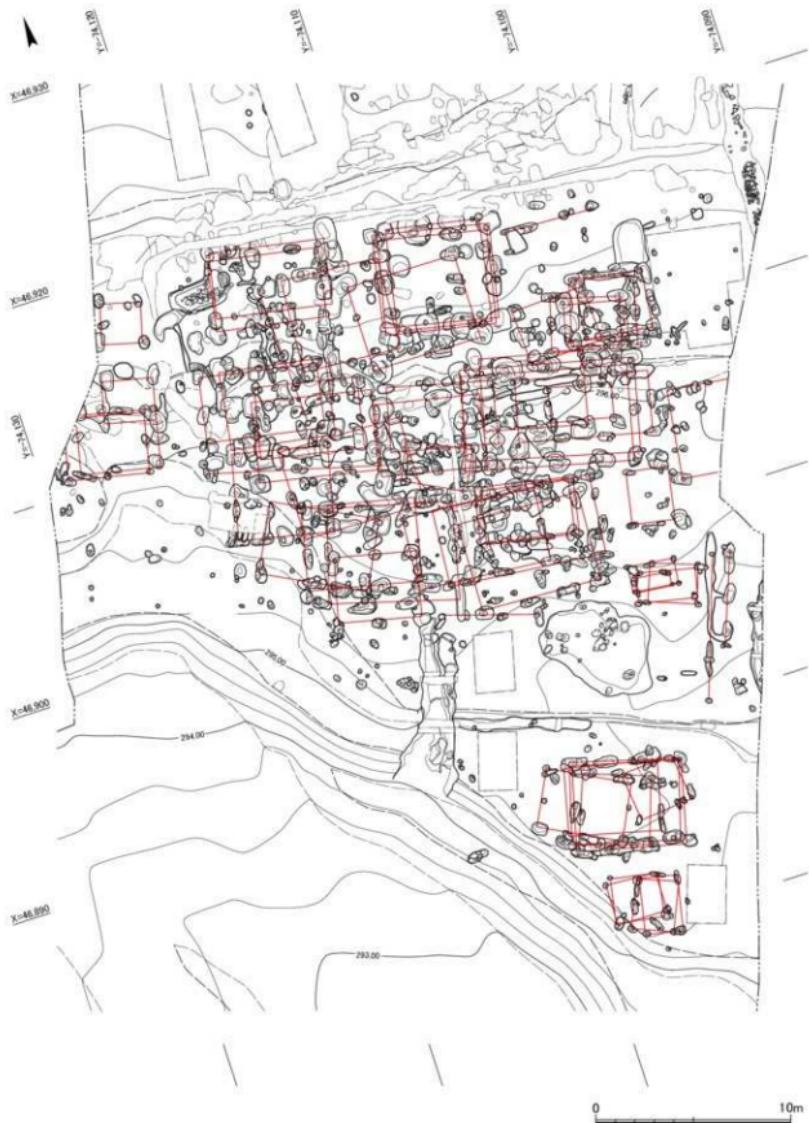


図 17 1区北半部の遺構集中部 (1/250)

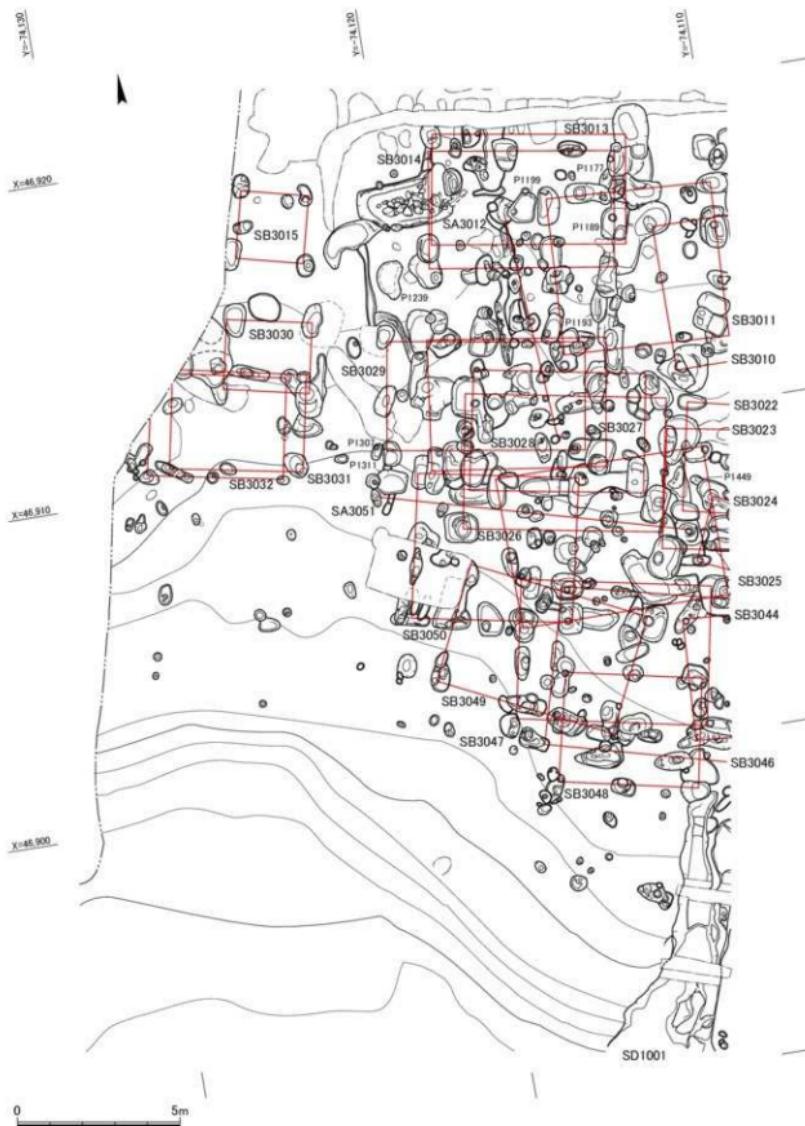


図18 1区北半部の遺構分布詳細1 (1/150)

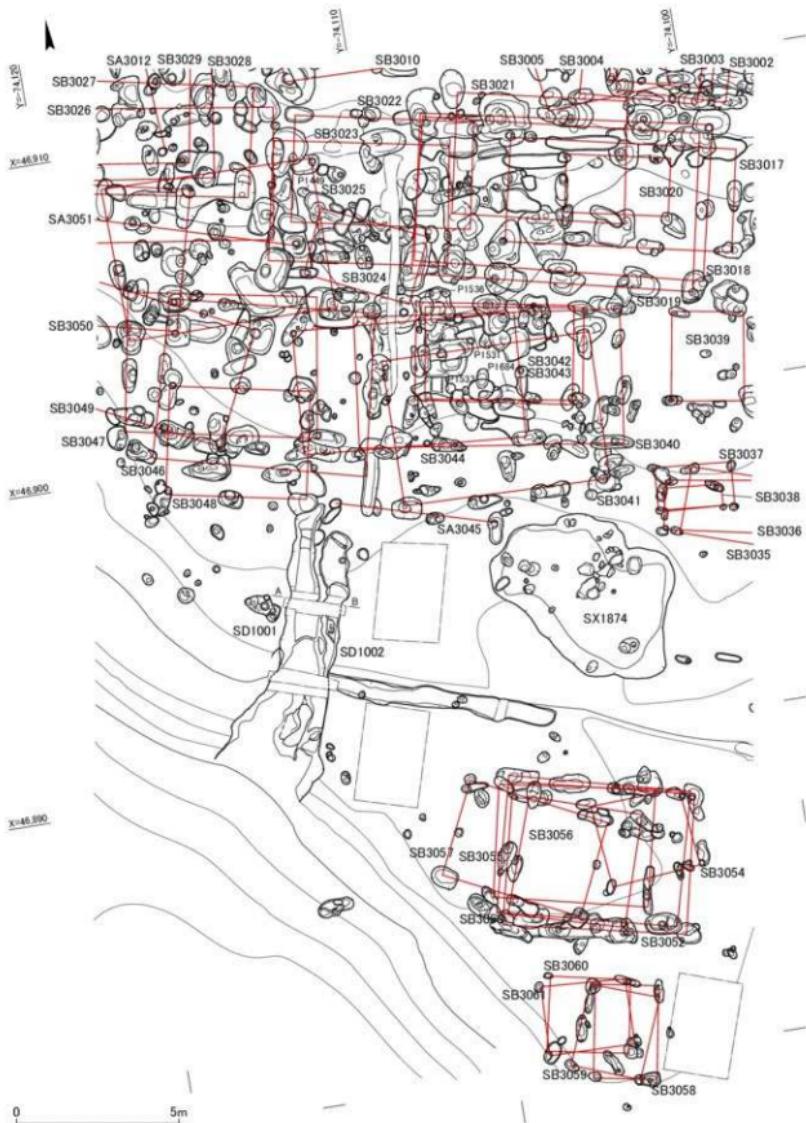


図 19 1 区北半部の透構分布詳細 2 (1/150)

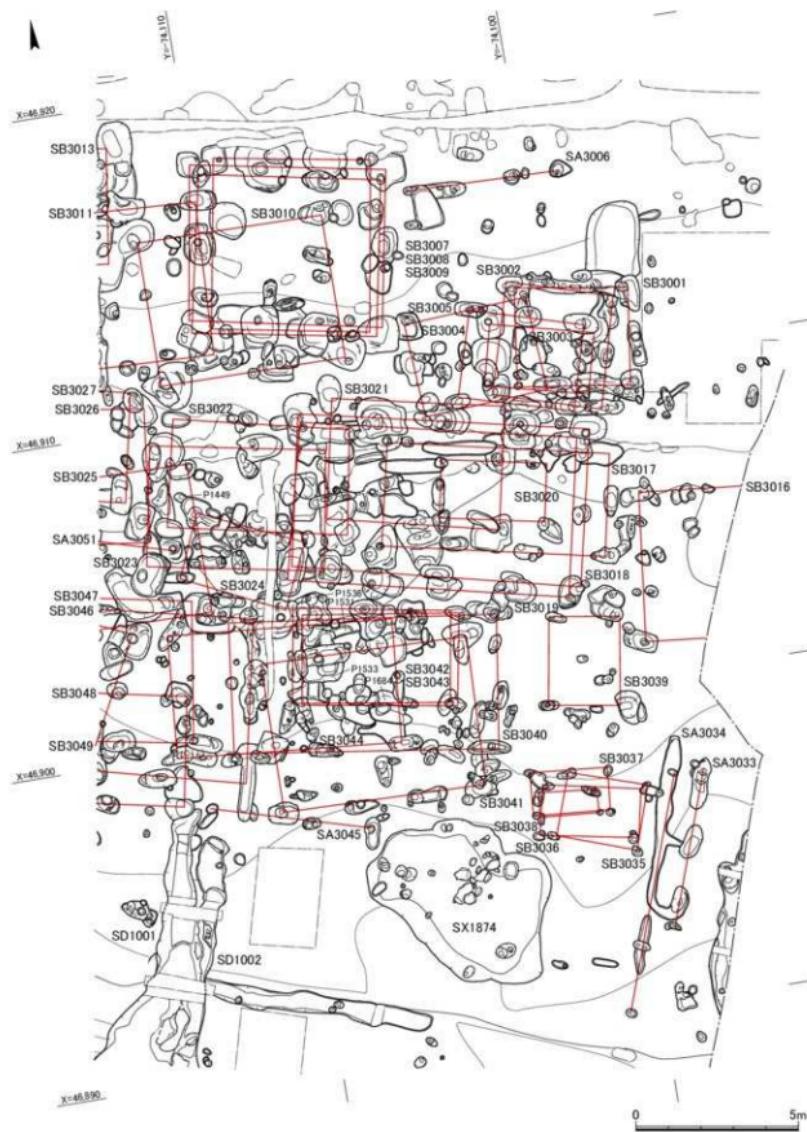


図20 1区北半部の遺構分布詳細3 (1/150)

SB3005との新旧関係は明らかではない。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜、竜泉窯系青磁碗、福建系青花碗等が出土した。

SB3001 出土遺物（図 50）

53は竜泉窯系青磁碗である。54は福建系（漳州窯系）の青花碗で、蓮子碗系統の小野C群とみられる。

SB3002（図 21）

遺構集中部の北東側に位置し、SB3001と重複する。梁行2間（3.48 m）×桁行2間（3.30 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN74.5°W、柱間は梁行1.30～2.30 m、桁行1.60～1.80 m、床面積は11.48m²である。柱穴は、長軸0.70～1.20 m、短軸0.40～0.70 m、深さ0.30～0.80 mの長楕円形あるいは隅丸方形を主体とする。重複するSB3001・SB3004・SB3005より古いと考えられるが、SB3003との新旧関係は明らかではない。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・鉢、炭化物が出土した。

SB3002 出土遺物（図 50）

55は底部糸切の土師器杯である。56は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。

SB3003（図 22）

遺構集中部の北東側に位置する。梁行1間（1.88 m）×桁行1間（3.22 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN80°W、床面積は6.05m²である。ほぼ同一箇所に位置する四つの建物に比べて小規模である。柱穴は、長軸0.50～1.00 m程、短軸0.40～0.80 m、深さ0.30～0.90 mの隅丸方形または長楕円形で、西側と東側とで柱穴の深さに差がある。重複するSB3001・SB3004・SB3005より古いと考えられるが、SB3002との新旧関係は明らかではない。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋・茶釜・鉢等が出土した。

SB3003 出土遺物（図 50）

57は瓦質土器鍋で、外面下部に煤が付着している。

SB3004（図 22）

遺構集中部の北東側に位置する。梁行2間（2.70 m）×桁行3間（3.60 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN74°W、柱間は梁行1.30～1.40 m、桁行1.70～2.00 m、床面積は9.72m²である。柱穴は、長軸0.80～1.00 m、短軸0.40～0.60 m、深さは0.20～0.40 mの長楕円形である。重複するSB3001・SB3005より古く、SB3002・SB3003より新しいと考えられる。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋・茶釜、防長系瓦質土器足鍋が出土した。

SB3004 出土遺物（図 50）

58は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。59は防長系の瓦質土器足鍋の口縁部である。

SB3005（図 23）

遺構集中部の北東側に位置する。梁行2間（2.88 m）×桁行2間（3.80 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN87°E、柱間は梁行1.40～1.70 m、桁行は1.80～2.20 m、床面積は10.94m²である。柱穴は、長軸0.60～1.20 m、短軸0.30～0.80 m、深さ0.30～0.80 mの楕円形または隅丸長方形である。重複するSB3002・SB3003・SB3004より新しいと考えられるが、SB3001との新旧関係は明らかではない。柱穴からは、瓦質土器鍋・茶釜・鉢が出土したが、いずれも小片で図示していない。

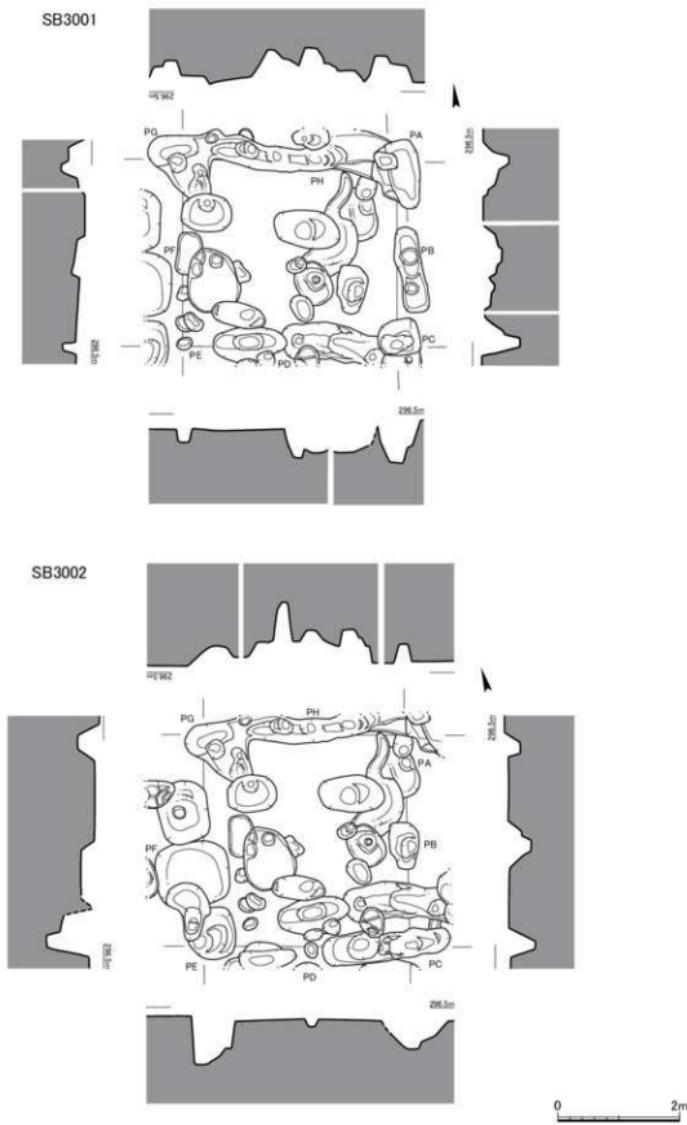
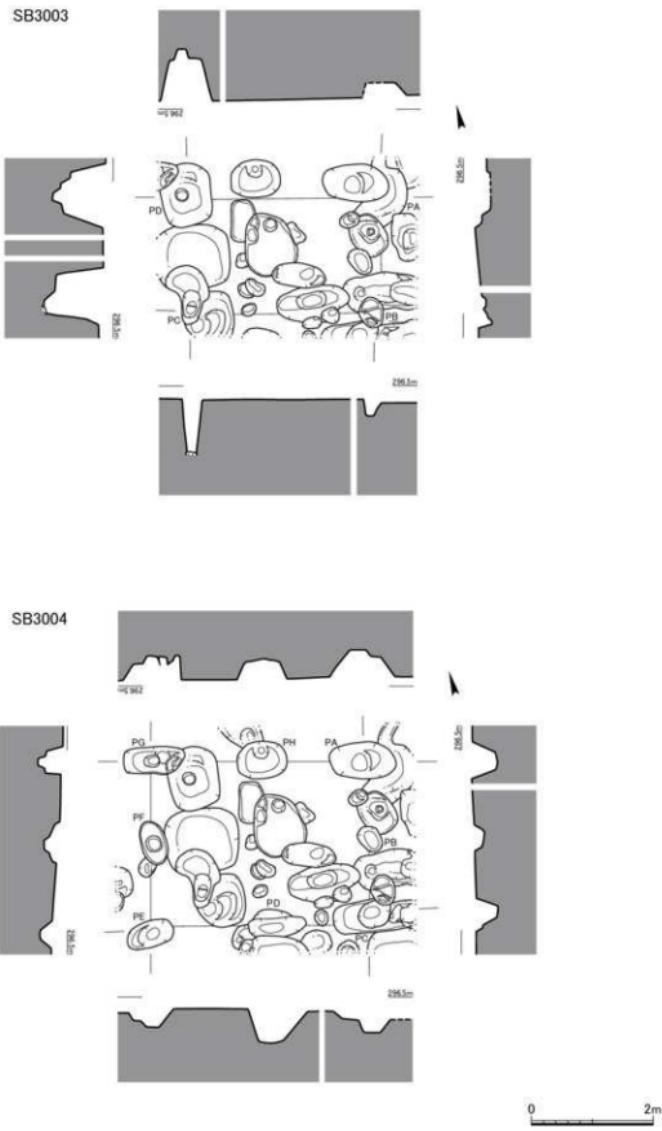


図21 1区中世の据立柱建物1 (1/80)



SB3007 (図 23)

遺構集中部の北側に位置する。梁行2間(4.66 m)×桁行3間(5.88 m)の東西棟の側柱建物で、主軸はN81°W、柱間は梁行2.00～2.70 m、桁行1.80～2.20 m、床面積は27.40m²である。柱穴は、長軸1.00～1.20 m、短軸0.70～1.00 m、深さ0.50～1.20 mの楕円形または隅丸方形で、比較的大型である。重複するSB3007・SB3009とほぼ同規模で、しかも同じような位置に3棟の建物が存在することから、同一箇所で建て替えが行われたことが窺える。SB3008より新しいが、SB3009との新旧関係は明らかではない。柱穴からは、土師器杯・浅鍋（焙烙か）、瓦質土器鍋・茶釜・火鉢、須恵器系陶器鉢、景德鎮窯系白磁皿等が出土した。

SB3007 出土遺物 (図 50)

60は、防長系の瓦質土器足鍋の口縁部である。61は土師器浅鍋（焙烙か）で、外面に煤が付着している。62は須恵器系陶器鉢で、外面の調整はハケメである。

SB3008 (図 24)

遺構集中部の北側に位置する。梁行2間(4.84 m)×桁行3間(5.56 m)の東西棟の側柱建物で、主軸はN80°W、柱間は梁行2.20～2.70 m、桁行1.80～2.30 m、床面積は26.91m²である。柱穴は、SB3007・SB3009と同様に比較的大型である。SB3007・SB3009と重複し、いずれよりも古いと考えられる。柱穴からは、土師器杯・小皿・浅鍋（焙烙か）、瓦質土器鍋・茶釜・鉢、須恵器系陶器鉢、朝鮮半島産陶器碗、朝鮮半島産か肥前産の無釉陶器瓶等が出土した。

SB3008 出土遺物 (図 50)

63は底部糸切の土師器小皿である。64は朝鮮王朝期の灰青陶器碗である。65は瓦質土器鉢、66は瓦質土器鍋で、外面にはわずかに煤が付着している。67は土師器浅鍋（焙烙か）で、底部に煤が付着している。68は須恵器系陶器鉢で、調整は摩耗のため不明である。

SB3009 (図 24)

遺構集中部の北側に位置する。梁行2間(5.24 m)×桁行3間(4.80 m)の東西棟の側柱建物で、主軸はN80.5°W、柱間は梁行2.00～3.10 m、桁行1.50～1.80 m、床面積は25.15m²である。柱穴は、SB3007・SB3008と同様に比較的大型である。重複するSB3008より新しいが、SB3009との新旧関係は明らかではない。柱穴からは、土師器小皿・火鉢、瓦質土器鍋・火鉢等が出土している。

SB3009 出土遺物 (図 50)

69は瓦質土器火鉢、70は土師器火鉢で、いずれも外面に印刻文が施される。

SB3010 (図 25)

遺構集中部の北側に位置する。梁行2間(4.46)×桁行2間(5.72 m)の東西棟の側柱建物で、主軸はN89.5°E、柱間は梁行1.60～2.80 m、桁行2.80～3.00 m、床面積は25.51m²である。柱穴は、長軸1.00 m以上、短軸0.80 m程、深さ1.00～1.20 mの隅丸方形で大型のものと、径0.30 m程、深さ0.40 m程の円形で小型のものがある。PA・PE・PG・PHでは、柱穴から0.20～0.50 m程の礫がまとまって出土した。この礫は、柱を安定させる目的で柱穴の上面に充填されたものと考えられる。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜、中国産陶器小壺（茶入）、竜泉窯系青磁皿、炭化物等が出土した。

SB3010 出土遺物 (図 50)

71は土師器杯で、外面に煤が付着している。72は中国産の褐釉陶器小壺で、茶入と考えられる。胴部に1条の沈線が施される。73は竜泉窯系青磁皿で、稜花皿と考えられ、内面見込みには印花文が施される。高台置付まで

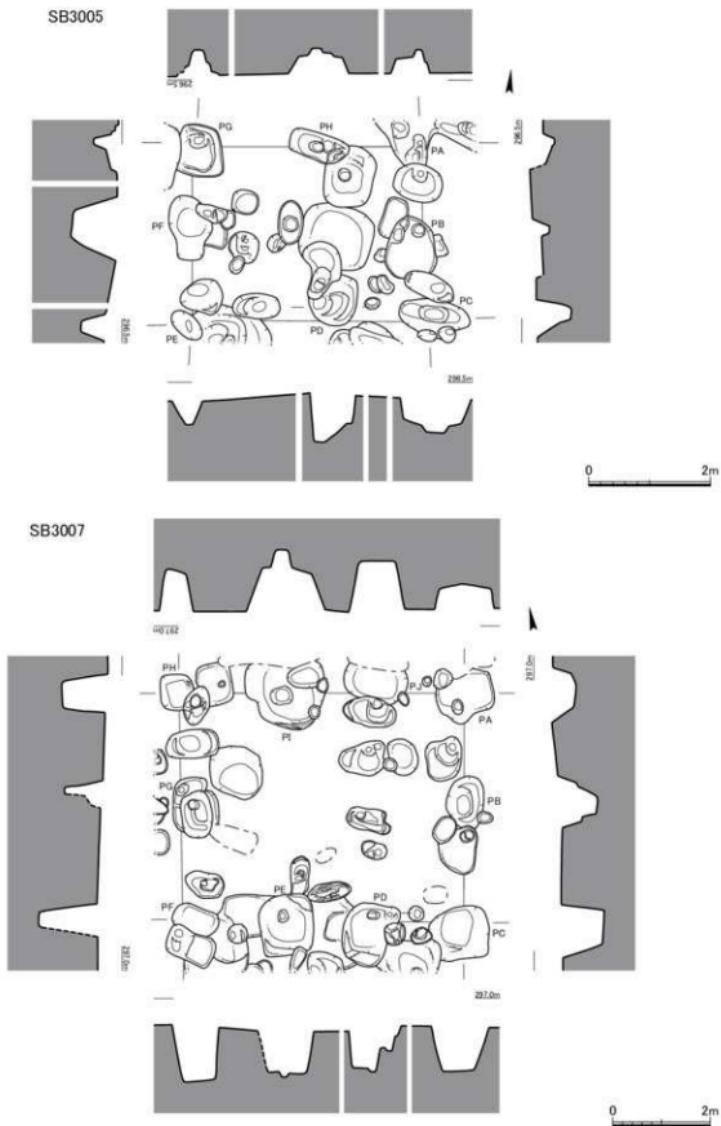


図23 1区中世の掘立柱建物3 (1/80・1/100)

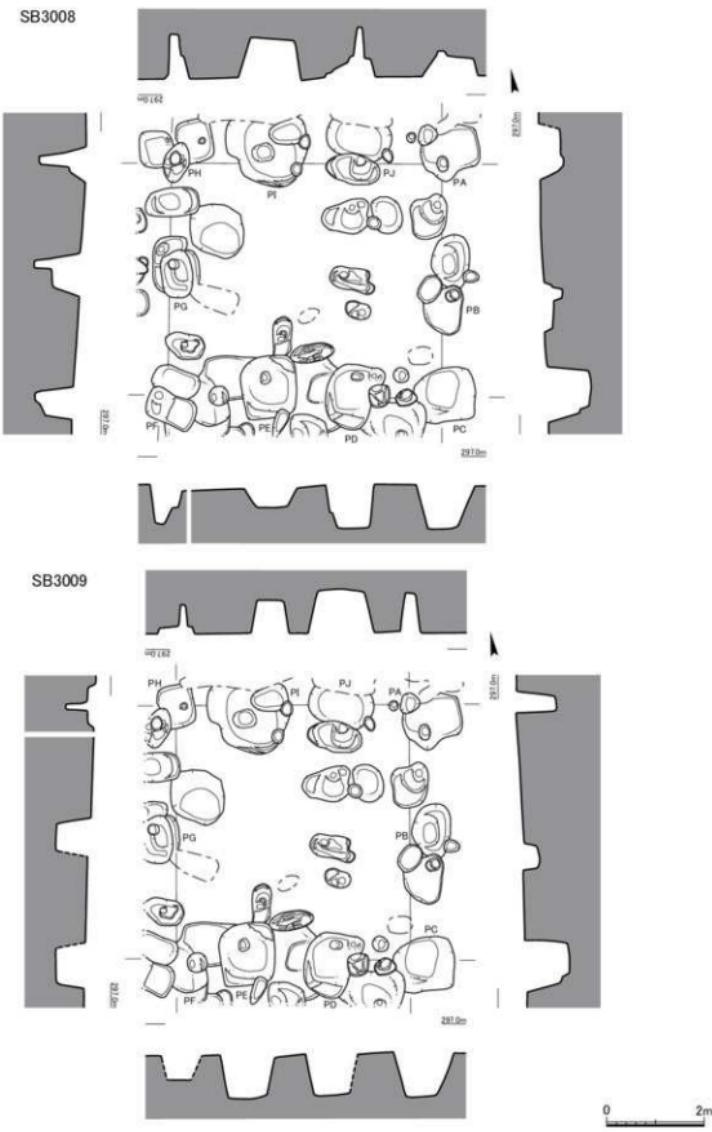


図 24 1区中世の掘立柱建物4 (1/100)

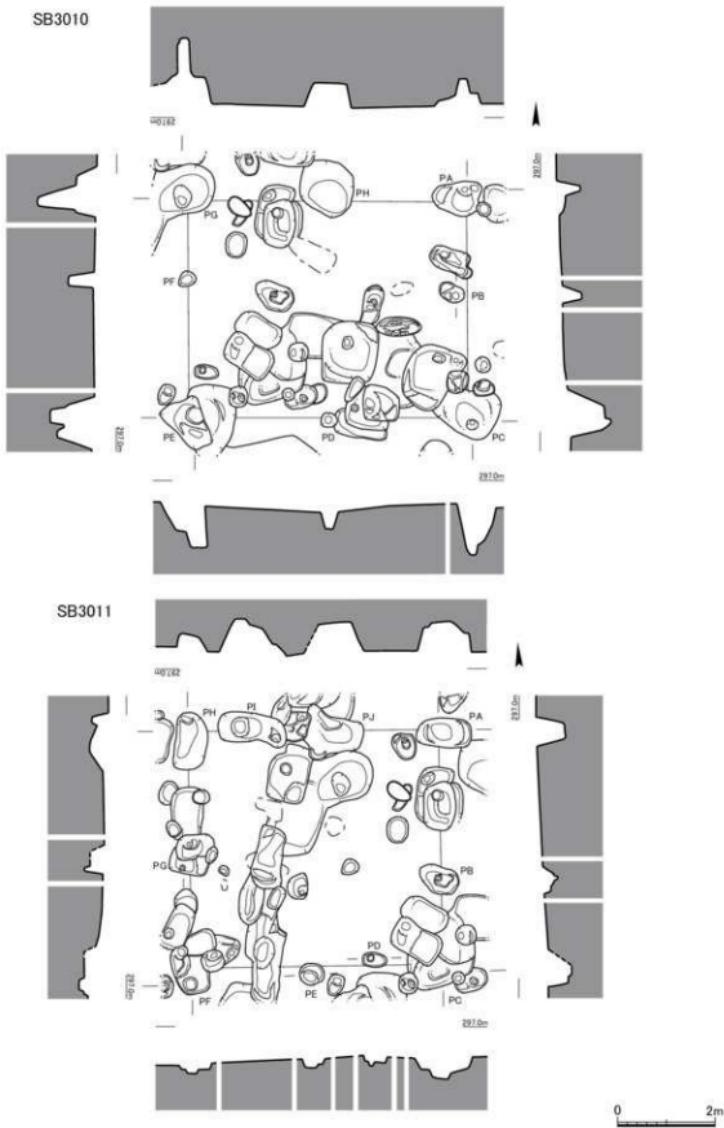


図 25 1区中世の掘立柱建物 5 (1/100)

施釉され、高台内は露胎である。

SB3011（図 25）

遺構集中部の北側に位置する。梁行2間(4.88 m)×桁行3間(5.14 m)の東西棟の側柱建物で、主軸はN88°W、柱間は梁行1.80～3.00 m、桁行1.20～2.30 m、床面積は25.08m²である。柱穴は、長軸0.50～1.20 m、短軸0.30～0.60 m、深さ0.20～0.70 mの楕円形または隅丸長方形である。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜、中国産青磁碗、炭化物等が出土したが、小片のため図示していない。

SB3013（図 26）

遺構集中部の北西寄りに位置する。梁行2間(3.44 m)×桁行3間(6.04 m)の東西棟の側柱建物で、主軸はN80.5°W、柱間は梁行1.50～2.00 m、桁行1.00～2.00 m、床面積は20.78m²である。柱穴は、長軸0.30～1.40 m、短軸0.30～1.00 m、深さ0.30～1.00 mの円形または隅丸方形だが、大きさにはばらつきがある。SB3014と重複し、若干位置をずらして建て替えられたと考えられるが、新旧関係は明らかではない。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・火鉢・擂鉢・甕か、景德鎮窯系白磁皿等が出土した。

SB3013 出土遺物（図 50）

74は底部糸切の土師器杯で、底部には板状圧痕がみられる。75は景德鎮窯系の白磁で、森田E群の皿である。76・77は瓦質土器鍋で、ともに外面には煤が付着している。

SB3014（図 26）

遺構集中部の北西寄りに、SB3013と重複して位置する。梁行2間(3.64 m)×桁行3間(5.86 m)の東西棟の側柱建物で、主軸はN81°W、柱間は梁行1.60～2.10 m、桁行1.60～2.60 m、床面積は21.33m²である。柱穴は、長軸0.30～1.20 m、短軸0.30～1.20 m、深さ0.20～0.90 mの隅丸長方形または長楕円形のものを主体とする。SB3013と重複するが新旧関係は明らかではない。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋・茶釜、福建系（漳州窯系）青花碗、炭化物等が出土した。

SB3014 出土遺物（図 51）

78は瓦質土器鉢である。79は瓦質土器茶釜で、肩部に一条の沈線と印刻文が施される。

SB3015（図 27）

遺構集中部の北西側に位置する。梁行1間(2.10 m)×桁行1間(2.14 m)の東西棟の側柱建物として報告するが、調査区外の西側に建物が続いている可能性もある。柱穴は、長軸0.70 m前後、短軸0.50 m程、深さ0.20～0.50 mの楕円形である。主軸はN77°W、床面積は4.49m²である。遺物は出土していない。

SB3016（図 27）

遺構集中部の東側に位置する。梁行は2間(4.66 m)で、柱間はPC・PD間が2.06 m、PD・PE間が2.60 mである。桁行は、1間分(3.20 m)まで確認している。建物の東半部は調査区外のため全容は不明であるが、仮に南北棟の建物と考えた時の主軸は、N 9°Eである。柱穴からは、瓦質土器鍋・茶釜等が出土したが、小片のため図示していない。

SB3017（図 28）

遺構集中部のやや東側に位置する。梁行2間(3.24 m)×桁行3間(6.96 m)の東西棟の側柱建物で、主軸はN78°W、柱間は梁行1.50～1.70 m、桁行2.30～2.60 m、床面積は22.54m²である。柱穴は、長軸0.70～1.30

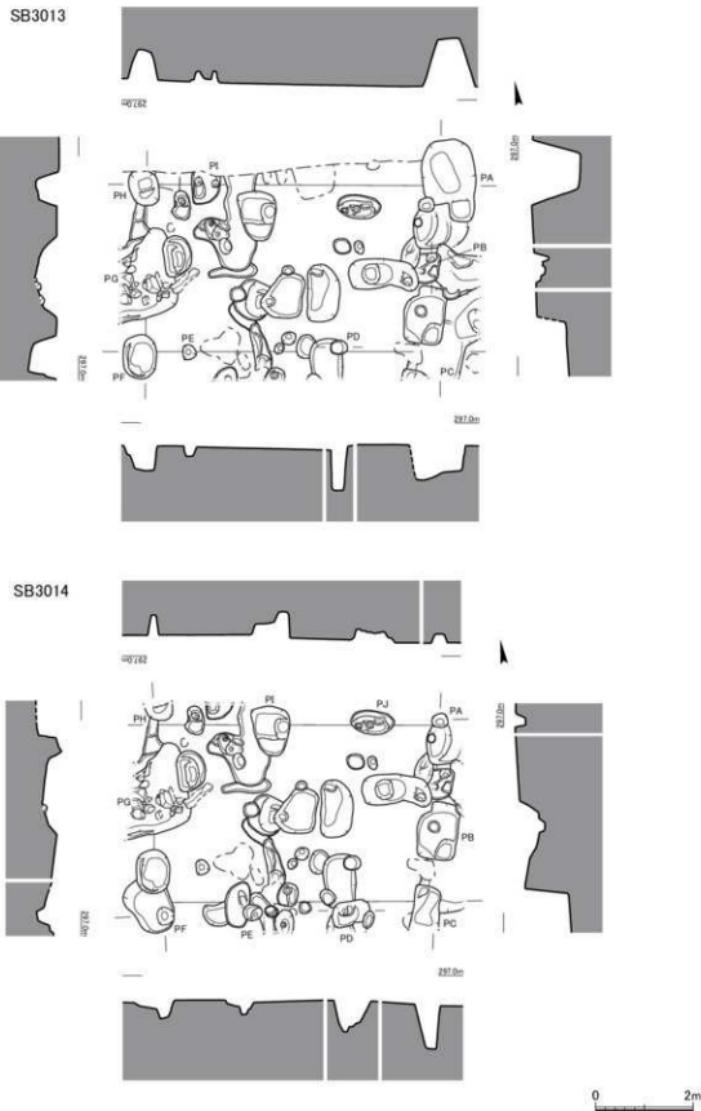
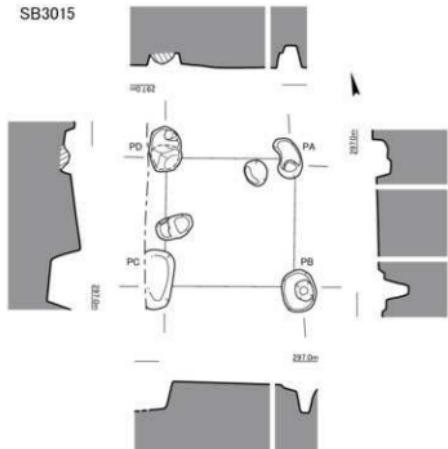
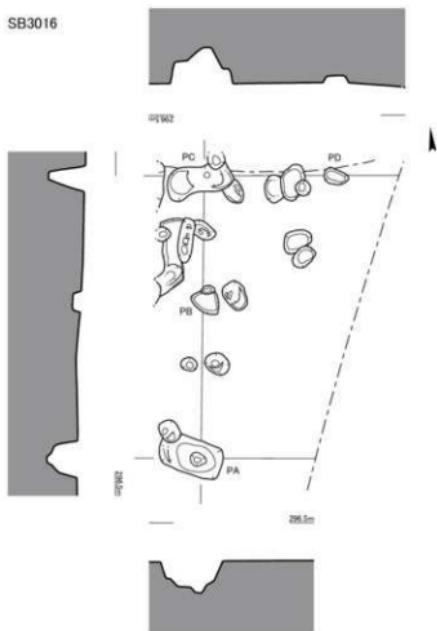


図 26 1区中世の掘立柱建物 6 (1/100)

SB3015



SB3016



0 2m

図27 1区中世の掘立柱建物7 (1/80)

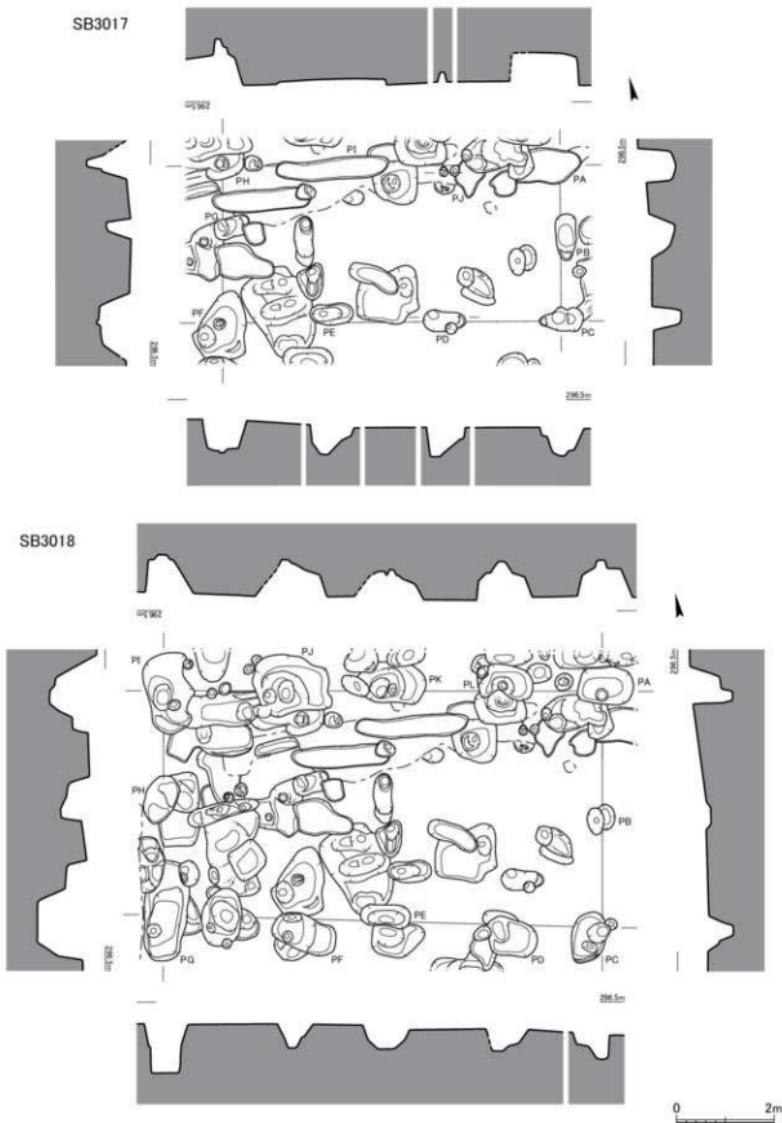


図 28 1区中世の掘立柱建物 8 (1/100)

m、短軸は 0.50 ~ 0.90 m、深さ 0.50 ~ 1.00 m の長楕円形のものが主体である。柱穴からは、瓦質土器鍋・茶釜、竜泉窯系青磁碗等が出土した。

SB3017 出土遺物（図 51）

80・81 は竜泉窯系の青磁碗である。80 は上田 B IV 類で、外面に線描蓮弁文が施され、SB3018 から出土した 84、P1531 から出土した 136 と同一個体である可能性がある。81 は上田 B II 類で、外面に幅の広い片切形の蓮弁文が施される。82 は瓦質土器鍋、83 は瓦質土器茶釜で、ともに外面に煤が付着している。

SB3018（図 28）

遺構集中部の中央東寄りに、SB3019 と重複して位置する。梁行 2 間（4.60 m）×桁行 4 間（9.10 m）の東西棟の側柱建物で、主軸は N79° W、柱間は 梁行 2.30 ~ 2.40 m、桁行 2.00 ~ 2.60 m、床面積は 41.86 m² で、調査された建物の中で最も床面積が大きい。SB3019 とともに他の建物より明らかに規模が大きく、建物群の中でも主要な建物であると考えられる。柱穴は大型で、長軸 1.10 ~ 1.50 m、短軸 0.70 ~ 0.80 m の隅丸方形または楕円形である。重複する SB3019 より新しいと考えられる。この 2 棟の建物はほぼ同規模であり、同一箇所で建て替えが行われたことが窺える。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜・擂鉢・鉢・壺、防長系瓦質土器足鍋、竜泉窯系青磁碗、炭化物等が出土した。

SB3018 出土遺物（図 51）

84・85 は竜泉窯系の青磁碗で、84 は上田 B IV 類で、外面に線描蓮弁文が施され、SB3017 から出土した 80、P1531 から出土した 136 と同一個体である可能性がある。85 の高台内は輪状に釉剥ぎされる。86 は瓦質土器直口壺、87 は瓦質土器茶釜、88 は防長系の瓦質土器足鍋の脚部である。

SB3019（図 29）

遺構集中部の中央東寄りに、SB3018 と重複して位置する。梁行 2 間（4.90 m）×桁行 4 間（8.52 m）の東西棟の側柱建物で、主軸は N78° W、柱間は 梁行 2.20 ~ 2.60 m、桁行 2.00 ~ 2.70 m、床面積は 41.75 m² である。柱穴は SB3018 と同様に大型で、隅丸方形または楕円形である。重複する SB3018 より古いと考えられる。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜が出土した。

SB3019 出土遺物（図 51）

89 は外耳をもつ瓦質土器鍋、90 は瓦質土器茶釜で、ともに外面に煤が付着している。

SB3020（図 29）

遺構集中部の中央やや東寄りに位置する。梁行 1 間（1.80 m）×桁行 1 間（3.26 m）の東西棟の側柱建物で、主軸は N80° W、床面積は 5.87 m² である。柱穴は長軸 0.40 ~ 0.80 m、短軸 0.30 ~ 0.50 m、深さ 0.30 ~ 0.50 m の隅丸方形または不整楕円形である。遺物は出土していない。

SB3021（図 30）

遺構集中部の中央やや東寄りに位置する。梁行 2 間（3.78 m）×桁行 2 間（5.42 m）の東西棟の側柱建物で、主軸は N78.5° W、柱間は 梁行 1.50 ~ 2.50 m、桁行 2.50 ~ 3.00 m、床面積 39.01 m² である。柱穴は、長軸 0.50 ~ 1.30 m、短軸 0.30 ~ 1.00 m、深さ 0.50 ~ 1.00 m の隅丸方形または長楕円形である。PG で 0.15 m 程の柱根が残存していた。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜・火鉢等が出土した。

SB3021 出土遺物（図 51）

91・92 は底部糸切の土師器小皿で、92 の内外面には煤が付着している。

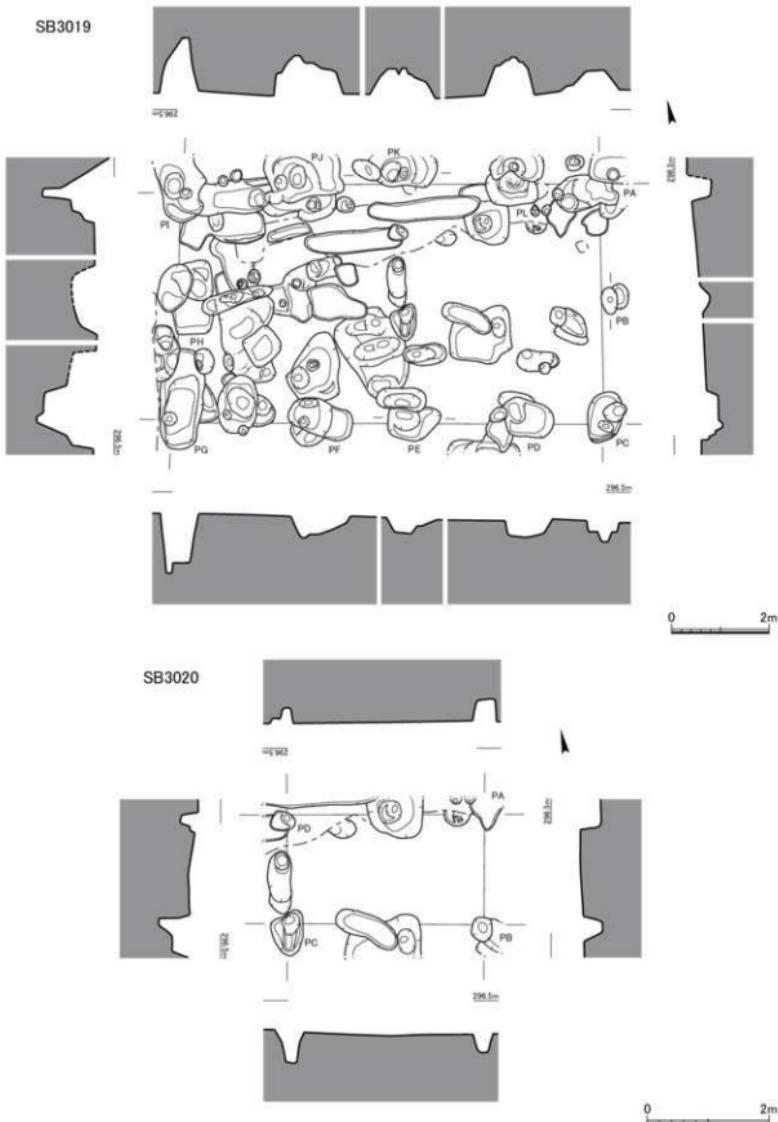


図29 1区中世の掘立柱建物9 (1/100・1/80)

SB3022（図 30）

遺構集中部のほぼ中央に位置する。梁行2間（3.30 m）×桁行3間（5.58 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN79°W、柱間は梁行1.40～2.00 m、桁行1.60～2.30 m、床面積は18.41m²である。柱穴は、長軸0.30～1.40 m、短軸0.25～0.70 m、深さ0.25～0.90 mの円形または長楕円形である。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜・火鉢、防長系瓦質土器足鍋、福建系青花皿等が出土した。

SB3022 出土遺物（図 51）

93は福建系（漳州窯系）の青花皿である。94は防長系の瓦質土器足鍋の口縁部である。

SB3023（図 31）

遺構集中部のほぼ中央に位置する。梁行2間（3.74 m）×桁行2間（5.50 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN79°W、柱間は梁行1.60～2.20 m、桁行2.40～3.00 m、床面積は20.57m²である。柱穴は、長軸1.00～1.30 m超、短軸0.30～1.00 m、深さ0.40～1.20 mの隅丸長方形または長楕円形のものが主体である。重複するSB3026よりも新しいと考えられる。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜が出土した。

SB3023 出土遺物（図 51）

95は底部糸切の土師器杯、96は瓦質土器鍋で、いずれも外面に煤が付着している。

SB3024（図 31）

遺構集中部のほぼ中央に位置する。梁行1間（2.24 m）×桁行1間（3.52 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN65°W、床面積は7.88m²である。柱穴は、長軸0.40～1.00 m、短軸0.40～0.90 m、深さ0.40～0.60 mの長楕円形または不整隅丸方形である。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋・茶釜、竜泉窯系青磁碗、炭化物等が出土した。

SB3024 出土遺物（図 51）

97は底部糸切の土師器小皿、98は瓦質土器鍋である。

SB3025（図 32）

遺構集中部の中央や西寄りに位置する。梁行2間（4.50 m）×桁行3間（6.43 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN89°W、柱間は梁行2.20～2.30 m、桁行1.60～2.20 m、床面積は28.93m²である。柱穴は、長軸0.50～1.30 m、短軸は0.30～0.90 m、深さ0.30～0.60 mの隅丸方形または長楕円形のものが主体である。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・擂鉢・火鉢、防長系瓦質土器足鍋、炭化物等が出土した。

SB3025 出土遺物（図 51）

99は底部糸切の土師器杯で、底部に煤が付着している。100は防長系の瓦質土器足鍋の口縁部である。

SB3026（図 32）

遺構集中部の中央西寄りに位置する。梁行2間（4.10 m）×桁行3間（6.10 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN80.5°W、柱間は梁行1.50～2.30 m、桁行1.70～2.20 m、床面積25.01m²である。柱穴は、長軸0.20～0.60 m、短軸0.20～0.60 m、深さ0.20 m程の円形で小型のものと、長軸0.90～1.00 m、短軸0.50～0.90 m、深さ0.40～0.80 mの隅丸方形または長楕円形で大型のものがある。重複するSB3023より古いと考えられるが、SB3027との新旧関係は明確ではない。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜、竜泉窯系青磁碗、福建系青花碗、朝鮮半島産陶器碗、炭化物等が出土した。

SB3026 出土遺物（図 51）

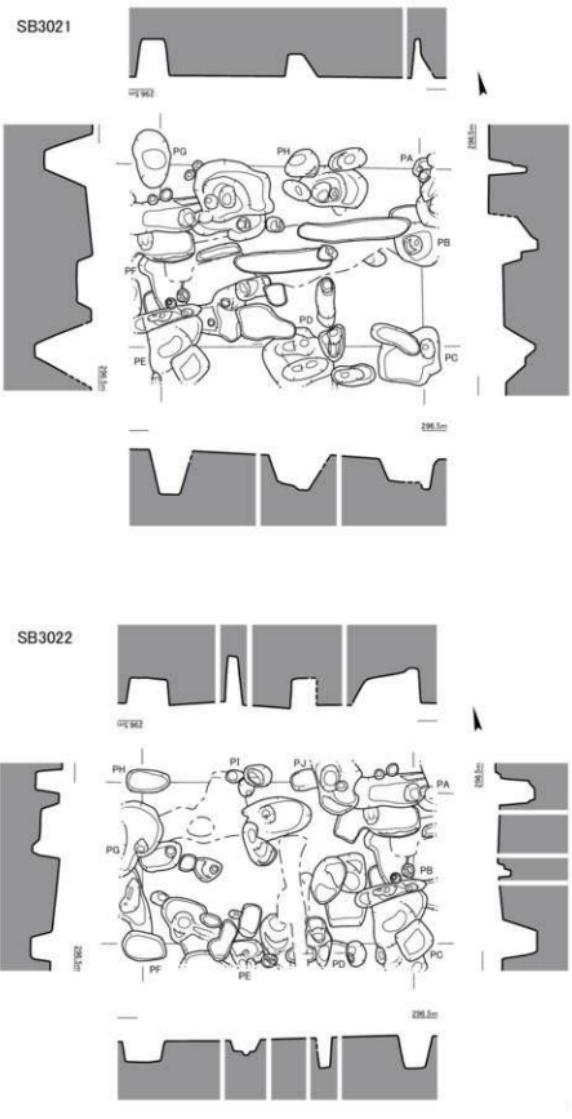


図 30 1区中世の据立柱建物 10 (1/100)

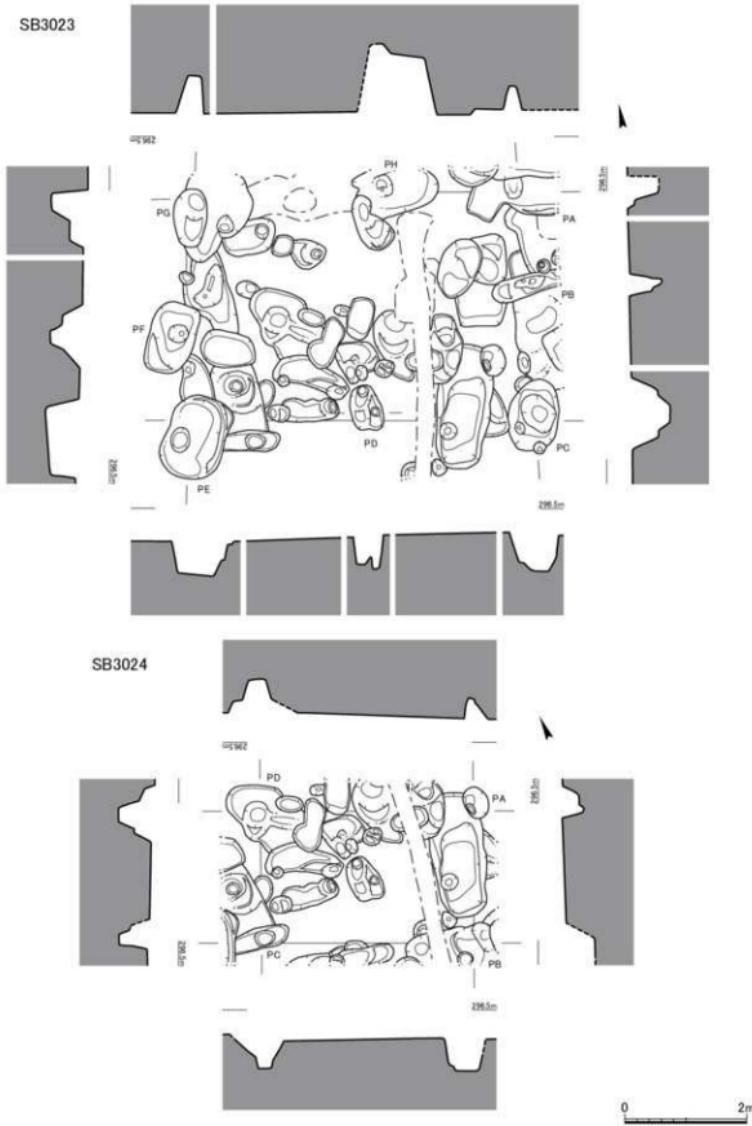


図 31 1 区中世の据立柱建物 11 (1/80)

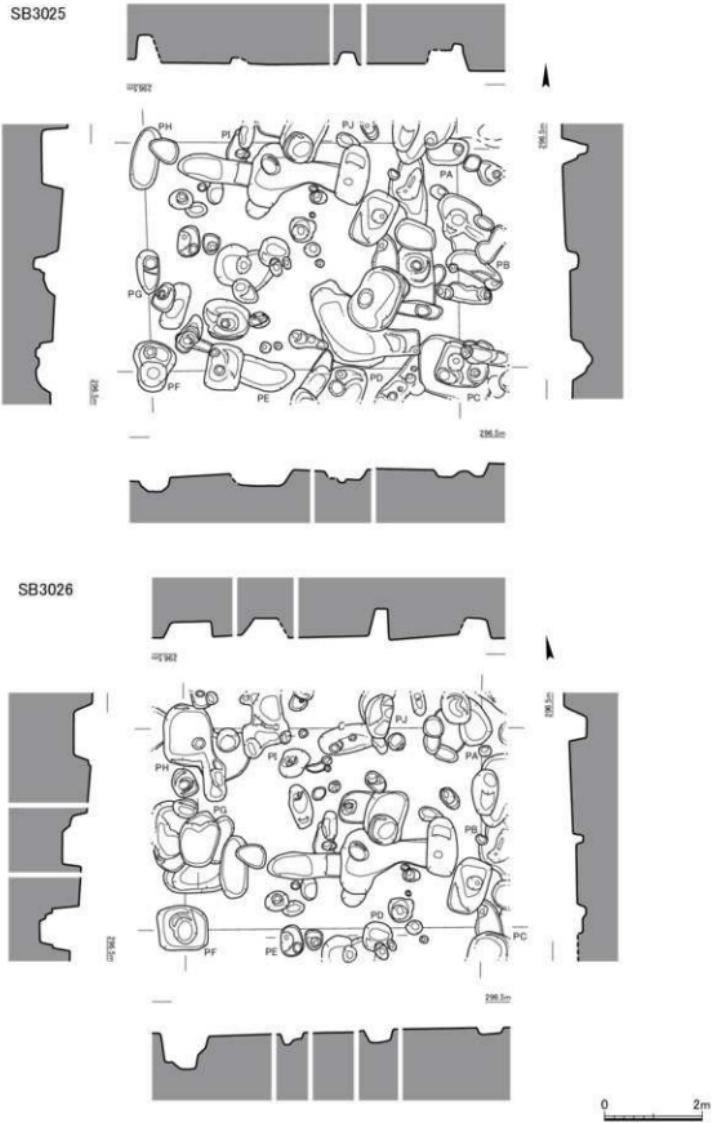


図32 1区中世の据立柱建物12 (1/100)

101は底部糸切の土師器杯である。102は竜泉窯系の青磁で、上田B IV類の碗である。内面見込みに印花文、外面に線描蓮弁文が施される。103は福建系と考えられる青花皿で、碁笥状底部の小野皿C群である。焼成不良のため釉はオリーブ灰色、露胎部は赤褐色を呈している。

SB3027（図33）

遺構集中部の中央西寄りに位置する。梁行2間（3.72m）×桁行3間（5.42m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN80.5°W、柱間は梁行1.30～1.90m、桁行1.50～2.00m、床面積20.16m²である。柱穴は、長軸1.00～1.20m、短軸0.60～0.80m、深さ0.50～1.20mの長楕円形で大型のものと、長軸0.50～0.60m、短軸0.30～0.60m、深さ0.20～0.60mの円形または楕円形で小型のものがある。SB3026と重複するが、新旧関係は明確ではない。柱穴からは、土師器杯、瓦質土器鍋、竜泉窯系青磁碗、朝鮮半島産陶器碗等が出土した。

SB3027出土遺物（図51）

104は竜泉窯系の青磁碗で、内面には片切彫で蓮花文が施される。14世紀後半～15世紀中頃の資料と考えられる。105は朝鮮王朝期の灰青陶器碗である。

SB3028（図33）

遺構集中部の西寄りに位置する。梁行2間（4.63m）×桁行3間（6.10m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN81°W、柱間は梁行2.10～3.10m、桁行1.40～2.40m、床面積は28.24m²である。柱穴は、長軸1.00～1.50m、短軸0.50～1.30m以上、深さ0.40～1.00mの長楕円形または隅丸長方形のものが主体であるが、円形で小型のものもある。SB3029・SB3050と重複するが新旧関係は明らかではない。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋・鉢が出土した。

SB3028出土遺物（図52）

106は底部糸切の土師器小皿である。107は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。

SB3029（図34）

遺構集中部の西寄りに位置する。梁行2間（3.38m）×桁行3間（6.20m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN81.5°W、柱間は梁行1.40～2.00m、桁行は1.00～2.40m、床面積は20.96m²である。柱穴は長軸0.30～1.20m、短軸0.30～0.80m、深さ0.10～0.70mの隅丸方形または楕円形である。SB3028と重複するが、新旧関係は明確ではない。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器茶釜などが出土した。

SB3029出土遺物（図52）

108は底部糸切の土師器杯で、口縁部にわずかに油煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。

SB3030（図34）

遺構集中部の西側に位置する。梁行1間（2.18m）×桁行1間（2.68m）の東西棟の側柱建物として復元したが、調査区外の西側に建物が続いている可能性もある。主軸はN80.5°W、床面積は5.84m²である。柱穴は、長軸1.00m程、短軸0.60～0.70m、深さ0.30～0.90mの長楕円形である。重複するSB3031・SB3032より新しいと考えられる。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋・茶釜、景德鎮窯系白磁皿等が出土した。

SB3030出土遺物（図52）

109は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。写真図版14-153は景德鎮窯系の白磁皿底部で、16世紀代の資料である。

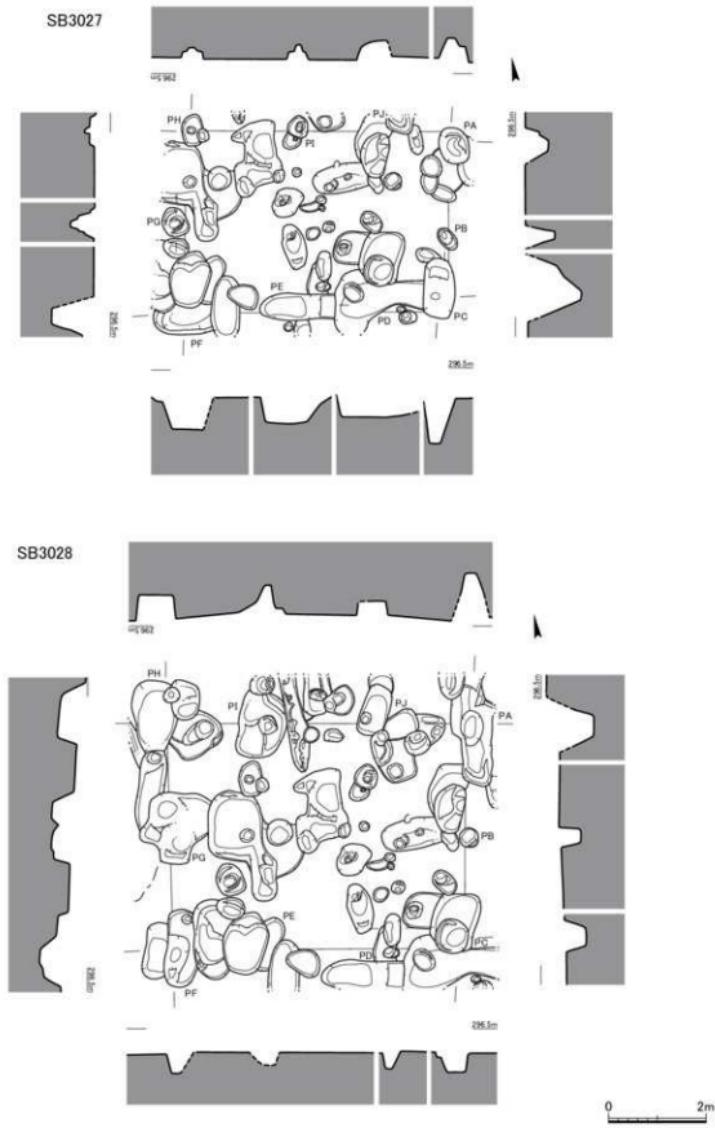


図33 1区中世の据立柱建物13 (1/100)

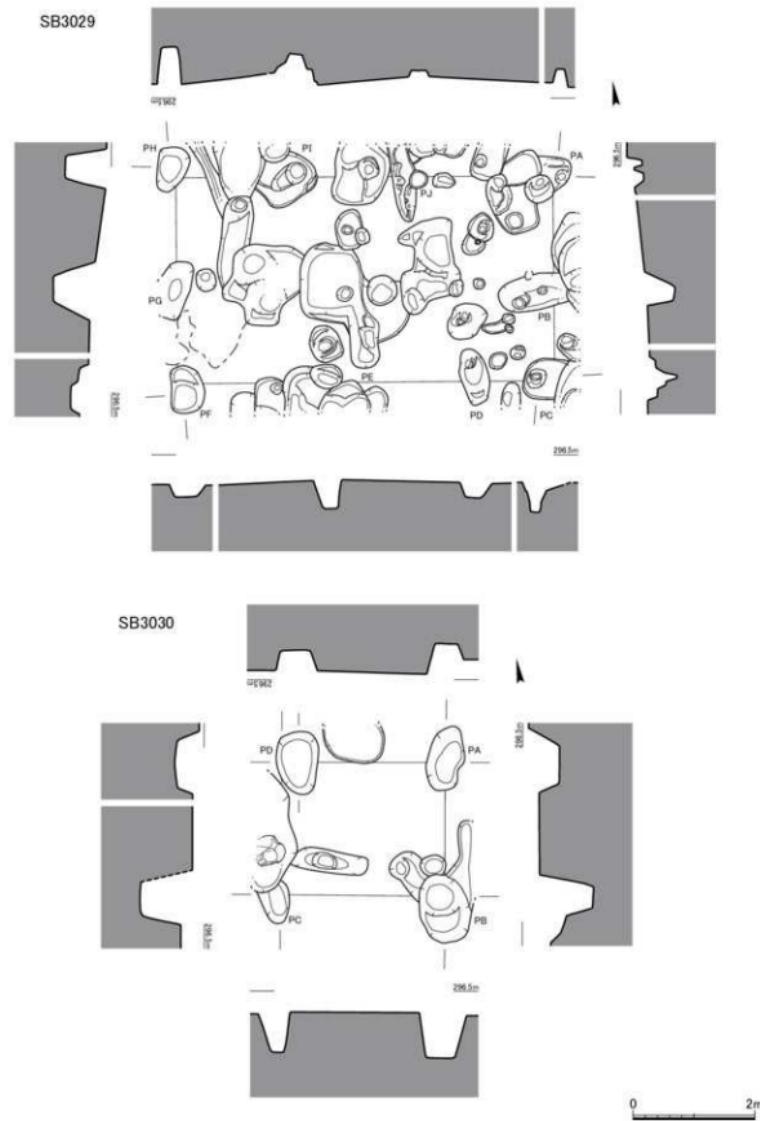


図34 1区中世の掘立柱建物 14 (1/80)

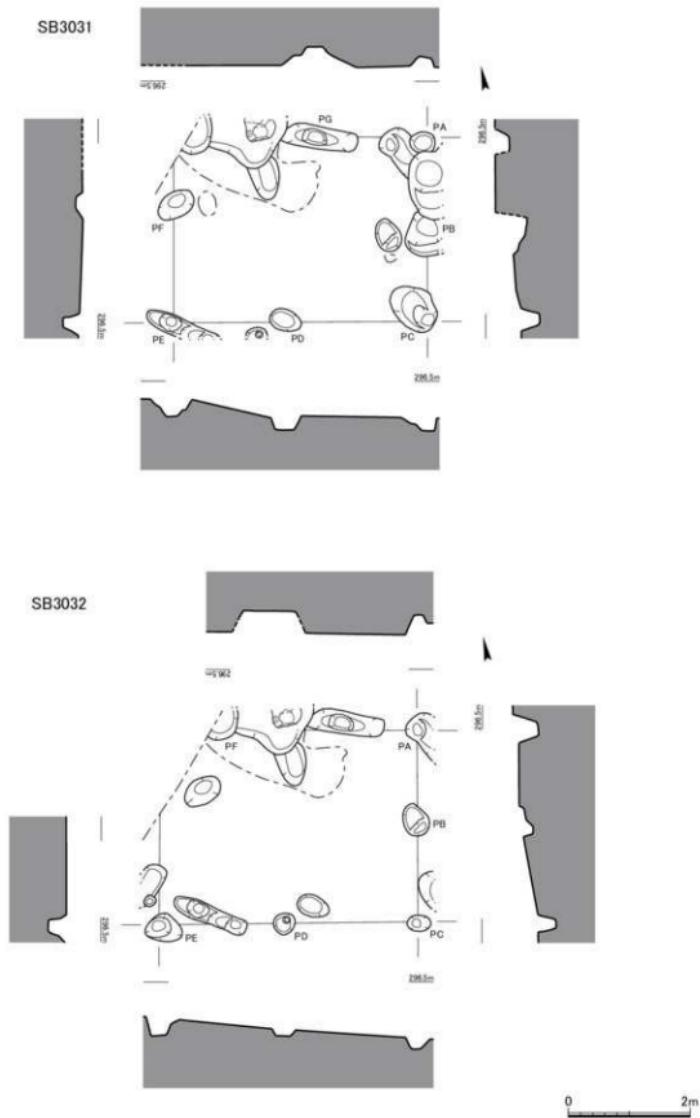


図35 1区中世の掘立柱建物 15 (1/80)

SB3031（図 35）

遺構集中部の西側に位置する。梁行2間（3.00 m）×桁行2間（4.18 m）の東西棟の側柱建物としたが、北西隅の柱穴は調査区外のため確認できていない。主軸はN80°W、柱間は梁行1.30～2.00 m、桁行1.90～2.30 m、床面積は12.54m²である。柱穴は、長軸0.40～1.30 m以上、短軸0.30～0.60 m、深さ0.10～0.50 mの楕円形または長楕円形である。重複するSB3030より古いと考えられるが、SB3032との新旧関係は明らかではない。遺物は出土していない。

SB3032（図 35）

遺構集中部の西側に位置する。梁行2間（3.14 m）×桁行2間（4.28 m）の東西棟の側柱建物で、北西隅の柱穴は調査区外のため確認できていない。2間×2間の建物として復元したが、建物がさらに西側の調査区外へ続いている可能性もある。主軸はN80°W、柱間は確認されている部分で梁行1.57 m、桁行2.14 mである。柱穴は、長軸0.30～0.60 m、短軸0.30～0.40 m、深さ0.10～0.40 mの円形または楕円形である。重複するSB3030より古いと考えられるが、SB3031との新旧関係は明らかではない。柱穴からは、土師器小皿が出土しているが、小片のため図示していない。

SB3035（図 36）

遺構集中部の東側に位置する。梁行1間（2.00 m）×桁行1間（2.50 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN70.5°W、床面積は5.00m²である。柱穴は、長軸0.30～0.04 m、短軸0.30 m、深さ0.20～0.40 mの隅丸方形または長楕円形で、小型である。重複するSB3036・SA3034より新しいと考えられる。遺物は出土していない。

SB3036（図 36）

遺構集中部の東側に位置する。梁行1間（1.52 m）×桁行1間（3.04 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN75.5°W、床面積は4.62m²である。柱穴は、長軸0.20～0.30 m、短軸0.20～0.30 m、深さ0.20～0.30 mの円形または長楕円形である。SB3035・SB3037と重複し、いずれよりも古いと考えられる。遺物は出土していない。

SB3037（図 36）

遺構集中部の東側に位置する。梁行1間（1.34 m）×桁行1間（2.40 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN86.5°W、床面積は3.22m²である。柱穴は、長軸0.20～0.30 m以上、短軸は0.20 m程、深さ0.10～0.30 mの円形である。SB3038と重複し、SB3038より新しいと考えられる。遺物は出土していない。

SB3038（図 36）

遺構集中部の東側に位置する。梁行1間（0.74 m）×桁行1間（1.84 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN85.5°W、床面積は1.36m²である。柱穴は、長軸0.20～0.50 m、短軸0.20～0.30 m、深さ0.10～0.35 mの円形あるいは長楕円形である。重複するSB3037より古いと考えられる。柱穴からは、瓦質土器鍋、防長系瓦質土器足鍋等が出土したが、いずれも小片のため図示していない。

SB3039（図 37）

遺構集中部の東側や北寄りに位置する。梁行1間（2.18 m）×桁行1間（2.76 m）の南北棟の側柱建物で、主軸はN9.5°E、床面積は6.02m²である。柱穴は、0.60～1.00 m、短軸0.30～0.60 m、深さ0.40～0.50 mの長楕円形あるいは隅丸方形である。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋が出土したが、いずれも小片のため図

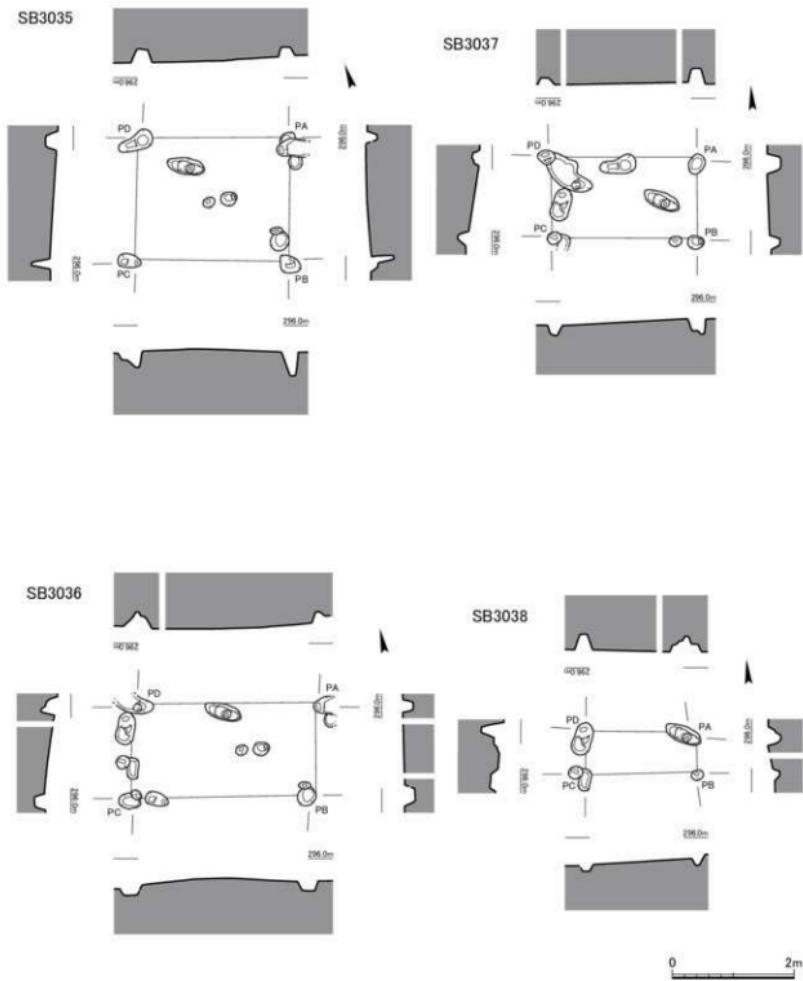


図 36 1区中世の据立柱建物 16 (1/80)

示していない。

SB3040（図 37）

遺構集中部の中央部南東寄りに位置する。梁行2間（4.18 m）×桁行3間（8.26 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN84°W、柱間は梁行1.80～2.30 m、桁行2.00～3.30 m、床面積は34.52m²である。柱穴は、長軸0.40～0.60 m、短軸0.35 m、深さ0.20～0.60 mで円形のものと、長軸1.00 m～1.50 m、短軸0.30～0.80 m、深さ0.30～0.70 mの長楕円形または不整圓丸長方形のものがある。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋・茶釜・鉢が出土した。

SB3040 出土遺物（図 52）

110は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。

SB3041（図 38）

遺構集中部の中央南東寄りに位置する。梁行2間（4.66 m）×桁行3間（6.56 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN89.5°E、柱間は梁行2.00～2.50 m、桁行1.80～2.40 m、床面積は30.75m²である。柱穴は、長軸1.00 m程、短軸0.50 m弱、深さ0.30～1.00で、圓丸方形または長楕円形である。SB3042・SB3043と重複し、いずれよりも新しいと考えられる。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋・火鉢等が出土した。

SB3041 出土遺物（図 52）

111は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。

SB3042（図 38）

遺構集中部の南側やや東寄りに位置する。梁行2間（2.86 m）×桁行3間（4.96 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN81.5°E、柱間は梁行1.00～1.60 m、桁行1.50～1.90 m、床面積は14.19m²である。柱穴は、長軸約0.60 m、短軸0.40～0.50 m程、深さ0.20～0.50 mの長楕円形である。重複するSB3041より古く、SB3043より新しいと考えられる。特にSB3043とは、柱穴の大きさや建物の規模がほぼ同じで、同一箇所に位置することから、建て替えが行われたことが窺える。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜等が出土したが、いずれも小片のため図示していない。

SB3043（図 39）

遺構集中部の中央やや東寄りに位置する。梁行2間（3.06 m）×桁行3間（4.92 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN80°W、柱間は梁行1.06 m（西側柱列）、桁行1.30～2.20 m、床面積は15.06m²である。なお、東列中央の柱穴は確認されていない。重複するSB3041より古く、SB3042より新しいと考えられる。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜等が出土したが、いずれも小片のため図示していない。

SB3044（図 39）

遺構集中部の南側に位置する。梁行2間（3.86 m）×桁行3間（6.98 m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN86°W、柱間は梁行1.60～2.10 m、桁行1.80～2.80 m、床面積は26.94m²である。柱穴は、長軸0.60～1.00 m、短軸0.40～0.50 m、深さは0.30～0.50 mの圓丸形または長楕円形のものが主体である。柱穴からは、瓦質土器鍋・茶釜・壺、朝鮮半島產陶器碗等が出土した。

SB3044 出土遺物（図 52）

112は朝鮮王朝期の灰青陶器碗である。113は瓦質土器直口壺である。

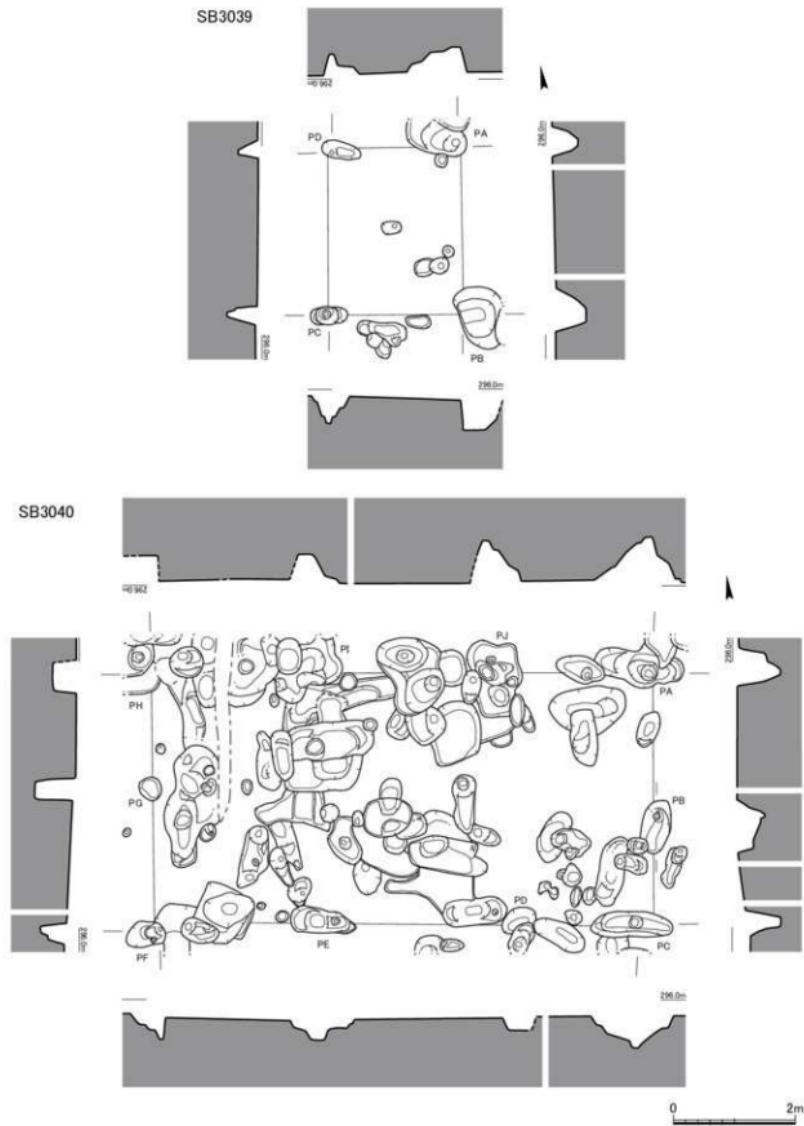


図37 1区中世の掘立柱建物 17 (1/80)

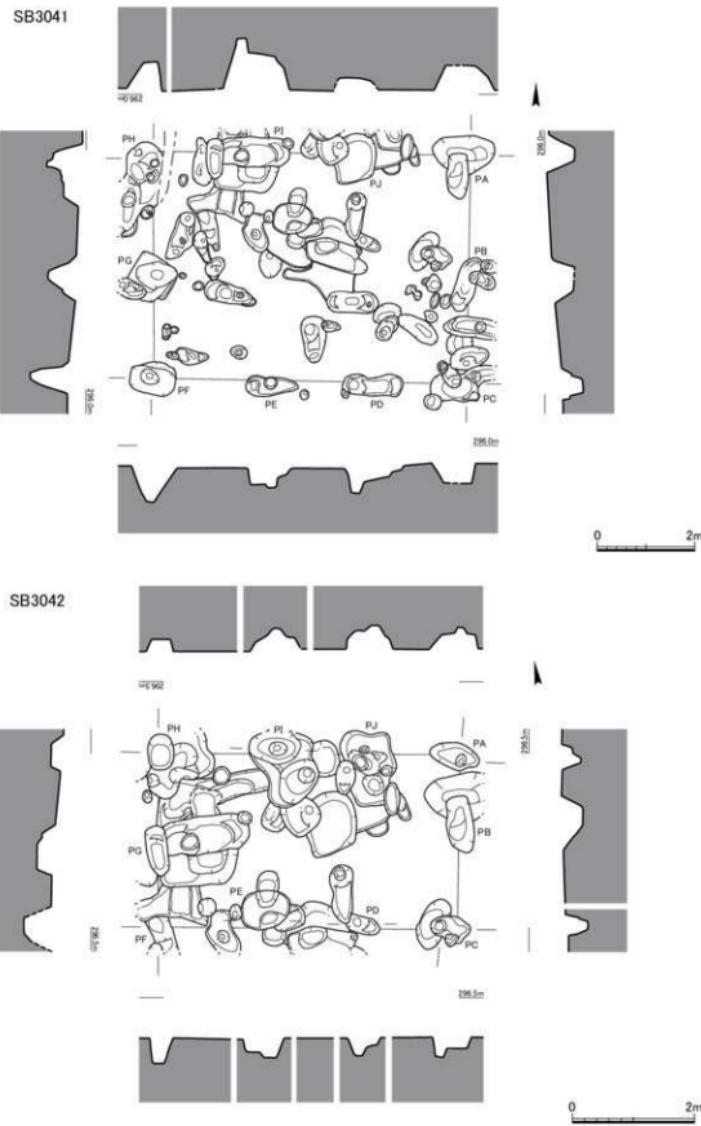
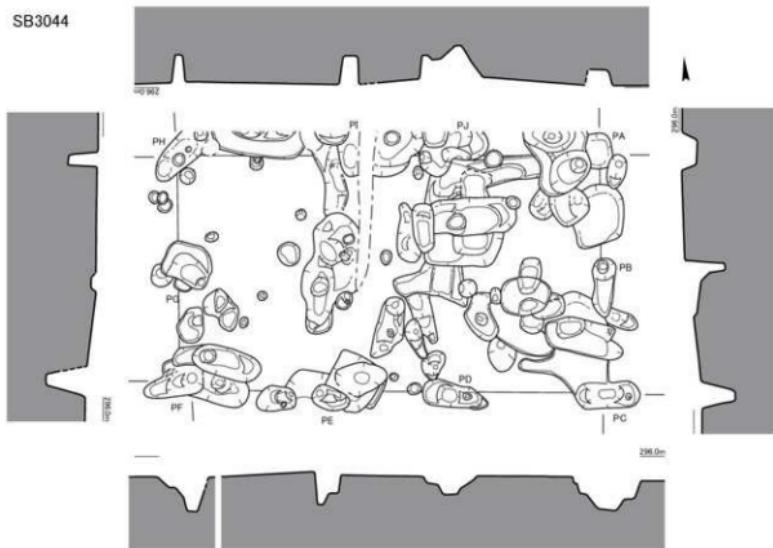


図38 1区中世の据立柱建物 18 (1/100・1/80)

SB3044



SB3043

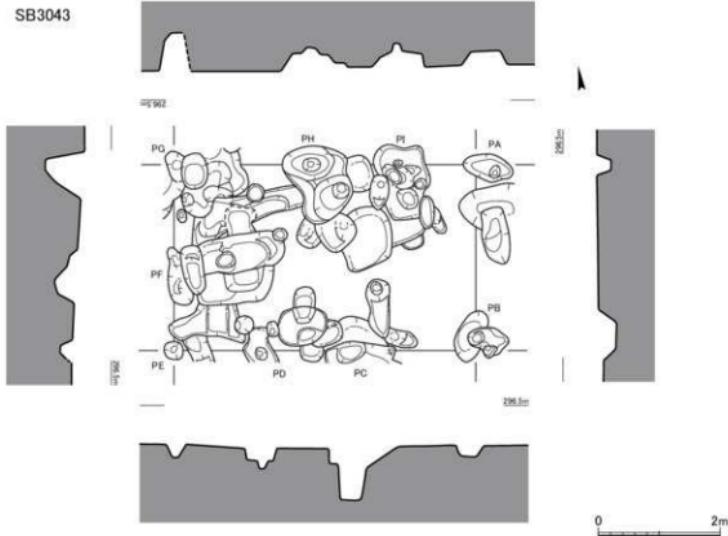


図39 1区中世の掘立柱建物 19 (1/80)

SB3046 (図 40)

遺構集中部の南側に位置する。梁行 2 間(4.98 m) × 柱行 3 間(6.68 m) の東西棟の側柱建物で、主軸は N74.5° W、柱間は梁行 2.00 ~ 2.60 m、柱行 2.00 ~ 2.60 m、床面積 34.76 m² である。柱穴は、長軸 0.80 ~ 2.00 m 以上、短軸 0.30 ~ 0.80 m の長楕円形のものが主体である。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・擂鉢、竜泉窯系青磁碗、朝鮮半島産陶器皿等が出土した。

SB3046 出土遺物 (図 52)

114 は底部糸切の土師器小皿である。115 は竜泉窯系の青磁碗と考えられ、口縁部は玉縁状で外反しており、15 世紀代の資料と考えられる。116 は朝鮮王朝期の灰青陶器皿で、内面見込みと疊付には砂目痕がみられる。

SB3047 (図 40)

遺構集中部の南側に位置する。梁行 2 間(2.16 m) × 柱行 3 間(1.97 m) の東西棟の側柱建物で、主軸は N79.5° W、柱間は梁行 2.00 ~ 2.50 m、柱行 1.50 ~ 2.30 m、床面積は 25.49 m² である。柱穴は、長軸 0.60 ~ 1.20 m、短軸 0.40 ~ 0.70 m、深さ 0.30 ~ 0.60 m の長楕円形のものが主体である。柱穴からは、土師器杯、瓦質土器鍋・茶釜、炭化物等が出土した。

SB3047 出土遺物 (図 52)

117 は底部糸切の土師器杯である。

SB3048 (図 41)

遺構集中部の南側やや西寄りに位置する。梁行 2 間(3.32 m) × 柱行 2 間(4.32 m) の東西棟の側柱建物で、主軸は N80° W、柱間は梁行 1.40 ~ 2.00 m、柱行 2.00 ~ 2.30 m、床面積は 14.34 m² である。柱穴は、長軸 0.60 ~ 1.20 m、短軸 0.50 ~ 0.60 m、深さ 0.20 ~ 0.60 m の楕円形または楕円形である。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋が出土したが、いずれも小片のため図示していない。

SB3049 (図 41)

遺構集中部の南側やや西寄りに位置する。梁行 2 間(3.78 m) × 柱行 2 間(5.76 m) の東西棟の側柱建物で、主軸は N65° W、柱間は梁行 1.00 ~ 2.70 m、柱行 2.60 ~ 3.00 m、床面積は 21.77 m² である。柱穴は、0.30 ~ 1.20 m、短軸 0.30 ~ 0.70 m、深さ 0.30 ~ 0.60 m の円形または長楕円形のものが主体である。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋、竜泉窯系青磁碗、景德鎮窯系白磁皿等が出土した。

SB3049 出土遺物 (図 52)

118 は底部糸切の土師器小皿である。119 は土師器杯で、口縁部にわずかに油煤が付着しており、灯明皿として用いられた可能性がある。120 は景德鎮窯系の白磁で、森田 E 群の皿である。121 は竜泉窯系の青磁で、上田 B IV 類の碗である。外面に線描蓮弁文が施される。

SB3050 (図 42)

遺構集中部の西側やや南寄りに位置する。梁行 2 間(4.46 m) × 柱行 2 間(4.96 m) の東西棟の側柱建物で、主軸は N78.5° W、柱間は梁行 1.50 ~ 3.00 m、柱行 2.30 ~ 2.60 m、床面積は 22.12 m² である。柱穴は、長軸 0.50 ~ 1.30 m、短軸 0.50 ~ 1.00 m、深さ 0.30 ~ 1.10 m の楕円形または長楕円形である。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋・茶釜、備前窯陶器甕等が出土した。

SB3050 出土遺物 (図 52)

122 は瓦質土器鍋で、内面上半から口縁部にかけて煤が付着している。

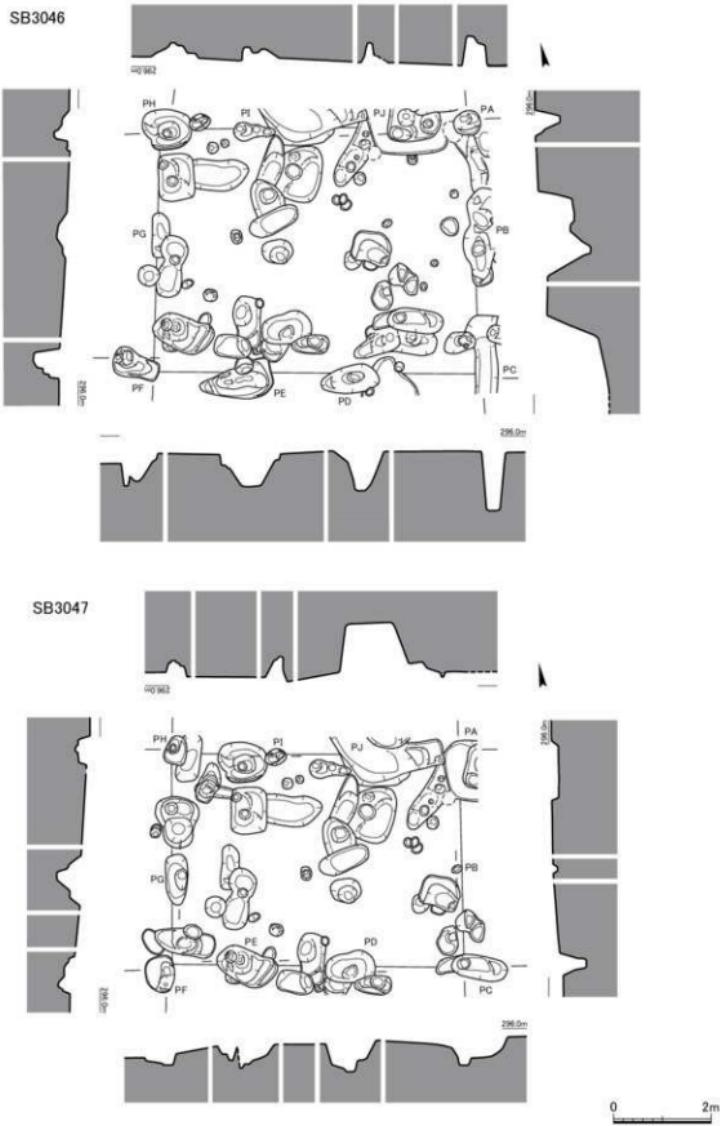


図40 1区中世の掘立柱建物 20 (1/100)

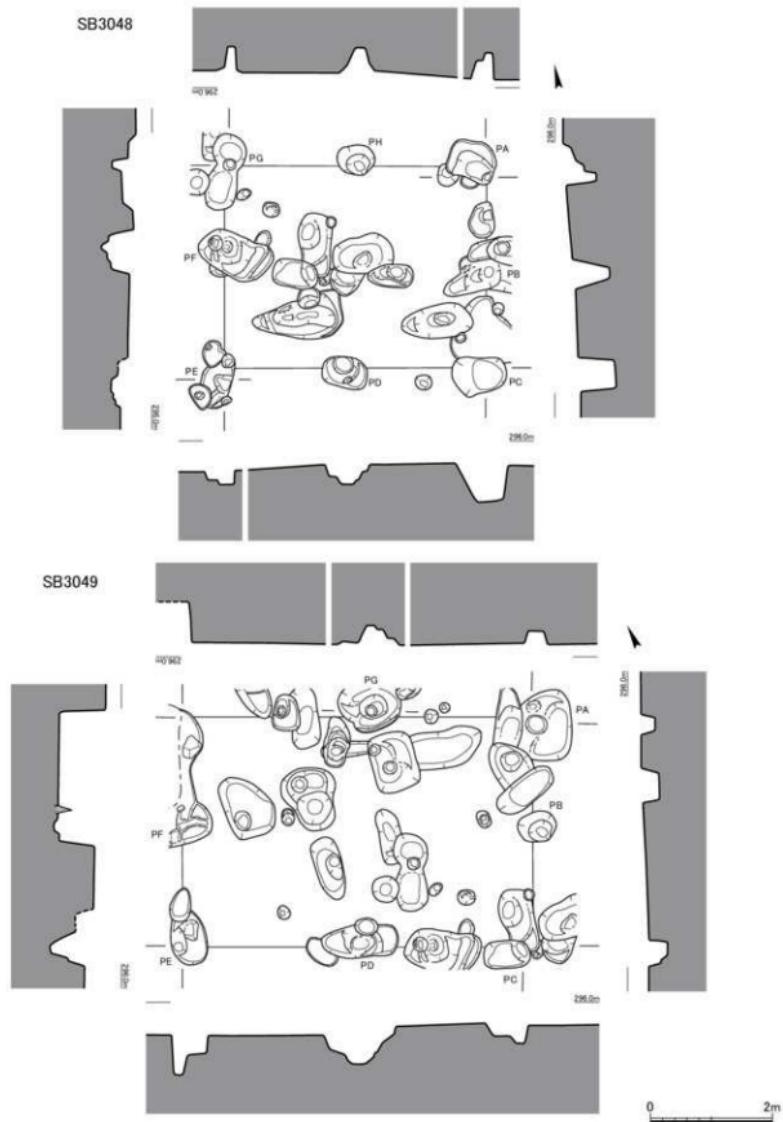


図41 1区中世の掘立柱建物 21 (1/80)

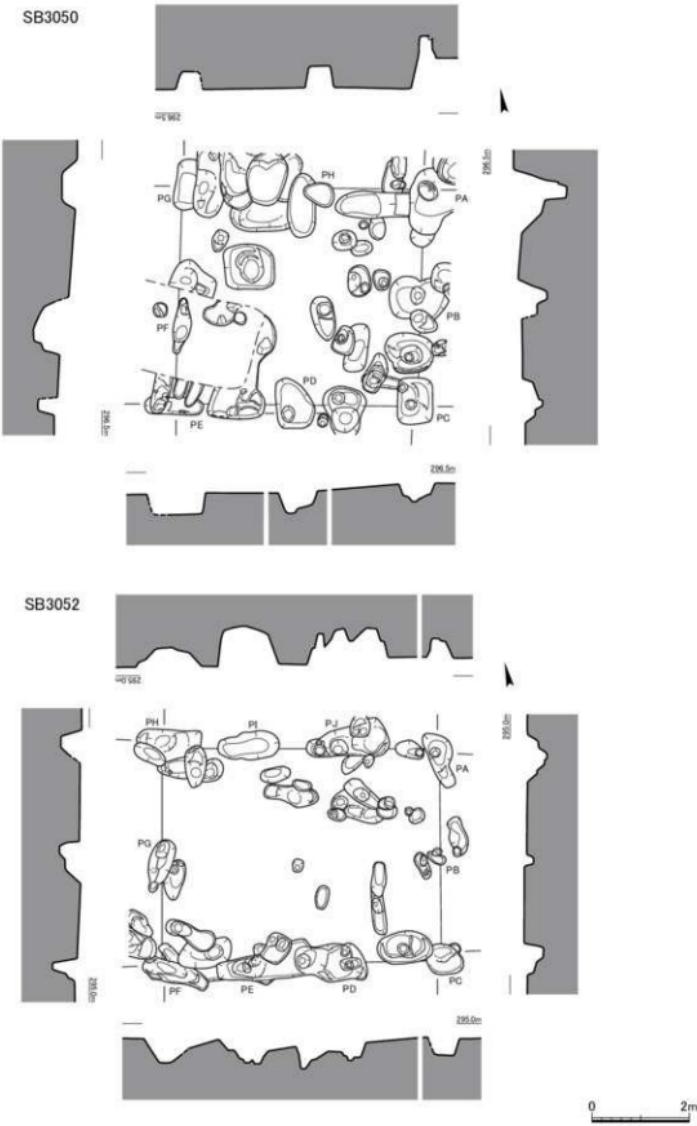


図42 1区中世の据立柱建物22 (1/100)

SB3052（図42）

遺構集中部の南東側に位置する。梁行2間（4.46m）×桁行3間（5.68m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN77°W、柱間は梁行1.90～2.10m、桁行1.70～2.10m、床面積は25.33m²である。柱穴は、長軸0.80～1.50m、短軸0.60～0.80m、深さ0.30～0.80mの円形または長楕円形のものが主体である。PD・PEとした柱穴は、細長い溝状の土坑となっており、一見すると布掘り状の掘方にも見える。この布掘り状の掘方は、近接した場所に複数の柱穴が掘り込まれた結果、柱穴が重複したものと考えられ、同一箇所での建て替えを示唆するものであろう。重複するSB3053より新しく、SB3056・SB3057より古いと考えられるが、SB3055との新旧関係は明らかではない。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・鉢が出土したが、いずれも小片のため図示していない。

SB3053（図43）

遺構集中部の南東側に位置する。梁行2間（4.26m）×桁行3間（5.68m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN75.5°W、柱間は梁行1.90～2.10m、桁行1.80～2.10m、床面積は24.20m²である。柱穴は、長軸1.00～1.50m、短軸0.60～0.80m、深さ0.40～0.80mの長楕円形である。SB3052・SB3055・SB3056・SB3057と重複し、最も古いと考えられる。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋、朝鮮半島産陶器碗等が出土した。

SB3053出土遺物（図52）

123は朝鮮王朝期の粉青沙器碗で、外面に刷毛で白化粧土が施される。P1420から出土した134と同一個体の可能性がある。

SB3054（図43）

遺構集中部の南東部に位置する。梁行1間（2.56m）×桁行1間（2.82m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN84°E、床面積は7.21m²である。柱穴は、長軸0.20～0.60m、短軸0.15～0.30m、深さ0.15～0.80mの円形または長楕円形である。柱穴からは、土師器小皿、土師器片が出土したが小片のため図示していない。

SB3055（図44）

遺構集中部の南東側に位置する。梁行1間（3.50m）×桁行1間（4.92m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN78°W、床面積は17.22m²である。柱穴は、長軸0.70～1.60m、短軸0.30～0.80m、深さ0.30～0.80mの長楕円形である。重複するSB3053より新しく、SB3056・SB3057よりも古いと考えられるが、SB3052との新旧関係は明らかではない。柱穴からは、瓦質土器茶釜が出土したが、小片のため図示していない。

SB3056（図44）

遺構集中部の南東側に位置する。梁行2間（3.70m）×桁行2間（3.70m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN70.5°W、柱間は梁行1.70～3.30m、桁行1.30～2.20mで、床面積は13.69m²である。柱穴は、長軸0.40～0.80m、短軸0.30～0.50m、深さ0.3～0.04mの長楕円形のものが主体である。重複するSB3052・SB3053・SB3055より新しいと考えられるが、SB3057との新旧関係は明らかではない。柱穴からは、瓦質土器鍋・茶釜が出土したが、小片のため図示していない。

SB3057（図45）

遺構集中部の南東側に位置する。梁行2間（3.08m）×桁行2間（4.48m）の東西棟の側柱建物で、主軸はN65°W、柱間は梁行1.54m、桁行1.30～2.00mで、床面積は13.80m²である。柱穴は、径0.30mほど、深さ0.20～0.30mの円形で規模の小さいものと、長軸0.50～1.00m、短軸0.30～0.80m、深さ0.30～0.60mの闊丸

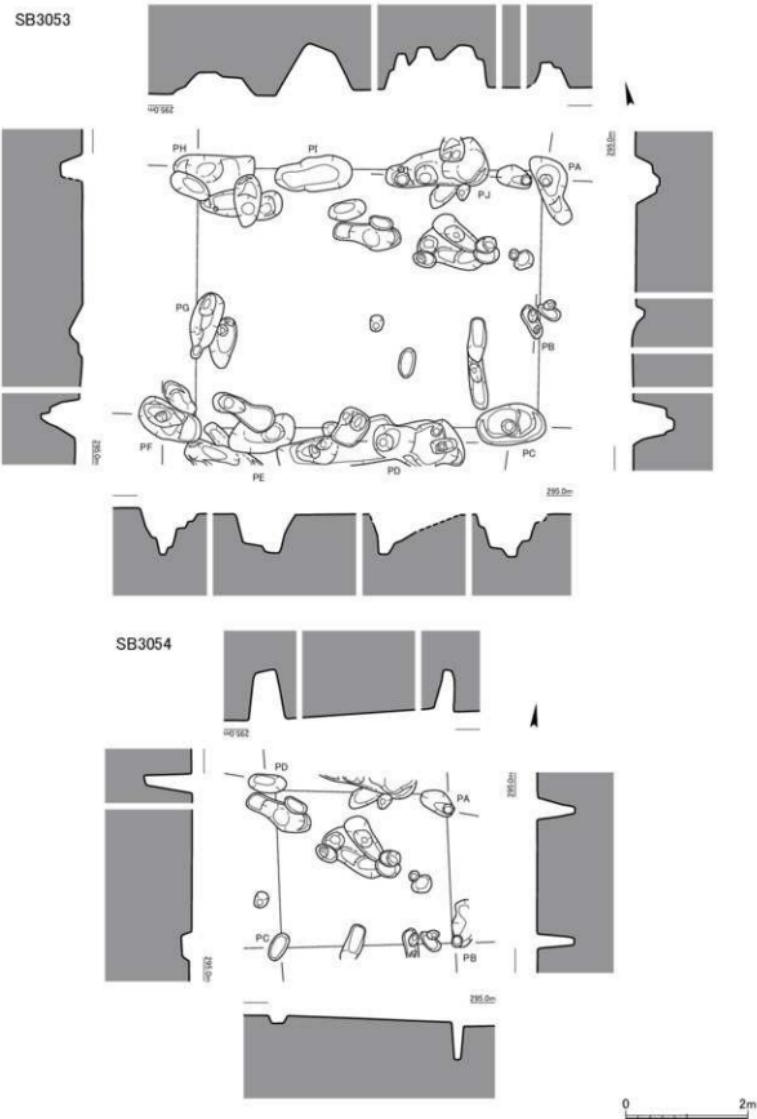


図43 1区中世の掘立柱建物 23 (1/80)

方形または長楕円形である。重複する SB3052・SB3053・SB3055 より新しいと考えられるが、SB3056 との新旧関係は明らかでない。柱穴からは、土師器杯、炭化物が出土したが、小片のため図示していない。

SB3058（図 45）

遺構集中部の南東側に位置する。梁行 1 間(1.98 m) × 柱行 1 間(2.90 m) の南北棟の側柱建物で、主軸は N10° E、床面積は 5.74 m² である。柱穴は、長軸 0.40 ~ 0.80 m、短軸 0.30 ~ 0.40 m、深さ 0.20 ~ 0.40 m の円形または長楕円形である。重複する SB3059 よりも古いと考えられる。遺物は出土していない。

SB3059（図 45）

遺構集中部の南東側に位置する。梁行 1 間(2.24 m) × 柱行 1 間(2.58 m) の南北棟の側柱建物で、主軸は N23° E、柱間は梁行 2.24 m、桁行は 2.58 m で、床面積は 5.78 m² である。柱穴は、長軸 0.50 ~ 0.70 m、短軸 0.30 ~ 0.45 m、深さ 0.15 ~ 0.50 m の円形または長楕円形である。重複する SB3058 よりも新しいと考えられる。柱穴からは、土師器杯、瓦質土器鍋・茶釜等が出土したが、いずれも小片のため図示していない。

SB3060（図 46）

遺構集中部の南東側に位置する。梁行 1 間(2.34 m) × 柱行 1 間(2.56 m) の東西棟の側柱建物で、主軸は N80° W、床面積は 5.99 m² である。柱穴は、長軸 0.25 ~ 0.80 m、短軸 0.20 ~ 0.40 m、深さ 0.10 ~ 0.50 m の円形または長楕円形である。遺構検出面は南西に向かって若干傾斜しており、PC 付近は削平されている可能性がある。重複する SB3061 より古いと考えられ、位置を若干ずらして建て替えが行われていると考えられる。遺物は出土していない。

SB3061（図 46）

遺構集中部の南東側に位置する。梁行 1 間(2.18 m) × 柱行 1 間(2.60 m) の東西棟の側柱建物で、主軸は N89.5° W、床面積は 5.84 m² である。柱穴は、長軸 0.30 ~ 0.80 m、短軸 0.20 ~ 0.40 m、深さ 0.15 ~ 0.30 m の円形または長楕円形である。遺構検出面は南西に向かって大きく傾斜しており、PC 付近は削平されている可能性がある。重複する SB3060 より新しいと考えられる。柱穴からは、瓦質土器鍋が出土したが、小片のため図示していない。

柵列

SA3006（図 47）

遺構集中部の北側やや東寄りに位置する。主軸を N89.5° W の東西方向にとる 3 間の柵列で、全長は 4.70 m、柱間は 1.50 ~ 1.60 m である。柱穴は、長軸 0.25 ~ 0.70 m、短軸 0.25 ~ 0.50 m、深さ 0.30 ~ 0.50 m の円形または長楕円形である。柱穴からは、瓦質土器鍋が出土したが、小片のため図示していない。

SA3012（図 47）

遺構集中部の北側やや西寄りに位置する。主軸を N5.5° W の南北方向にとる 4 間の柵列で、全長は 7.24 m、柱間は 1.50 ~ 2.00 m である。柱穴は径 0.20 ~ 0.80 m ほど、深さ 0.10 ~ 0.30 m の円形である。遺物は出土していない。

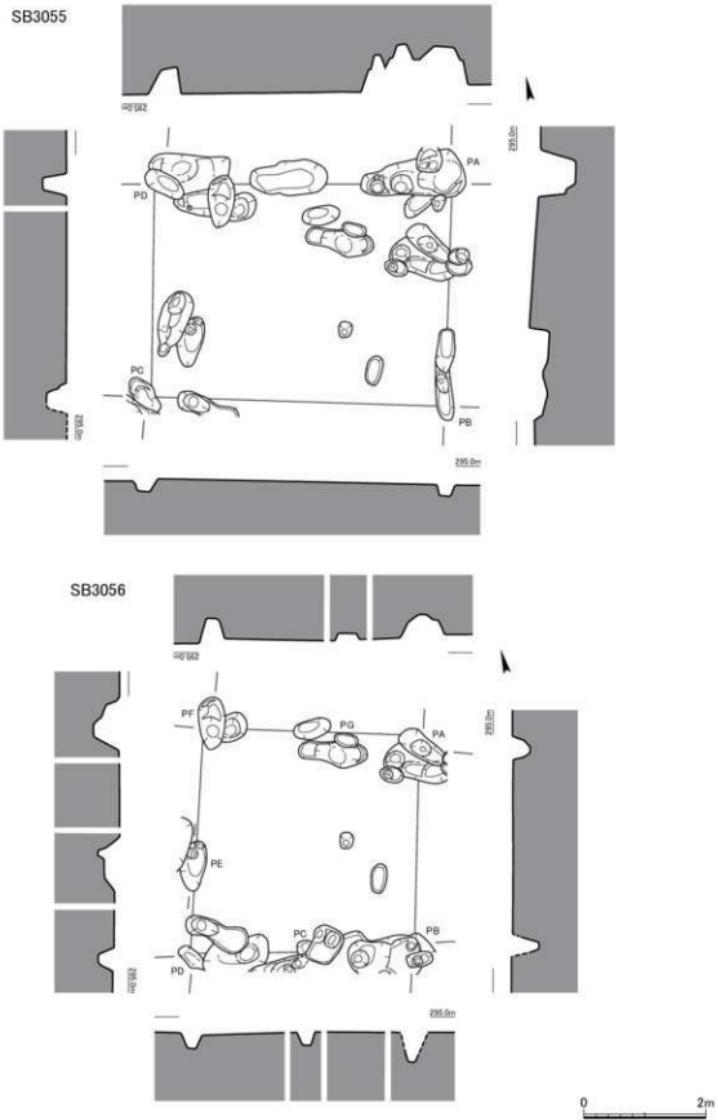


図 44 1 区中世の掘立柱建物 24 (1/80)

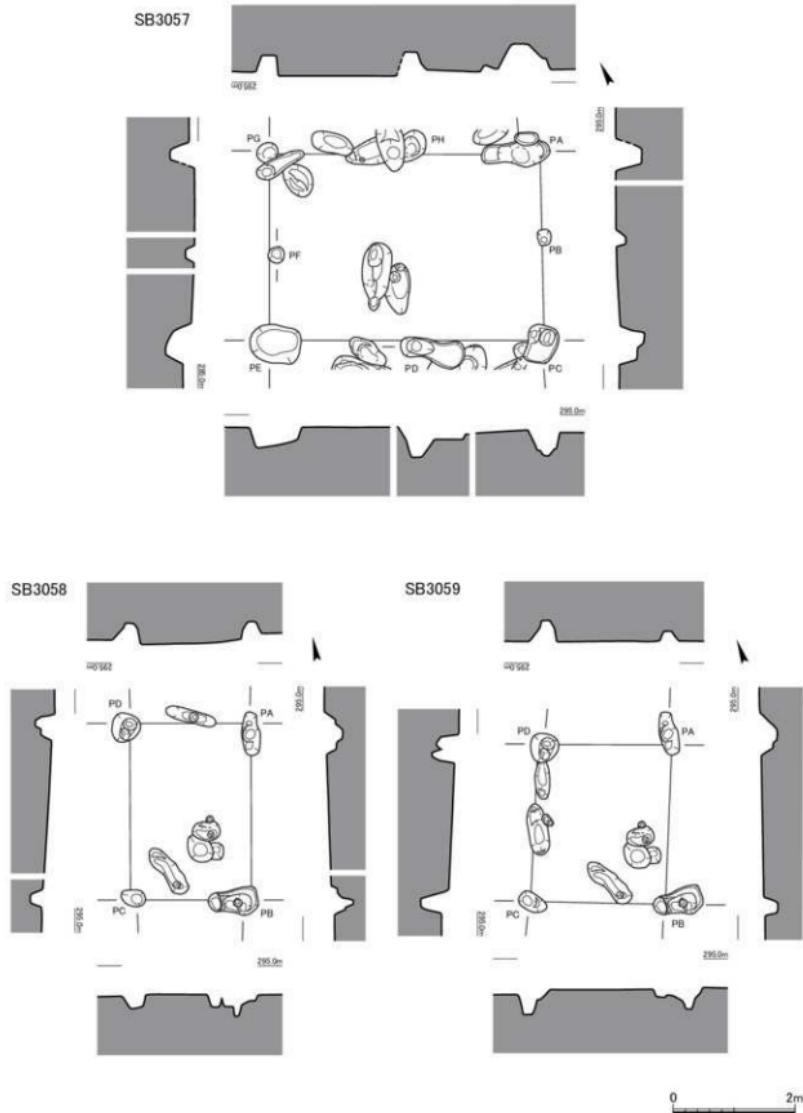


図45 1区中世の掘立柱建物 25 (1/80)

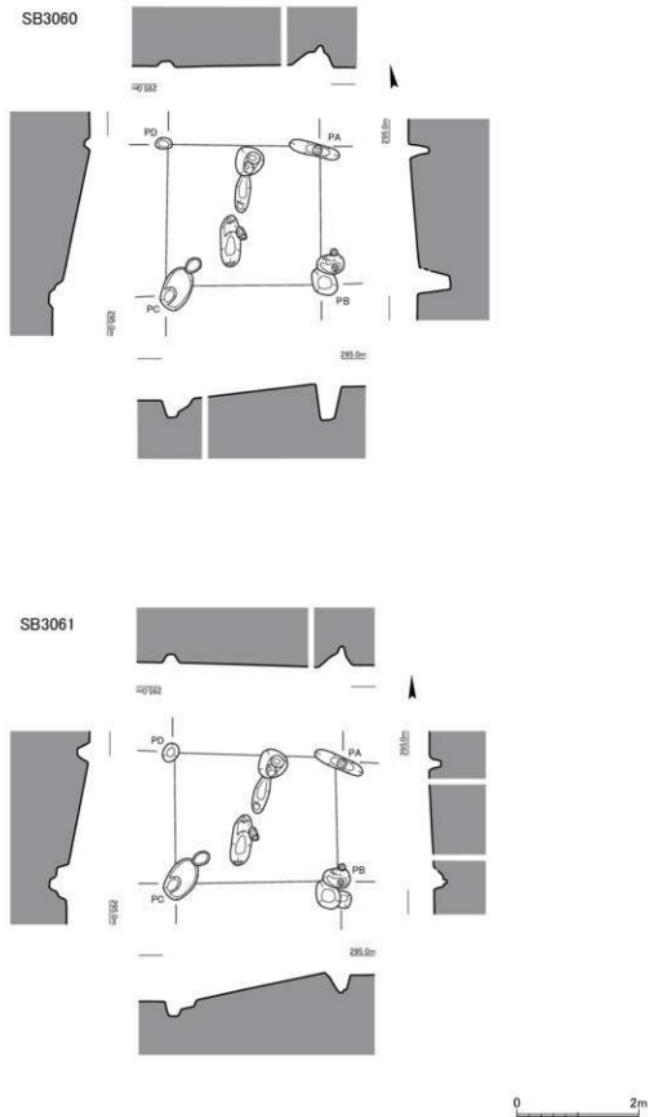


図 46 1区中世の掘立柱建物 26 (1/80)

SA3033 (図 47)

遺構集中部の東側やや南寄りに位置する。主軸を N19.5° E の南北方向にとる 3 間の柵列で、全長は 4.90 m、柱間は 0.70 ~ 2.30 m である。PA・PB・PC は長軸 1.00 ~ 1.50 m、短軸 0.50 m、深さ 0.30 ~ 0.70 m の長楕円形で、PD は長軸 0.50 m、短軸 0.20 m、深さ 0.15 m の長楕円形である。柱穴からは、土師器小皿、瓦質土器鍋が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。

SA3034 (図 47)

遺構集中部の東側やや南寄りに位置する。全長は 7.50 m、主軸を N18° E の南北方向にとる。PA と PB は布掘り状の掘方で、図では三つの柱穴しか表れていないが、PA にあと二つ、つまり計五つの柱穴があった可能性があり、4 間の柵列として報告しておく。柵として報告するが、布掘り状の掘方をもつことから、土壁を伴うような塀であった可能性もあるだろう。重複する SB3036 より古いと考えられる。遺物は出土していない。

SA3045 (図 47)

遺構集中部の南側に位置する。主軸を N74° W の東西方向にとる 3 間の柵列である。全長は 5.48 m、柱間は 1.30 ~ 2.00 m である。柱穴は、長軸 0.30 ~ 1.00 m、短軸 0.30 ~ 0.50 m、深さ 0.30 ~ 0.70 m の円形あるいは長楕円形である。遺物は出土していない。

SA3051 (図 47)

遺構集中部の西寄りに位置する。主軸を N75° W の東西方向にとる 4 間の柵列である。全長は 4.90 m、柱間は 2.10 ~ 2.60 m である。柱穴は、径 0.50 m ほど、深さ 0.30 ~ 1.00 m の円形または長楕円形である。柱穴からは、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋、防長系瓦質土器足鍋等が出土したが、いずれも小片のため図示していない。

その他の遺構と遺物

SX1874 (図 48)

遺構集中部の南側東寄りに位置する性格不明の遺構で、最大長約 5.80 m、最大幅約 4.70 m、深さ 0.20 ~ 0.37 m の不整形である。遺構の北東側から中央にかけて、0.05 ~ 0.70 m の礫が 20 個ほど出土したが、これらの礫は堆積土から出土しており、人為的に配置されたものではない。また、水が溜まっていたことを示す痕跡もみられず、庭園や園池等とは考えにくい。遺物は、土師器杯・小皿、瓦質土器鍋・茶釜、鉄釘等が出土した。

ちなみに、この場所は、星敷正面の出入口から建物群との間に展開するオープンスペースに該当し、中世の領主居館に多く見られる、建物前面の多目的広場（いわゆる「前庭」）であった可能性がある。

SX1874 出土遺物（図 52）

124・125 は底部糸切の土師器杯で、124 には煤が付着している。

SD1001・SD1002 (図 19・48)

遺構集中部の南側に位置し、南北方向に延びている。西側が SD1001、東側が SD1002 である。SD1001 は長さ 8.60 m、幅 0.60 ~ 0.80 m、深さ 0.50 ~ 0.95 m、SD1002 は長さ 7.50 m、幅約 0.80 m、深さ 0.20 ~ 0.70 m である。2 本の溝は南側で重複しており、SD1002 が古く、SD1001 が新しい。

この溝は、人為的に掘削されたものではなく、水の影響で形成された一種の自然流路と考えられる。SD1001 からは、遺物は出土していない。SD1002 からは、土師器小皿、瓦質土器鍋等が出土したが、いずれも小片のため図示していない。

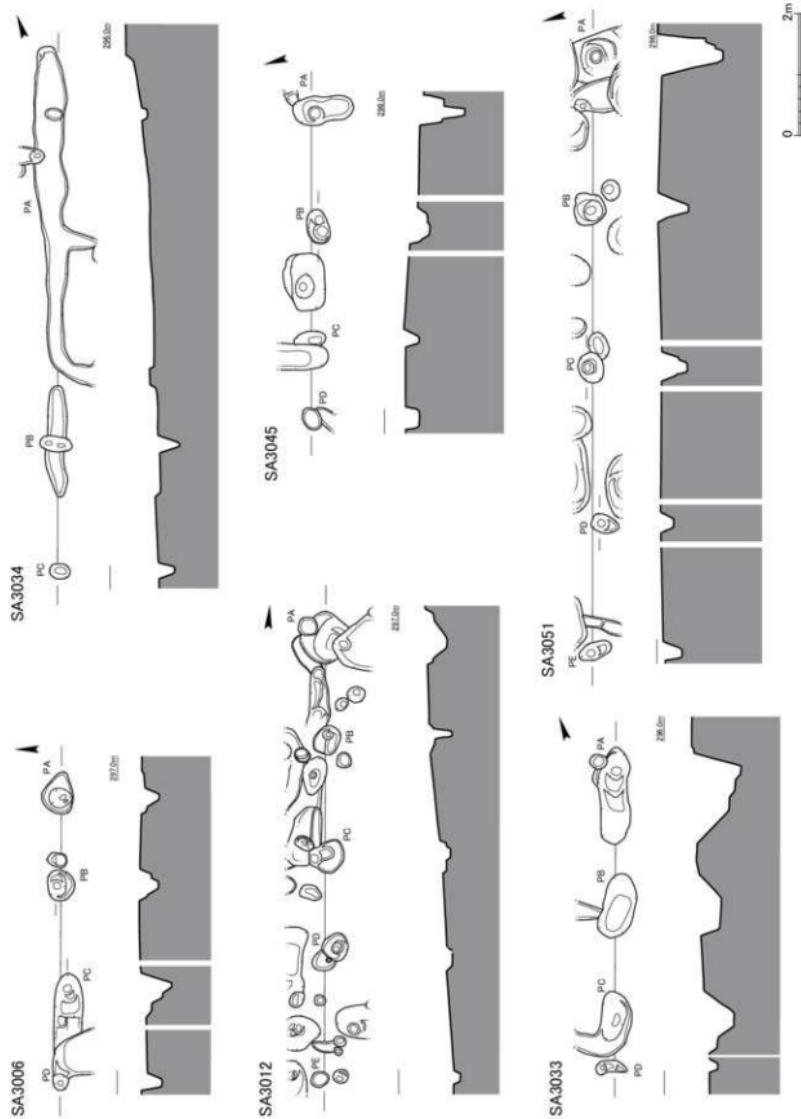


図 47 1区中世の様列 (1/80)

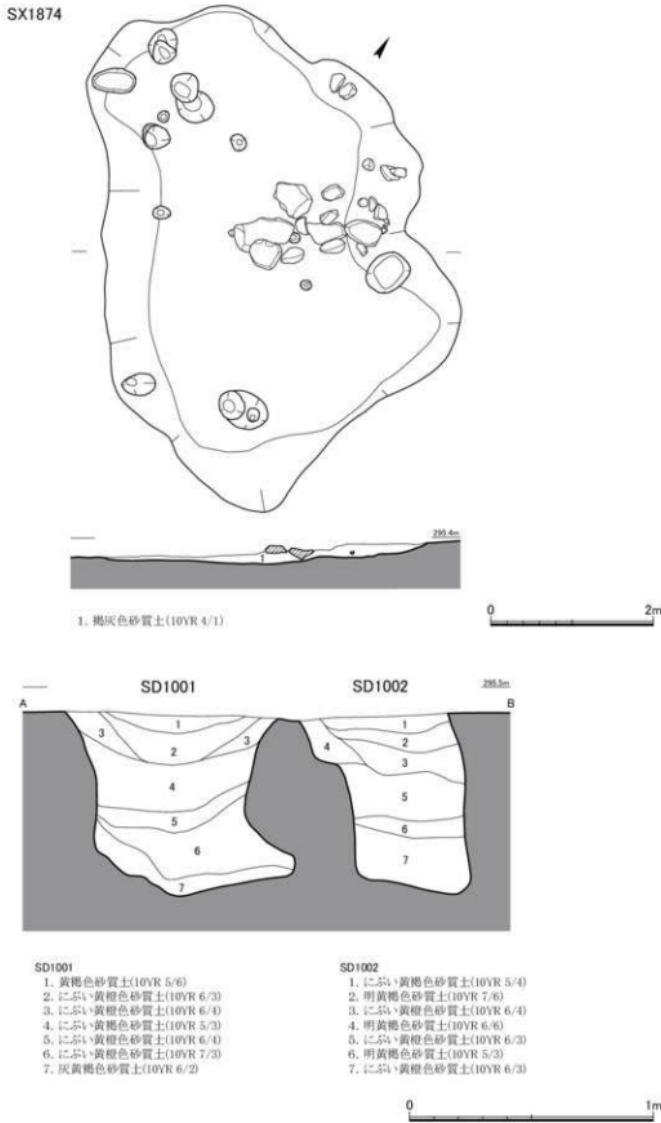


図48 1区性格不明遺構・溝の土層 (1/60・1/20)

小穴出土の遺物（図 52・53）

126～139は小穴から出土した主な遺物である。小穴の位置は図18～20（遺構分布詳細）に記載した。P1177からは126・127が出土した。126は景德鎮窯系の白磁で、森田E群の皿である。127は土師器火鉢で、内面に煤が付着している。P1189から出土した128は、福建系（漳州窯系）青花碗で、蓮子碗系統の小野C群とみられる。P1193から出土した129は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着している。P1199から出土した130とP1239から出土した131は、ともに瓦質土器擂鉢で、内面には使用による磨滅痕がある。

P1307から出土した132は、底部糸切の土師器小皿である。P1311から出土した133は、朝鮮王朝期の灰青陶器碗で、内面見込みと高台置付には砂目痕がみられる。P1420から出土した134は、朝鮮王朝期の粉青沙器碗で、外面には刷毛で白化粧土が施される。SB3053出土の123と同一個体である可能性がある。P1449から出土した135は、竜泉窯系の青磁碗で、口縁部外面には一条の圈線がめぐる。

P1531から出土した136は、竜泉窯系上田B IV類の碗で、外面に線描蓮弁文が施される。SB3017出土の80、SB3018出土の84と同一個体である可能性がある。P1533から出土した137は、底部糸切の土師器杯で、底部に煤が付着している。P1536から出土した138は、底部糸切の土師器杯で、底部に板状圧痕がみられる。P1684から出土した139は、朝鮮王朝期の灰青陶器皿である。

遺構検出面出土の遺物（図 53）

140は竜泉窯系上田B IV類の青磁碗で、外面に線描蓮弁文が施される。141・142は白磁である。141は景德鎮窯系森田E群の皿で、高台置付の釉は搔き取られている。142は口縁部が外反する碗で、12～14世紀代の資料である。143・144は青花である。143は福建系（漳州窯系）の碗で、16世紀後半～17世紀初頭の資料と考えられる。144は景德鎮窯系の皿で、高台が付く小野B群である。

145は中国明代の三彩陶器で、動物形の水注等の一部分と考えられるが、全体の形状や具体的な部位は不明である。146は中国産の褐釉陶器壺と考えられ、14～15世紀代の資料である。147は瀬戸・美濃産の陶器で、黒釉の天目碗である。148・149は朝鮮王朝期の灰青陶器で、碗か皿の底部である。いずれも内面見込みと置付に砂目痕がみられる。

150は須恵器系陶器擂鉢で、擂目の単位は6本である。151は防長系の瓦質土器足鍋の脚部である。152は瓦質土器鍋で、外面には煤が付着する。

2) 2区の調査（図 49）

2区の調査では、小穴64基を検出したが、時期や性格は不明である。後世の搅乱が多く、掘立柱建物や柵列は確認されなかった。また、試掘坑による調査も実施したが、繩文土器・石器がわずかに出土しただけである。

遺構検出面の標高は293.50～294.75mで、1区で確認された遺構集中部の標高より2～3mほど低い。現状では削平されていると考えられ、後世の搅乱を受けている。また、2m前後の段丘崖に隔てられているため、1区で確認された建物群が、そのまま2区にまで広がっていたとは考えにくい。しかし、推測の域は出ないが、1区に隣接していることや小穴が確認されていることから、何らかの土地利用がなされていたと思われ、1区の建物群に関連する施設が存在した可能性は残るだろう。2区で出土した遺物は、いずれも小片のため報告していない。



図49 2区の遺構分布、試掘坑の位置 (1/300)

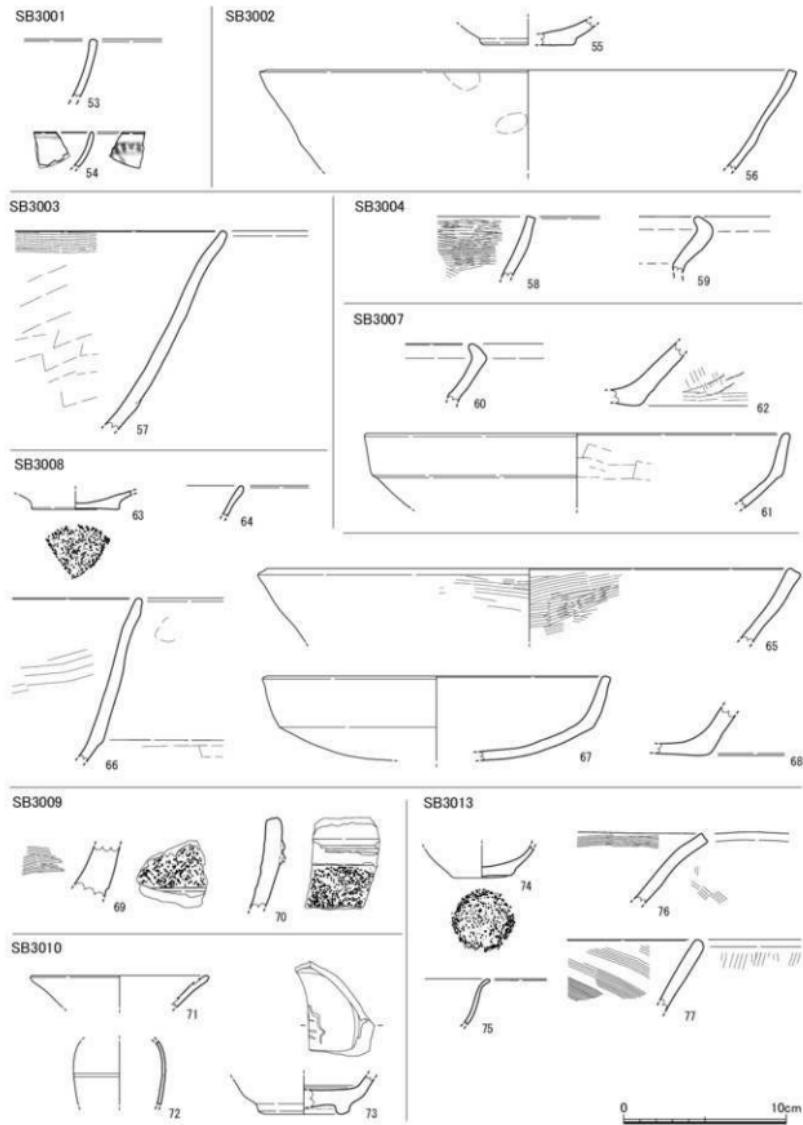


図 50 1区中世の遺物 1 (1/3)

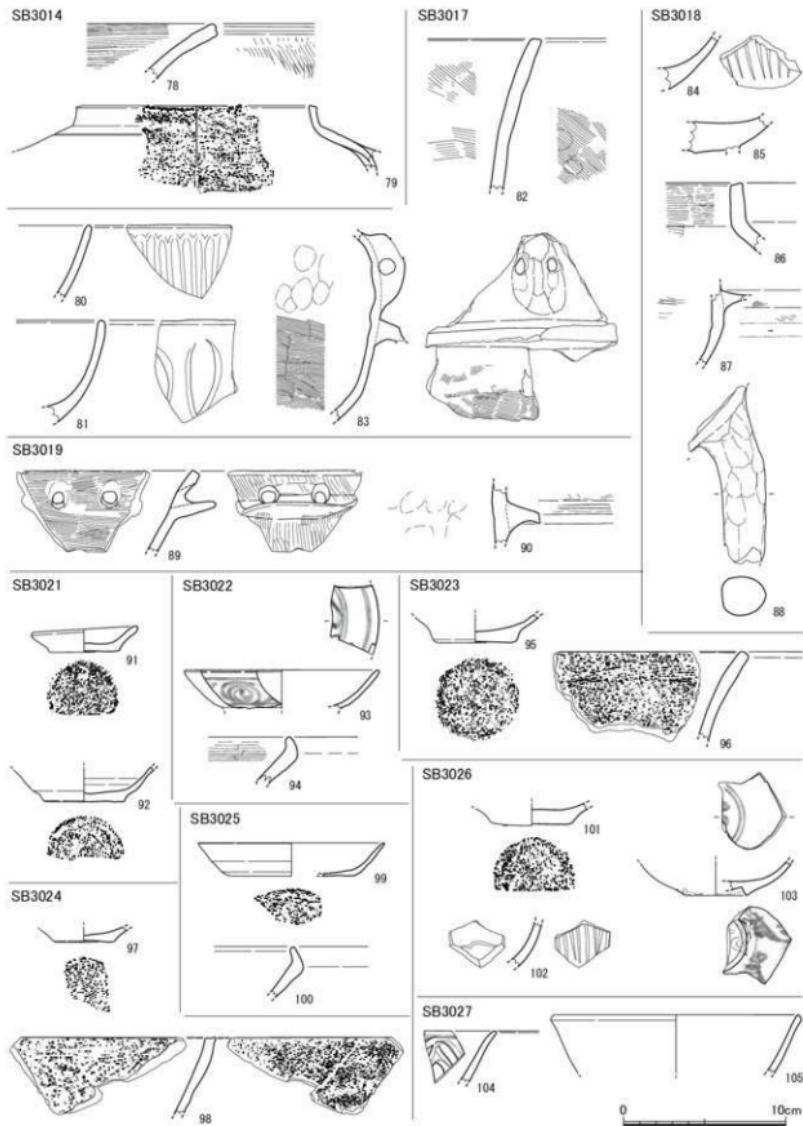


図 51 1区中世の遺物 2 (1/3)

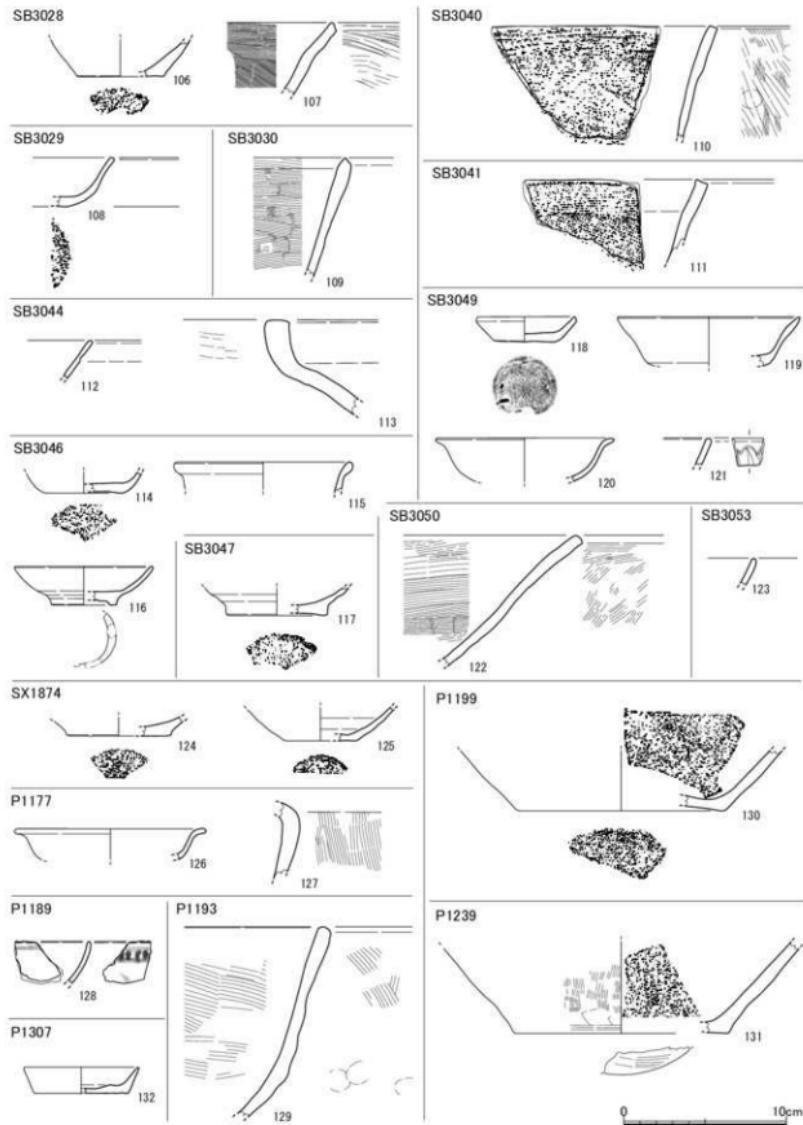


図52 1区中世の遺物3 (1/3)

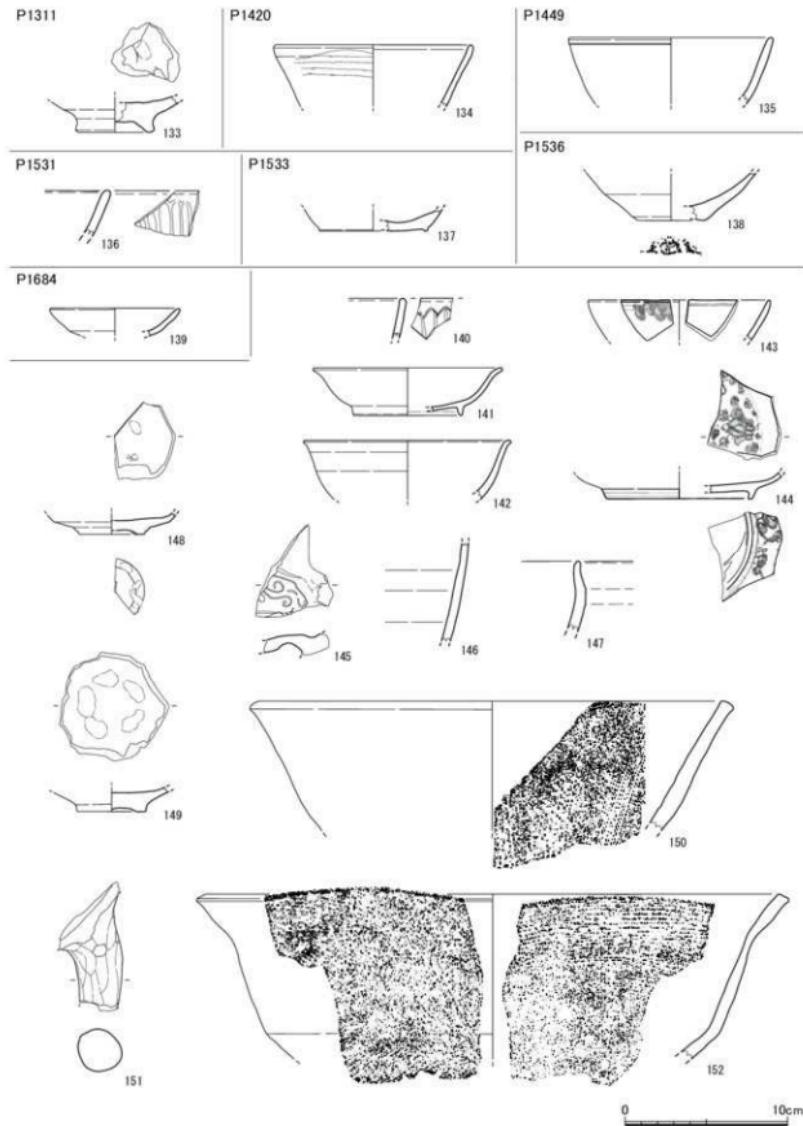


図53 1区中世の遺物4 (1/3)

表4 平畠遺跡中世の出土遺物

編図、番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版/ 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
岡 50-53 11000912	SB3001 PD	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 15c	写真図版 12-53 20111080
岡 50-54 11000911	SB3001 PC	青花 碗	-	-	-	胎土:灰白	福建系(漳州窯系) 16c 中～17c 初	写真図版 12-54 2011078・1079
岡 50-55 11000914	SB3002 PF	土師器 杯	-	5.8*	-	浅黄	底部糸切	写真図版 12-55 20111081
岡 50-56 11000913	SB3002 PF	瓦質土器 鍋	33.0*	-	-	外:暗褐色 内:黒褐色	側付着	写真図版 12-56 20111194
岡 50-57 11000915	SB3003 PC	瓦質土器 鍋	-	-	-	外:浅黄 内:浅黄・オリーブ黒	側付着	写真図版 12-57 20111082
岡 50-58 11000916	SB3004 PD	瓦質土器 足鍋	-	-	-	外:暗灰黄 内:赤い黄褐色	側付着	写真図版 12-58 20111083
岡 50-59 11001012	SB3004 PD	瓦質土器 足鍋	-	-	-	灰白・に赤い相	防長系	写真図版 12-59 20111084
岡 50-60 11000919	SB3007 PJ	瓦質土器 足鍋	-	-	-	外:浅黄褐色 内:灰白	防長系	写真図版 12-60 20111087
岡 50-61 11000918	SB3007 PI	土師器 浅鍋(笠形か)	26.2*	-	-	外:に赤い黄褐色 内:に赤い黄褐色	側付着	写真図版 12-61 20111086
岡 50-62 11000917	SB3007 PA	須恵器系胸器 鉢	-	-	-	外:暗灰黄 内:灰		写真図版 12-62 20111085
岡 50-63 11000922	SB3008 PC	土師器 小皿	-	5.4*	-	浅黄梢	底部糸切	写真図版 12-63 20111090
岡 50-64 11000923	SB3008 PE	陶器 碗	-	-	-	胎土:浅黄	朝鮮王朝期 灰青陶器	写真図版 12-64 20111091
岡 50-65 11000921	SB3008 PC	瓦質土器 鉢	33.4*	-	-	外:に赤い黄 内:灰黄		写真図版 12-65 20111089
岡 50-66 11000925	SB3008 PJ	瓦質土器 鍋	-	-	-	外:に赤い黄 内:灰黄	側付着	写真図版 12-66 20111093
岡 50-67 11000924	SB3008 PJ	土師器 浅鍋(笠形か)	21.4*	-	-	に赤い黄褐色	側付着	写真図版 12-67 20111092
岡 50-68 11000920	SB3008 PC	須恵器系胸器 鉢	-	-	-	外:暗灰黄 内:灰		写真図版 12-68 20111088
岡 50-69 11000927	SB3009 PF	瓦質土器 火鉢	-	-	-	外:黒褐色 内:暗灰黄		写真図版 12-69 20111095
岡 50-70 11000926	SB3009 PD	土師器 火鉢	-	-	-	に赤い黄褐色		写真図版 12-70 20111094
岡 50-71 11000930	SB3010 PG	土師器 杯	11.0*	-	-	外:に赤い黄褐色 内:に赤い相	側付着	写真図版 12-71 20111099
岡 50-72 11000928	SB3010 PG	陶器 小皿	-	-	-	胎土:黄褐色	中国 16c 茶入	写真図版 12-72 20111090
岡 50-73 11000929	SB3010 PG	青磁 皿	-	5.6*	-	胎土:灰	竜泉窯系 15c 高台内露胎	写真図版 12-73 20111097・1098
岡 50-74 11000932	SB3013 PA	土師器 杯	-	3.6	-	に赤い黄褐色	底部糸切 板状注痕	写真図版 12-74 20111101
岡 50-75 11000933	SB3013 PC	白磁 皿	-	-	-	胎土:灰白	景德镇窯系 森田 E 群	写真図版 12-75 20111102
岡 50-76 11000931	SB3013 PA	瓦質土器 鉢	-	-	-	外:暗灰黄 内:灰	側付着	写真図版 12-76 20111100
岡 50-77 11000934	SB3013 PH	瓦質土器 鍋	-	-	-	外:黑 内:褐	側付着	写真図版 12-77 20111103
岡 51-78 11000935	SB3014 PC	瓦質土器 鉢	-	-	-	灰白		写真図版 12-78 20111104
岡 51-79 11000936	SB3014 PI	瓦質土器 茶釜	14.8*	-	-	外:灰 内:黑		写真図版 12-79 20111105
岡 51-80 11000939	SB3017 PH	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 上田 B IV類 84・136と同一個体分	写真図版 12-80 20111108
岡 51-81 11000940	SB3017 PH	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 14c 末～15c 中 上田 B II類	写真図版 12-81 20111109
岡 51-82 11000937	SB3017 PG	瓦質土器 鍋	-	-	-	に赤い黄褐色	側付着	写真図版 12-82 20111106
岡 51-83 11000938	SB3017 PH	瓦質土器 茶釜	-	-	-	外:に赤い黄褐色 内:褐	側付着	写真図版 12-83 20111107
岡 51-84 11000944	SB3018 PJ	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 上田 B IV類 80・136と同一個体分	写真図版 12-84 20111113

表4 平島遺跡中世の出土遺物

件名・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
岡 51-85 11000941	SB3018 PD	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 15c 高台内輪測定	写真図版 12-85 20111110
岡 51-86 11000942	SB3018 PI	瓦質土器 壺	-	-	-	灰白	環付着	写真図版 13-86 20111111
岡 51-87 11000945	SB3018 PK	瓦質土器 茶釜	-	-	-	褐		写真図版 13-87 20111112
岡 51-88 11000943	SB3018 PJ	瓦質土器 足鍋	-	-	-	外:灰・浅黄 内:灰	防長系	写真図版 13-88 20111112
岡 51-89 11000946	SB3019 PD	瓦質土器 壺	-	-	-	外:灰白 内:灰黄	環付着	写真図版 13-89 20111112
岡 51-90 11000947	SB3019 PE	瓦質土器 茶釜	-	-	-	外:灰白 内:灰白	環付着	写真図版 13-90 20111112
岡 51-91 11000948	SB3021 PB	土師器 小皿	6.6	4.3	1.6	灰白・浅黄	底部系切	写真図版 13-91 20111112
岡 51-92 11000949	SB3021 PD	土師器 小皿	-	5.0*	-	外:灰・灰白 内:浅黄	底部系切 油漆付着	写真図版 13-92 20111112
岡 51-93 11000950	SB3022 PC	青花 盤	12.0*	-	-	胎土:灰白	福建系 (漳州窯系) 16c 後～17c 初	写真図版 13-93 20111119・1120
岡 51-94 11000913	SB3022 PA	瓦質土器 星彌	-	-	-	胎土:灰白・灰	防長系	写真図版 13-94 20111121
岡 51-95 11000951	SB3023 PC	土師器 杯	-	5.2	-	外:灰・灰白 内:浅黄	底部系切 環付着	写真図版 13-95 20111122
岡 51-96 11000952	SB3023 PC	瓦質土器 盤	-	-	-	外:黑褐 内:灰白	環付着	写真図版 13-96 20111122
岡 51-97 11000954	SB3024 PG	土師器 小皿	-	3.8*	-	外:灰黄 内:灰白	底部系切 環付着	写真図版 13-97 20111125
岡 51-98 11000953	SB3024 PG	瓦質土器 鍋	-	-	-	明赤褐		写真図版 13-98 20111124
岡 51-99 11000955	SB3025 PC	土師器 杯	11.4*	7.8*	2.05	外:浅黄 内:灰白	底部系切 環付着	写真図版 13-99 20111127
岡 51-100 11000977	SB3025 PB	瓦質土器 足鍋	-	-	-	外:灰白 内:灰黄	防長系	写真図版 13-100 20111126
岡 51-101 11000957	SB3026 PF	土師器 杯	-	5.0*	-	に灰・黄白	底部系切	写真図版 13-101 20111130
岡 51-102 11000956	SB3026 PB	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	中国 上田 B IV類	写真図版 13-102 20111128・1129
岡 51-103 11000958	SB3026 PJ	青花 皿	-	3.8*	-	胎土:灰白	福建系 小野 C 群 高台内輪胎	写真図版 13-103 20111131・1132
岡 51-104 11000960	SB3027 PF	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 14c 後～15c 中	写真図版 13-104 20111134
岡 51-105 11000959	SB3027 PA	陶器 碗	15.4*	-	-	胎土:灰オーリーブ	朝鮮王朝 灰青陶器	写真図版 13-105 20111133
岡 52-106 11001003	SB3028 PA	土師器 小皿	-	5.4*	-	に灰・黄白	底部系切	写真図版 13-106 20111136
岡 52-107 11000961	SB3028 PA	瓦質土器 鍋	-	-	-	黄灰	環付着	写真図版 13-107 20111135
岡 52-108 11000962	SB3029 PB	土師器 杯	-	-	-	灰黄・褐	底部系切 油漆付着	写真図版 13-108 20111137
岡 52-109 11000963	SB3030 PA	瓦質土器 鍋	-	-	-	外:浅黄 内:灰白	環付着	写真図版 13-109 20111138
岡 52-110 11000965	SB3040 PL	瓦質土器 鍋	-	-	-	外:に灰・白 内:褐	環付着	写真図版 13-110 20111140
岡 52-111 11000966	SB3041 PA	瓦質土器 鍋	-	-	-	に灰・黄白	環付着	写真図版 13-111 20111141
岡 52-112 11000967	SB3044 PF	陶器 皿	-	-	-	胎土:灰白	朝鮮王朝 灰青陶器	写真図版 13-112 20111142
岡 52-113 11000968	SB3044 PI	瓦質土器 壺	-	-	-	外:灰褐 内:に灰・白		写真図版 13-113 20111143
岡 52-114 11000969	SB3046 PA	土師器 小皿	-	4.8*	-	に灰・黄白	底部系切	写真図版 13-114 20111144
岡 52-115 11000970	SB3046 PB	青磁 碗	11.0*	-	-	胎土:灰白	中国 15c	写真図版 13-115 20111145
岡 52-116 11000971	SB3046 PC	陶器 皿	8.5*	4.0*	2.35	胎土:灰	朝鮮王朝 灰青陶器	写真図版 13-116 20111146・1147
岡 52-117 11000972	SB3047 PJ	土師器 杯	-	6.2*	-	外:褐 内:に灰・白	底部系切	写真図版 13-117 20111148
岡 52-118 11000976	SB3049 PG	土師器 小皿	6.2*	3.8	1.6	に灰・黄白	底部系切	写真図版 13-118 20111152
岡 52-119 11000975	SB3049 PC	土師器 杯	11.2*	-	-	外:に灰・白 内:に灰・黄白	油漆付着	写真図版 13-119 20111151
岡 52-120 11000974	SB3049 PC	白磁 碗	11.0*	-	-	胎土:灰白	景德鎮窯系 16c 森田 E 群	写真図版 13-120 20111150
岡 52-121 11000973	SB3049 PC	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 上田 B IV類	写真図版 13-121 20111149

表4 平島跡中世の出土遺物

編號 番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
岡52-122 11000978	SB3050 PF	瓦質土器 鍋	-	-	-	外:に赤い黄 内:に赤い黄	縁付着	写真図版 13-122 20111153
岡52-123 11000979	SB3053 PD	陶器 碗	-	-	-	胎土:灰	朝鮮王朝期 灰青沙器 134 同一個体分	写真図版 13-123 20111154
岡52-124 11000983	SX1874	土師器 杯	-	6.4*	-	外:に赤い黄 内:灰黄	底部系切 縁付着	写真図版 13-124 20111155
岡52-125 11000982	SX1874	土師器 杯	-	4.4*	-	外:黄 内:に赤い黄	底部系切	写真図版 13-125 20111157
岡52-126 11000985	P1177	白磁 皿	11.8*	-	-	胎土:灰白	景德鎮窯系 森田E群	写真図版 13-126 20111160
岡52-127 11000986	P1177	土師器 火鉢	-	-	-	外:に赤い黄 内:灰	縁付着	写真図版 13-127 20111161
岡52-128 11000987	P1189	青花 碗	-	-	-	胎土:灰白	福建系(済州窯系) 16c 後半 小野C群	写真図版 14-128 20111162・1163
岡52-129 11000988	P1193	瓦質土器 鍋	-	-	-	外:黒褐 内:赤褐・暗赤褐	縁付着	写真図版 14-129 20111164
岡52-130 11000989	P1199	瓦質土器 擂鉢	-	12.8*	-	外:オーリーブ黒 内:灰白	縁付着	写真図版 14-130 20111165
岡52-131 11000990	P1239	瓦質土器 擂鉢	-	13.2*	-	外:灰 内:灰白	縁付着	写真図版 14-131 20111166
岡52-132 11000991	P1307	土師器 小皿	7.1*	5.8*	1.6	外:赤褐 内:明赤褐	底部系切	写真図版 14-132 20111167
岡53-133 11000992	P1311	陶器 碗	-	4.8*	-	胎土:浅黄	朝鮮王朝期 灰青陶器 見込A・縁付に砂目痕	写真図版 14-133 20111168・1169
岡53-134 11000993	P1420	陶器 碗	12.3*	-	-	胎土:灰黄	朝鮮王朝期 灰青沙器 123 同一個体分	写真図版 14-134 20111170
岡53-135 11000994	P1449	青磁 碗	12.6*	-	-	胎土:灰白	龙泉窑系	写真図版 14-135 20111171
岡53-136 11000995	P1531	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰	龙泉窑系 上田B群 80・84 同一個体分	写真図版 14-136 20111172
岡53-137 11000996	P1533	土師器 杯	-	6.7*	-	に赤い帶	縁付着	写真図版 14-137 20111173
岡53-138 11000997	P1536	土師器 杯	-	4.3*	-	に赤い帶	底部系切 板状丘痕	写真図版 14-138 20111174
岡53-139 11000998	P1684	陶器 皿	8.0*	-	-	胎土:灰	朝鮮王朝期 灰青陶器	写真図版 14-139 20111175
岡53-140 11001011	検出面	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	龙泉窑系 上田B群類	写真図版 14-140 20111191
岡53-141 11001000	検出面	白磁 皿	11.6*	6.7*	-	胎土:灰白	景德鎮窯系 森田E群	写真図版 14-141 20111178・1179
岡53-142 11001001	検出面	白磁 皿	12.8*	-	-	胎土:灰白	中国 12～14c	写真図版 14-142 20111180
岡53-143 11001006	検出面	青花 碗	11.2*	-	-	胎土:灰白	福建系(済州窯系) 16c 後～17c 前	写真図版 14-143 20111184・1185
岡53-144 11000999	検出面	青花 皿	-	9.0*	-	胎土:灰白	景德鎮窯系 小野B群	写真図版 14-144 20111176・1177
岡53-145 11001004	検出面	陶器 不明	-	-	-	胎土:灰白	中国 明代 三彩	写真図版 14-145 20111182
岡53-146 11001005	検出面	陶器 溶か	-	-	-	胎土:浅黄	中国 14～15c	写真図版 14-146 20111183
岡53-147 11001014	検出面	陶器 碗	-	-	-	胎土:淡黄	瀬戸・美濃 天目	写真図版 14-147 20111192
岡53-148 11001002	検出面	陶器 碗	-	4.0*	-	胎土:灰	朝鮮王朝期 灰青陶器 内面見込・高台付に砂目痕	写真図版 14-148 20111181・1193
岡53-149 11001007	検出面	陶器 碗	-	4.2	-	胎土:灰白	朝鮮王朝期 灰青陶器 見込・高台付に砂目痕	写真図版 14-149 20111186・1187
岡53-150 11001009	検出面	劉家系陶器 擂鉢	29.7*	-	-	灰灰		写真図版 14-150 20111189
岡53-151 11001008	検出面	瓦質土器 足鍋	-	-	-	外:灰白 内:灰白	防長系	写真図版 14-151 20111188
岡53-152 11001010	検出面	瓦質土器 鍋	36.4*	-	-	外:灰灰 内:灰黄	縁付着	写真図版 14-152 20111190
11000964	SB3030 PB	白磁 皿	-	-	-	胎土:灰白	景德鎮窯系 16c	写真図版 14-153 20111139

4 まとめ

平島遺跡では、縄文時代の遺物、中世の遺構・遺物などを確認した。このうち、今回の調査で最も重要な成果である、掘立柱建物の構造や分布状況から在地領主クラスの有力者層の屋敷地、すなわち領主居館と考えられる1区中世後期の様相についてまとめておきたい。

掘立柱建物群について

1区では、中世後期の遺構として掘立柱建物55棟、柵列6条、溝2条、性格不明遺構1基等が確認され、中国・朝鮮半島産の陶磁器、在地系の土師器・瓦質土器等が出土した。検出された遺構は1区北半部のみに分布する。遺構の分布範囲について、調査区の北側と西側は山裾が接近していること、特に1区北端では遺構が確認されないことと、東側の2区とは2m前後の段丘崖により隔てられ、2区では建物や柵列等の遺構が確認されていないこと、南側は湿地で遺構が確認されていないこと、等々を勘案すると、建物群の広がりは1区で調査された範囲にほぼ限定できるといえよう。つまり、全てとは言い切れないが、居館の大部分が調査されたことになろう。

また、上述したように、北側と西側は山裾が迫り、東側は段丘崖があり、さらに河川に面していることを考えれば、この居館の正面は南向きであったと考えてよいだろう。建物群の南側に「前庭」とも考えられる空間があることや、後述するように、居館への出入口があったと推定されることも、その証左となろう。

掘立柱建物・柵列については、調査時に把握できたものは数棟に限られ、柱穴の新旧関係についても明確にできたものは少ない。そのため、掘立柱建物・柵列の復元と柱穴の新旧関係の把握は、主に整理作業の段階で行った。復元された掘立柱建物・柵列を、柱穴の新旧関係を考慮しつつ、主軸方向によってグルーピングし、さらには出土遺物の年代を加味し検討を行った結果、掘立柱建物・柵列を4群（A～D群）に分別することができた（図54～57）。A群は主軸方位をN79°W前後にとる一群、B群はN79°W前後にとる一群、C群はN86°W前後にとる一群、D群はN67°W前後にとる一群である。

各群の時期は、A群は15世紀代、B・C・D群は16世紀代と推定されるが、B・C・D群については、それ以上の限定は困難である。ただし、B群については、A群とほぼ同じ主軸方位であり、さらに建物の配置に類似点が多く、両者には強い連続性が窺えることから、A群→B群という変遷が考えられる。また、B群の後にはC・D群が続くと考えられるところから、結果的に、A群→B群→C・D群という変遷が想定される。

個々の建物の新旧関係については、限られた情報の中で厳密に追究することは困難で、上記した「群」としての提示に止まった。この四つの群は、群（時期）ごとの建物配置の大まかな「姿」を示すものであることを了解願いたい。

四つの群を通じてみると、建物は2×3間のものが最も多く、他に1×1間、1×2間、2×2間、2×4間等の構造をもつものがある。以下、各群の様相についてみていく。

A群には15棟の建物があり、そのうち14棟は東西棟、1棟が南北棟である（図54）。建物の主軸方位は、東西棟がN75.5°W～N80.5°W、南北棟がN10°Eである。これら建物の中で北端に位置するSB3008は、群の中で最大規模というわけではないが、居館の最も奥に、しかも他の建物と混在することなく位置しており、主屋と推定しておきたい。また、主屋の東側には規模の小さな建物があるが（SB3002・3003）、主屋に付属するような性格のものかもしれない。主屋の南側には、東西方向を指向すると考えられる建物の列が南北に2列認められる。北列についてみると、主屋近くに位置する一群とはやや離れた西側に建物がある（SB3031・3032）。また、東側に位置するSB3019はやや細長い長方形プランの建物で、群の中で突出して規模が大きい。一方、南列についてみると、西側に位置するSB3046は、上述したSB3019に準じて規模が大きい。これら大型建物の性格は明確にできないが、群の中でも主要な建物であったと推察される。なお、この南側の列をもって建物が途切れしており、この

列までが「主屋の求心力に属する建物群」と捉えてよさそうである。

これらの建物群の南側をみると、出入口や「前庭」と考えられる空間があり、さらに南側には高低差 0.5 m 程の段差が認められる。この段差は建物密集地区や「前庭」の前面にあり、しかも建物群と方向を一にすることから、居館の内と外を区切る境界だと考えてよいかもしれない。自然地形を利用した段差とも考えられるが、人為的に地形の変化部を切土造成した可能性も否定できない。段差の南側、つまり居館の外側にあたる平坦面には 2 棟の建物がみられるが（SB3053・3058）、居館に付随した被官屋の建物であるとも考えられよう。これら出入口や「前庭」、段差、小規模付属建物等の位置関係は、B・C・D 群でも維持され続ける。

B 群には 22 棟の建物と 2 条の柵列があり、A 群と比較すると、建物数が増加するとともに、建物の分布範囲も拡大する（図 55）。掘立柱建物のうち、SB3016 の全容が不明であるが、20 棟が東西棟、1 棟が南北棟である。建物の主軸方位は東西棟が N74° W ~ N81.5° W、南北棟が N9.5° E、柵列は N75° E 前後で、全体的に A 群とはほぼ同じである。建物の配置については、A 群では東西方向を指向していると受けられる一方、B 群では主屋の南側に東西方向を指向する建物が数棟みられるものの、全体の傾向としては南北方向が意識された空間となっているようである。

B 群の主屋については、A 群と同様に居館の奥に位置し、群の中で規模が大きいことを考慮すると、北側中央の建物が該当すると考えられる（SB3007・3009）。その東側には A 群同様、規模の小さな建物がみられる（SB3004）。また、主屋の南側に位置する SB3018 は、A 群の SB3019 とプランや規模がほぼ同じで、群の中でも突出して規模が大きく、同様の性格の建物であったことが想定される。しかし、A 群で SB3019 に準じる規模である SB3046 に相当する建物はみられず、規模の小さなものに変わっている（SB3048）。主屋の西側をみると、A 群には見られなかった南北方向を指向する建物がみられる。これらは、主屋に準じる規模の 3 棟の建物（SB3013・3014、SB3028・3029、SB3050）の東列と、規模の小さな 2 棟の建物（SB3015・3030）の西列の 2 列からなる。この他、前述した群の中で最も規模の大きい SB3018 の東から南東側には大小の建物が 3 棟（SB3016・3039・3036）認められる。なお、出入口や「前庭」、段差等の位置関係、また段差南側の 2 棟の建物については、A 群の様子と変わらない。

C 群には 12 棟の建物と 2 条の柵列があり、建物はすべて東西棟である（図 56）。B 群と比較すると、建物の数は減る。建物の主軸方位は N83.5° W ~ N89.5° W、柵列は東西方向のものが N0.5° E、南北方向のものが N5.5° W で、主軸方位は、A・B 群と比較して全体にやや西に振れている。

C 群の主屋については、A・B 群と同じく居館の奥に位置し、群の中で規模の大きな建物であることを考慮すると、北端に位置する建物が該当すると考えられる（SB3010・3011）。その東側には、やや小規模の建物（SB3001・3005）がみられるが、これも A・B 群の状況と類似していると言えよう。これら主屋と東側の建物については、A・B 群における配置を概ね踏襲しているとも考えられる。また、A・B 群では主屋のすぐ南側に大型の建物が位置していたが、C 群においてはやや距離をおいて位置するようになるとともに（SB3040・3044）、全体的に整然と配置された印象が薄れてしまう。なお、出入口や「前庭」、段差等の位置関係については、A・B 群の状況と同様である。ただし、段差南側の 2 棟の建物（SB3054・3060）については、A・B 群とも建物の規模に差があるが、C 群ではほぼ同規模のものとなる。

D 群は 6 棟の建物と 2 条の柵列があり、建物のうち 5 棟が東西棟、1 棟が南北棟である（図 57）。建物の主軸方位は東西棟が N65° W ~ N70.5° W、南北棟が N23° E、柵列は N18° E ~ N19.5° E である。A・B・C 群と比べると建物の数が極端に少ないが、D 群については、他群との主軸方向の相違を重視し分別した結果、どの群にも属さず、いわば「残りの建物」が D 群となっただけで、本来的には A・B・C 群に属するものなのかもしれない。しかし、建物の主軸方向が他群と異なり、大きく東に振れること、また建物の配置についても、疎らに点在するのではなく、出入口付近にある程度のまとまりをもって分布していることから、やはり一つの群としての姿が表されてい

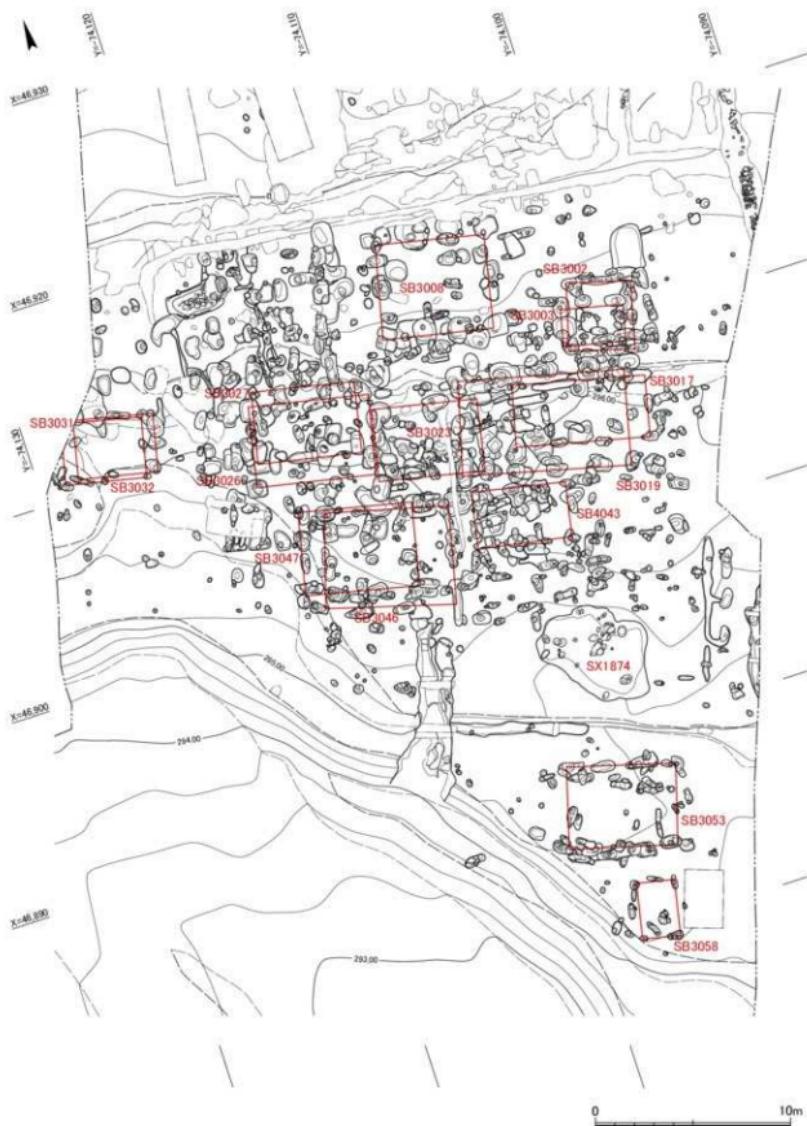


図 54 A 群の遺構配置 (1/250)

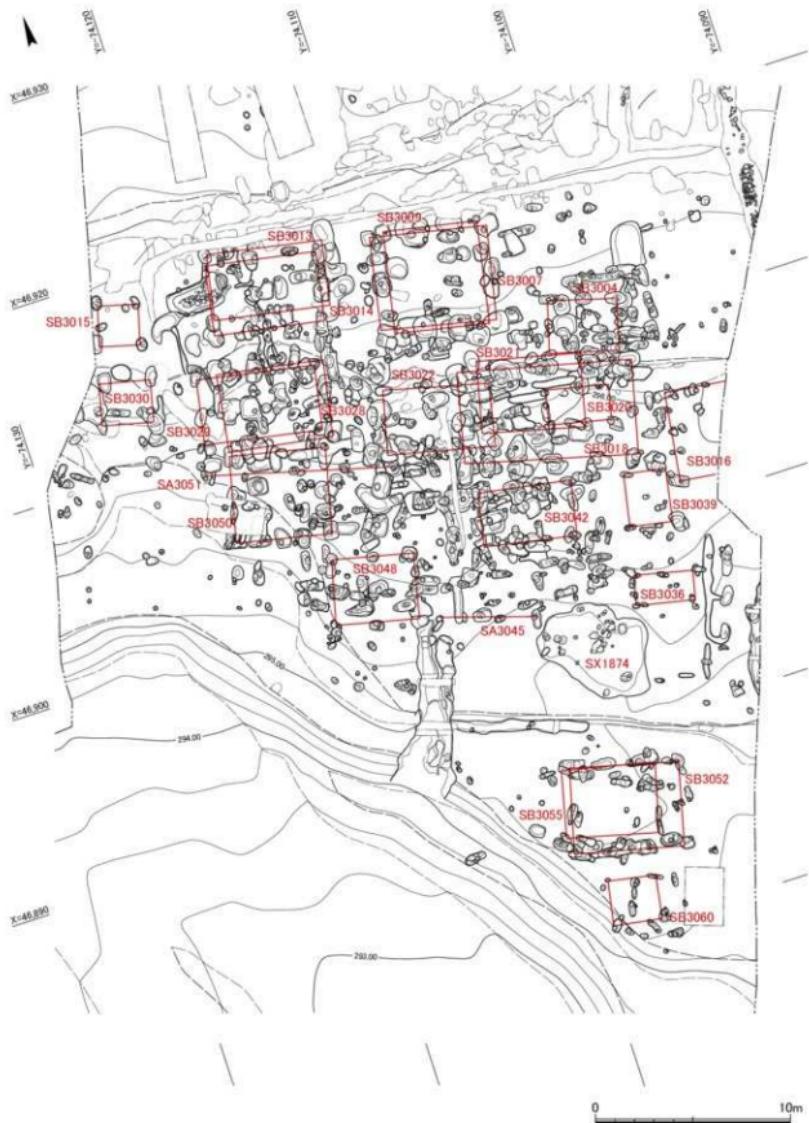


図 55 B 群の遺構配置 (1/250)

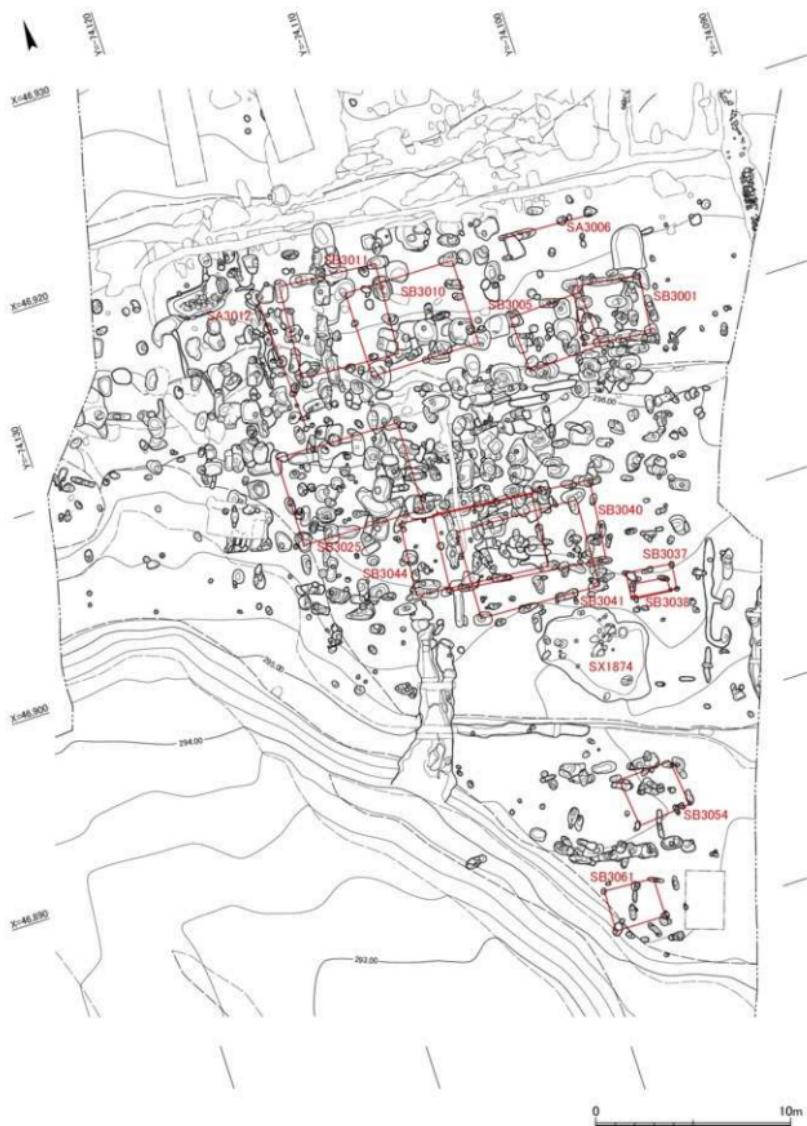


図 56 C 群の遺構配置 (1/250)

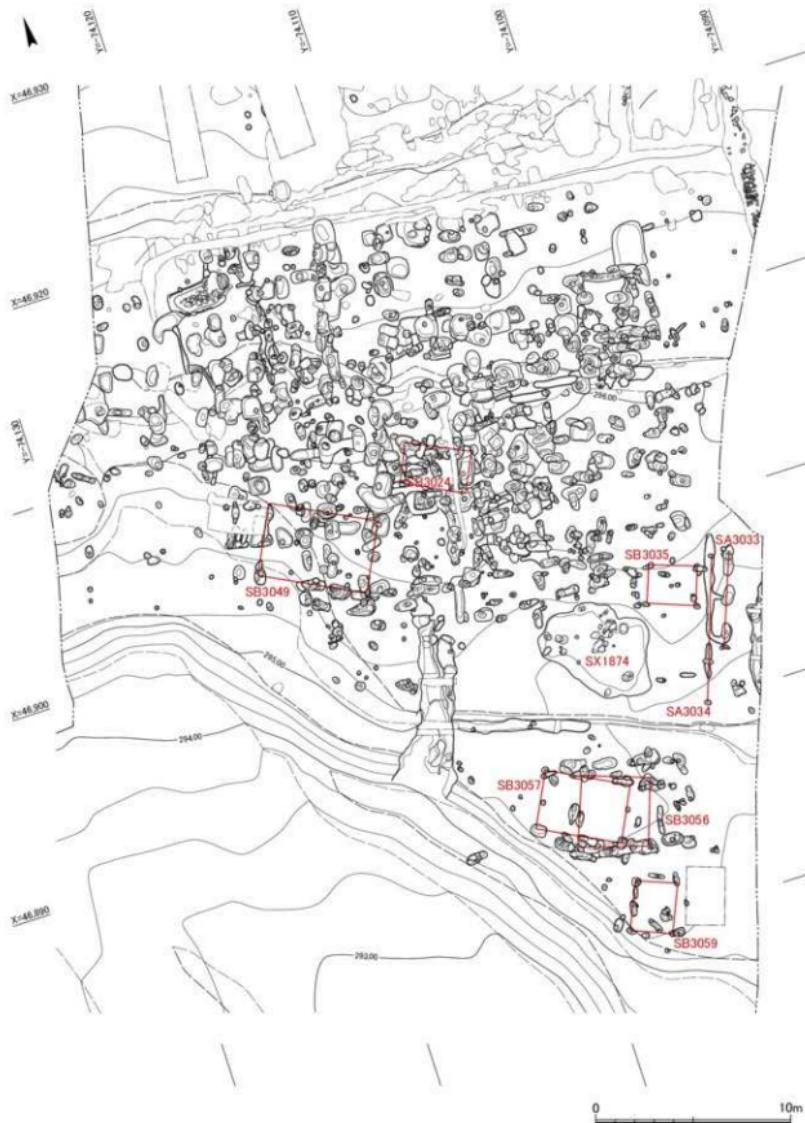


図 57 D 群の遺構配置 (1/250)

ると考えられる。なお、出入口や「前庭」、段差等が機能していたか否かは、建物数が少なく推定のしようがないが、少なくとも段差の南側に位置する小規模付属建物等の位置関係は A・B・C 群と変わらないことから、出入口や段差については、機能が維持されていたとも考えられる。

ここまで各群の様相についてみてきたが、主屋とその東側の建物については、A・B・C 群においてセット関係が維持されていることが窺え、同様の性格（機能）を保ったまま、建て替えられ続けたと推定される。また、小規模付属建物についても同じように、A・B・C 群、さらに D 群においてもセット関係が保たれていることが認められる。主屋南側の建物については、A・B 群ではほぼ同じ場所に位置し、C 群においては若干位置をずらしながらも、群全体の中で大型の建物が建て続けられるという共通点をもつ。居館全体をみると、建物数は B 群をピークに減少し、特に D 群では出入口付近に数棟がみられるだけになる。しかし、上述したような建物のセット関係や、おそらく出入口の位置は変わっていないだろうこと等を考え合わせると、A 群から D 群まで、大きな変革は認められず、同じ「居館」として連続と機能していたことが想定されよう。

なお、前述した居館への出入口だが、直接的にそれと判る材料が得られたわけではなく、調査では 2 条の自然流路 (SD1001・1002) が確認されたに過ぎない。しかし、調査区内でこの部分だけに流路が形成されるということは、この場所が最も水が集まりやすい場所、つまり窪んだ場所であったことを暗示しており、例えばスロープ状の通路など、何らかの「窪み」が存在したことが想定される。この流路は、人為的に埋められた形跡がないことから、居館が廃絶した後に形成されたと考えられる。また、流路周辺には小穴が認められることから、出入口に関する何らかの施設があった可能性があるが、明確にはし得なかった。

出土遺物について

1 区の出土遺物のうち、主に柱穴から出土したものには、12 世紀～17 世紀初頭のものがある。このうち、中世前期に遡る遺物はわずかで、主体は 15～16 世紀の中国・朝鮮半島産陶磁器や在地系土器等で、そのなかでも 16 世紀前半を中心とする森田 E 群の白磁皿、線描蓮弁文の青磁碗上田 B IV 類、青花小野碗 C 群・皿 B・C 群が比較的多く確認されている。

15～16 世紀代の煮炊具の組成についてみると、平畠遺跡では、佐賀平野の遺跡の状況とは異なり、玉縁状の口縁部をもつ土器鍋がほとんど確認されず、直口縁の瓦質土器鍋が多数出土するとともに、外耳・内耳の付く瓦質土器鍋も少量ながらも出土する。このほか、朝鮮王朝期の灰青陶器や防長系足鍋が少なからず出土する。

このように、平畠遺跡における煮炊具の組成、灰青陶器や足鍋が出土するという特徴は、近隣の大串遺跡 1 区や東畠瀬遺跡 6F 区でも同様である²⁾。灰青陶器や足鍋が一定量出土する点は、佐賀平野とは異なり、玄界灘沿岸地域の様相に近いといえるだろう。なお、東畠瀬遺跡 6F 区から出土する遺物は、平畠遺跡と同様に、16 世紀前半代を主体とするが、大串遺跡 1 区については 14～15 世紀代が主体で、時期的に若干異なっている。

上述したような、煮炊具の組成、灰青陶器・足鍋が出土するという特徴が、はたして 3 遺跡に偶然みられることがあるのか、あるいは「山内」全体に共通する現象であるのか、さらに中世後期以外にもみられる現象なのかは、今後、周辺の遺跡との比較・検討を要する課題である。

また、平畠遺跡では茶入が出土しているが、「山内」で出土することは稀である。また、茶入とともに天目茶碗がわずかながら確認されることから、ここでも喫茶が行われていたことが推測されよう。

平畠遺跡の性格について

平畠遺跡では、多数の掘立柱建物が同一箇所あるいは若干位置をずらしながら建て替えられ、継続して營まれている。また、「前庭」や被官屋敷の付随が推定されることも合わせて考えると、「居館」の様相を呈しているともいえよう。

居館の東側は神水川に開析された断崖が、西側は急峻な山麓が迫っている。さらに、居館の南北は、西側の山麓が張り出し、人が辛うじて通れる程の急傾斜のまま神水川に至る。このように、居館は山と川に囲まれ、周囲から隔離された空間にあり、防御面を意識していたことが窺える。ちなみに、西側の山（マエヤマ）の尾根筋にはいくつかの平坦面が認められ、「詰城」としての利用も考えられなくはないが、堀切や堅堀等の中世山城特有の遺構は伴っていない³⁾。

近隣の遺跡の中で、平畠遺跡と同時期のものとしては、東畠瀬遺跡 6F 区で確認された神代氏の居館（館城）がある。居館は、北西に開く谷の谷奥に位置し、区画を意图した土塁や堀、門等が認められ、主殿と考えられる 3 × 5 間の建物も確認されている⁴⁾。また、中国・朝鮮半島産陶磁器が多く出土している。この居館の背後にある山塊には、広範囲に烟瀬城とその出城が展開しており、居館と山城が一体として機能していたことが窺える。一方、平畠遺跡についてみると、居館に近接して山城が存在したとすれば、神代氏館跡と同様、居館と山城が一体として機能していた可能性がある。しかし、平畠遺跡では、土塁や門等の積極的防護施設が確認されていないこと、建物の規模が小さいこと、中国・朝鮮半島産陶磁器が少ないと等から、戦国期「山内」の実質的統轄者だった神代氏の居館と比較して、遺構・遺物両面から見劣りすることは否めず、それよりも下位の階層の居館だと考えられる。しかし、整然と並ぶ建物群が長期間にわたり営まれることや、「前庭」や被官屋敷の付随が推定されること、茶入等の嗜好品が出土していることなどから、「山内」地域の社会において政治的・経済的に一定程度の優位性をもつ階層を主体とする屋敷（領主居館）であった可能性が高いと考えられよう。

ところで、現在、平畠遺跡から北東約 200 m の地点（国道 323 号線沿い）に石塔が集められている。石塔の多くは概ね 15 世紀後半～17 世紀の宝篋印塔や五輪塔で、これらは元々平畠遺跡の周辺地城から集められたものだとされている⁵⁾。この石塔群の造立時期は、平畠遺跡の居館が営まれた時期とよく合致していることから、居館の主が石塔の造立に関わっていた可能性を考えるのが素直であろう。

平畠遺跡の調査では、「山内」における中世後期の在地領主クラスの居館の様相を断片ながら知ることができた。上述したように、平畠遺跡とその周辺は、居館と山城と石塔（墓）という、中世当時の景観を構成する諸要素が、纏めながら一体的に把握され得る空間であるといえよう。

注

- 1) 布振り状の柱穴が意識して掘られたものであれば、一般の圓柱建物とは異なった性格を与えられよう。唐津市佐志中通遺跡では、SB3001 と規模や構造は若干異なるが、布振り状の柱穴をもつ建物（SB006）が確認されており、この建物は、屋根ないし壁材の荷重を想定した基礎構造をもつ倉庫（土蔵）の可能性があることが、宮武正登氏によって指摘されている（宮武 2008）。この志中通遺跡の例を参考にすると、SB3001 も倉庫（土蔵）であった可能性があろう。
- 2) 大串遺跡 1 区は平畠遺跡から南西に約 0.8 km、東畠瀬遺跡 6F 区は南東に約 3.5 km の位置に立地する。
- 3) 宮武正登氏の御教示による。
- 4) 「主殿」等の呼称は、報告書（佐賀県教育委員会 2010）に記載されたものをそのまま用いた。
- 5) 真瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書（真瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会 2000）の記述による。

第3章 参考・引用文献

- 上田秀夫（1982）「14～16 世紀の青磁釉の分類」「貿易陶磁研究」No.2 日本貿易陶磁研究会
 小野正敬（1982）「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」「貿易陶磁研究」No.2 日本貿易陶磁研究会
 真瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（2000）「真瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書」富士町教育委員会
 片山まさみ（2002）「高麗から朝鮮時代へ－十四・十五世紀の船相」「東洋陶磁史」東洋陶磁学会
 唐津市教育委員会（2002）「佐志中通遺跡（2）」唐津市埋蔵文化財調査報告書第 104 集
 唐津市教育委員会（2003）「徳蔵谷遺跡（4）」唐津市埋蔵文化財調査報告書第 110 集
 唐津市教育委員会（2004）「徳蔵谷遺跡（5）」唐津市埋蔵文化財調査報告書第 117 集
 佐賀県教育委員会（1989）「下六丁遺跡」「筑後川下流水事業に係る文化財調査報告書 2」佐賀県文化財調査報告書第 93 集
 佐賀県教育委員会（1991）「木村遺跡」「筑後川下流水事業に係る文化財調査報告書 3」佐賀県文化財調査報告書第 102 集
 佐賀県教育委員会（2009）「西頭瀬遺跡 2・大串遺跡」佐賀県文化財調査報告書第 180 集

- 佐賀県教育委員会（2010）「東鍋瀬遺跡2・鍋瀬城跡」佐賀県文化財調査報告書第185集
- 佐賀県教育委員会（2011）「小ヶ倉遺跡・人道遺跡・九郎遺跡」佐賀県文化財調査報告書第186集
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城宏志・安藤開充・松原恭志（2007）「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋蔵文化財センター』
- 太宰府市教育委員会（2000）『太宰府築跡坊XV - 陶磁器分類編 -』太宰府市の文化財第49集
- 鍋西町教育委員会（1998）「塙瀬遺跡」鍋西町文化財調査報告書第16集
- 徳永貞昭（1990）「肥前ににおける中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会
- 水ノ口和同（1998）「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器』九州縄文研究会
- 都城市教育委員会（1994）「太田五郎遺跡・前原遺跡」都城市文化財調査報告書第26集
- 宮武正登（2008）「中世港湾「佐志」の実相と構成 - 地方港湾遺跡の理解に向けて -」『中世港湾都市遺跡の立地・環境に関する日韓比較研究』平成15年度～平成19年度科学研究助成研究成果報告書
- 森田 勉（1982）「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 森木朝子・片山まび（2000）「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案」『博多研究会誌』第8号博多研究会

第4章 大野遺跡1・4～8区

第4章 大野遺跡 1・4～8区

1 大野遺跡 1・4～8区の概要

大野遺跡は、佐賀市富士町大字大野字一本松に所在する（図 58）。

大野地区は、嘉瀬川支流神水川の中流域左岸に位置し、西側を南流する神水川と東側の山塊との間に開けた河岸段丘から山麓部の斜面にかけて集落と耕地が展開している。

地区内に所在する臨済宗金福寺は正応3（1290）年創建と伝えられ、川を挟んだ対岸にあたる中原地区的薬師堂には平安時代後期の作とみられる薬師如来像（佐賀県重要文化財）が安置されている。また、近年の文化財調査により大野遺跡や対岸の中原遺跡で中世集落遺構の存在が明らかになり、この地区の中世の様相が判明しつつある。藩政期の大野地区は小城鍋島家（小城支藩）領の山内郷に属しており、江戸時代後期には山内支配のための代官所が大野地区にあった。大野代官所跡（佐賀市史跡）には支藩の代官所には似つかわしくない規模・構造の石垣が現存するが、最近の調査によってその内容が少しづつ明らかになりつつある。

大野遺跡では、これまでに嘉瀬川ダム建設事業に伴い1～8区の発掘調査を実施し、縄文時代の集落跡、中世～近世の集落跡・建物群などを確認しており、弥生～古墳時代の遺構・遺物も散見されている。このうち、調査範囲の北端にあたる2・3区の調査では、下層から縄文時代後期後葉の三万田式期の集落跡、上層から近世初期の役所的な施設と考えられる企画的な建物群が確認された。

今回報告する1・4～8区（図 59）は、金福寺の前面から大野代官所跡南西にかけての神水川に面した河岸段丘上から山麓部（標高 298 ～ 311 m）にあたり、主に屋敷地や水田として利用されていた。1区は、平成8年度に当時の富士町教育委員会が調査しているが、本書で併せて報告する。

1・4～8区では、中世～近世の集落跡を調査した。また、縄文～古墳時代の遺物が出土しており、類例が少ない弥生土器は脊振山間部における当時の様相を知る上で貴重である。なお、7区については試掘坑を設定して調査したが、遺構は確認できず、遺物が少量出土しただけである。

中世前期では、明確な遺構は少ないものの、1B・5B区を中心として白磁・青磁などの遺物が多数出土した。状況から、調査が及ばなかった5B区東側の斜面地を中心に中世前期の遺跡が展開していたと考えられる。遺構としては、5E区で鎌倉時代に遡る可能性がある石敷遺構を検出し、一般的な集落より階層の高い集落や寺院などが存在したことを推測させる。

中世後期では、6B・6C区で掘立柱建物などを構成する小穴群が確認された。調査区が狭小なため、確実な建物などを明らかにすることはできなかったが、遺構の状況から、やはり階層の高い建物群であった可能性がある。また、1A区南部の短時間で堆積したとみられる SD1862 から、まとまって中世後期の遺物が出土しており、東側の4区の斜面地を中心に集落が展開していたものと思われる。

近世の遺構は、1A・5B区を中心に掘立柱建物などが確認された。掘立柱建物は17世紀代を主体とするものと考えられ、布掘りの建物の存在などから、役所といった上位階層の建物群である可能性がある。このほか、出土遺物から4区周辺に近世前期の集落が展開していたことが推測される。

大野代官所跡に関連する遺構としては、代官所跡前面で縁石などを作る道路遺構を確認した。道路遺構は現存する代官所跡の石垣と同時に構築されたものとみられ、出土遺物から19世紀中頃に造成されたものと推定される。また、道路遺構造成以前に本瓦葺きの建物の存在が示唆されるなど、まだ不明な点が多い大野代官所に関する資料を得ることができた。

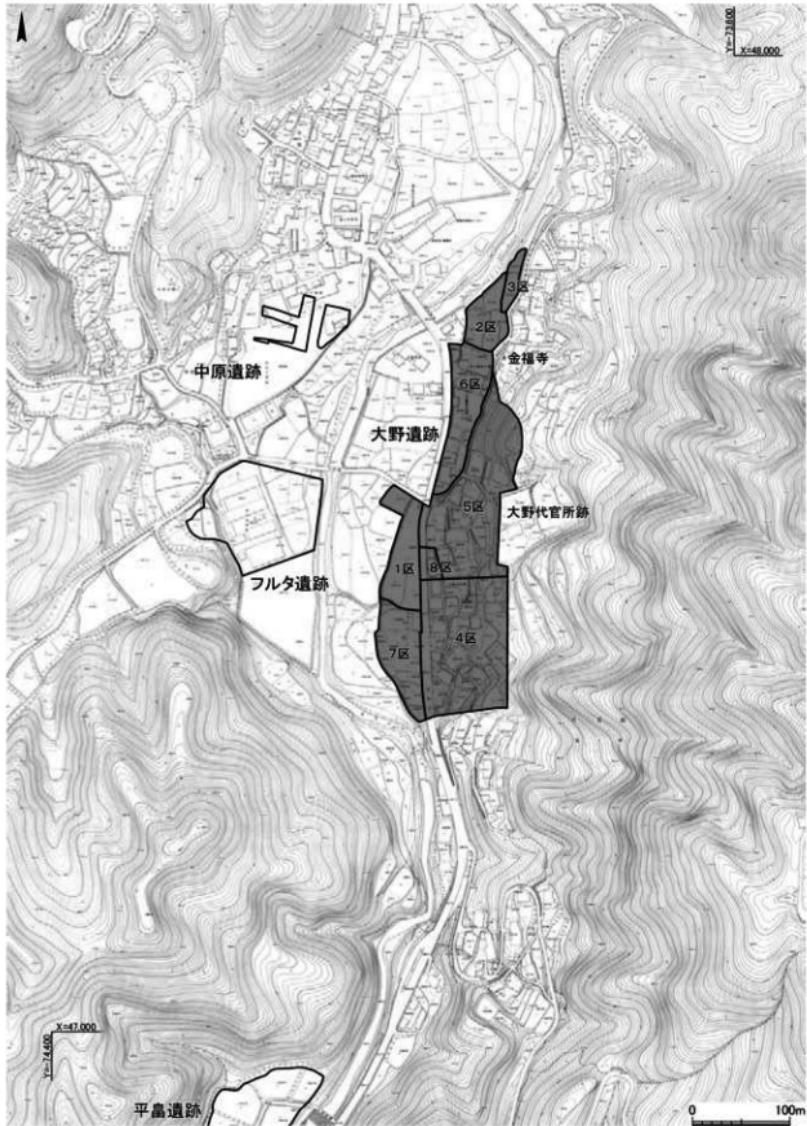


図 58 大野遺跡周辺の地形 (1/5,000)

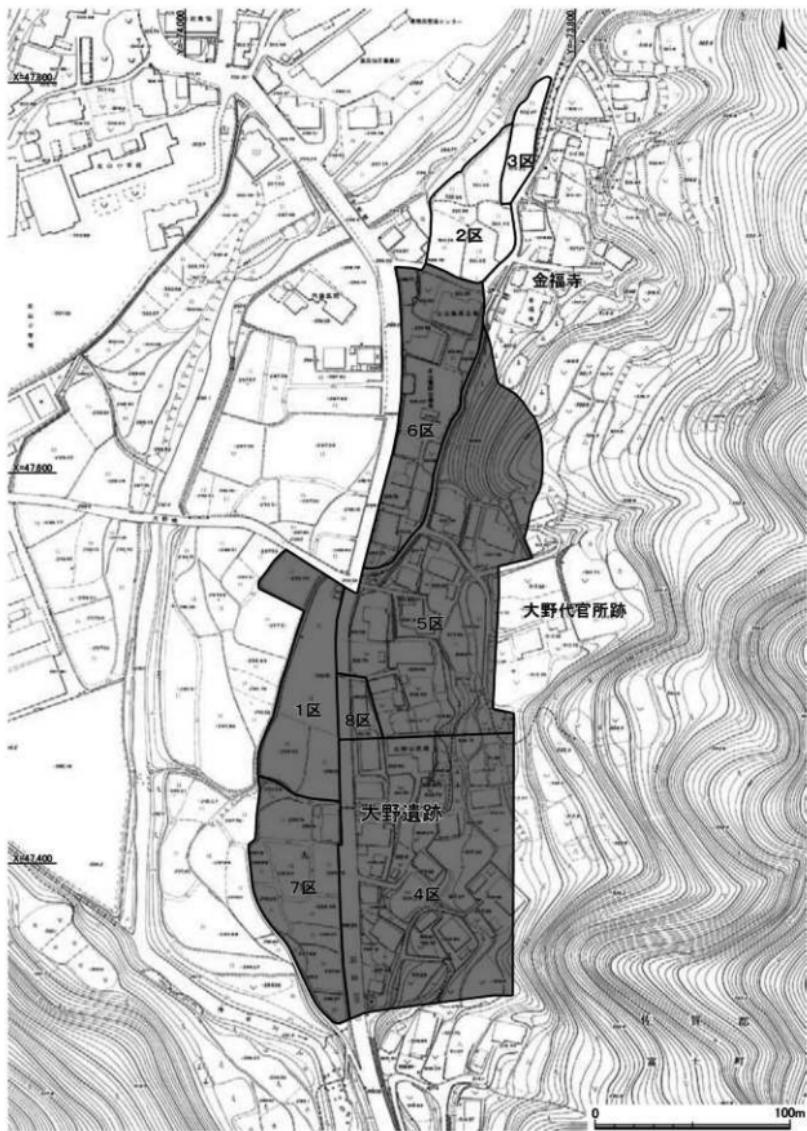


図 59 大野遺跡 1・4～8 区の位置 (1/2,500)

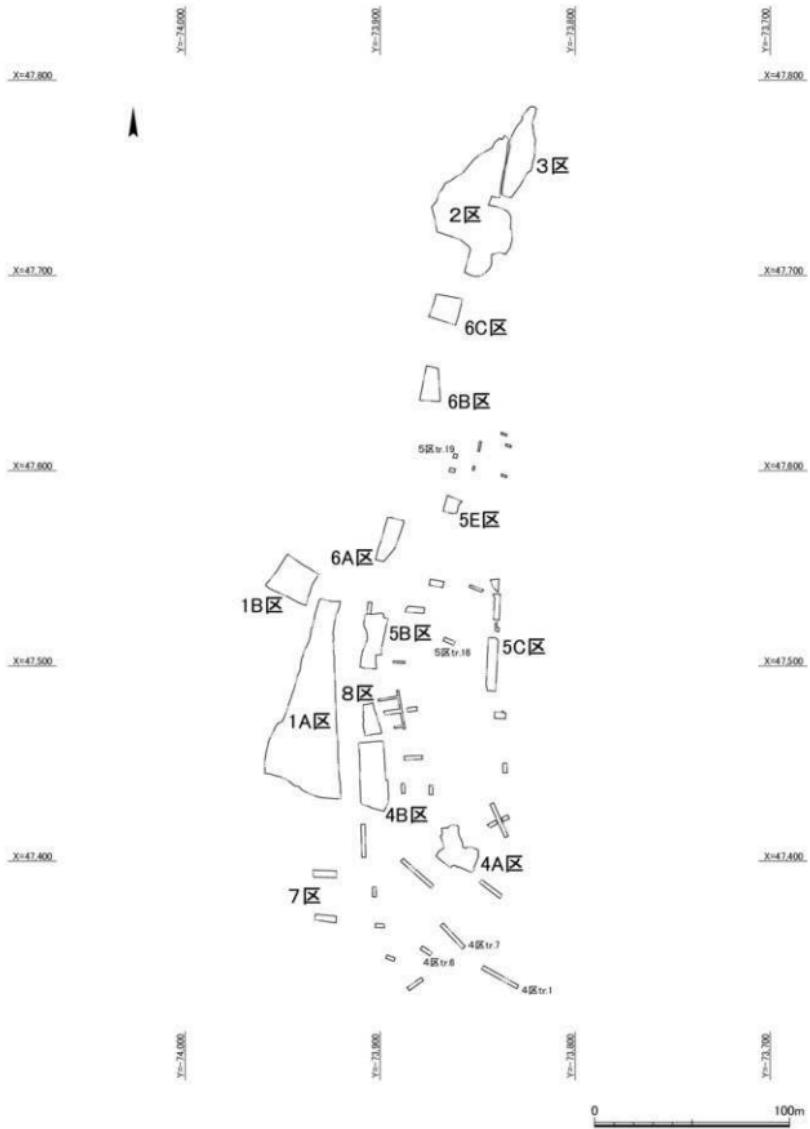


図 60 大野遺跡の調査範囲 (1/2,500)

2 繩文～古墳時代の遺物

1・4～8区では、縄文～古墳時代の遺物がごく少量出土したが、いずれも後世の造構や堆積層などから出土しており、1次的な遺物包含層や当時の明確な造構は確認できなかった。縄文時代では、2・3区で後期後葉の三万田式期の集落が確認されており、それに関連すると思われる石器も出土しているが、異なる時期の遺物もあり、2・3区以外にも周辺などに縄文時代の集落が展開していたものと考えられる。弥生時代では、前期の土器が出土しており、当該期の資料が少ない脊振山間部における様相を知る上で貴重な資料を加えることとなった。

出土遺物（図61）

1～5は縄文土器である。1～4は時期不明の同一個体とみられる条痕土器で、外面は縱方向の条痕を施す。5は前期後葉の曾畠式新段階かと思われるもので、器面調整は条痕、外面には縱方向に雜な浅い沈線を施す。

6・7は弥生土器甕で、ともに器面調整はナデである。6は短く外反する口縁部で、面取りを施したと思われる口縁端部下端に刻目を施す。7は底部である。

8は土師器甕の口縁部で、内面の器面調整はナデである。古墳時代としたが、古代に降る可能性もある。

9～17は縄文時代の石器である。9～12は石鏃で、平面形や調整加工の程度などは多様である。13は小型の削器とした。14は黒曜岩製のヘラ状の插器、15は無斑晶質安山岩製の削器である。16・17は黒曜岩の縱長削片を利用したもので、16は削器、17は微細剝離痕ある削片である。

表5 大野遺跡縄文～古墳時代の出土遺物

排列・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			重量 g	色調／石材	備考	写真図版 写真登録番号
			口徑 長さ	底径 幅	高さ 厚さ				
図61-1 97001298	JA区 包合層	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	外：にぶい黄橙 内：にぶい相		写真図版 24-1 20112120
図61-2 97001299	JA区 包合層	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	外：にぶい相		写真図版 24-2 20112121
図61-3 97001301	JA区 包合層	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	内：にぶい相		写真図版 24-3 20112122
図61-4 97001297	JA区 SK1016	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	外：にぶい相 内：灰褐		写真図版 24-4 20112119
図61-5 11001585	SD区 6層	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	外：黒褐色・にぶい相 内：灰褐色	前輪式新段階力	写真図版 24-5 20112488
図61-6 11001794	GB区 機出面	弥生土器 甕	-	-	-	-	にぶい黄橙		写真図版 24-6 20112483
図61-7 97001243	JA区 P1027	弥生土器 甕	-	60*	-	-	外：相 内：にぶい相		写真図版 24-7 20112216
図61-8 97001333	JA区 SD1862	土師器 甕	11.7*	-	-	-	にぶい相		写真図版 24-8 20112073
図61-9 10001601	SB区 SX5012	打製石器 石鏃	2.3	1.5	0.2	1.0	無斑晶質安山岩	完形	写真図版 24-9 20111072
図61-10 10001597	4区 607層	打製石器 石鏃	2.5+	1.6+	0.5	1.4	無斑晶質安山岩	先端部と脚部片方欠損	写真図版 24-10 20111070
図61-11 10001598	SD区 4層	打製石器 石鏃	2.9+	2.1+	0.3	1.2	黒曜岩	脚部先端をわずかに欠損	写真図版 24-11 20111071
図61-12 10001596	SD区 表床	打製石器 石鏃	3.9	1.9	0.5	2.4	無斑晶質安山岩	完形	写真図版 24-12 20111069
図61-13 10001602	5CN区 1層	打製石器 削器	1.9	1.7	0.5	1.4	黒曜岩	完形	写真図版 24-13 20111073
図61-14 97001302	JA区 P1583	打製石器 插器	4.8	2.2	0.6	6.0	黒曜岩	完形	写真図版 24-14 20112123
図61-15 10001600	SE区 9層	打製石器 削器	9.7	6.1	1.4	68.0	無斑晶質安山岩	完形	写真図版 24-15 20111076
図61-16 10001599	SB区 5m層	打製石器 削器	5.5+	2.5	0.8	7.8	黒曜岩	下部欠損	写真図版 24-16 20111074
図61-17 10001603	GB区 機出面	打製石器 MF	5.1	2.2	0.5	4.4	黒曜岩	完形	写真図版 24-17 20111075

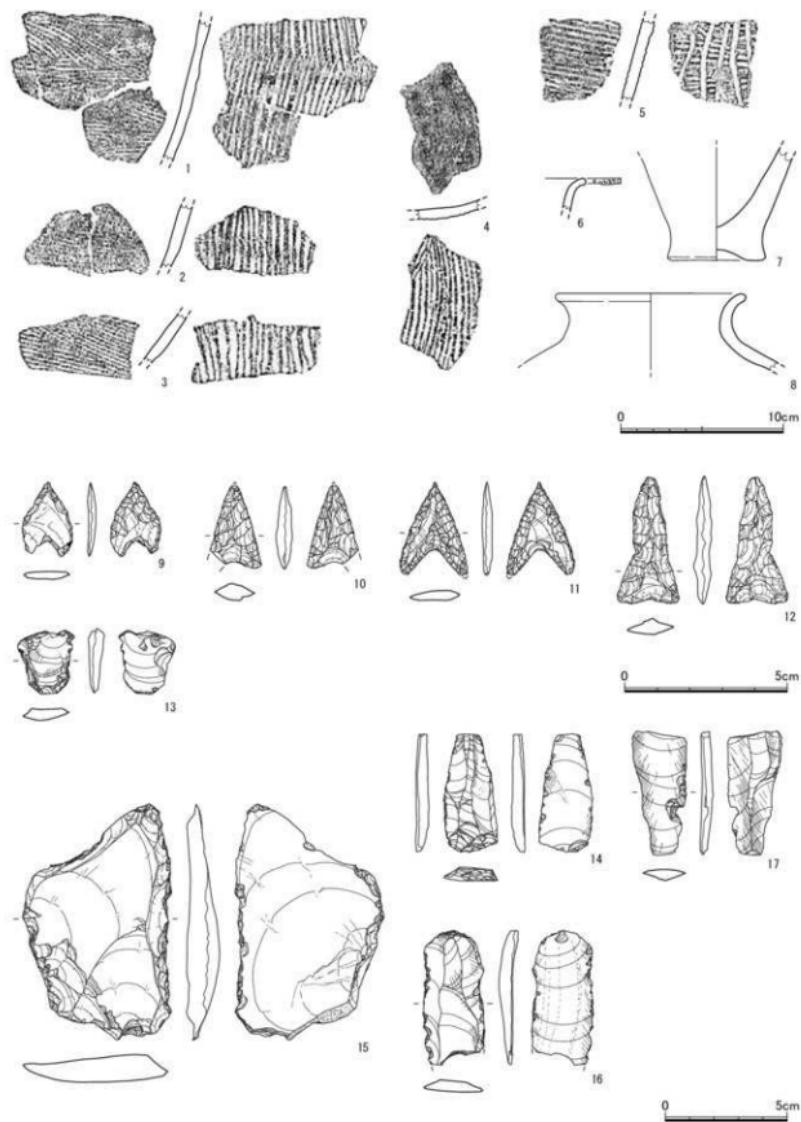


図61 織文～古墳時代の遺物（1～8は1/3、9～13は2/3、14～17は1/2）

大野道路 1・4～8区



図 62 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 1 (1/300)

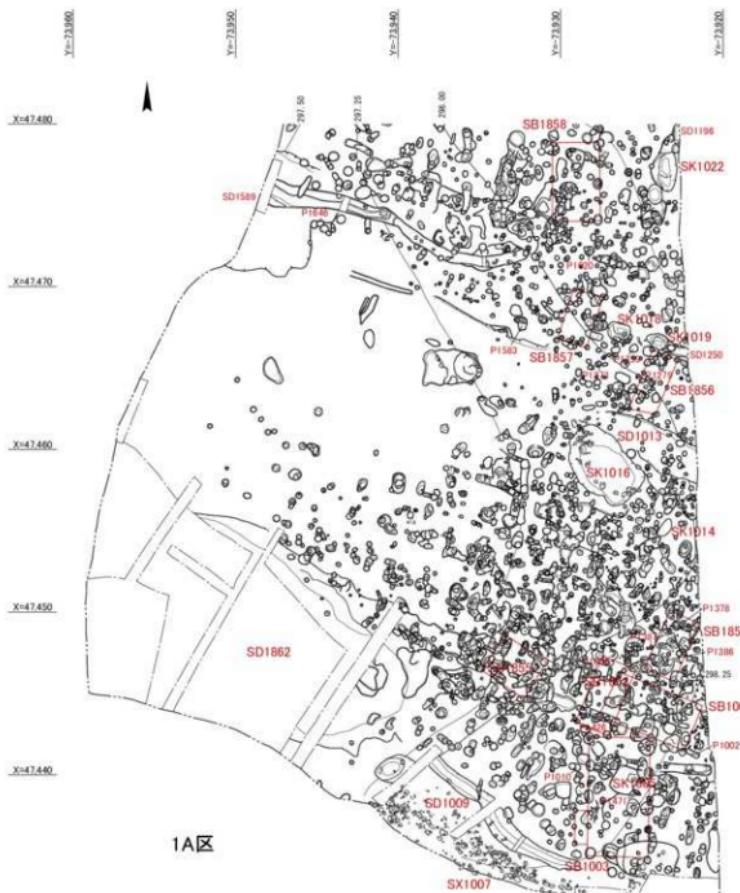


図63 1・4~8区中世~近世の遺構分布詳細2 (1/300)

大野道路 1・4～8区



図 64 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 3 (1/300)



0 10m

図65 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細4 (1/300)



図 66 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 5 (1/300)



図 67 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 6 (1/300)

大野道路 1・4～8区

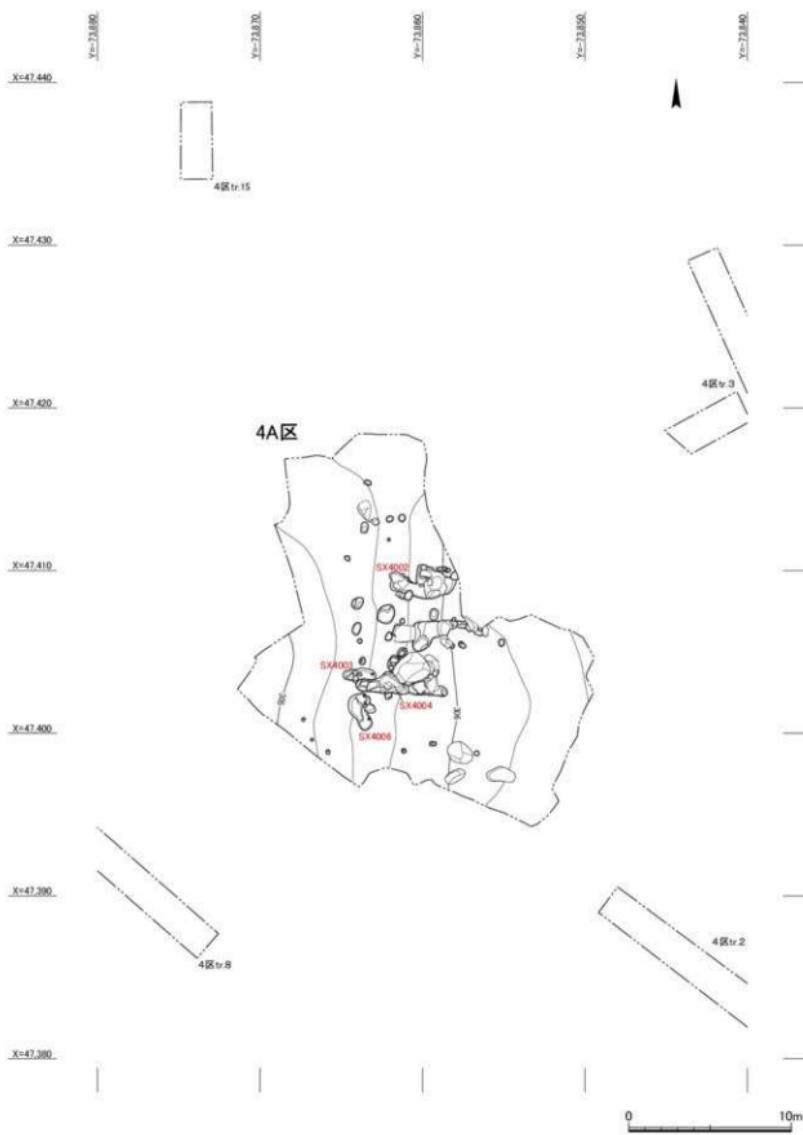


図 68 1・4～8区中世～近世の遺構分布詳細 7 (1/300)

3 中世の遺構と遺物

1・4～8区では、遺物のうち中世のものが大多数を占めており、現地では多くの遺構を中世として認識していた。しかし、近世の項で説明するように、整理作業を進めていくうち、調査を行った遺構面は近世であるとの考えに変更した。改めて遺構を検討したところ、掘立柱建物や溝の多くは近世のもので、確実に中世と認められる遺構はあまり多くはない。調査状況からすると、近世の遺構面の下位に中世の遺構面が存在することは考えにくいが、中世の遺物が数多く出土していることから、調査の及ばなかった調査区東側の斜面地に、集落など主要な中世の遺跡が展開していたことが推測される。

中世の主な遺構としては、1B区で溝2条・柵列2条、5E区で石敷遺構、6B・6C区で掘立柱建物などを構成する柱穴群などがあり、他に土坑や小穴に中世と思われるものがある。遺物は、主に2次的な堆積層から出土しており、中世前期は1B・5B区を中心に、中世後期は1B区南部・4区を中心に出土している。このようなことから、中世前期は5B区東側の斜面地に、中世後期は6B・C区と4区の斜面地に集落が展開していたことが推測される。4区については、大部分が土石流を思わせる巨石を含む近世以降の堆積層で、明確に遺構面を確認できたのは狭い範囲にとどまる。

ここでは、主な中世の遺構が確認された地区は地区ごとに、それ以外の地区についてはまとめて述べることにする。なお、説明の都合で一部近世の遺物もこの項で報告している。

1) 1区中世の遺構と遺物

1区中世の遺構としては、1A区で自然流路・土坑、1B区で溝・柵列・土坑・包含層を確認した。1区では多数の柱穴・小穴が検出されているが、前述のように遺構検出面は近世であり、概報（佐賀県文化財課1998）で中世の掘立柱建物としたものは近世として本書では報告している。本来ならば、整理段階で掘立柱建物などを再検討する必要があったが、期間の都合でできていない。小穴から中世の遺物が出土しているが、多くは遺構面上位の包含層から混入したものと考えられる。しかし、完形の土師器小皿が出土したものもあり、詳細に検討すれば、中世の掘立柱建物などが認められる可能性がある。

溝・包含層

溝は1B区東部で2条（SD1835・1851）確認された。1A区と1B区は北東から南西方向へ流れる現代の水路によって分断されているが、この水路は江戸時代後期の絵図にもみられる。1B区で確認された溝も水路と同じ方向であり、古くからこの部分が水路として利用されていたことが分かる。溝は中世前期の遺物がほとんどを占める包含層Fを掘り込んでおり、この包含層も溝や水路と同じ方向で確認されているようで、後述するSD1862・1863と同様、恐らく土砂災害などで短時間に堆積した層位であると考えられる。なお、SD1835・1851より標高が高い位置で検出されたSD1246・1247は、図示していないがSD1247から肥前産と思われる陶器甕か壺（16世紀末～17世紀初頭）、包含層F検出面で肥前陶器擂鉢（73）が出土していること、土層観察でSD1835・1851との間に堆積層が認められることなどから、近世のものと判断した。

2条の溝はほぼ同じ位置に掘り直されたものであり、中世に集落が営まれた時期に維持された溝であろう。ただ、SD1835・1851から出土する中世前期の遺物については、包含層Fに由来するものが大多数であると考えられ、詳細な時期は明らかにできない。

SD1835（図69）

1B区東部に位置する北東～南西方向の溝で、重複するSD1851より古い。長さ17.5mほど確認され、幅1.1m、

深さ 0.42 m である。南にいくほど底面が低くなることから、北東から南西に水が流れる水路であると考えられる。遺物は土師器杯・小皿（糸切）、鍋 II 類、瓦器碗、東播諸窯系捏鉢、同安窯系青磁皿、竜泉窯系青磁碗 I 類、褐釉陶器鉢などが出土した。

SD1835 出土遺物（図 70）

18・19 は底部糸切の土師器小皿、20 は底部糸切の土師器杯、21 は瓦器碗である。22 は同安窯系青磁皿である。23～27 は竜泉窯系青磁碗で、23 が無文の I 1 類、25 が内面に片彫蓮花文を施す I 2 類、26・27 が内面を区画する I 4 類である。28 は中国産の陶器鉢で、褐釉が施される。29 は土師器鍋で、口縁上面に板状工具による擦痕をもつ II c 類である。30・31 は東播諸窯系とみられる須恵器系陶器捏鉢である。

SD1851（図 69）

1B 区東部に位置する北東～南西方向の溝で、SD1835 の掘り直しとみられる。近世の SD1246 とも重複しているためか、平面で検出することが難しかったようである。調査区北壁の土層では、幅 0.85 m、深さ 0.36 m である。遺物は土師器杯・小皿（糸切）、東播諸窯系捏鉢、白磁碗 IV 類、同安窯系青磁碗・皿、竜泉窯系青磁碗 I・II・上田 B II 類、陶器盤か鉢・耳壺、滑石製石鍋、滑石製品などが出土した。

SD1835 出土遺物（図 70）

32～34 は底部糸切の土師器小皿である。35 は底部糸切の土師器杯で、内底ナデが施され、底面に板状圧痕がみられる。36 は白磁碗 IV 類である。37 は同安窯系青磁碗で、高台内に墨書がある。38・39 は同安窯系青磁皿である。40～45 は竜泉窯系青磁碗で、40 が無文の I 1 類、41 が内面に片彫蓮花文を施す I 2 類、42・43 が内面を区画する I 4 類、44 は鍋蓮弁文の II bc 類、45 は幅の広い蓮弁を片切彫で表現する上田 B II 類である。46 は陶器盤もしくは鉢の口縁部で、内面に褐釉が施され、口縁部に目痕がみられる。47 は陶器耳壺で、暗緑色の釉を流し掛けている。48 は東播諸窯とみられる須恵器系陶器捏鉢である。49 は滑石製石鍋で、口縁下に鈎が巡る釜形のものである。50 は縱方向の耳状把手をもつ滑石製石鍋を再加工しようとしたもので、鋸状のもので切ろうとした痕跡が残る。石鍋としての外面には煤が付着している。

包含層 F 出土遺物（図 71・72）

51・52 は底部糸切の土師器小皿で、52 は内底ナデが施される。53 は底部糸切の土師器杯で、内底ナデが施される。54 は瓦器碗である。

55 は口禿の白磁皿 IX 類である。56 は白磁小碗で、内面に柳目文が施される。57 は白磁碗 IV 類、58 は白磁碗で、内面に柳目文、笠描き文が施される。59 は同安窯系青磁皿である。60 は同安窯系青磁碗で、高台内に墨書がある。61～63 は竜泉窯系青磁碗で、61 が内面を区切り、その間に飛雲文を施す I 4 類、62 が外面上に無鍋蓮弁文を施す II a 類、63 は外面上に鍋蓮弁文を施す II b 類である。64 は陶器耳壺で、暗緑色の釉を流し掛けられる。65 は陶器壺で、褐釉が流し掛けられる。

66・67 は樟谷城・龜山窯系と思われる須恵器系陶器壺で、外面がタタキ、内面がハケメで、67 の内面はさらにナデを施している。68・69 は東播諸窯とみられる須恵器系陶器捏鉢で、68 の内面は顯著な磨滅痕がみられる。70 は口縁上面が繩目文の土師器鍋 II b 類である。71・72 は滑石製石鍋で、口縁下に鈎が巡る釜形のものである。

73 はタタキ成形の肥前陶器捏鉢で、灰釉が施される。検出面から出土した。

74 は土製の櫛羽口である。75・76 は滑石製品で、75 は石鍋再加工品とみられるバレン形、76 はくびれがやや雑に作られた棒形のものである。

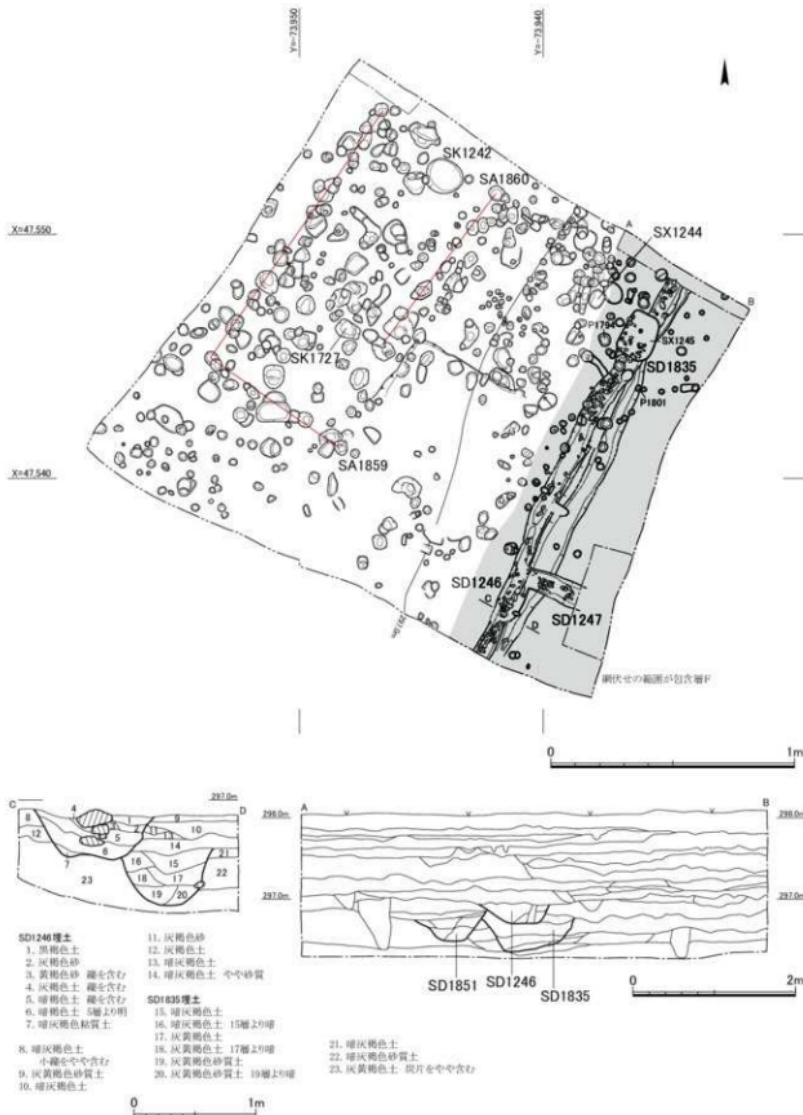
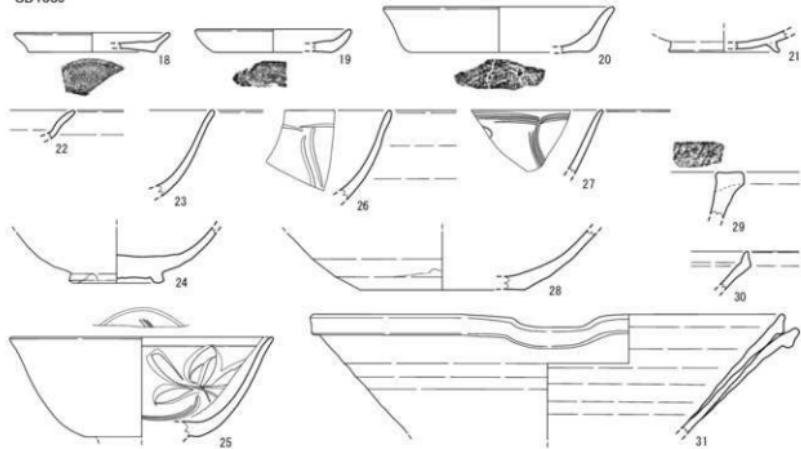


図 69 1B 区中世～近世の遺構分布 (1/200)、土層 (1/40, 1/60)

SD1835



SD1851

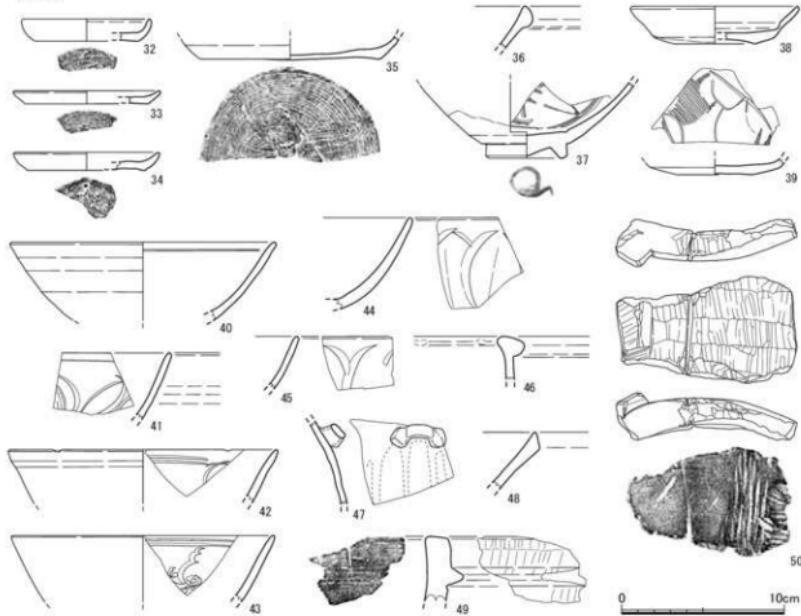


図 70 1B 区中世の溝出土遺物 (1/3)

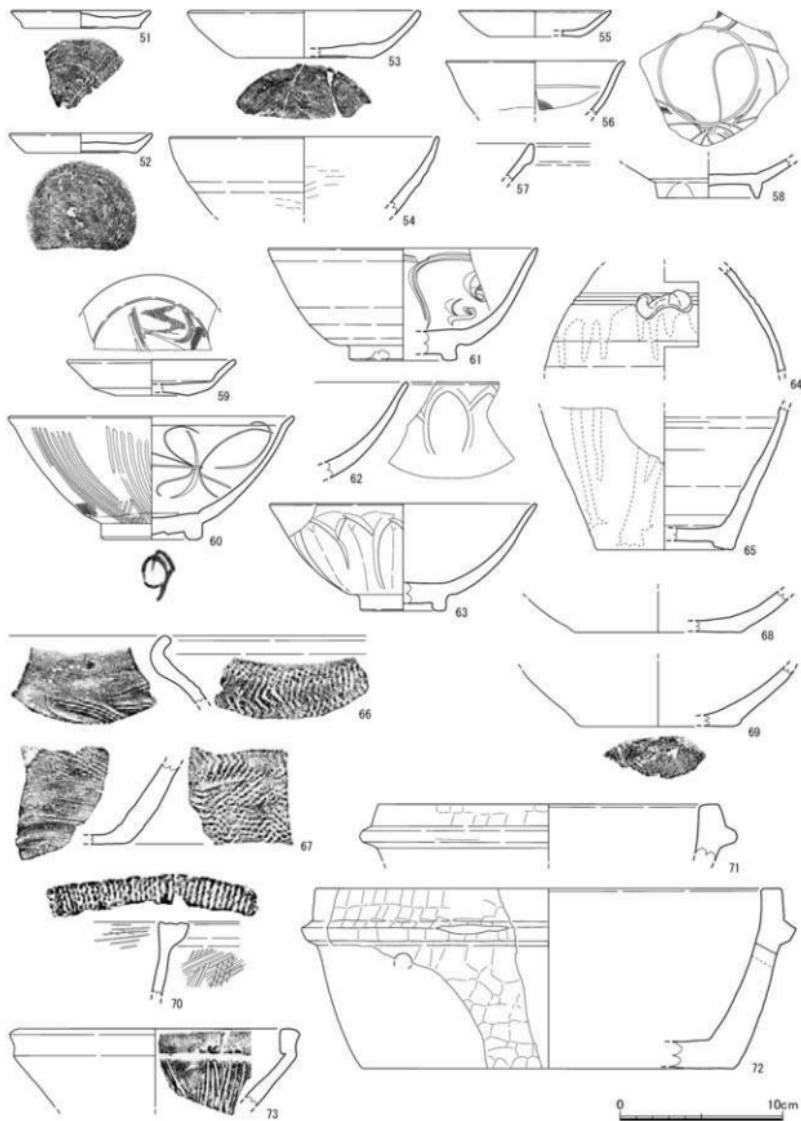


図 71 1B 区中世の包含層 F 出土遺物 1 (1/3)

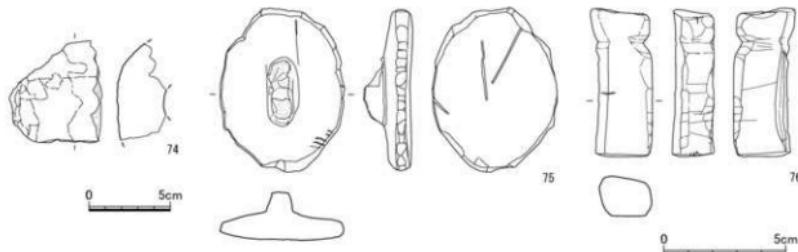


図 72 1B 区中世の包含層 F 出土遺物 2 (74 は 1/3、75・76 は 1/2)

柵列

柵列は 1B 区北西部で 2 基確認された。遺物がごく少量のため、正確な時期は不明であるが、SD1835 と方位が同じであり、1A 区南部で検出された近世の掘立柱建物群とは方位が異なることから、中世として報告する。ただ、近世の SD1246 と方位が同じともいえるので、近世に降る可能性は否定できない。

SA1859 (図 73)

1B 区北西部に位置している。長軸の主軸を N35° E にとる 10 間の L 字状の柵列であるが、北東方向にさらに延びる可能性がある。長さは北東一南西方向が 12.38 m、北西一南東方向が 6.47 m で、柱間は 1.39 ~ 2.39 m である。調査当初の検出時点では L 字状の溝としていたが、2 ~ 5 cm ほど掘り下げるに列状に小穴が確認されており、本来は布掘り状の掘方であった可能性がある。SA1860 とは主軸方位が若干異なるが、囲い柵など有機的に関連するかもしれない。遺物は土師器杯が出土した。

SA1859 出土遺物 (図 76)

77 は底部糸切の土師器杯である。

SA1860 (図 73)

1B 区中央部北寄りに位置している。主軸を N37° E の北東一南西方向にとる 5 間の柵列であるが、北東方向にさらに延びる可能性がある。長さ 7.73 m、柱間は 1.18 ~ 1.98 m である。SA1859 とは主軸方位が若干異なるが、囲い柵など有機的に関連するかもしれない。遺物は出土していない。

土坑

1 区中世の土坑として 7 基を報告するが、出土遺物は小片が多く、いずれも近世に降る可能性は否定できない。

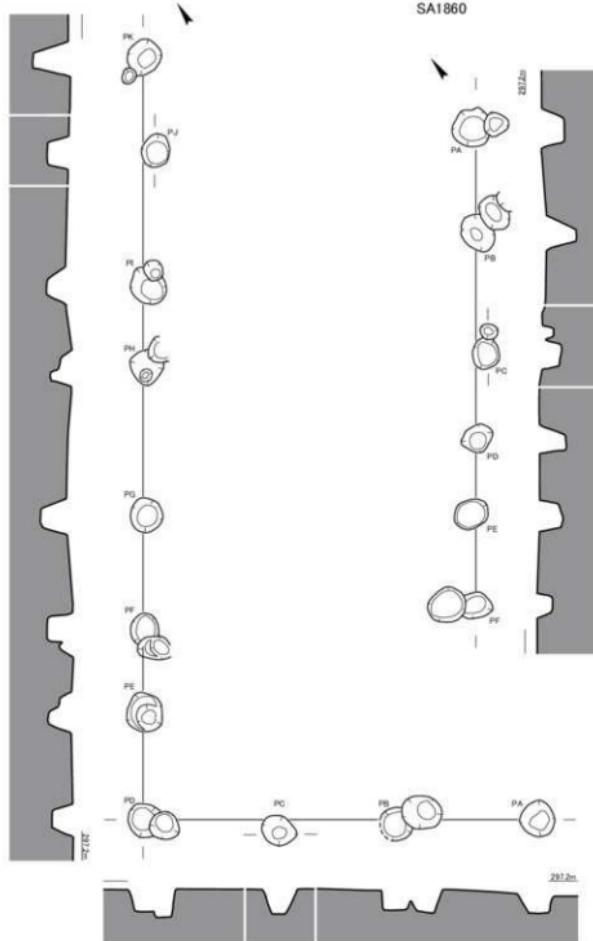
SK1014 (図 74)

1A 区南東部に位置し、長軸 1.21 m、短軸 0.62 m、深さ 0.40 m で、平面は不整梢円形である。柱穴の可能性がある。遺物は土師器杯・小皿、白磁合子身か小壺、竜泉窯系青磁碗が出土した。

SK1014 出土遺物 (図 76)

78 は白磁合子身もしくは小壺の底部である。

SA1859



SA1860

0 2m

図 73 1B 区中世の構造 (1/80)

SK1016（図 74）

1A 区南東部に位置し、長軸 5.13 m、短軸 3.34 m、深さ 0.39 m で、平面は不整長方形である。中世後期の遺物を含む堆積層とみられる SD1013 より新しい。径 0.1～0.4 m の礫が周辺から流れ込んだ状態で検出されており、周囲に土留石などが存在した可能性がある。遺物は土師器小皿（糸切）、瓦質土器擂鉢・火鉢・茶釜・鍋、備前窯陶器擂鉢、同安窯系青磁皿、竜泉窯系青磁碗上田 B IV 類が出土した。

SK1016 出土遺物（図 76）

79 は底部糸切の土師器小皿である。80 は同安窯系青磁皿、81・82 は竜泉窯系青磁碗で、81 はヘラ先による細線の線描蓮弁文を施す上田 B IV 類、82 の高台置付からその内部は露胎である。83 は瓦質土器擂鉢、84 は備前窯陶器擂鉢で、ともに内面に磨滅痕がみられる。85 は瓦質土器火鉢、86・87 は瓦質土器茶釜で、85・86 には印刻文が施される。88～95 は瓦質土器鍋で、いずれも直口縁で、鉢形の器形になるものと思われる。88 は土師器とすべきかもしれない。

SK1018（図 75）

1A 区南東部に位置し、長軸 1.41 m、短軸 1.13 m、深さ 0.67 m で、平面は不整長方形である。遺物は土師器杯・鍋 II b 類、瓦質土器鍋、同安窯系青磁皿、灰青陶器皿か碗が出土した。

SK1018 出土遺物（図 76）

96 は同安窯系青磁皿、97 は朝鮮王朝期の灰青陶器皿もしくは碗である。98 は口縁上面が縄目文の土師器鍋 II b 類である。

SK1019（図 75）

1A 区南東部に位置し、長軸 1.34 m、短軸 0.96 m、深さ 0.78 m で、平面は不整橢円形である。柱穴の可能性がある。遺物は土師器杯・小皿（糸切）、瓦質土器小片が出土した。

SK1019 出土遺物（図 76）

99 は底部糸切の土師器小皿で、内底ナデが施される。

SK1022（図 74）

1A 区中央東端に位置し、長軸 2.37 m、短軸 1.61 m、深さ 1.03 m で、平面は不整形である。遺物は土師器杯、竜泉窯系青磁碗 II 類が出土した。

SK1022 出土遺物（図 76）

100・101 は竜泉窯系青磁碗で、100 が無錫蓮弁文の II a 類、101 が鎮蓮弁文の II bc 類である。

SK1242（図 75）

1B 区北西部に位置し、長軸 1.57 m、短軸 1.40 m、深さ 0.47 m で、平面は橢円形である。遺物は土師器杯（糸切）、中国産陶器片が出土した。

SK1242 出土遺物（図 76）

102 は底部糸切の土師器杯で、内底ナデが施される。

SK1727（図 75）

1B 区中央北西寄りに位置し、長軸 1.02 m、短軸 0.62 m、深さ 0.46 m で、平面は不整長方形である。柱穴の可能性がある。遺物は土師器杯・鉢、瓦質土器茶釜・鉢が出土した。

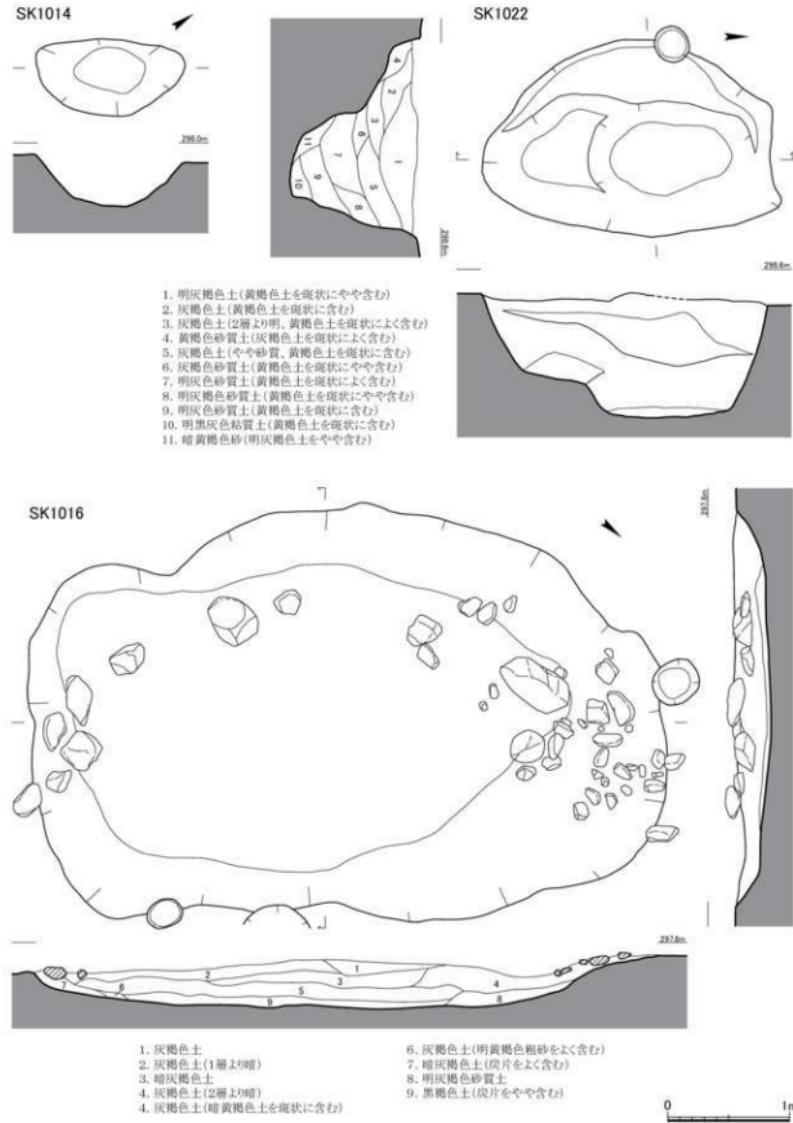


図74 1区中世の土坑 (1/40)

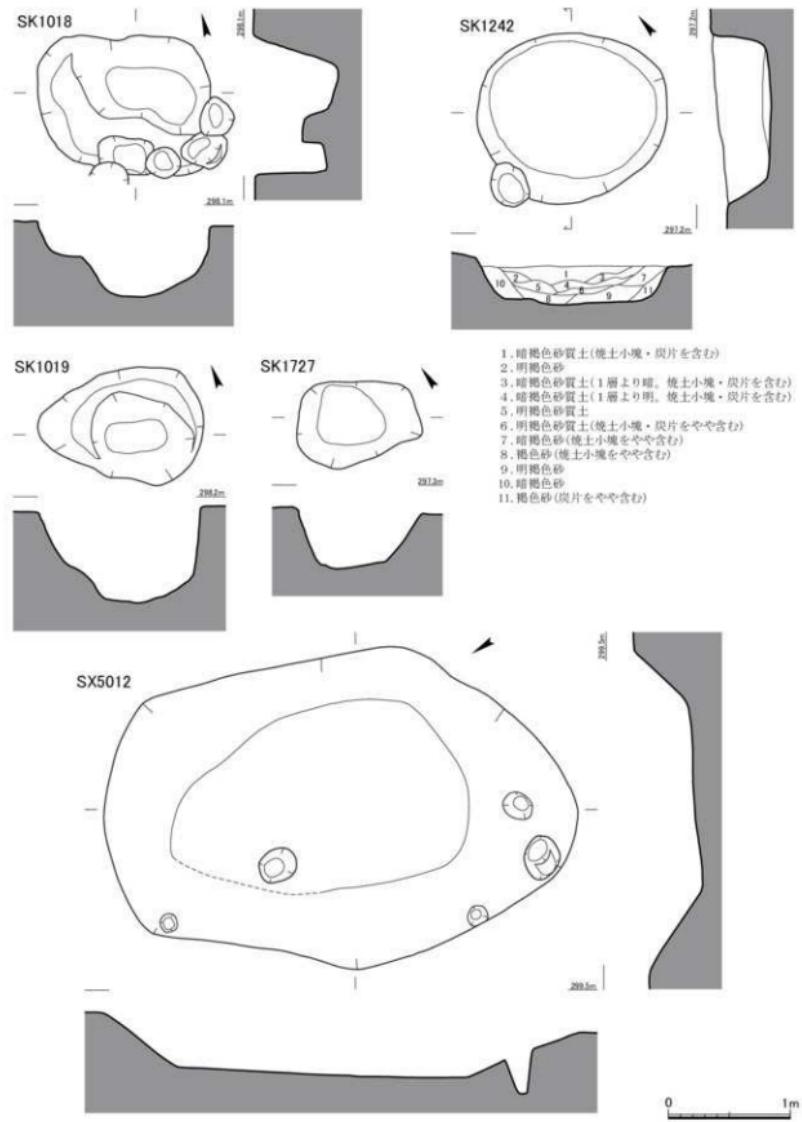


図75 1・58区中世の土坑 (1/40)

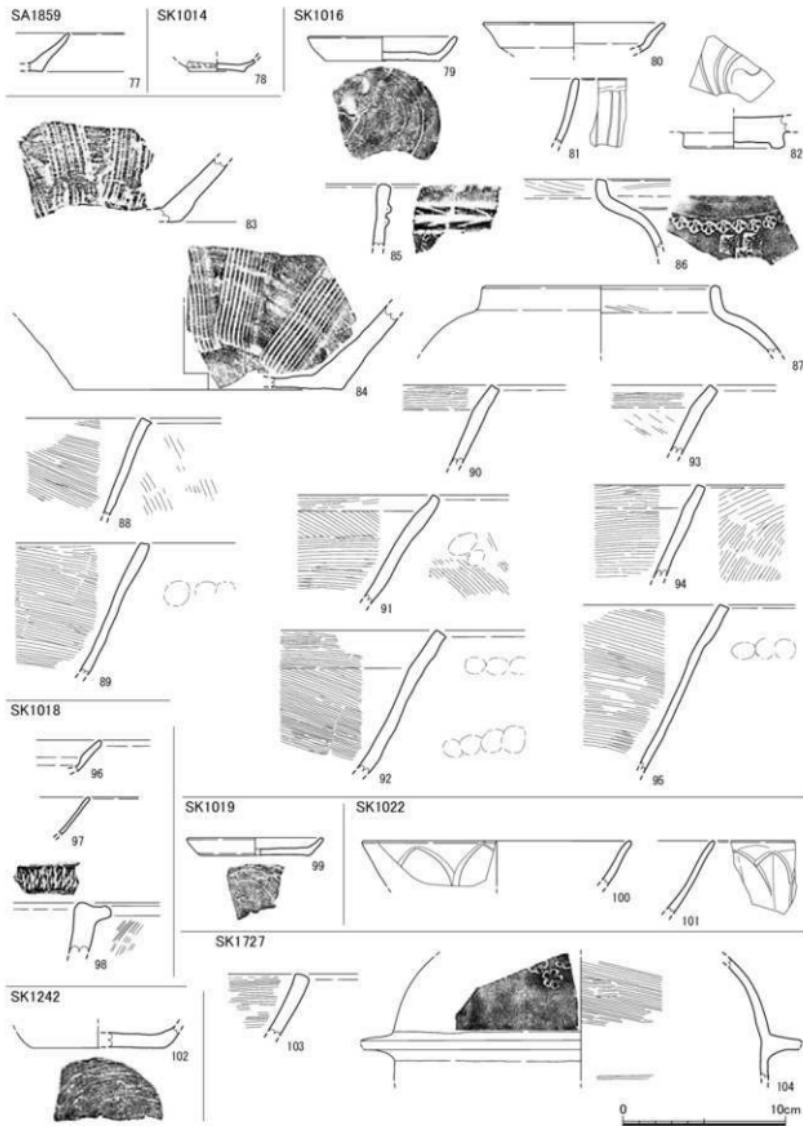


図 76 1区中世の土坑出土遺物 (1/3)

SK1727 出土遺物（図 76）

103 は土師器鉢で、内面はハケメである。104 は瓦質土器茶釜で、外面に印刻文が施される。

自然流路（図 64・65）

自然流路としたのは、1A 区南端の SD1862 と 1A 区中央西端の SD1863 で、1A 区南東部の SD1013 や前述した包含層 F も同様の遺構の可能性がある。形状や土層（図 93）などから、常時水が流れているような流路というよりは、山崩れなど土砂災害によって生じた堆積層ではないかと推測している。SD1862・1863 とも中世後期の遺物が主体を占め、あるいは同時に起こった災害によるものかもしれない。

SD1862 出土遺物（図 77）

105～107 は土師器杯で、106 は内底に沈線状の調整、107 は内底に螺旋状沈線が施される。

108・109 は竜泉窯系青磁碗で、108 は細線の線描蓮弁文を施す上田 B IV 類、109 の高台内は露胎である。110 は竜泉窯系青磁盤で、高台内中心部を除き施釉される。111 は朝鮮半島あるいは中国産の陶器壺である。112 は朝鮮王朝期の灰青陶器皿で、高台脛付に目痕が残る。

113 は東播諸窯とみられる須恵器系陶器押鉢である。114 は備前窯陶器押鉢で、内面に顯著な磨滅痕がみられる。115 は玉縁状口縁の土師器鍋Ⅲ a 類である。116～118 は瓦質土器鍋で、116 は内耳が付き、117 は口縁内面に横方向のハケメを施することで、明瞭な稜を作り出している。119・120 は瓦質土器火鉢、121 は瓦質土器茶釜で、外面に印刻文が施される。

122 は肥前陶器皿で、灰釉が施される。

SD1863 出土遺物（図 77）

123 は底部糸切の土師器杯で、内底に螺旋状沈線が施される。124 は竜泉窯系青磁皿で、高台脛付から内側は露胎である。125 は中国産の陶器甕で、外面に褐釉が施される。126 は瓦質土器擂鉢で、外面に煤が付着している。

127 は瓦質土器鍋で、口縁内面に横方向のハケメを施することで、明瞭な稜を作り出している。

1 区その他中世の出土遺物（図 77～79）

128～170 は小穴や後世の遺構などから出土した中世の遺物である。129 のように完形の遺物があり、中世の小穴に伴うとみられる遺物もあるが、大多数は堆積層などからの混入によるものであろう。主に遺物の種別により説明していくため、出土位置については図・表を参照されたい。

128 は備前窯陶器擂鉢である。129 は底部糸切の土師器小皿で、完形品である。130 は底部糸切の土師器杯である。131 は白磁多角杯を模倣した土師器杯で、平面六角形になるものと思われる。132・133 は底部ヘラ切の瓦器皿で、底面に板状圧痕がみられる。134 は瓦器碗で、高台脛付に板状圧痕がみられる。

135～138 は白磁皿である。135 は皿Ⅶ 1 類、136 は皿Ⅶ 1' 類かと思われ、137 は口禿の皿Ⅸ 類で、口禿の部分に墨かと思われる黒色物が付着している。138 は白磁森田 D 群の皿で、高台に 4 箇所抉り込みが入るものと思われ、内面に目痕が残る。

139・140 は同安窯系青磁皿である。141～149 は竜泉窯系青磁碗である。141 は内面に片彫蓮花文を施す I 2b 類、142・143 は外面に錦蓮弁文を施す II bc 類、144 は幅の細い錦蓮弁文を施す III 2 類、145 は幅の広い蓮弁を片切形で表現する上田 B II 類、146 は口縁外に雷文帯をもつ上田 C 類、147・148 は外反口縁の上田 D 類である。149 は高台脛付から内側は露胎である。150 は竜泉窯系青磁皿である。

151 は褐釉陶器小壺（茶入）で、胴部に沈線が 1 条巡り、器壁は非常に薄い。152 は中国産黒釉磁器の天目碗

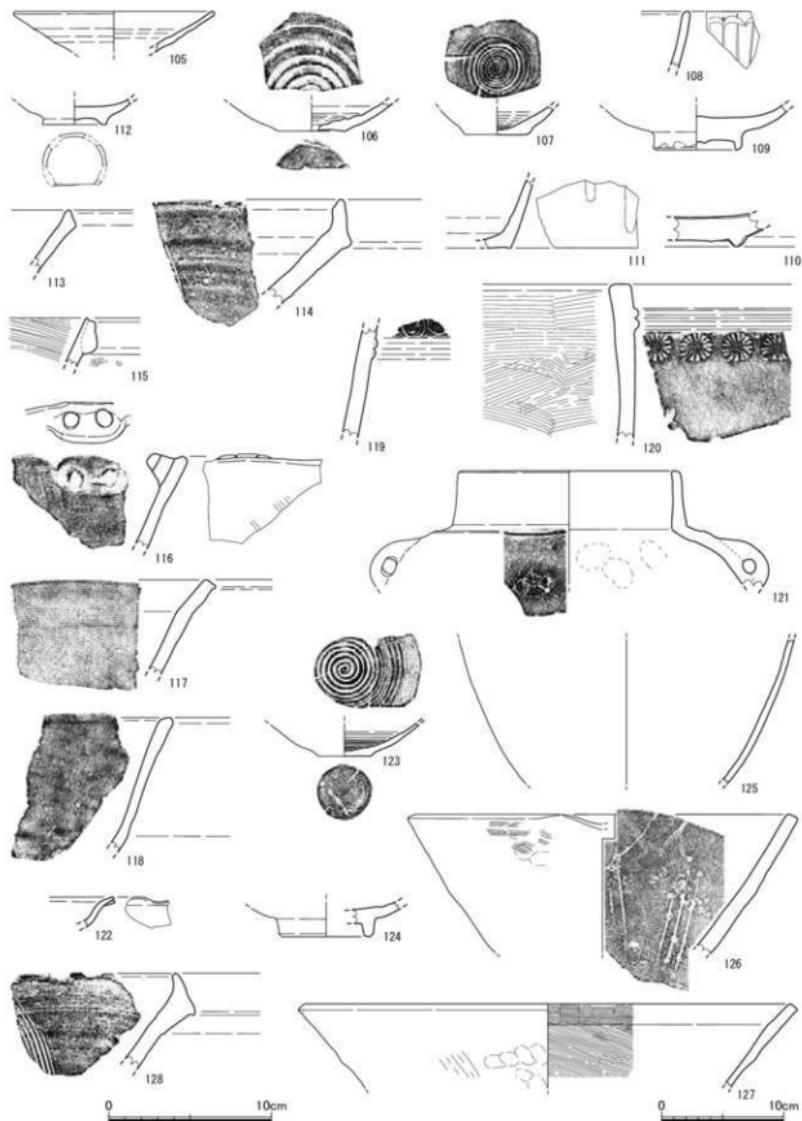


図 77 1A 区中世の自然流路出土遺物 (127 は 1/4、他は 1/3)

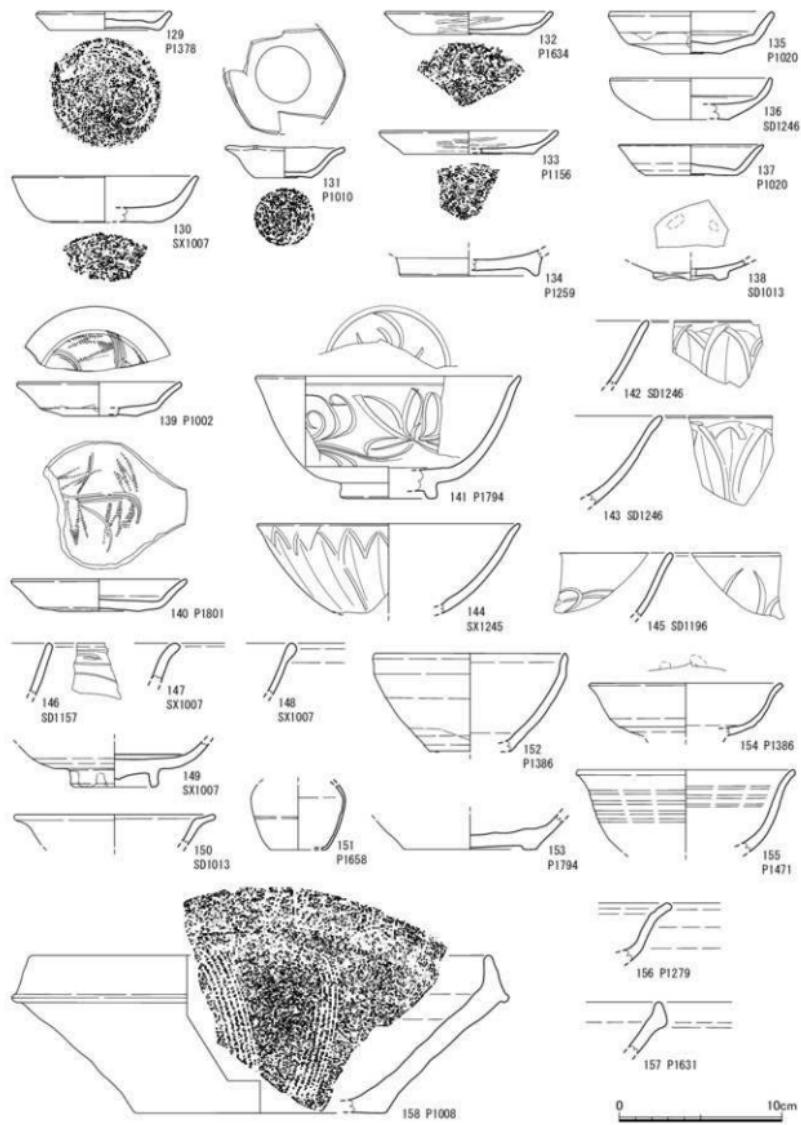


図 78 1 区中世の出土遺物 1 (1/3)

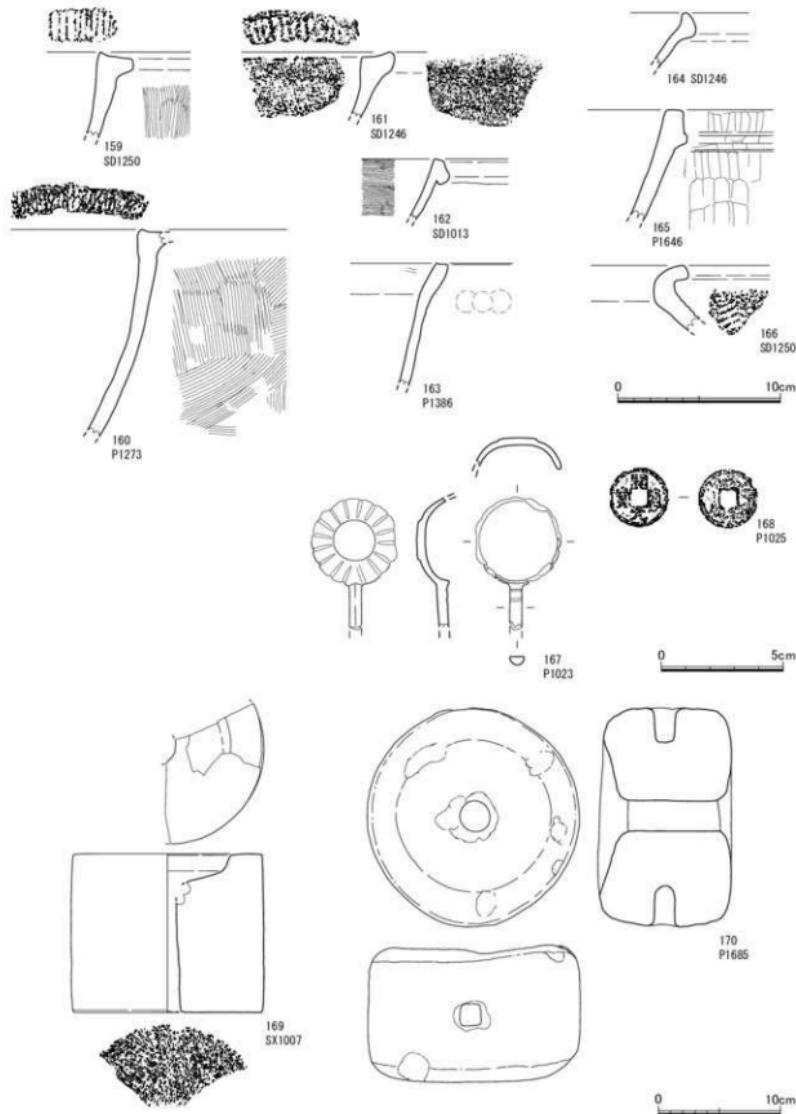


図 79 1区中世の出土遺物 2 (159～166は1/3、167・168は1/2、169・170は1/4)

である。153 は陶器壺で、暗褐色の釉が内外面に施されるが、本来は青磁を意識した釉の可能性がある。

154 は朝鮮半島産の軟質白磁とみられる皿で、内面見込みに目痕が残る。SB1854 柱穴から出土した破片と接合した。155 は朝鮮王朝期の粉青沙器碗で、刷毛で白化粧土を施している。

156 は瀬戸・美濃窯系の陶器皿で、灰釉が施される。157 は東播諸窯とみられる須恵器系陶器捏鉢である。158 は備前窯陶器捏鉢で、内面には磨滅痕が顕著にみられる。

159～161 は口縁上面に文様を施す土師器鍋 II 類で、159 が短沈線状文の II a 類、160・161 が繩目文の II b 類である。162 は玉縁状口縁の土師器鍋 III a 類である。163 は瓦質土器鍋で、口縁内面に明瞭な稜をもつ。164 は防長系の瓦質土器足鍋である。165 は滑石製石鍋で、口縁外面に高さが低い鈴が巡る。166 は樺谷城・亀山窯系と思われる須恵器系陶器甕で、外面はタタキである。

167 は杓子状の銅製品で、仏具の可能性がある。外面の放射状に施された沈線には削った痕跡がみられる。柄は横断面が半円状で、平面部分に 2 条の浅い沈線が鋤込まれている。時期は中世～近世と言わざるを得ない。168 は唐錢の開元通宝である。

169・170 は石臼である。169 は下面に磨滅痕がみられ、近世前期の SX1007 石列中から出土した。170 は下面の約 1/4 が使用によるためか顕著に磨滅している。

2) 5E 区中世の遺構と遺物

5E 区中世の遺構としては、性格不明の石敷遺構を確認した（図 80）。5E 区は、代官所跡が所在する西に開く谷の北側斜面際に所在した現代の屋敷地に設定した調査区である。現地表面から約 2 m 挖り下げた標高約 300 m の地点で、礫石が大量に散布している面を検出した。詳細に検討した結果、多くの礫石は原位置を保っていないものであるが、調査区東側で原位置を保つ石列などがあることが判明した。複数時期のものが含まれている可能性はあるが、原位置を保つものを SX5008 とした。

5E 区の堆積状況（図 81）は、西壁土層の 6 層以上には近世陶磁器が含まれており、8・9 層（東壁では f 層が対応）はわずかに近世の遺物を含むものの、中世後期を主体とする遺物が出土していることから、8 層以下が中世の堆積層と考えられる。SX5008 は 9 層に覆われておらず、10 層（東壁では g 層）上に構築されていると現地で判断されているが、写真で見ると g1 層も SX5008 を覆っているように見える。

SX5008（図 80）

5E 区南東部に位置する石敷遺構である。長さ 1 m ほどの扁平な石材の面をそろえて東西方向に並べている列が 2 条確認できる。北側石列の中央部は、本来同様の石材があったが、調査時に誤って動かしてしまっている。石列の間には円礫を主体とする小礫が敷き詰められているが、二つの石列は方位がやや異なっており、同一時期のものか、2 時期あるのかは明確ではない。石材の中には被熱痕のあるものがみられるが、炭化物や焼土などは伴っていないため、この場で火が焚かれたかどうかは不明である。

SX5008 の北側斜面部の岩盤は人為的に整形されており、石敷遺構に伴って周辺が造成されていることが推測されるが、調査区を大きく拡張することが困難な場所であったことから、石敷遺構の性格を把握するための材料は乏しい。ただ、このような石敷遺構が中世の一般的な集落に伴うとは考えにくいので、在地領主クラスの館や寺院など階層の高い施設が存在したことがうかがえる。

遺構の時期は、14・15 世紀代の遺物が 8・9 層に多いが、SX5008 北側に埋納されたかのように出土した完形の土師器小皿（183）は 13 世紀に遡る可能性があり、詳細に絞り込むことは難しい。

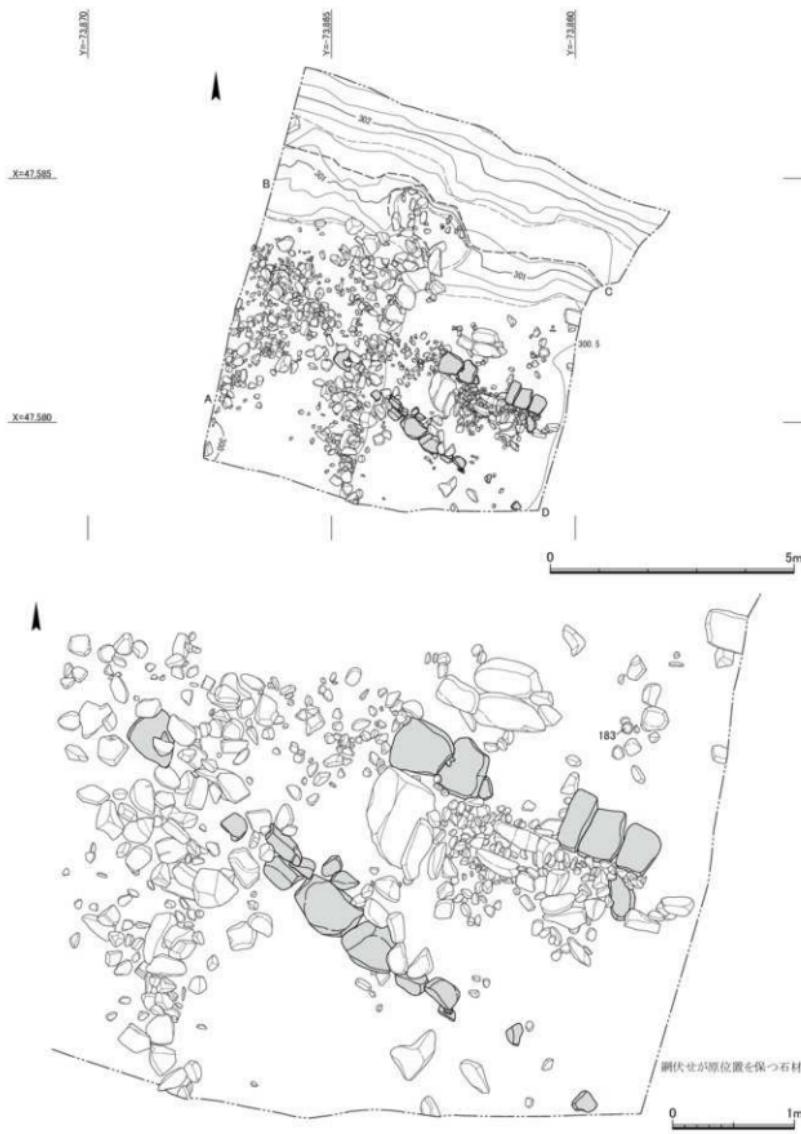
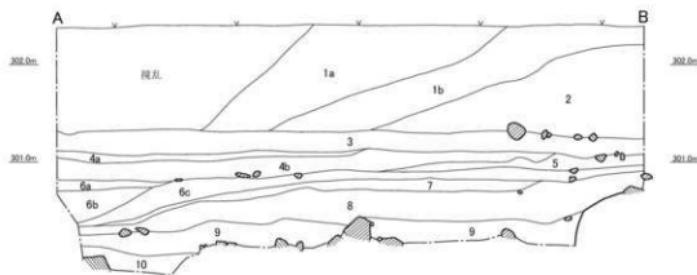


図 80 5E 区の遺構分布 (1/100)、SX5008 (1/40)

5E区西壁



- 1a. にぶい 黄色(2, 5Y6/4) 砂質土
 1b. にぶい 黄褐色(10YR5/4) 砂質土
 2. 橙色(10YR4/4) 砂質土
 3. 黄褐色(2, 5Y5/1) 砂質土 粒子が細かい。よくしまる。
 4a. 橙褐色(10YR6/1) 砂質土
 4b. 橙褐色(10YR5/1) 砂質土 2層よりも粒子が大きい。
 5. 淡黄色(2, 5Y8/3) 砂質土 2・3層よりも粒子が大きい。
 6a. 淡黄褐色(10YR7/2) 砂質土
 6b. 淡灰色(3Y4/1) 砂質土
 6c. 淡灰黄色(2, 5Y5/2) 砂質土 7層よりも粒子が細かい。
 7. 淡黄色(2, 5Y6/2) 砂質土 6・8層よりも粒子は粗い。遺物は少ない。
 8. にぶい 黄褐色(10YR7/2) 砂質土
 9. 橙褐色(10YR6/1) 粘質土 しまりが悪い。一部橙色(7, 5YR7/6) 粘質土が混ざる。
 10. 暗灰色(N3/0) 粘質土 しまりはない。水分を含む。遺物を含まない。東壁のg層と対応するものと考えられる。

5E区東壁



- a. 橙褐色(10YR5/1) 砂質土
 b. 灰白色(7, 5YR8/2) 砂質土
 c. 淡黃褐色(7, 5YR8/3) 砂質土 b層が酸化したものか? 遺物なし。
 d. 橙褐色(10YR6/1) 粘質土 a層とe層の間に確認。東壁、西壁では未確認。
 e. 暗青灰色(10BGS/1) 粘質土 + 淡灰色(7, 5G15/1) 粘質土 西壁 6・7層とe層に対応。
 f. 灰褐色(2, 5Y6/2) 粘質土 a・b・9層と対応する。石転造構の直上。
 g1. 淡灰褐色(N3/0) 粘質土 + オリーブ灰色(5G15/1) 粘質土 遺構面(g1層)上にある。
 g2. 灰色(5Y6/1) 砂質土 橙色(5YR6/8) 砂質土 (砂分り)を含む。
 h. にぶい 黄褐色(10YR7/2) 砂質土 粒子が非常に細かくサラサラした砂質。石転造構の直上に見られた。東壁、西壁では未確認。
 i. 緑灰色(10G5/1) 砂質土 游水する。水分を多く含み。しまりがない。遺構面より下層になる。遺物なし。

0 2m

図 81 5E 区の土層 (1/50)

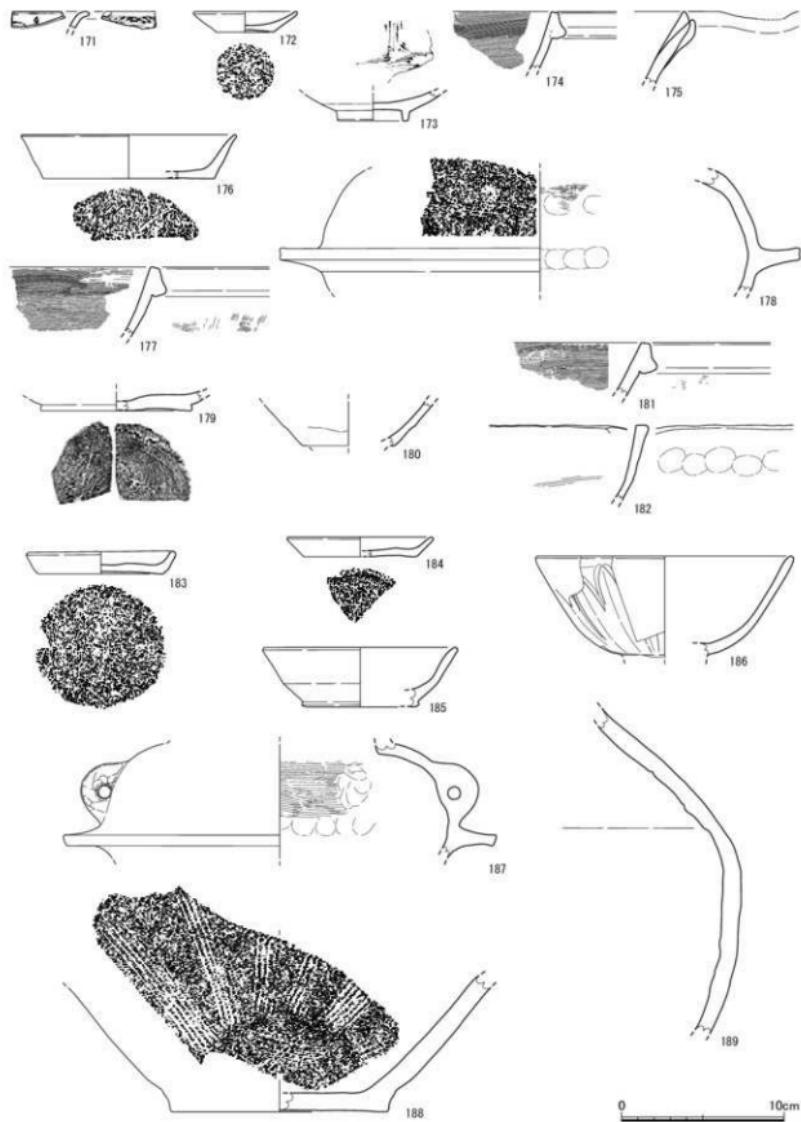


図 82 5E 区の出土遺物 (1/3)

5E 区出土遺物（図 82）

171～175 は 6 層以上から出土した。171 は景德鎮窯系青花皿で、端反形の小野 B1 群である。172 は底部糸切の土師器小皿である。173 は肥前の京焼風陶器皿で、高台内に円刻はみられない。174 は玉縁状口縁の土師器鍋Ⅲ a 類、175 は東播諸窯とみられる須恵器系陶器捏鉢である。

176～182 は 8・9 層から出土した。176 は底部糸切の土師器杯、177 は玉縁状口縁の土師器鍋Ⅲ a 類、178 は瓦質土器茶釜で、外面に印刻文を施す。179 は底部糸切の土師器杯である。180 は中国産とみられる天目形の黒釉磁器碗で、釉がはじけている。181 は玉縁状口縁の土師器鍋Ⅲ a 類である。182 は瓦質土器鍋で、焙烙形になるものと思われ、近世に降る資料であろう。

183～189 は g1 層出土である。183・184 は底部糸切の土師器小皿で、184 は内底ナゲが施される。185 は底部糸切の土師器杯である。186 は竜泉窯系青磁碗で、幅の細い錦蓮弁文を施すⅢ 2 類である。187 は瓦質土器茶釜、188 は瓦質土器擂鉢である。189 は常滑窯系陶器甕で、肩部には自然釉が掛かる。

3) 6B・C 区中世の遺構と遺物

6B・C 区中世の遺構としては、掘立柱建物や柵列を構成すると考えられる柱穴・小穴群を確認した。6B・C 区は現在の金福寺の南西側に隣接する調査区である。他の地区と異なり、検出面上位の包含層は薄いか、ほとんど確認できない状況である。

両調査区とも非常に狭い面積しか調査していないため、確実な建物などを認定するのは困難な状況である。調査担当者によって掘立柱建物や柵列の候補が挙げられているが、担当者もより大きな建物を想定しており、あくまで想定案の一つとしておくべきであろう。整理段階で詳細にみると、近世以降の遺物が出土した掘立柱建物の柱穴もあり、時期を含め詳細に検討する必要が出てきているが、期間の都合でできていない。そのため、報告にあたっては調査段階で認定した遺構番号をそのまま使用している。

出土遺物は量が少ないものの、14～16 世紀代のものが多く、中世後期に掘立柱建物を中心とした建物群が調査区周辺に展開していたことが推測される。金福寺に隣接することから、金福寺や寺に関連する建物群の可能性もあるが、遺物には寺院に直接関連するものはみられない。なお、約 100 m 北側の 2・3 区では近世初期の役所的な施設とみられる建物群が確認されており、これとの関連も考慮しておく必要があるかもしれない。

6B 区の遺構（図 83・84）

6B 区では、6 基の掘立柱建物や柵列を想定している（図 84）。調査区北部の SB6003、中央部の SB6004・6005、南部の SB6006 については、確定はできないものの、掘立柱建物や柵列が推定できる柱穴の分布状況である。建物の主軸方向は N15° E 前後である。SB6003 の PA-PF 間は、検出時に溝状に検出されているが（写真図版 22）、本来布掘り状の掘方であったかどうかは確実ではない。柱穴の中には、沈下防止のためと思われる敷石をもつものがあり、調査区南東端の SA6008 の柱穴はその典型例である。遺物は、柱穴などから土師器杯・小皿、瓦質土器茶釜・鍋・擂鉢・鉢、白磁碗・瓶、竜泉窯系青磁碗・皿、滑石製石鍋などが出土した。なお、図示していないが、SB6003-PC・PH、SB6004-PG から近世の肥前陶磁器が、SB6003-PH、B6006-PB から近代の遺物が出土しているが、混入かどうかは不明である。

6B 区出土遺物（図 89）

190～199 は掘立柱建物を構成すると考えた柱穴から、200～213 はそれ以外の小穴などから出土した。出土位置については、表を参照されたい。

190 は底部糸切の土師器小皿である。191 は底部糸切とみられる土師器杯、192 は底部糸切の土師器小皿である。193 は土師器鍋、194 は瓦質土器鍋で、口縁内面に明瞭な稜をもつ。195 は竜泉窯系青磁碗で、内面を区画する

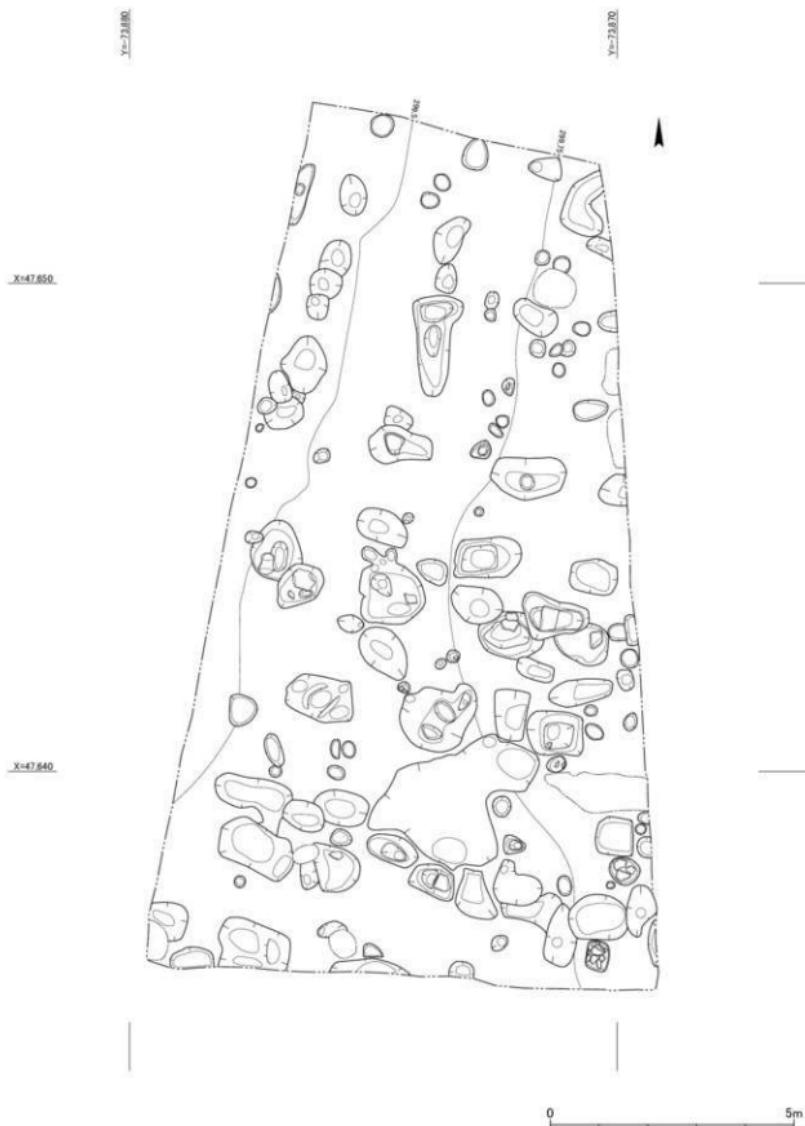


図 83 6B 区の造構分布 (1/100)

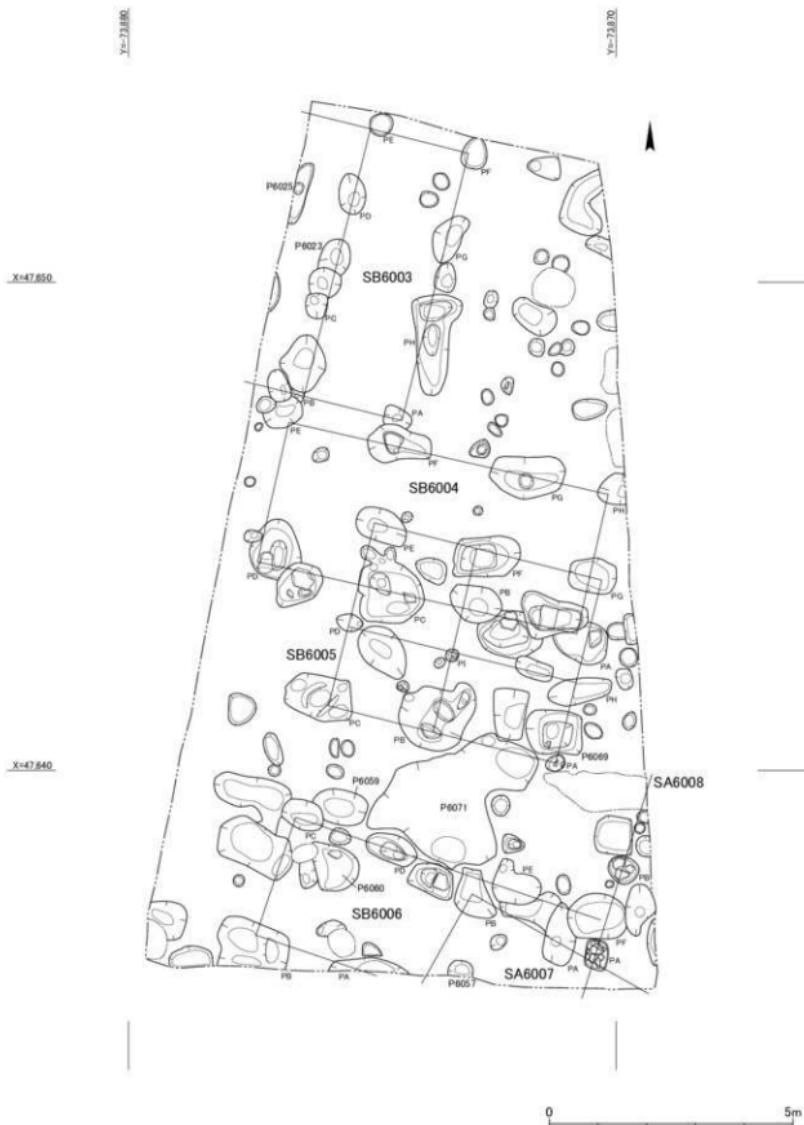


図 84 6B 区の造構分布 (1/100)

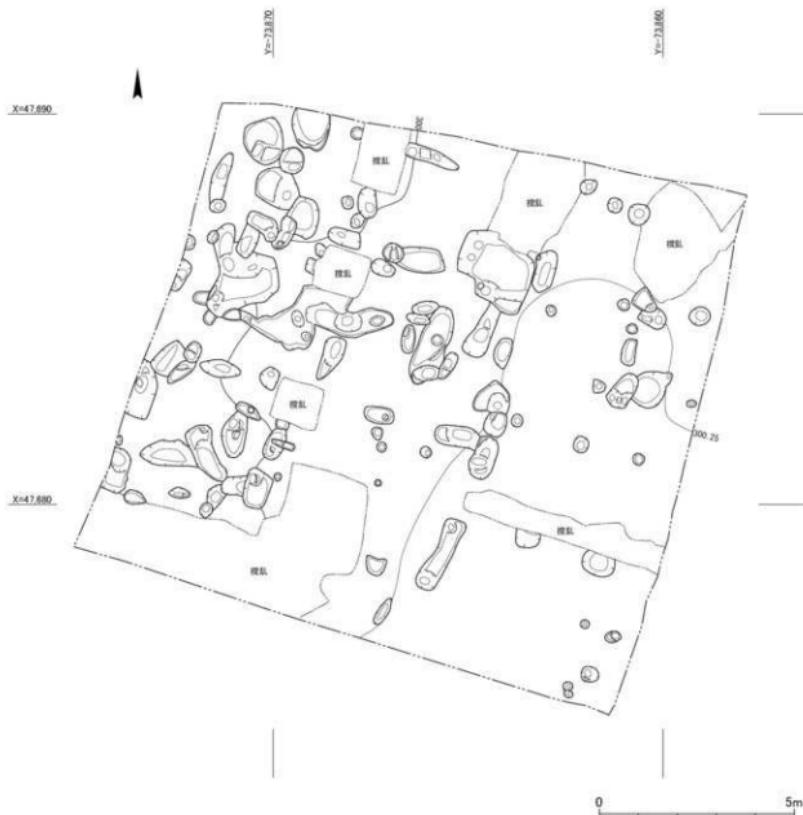


図 85 6C 区の遺構分布 (1/125)

I 4 類である。196 は土師器杯、197 は底部糸切の土師器杯で、内底ナデが施される。198・199 は竜泉窯系青磁碗で、198 は無文の I 類の可能性がある。199 は蓮弁を片切形で表現する上田 B II 類で、全面施釉の後、内面見込みと高台置付の軸を剥いでいる。

200 は底部糸切の土師器小皿、201 は底部糸切の土師器杯で、内底ナデが施される。202 は底部糸切の土師器小皿、203～205 は底部糸切の土師器杯である。203 は外面に煤が付着している。土師器杯・小皿は 200・201 が 13 世紀代、202～205 は中世後期の資料とみられる。206 は底部糸切の土師器小皿で、近世に降る資料である。207 は白磁碗、208 は白磁瓶である。209・210 は竜泉窯系青磁碗で、209 が無模蓮弁文を施す II a 類、210 が口縁外面に雷文帯をもつ上田 C 類である。211 は竜泉窯系青磁皿で、全面施釉の後、内面見込みと高台内を軸剥ぎしている。212 は滑石製石鍋で、口縁外面に高さが低い鈎が巡る。213 は滑石製品で、円盤形の中央に孔を穿つ。



図 86 6C 区の遺構分布 (1/125)

6C 区の遺構 (図 85・86)

6C 区では、掘立柱建物 1 棟、柵列 2 条を想定している (図 86)。SB6009 は主軸を N70° W にとる掘立柱建物の一部とみられ、主軸を N21° E にとる SA6010 とほぼ方位を同じくするため、有機的に関連する掘立柱建物と柵列だと考えられる。遺物は、柱穴などから土師器杯・小皿、瓦質土器鍋、白磁碗・皿か杯、竜泉窯系青磁碗・皿、朝鮮半島産陶器などが出土した。

6C 区出土遺物 (図 89)

214～217 は掘立柱建物を構成すると考えた柱穴から、218～224 はそれ以外の小穴などから出土した。出土位置については、表を参照されたい。

214・215 は底部糸切の土師器小皿である。216 は白磁森田 D 群の皿か杯である。217 は中国産と思われる白磁碗で、白化粧土を施している。

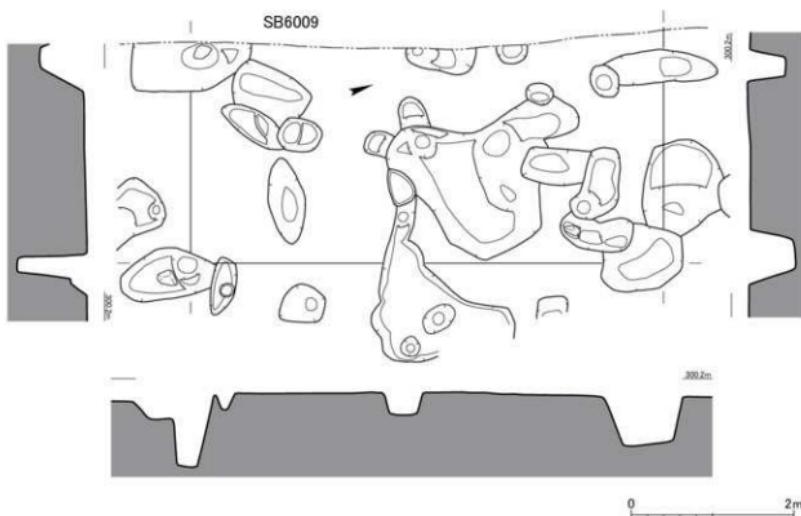


図 87 6C 区中世の掘立柱建物 (1/60)

218は底部糸切と思われる土師器小皿、219は底部糸切の土師器杯である。220・221は竜泉窯系青磁碗で、220が内面を区画する14類、221が内湾する口縁部の上田E類である。222は竜泉窯系青磁皿、223は朝鮮王朝前期の灰青陶器皿である。224は宋銭の紹聖元寶である。

4) その他中世の遺構と遺物

ここでは、出土遺物から中世の可能性がある土坑1基と、1・5E・6B・6C区以外から出土した中世の遺物について報告する。

SX5012 (図 75)

5B区北部に位置し、長軸3.88m、短軸2.60m、深さ0.60mで、平面は不整椭円形である。遺物は土師器杯・小皿(糸切)、白磁皿IV類、同安窯系青磁碗、竜泉窯系青磁碗などが出土したが、小片であり図示していない。出土遺物は小片であり、近世前期のSB5013に隣接するため、近世に降る遺構かもしれない。西側に位置するSX5014も同規模の土坑であり、同じ性格のものであろう。

その他中世の遺物(図 90・91)

225～259は5B区から出土した。5B区では近世前期の掘立柱建物が確認され、遺構検出面も近世と考えられるが、検出面直上の5a層(図92)から比較的まとまって中世前期の遺物が出土している。このような状況から、5B区東側に中世前期の集落などが展開していた可能性が高い。出土位置については、表を参照されたい。

225～232は5B区小穴から出土した。225・226は底部糸切の土師器小皿で、226は内底ナデが施される。227は瓦器碗である。228は白磁碗IV類、229は白磁皿である。230は同安窯系青磁、231は竜泉窯系青磁で、

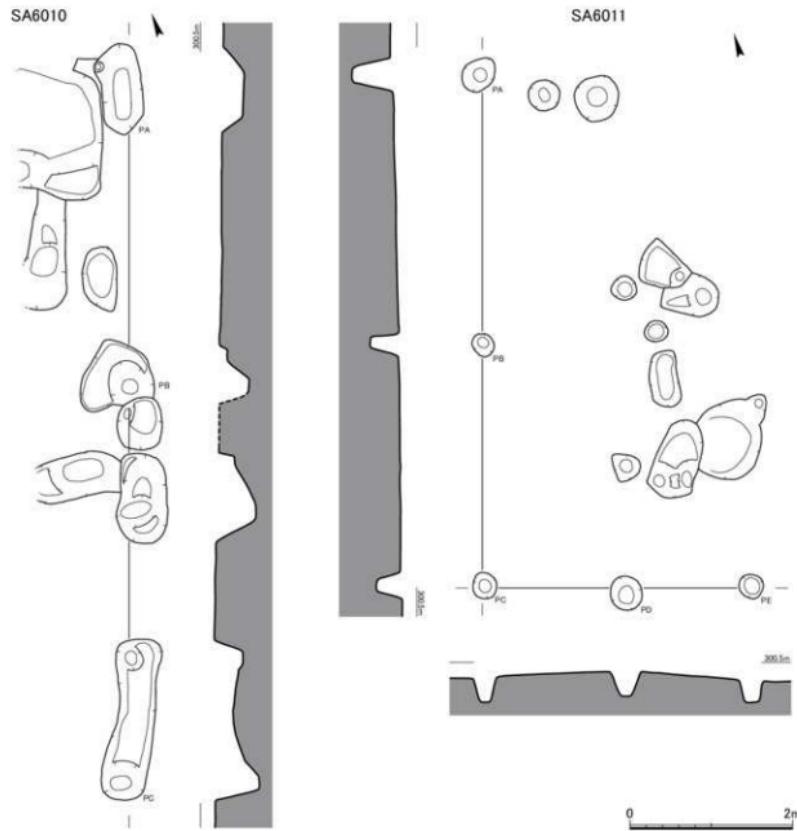


図 88 6C 区中世の壙例 (1/60)

内面を区画する I 4 類である。232 は滑石製石鍋の再加工未製品で、鍔の部分とその下方の割れ口にケズリがみられる。

233～259 は 5a 層など後世の堆積層から出土した。233～237 は底部糸切の土師器小皿で、233～235 は内底ナデが施される。238～241 は底部糸切の土師器杯で、239～241 は内底ナデが施される。土師器杯・小皿は 236～238 が中世後期で、その他は 13 世紀代とみられる。242～244 は瓦器碗である。

245～252 は白磁碗で、245～248 が IV 類、250 が V 類、251・252 が VI 類である。253 は同安窯系青磁皿で、内底にヘラによる文様と櫛点描文を施している。254～258 は竜泉窯系青磁碗で、254 が内面に片彫蓮花文を施す I 2 類、255・256 が内面を区画する I 4 類、257 が鍋蓮弁文の II b 類である。258 は高台置付から高台内は露胎である。259 は中国産の陶器耳壺で、暗緑色の釉が掛かる。

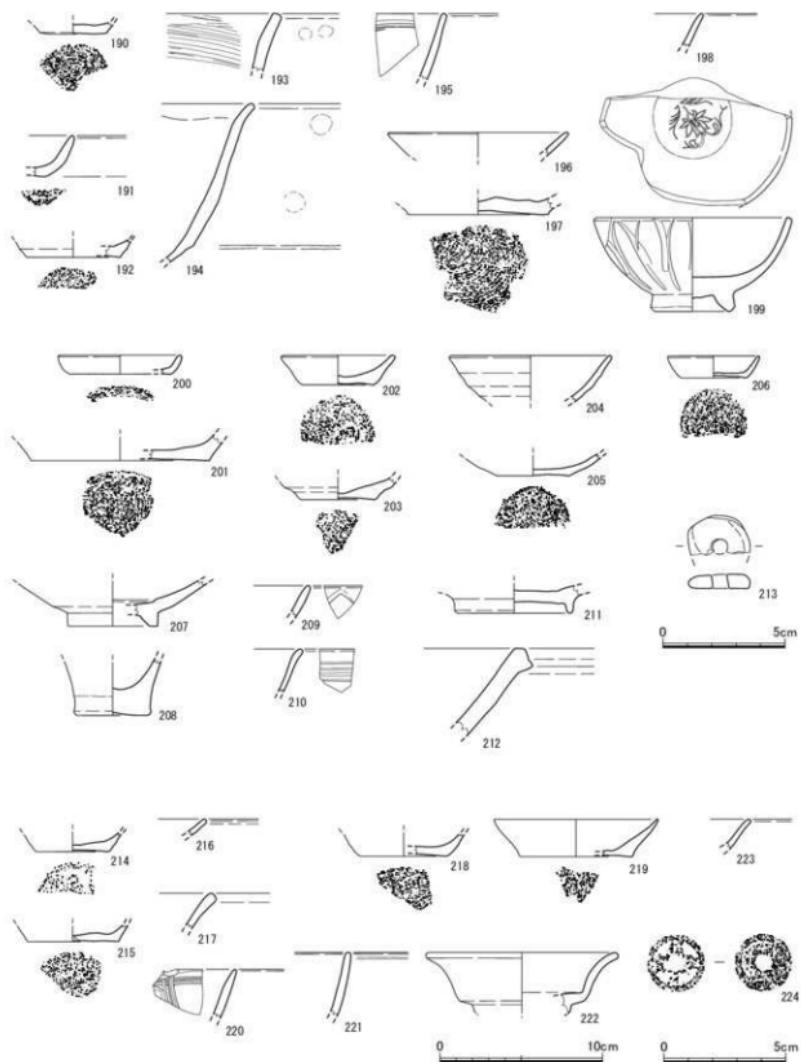


図89 6B・C区の出土遺物 (224は1/2、他は1/3)

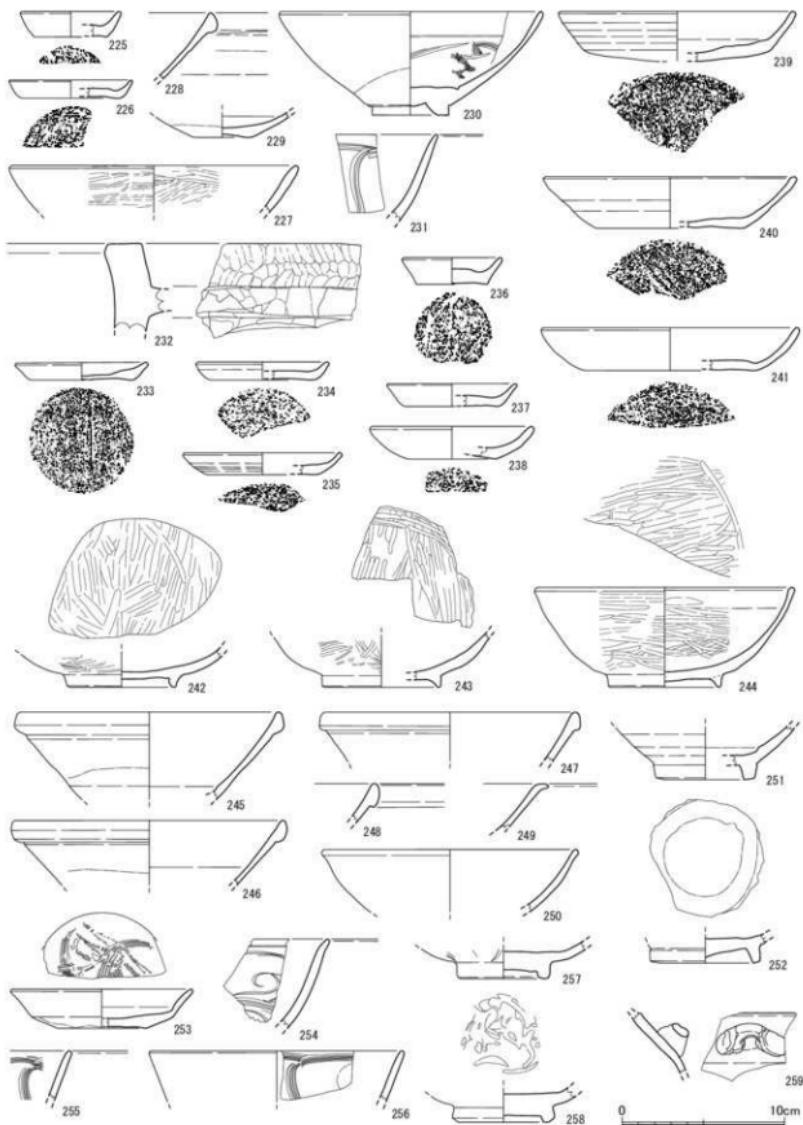


図 90 5B 区中世の出土遺物 (1/3)

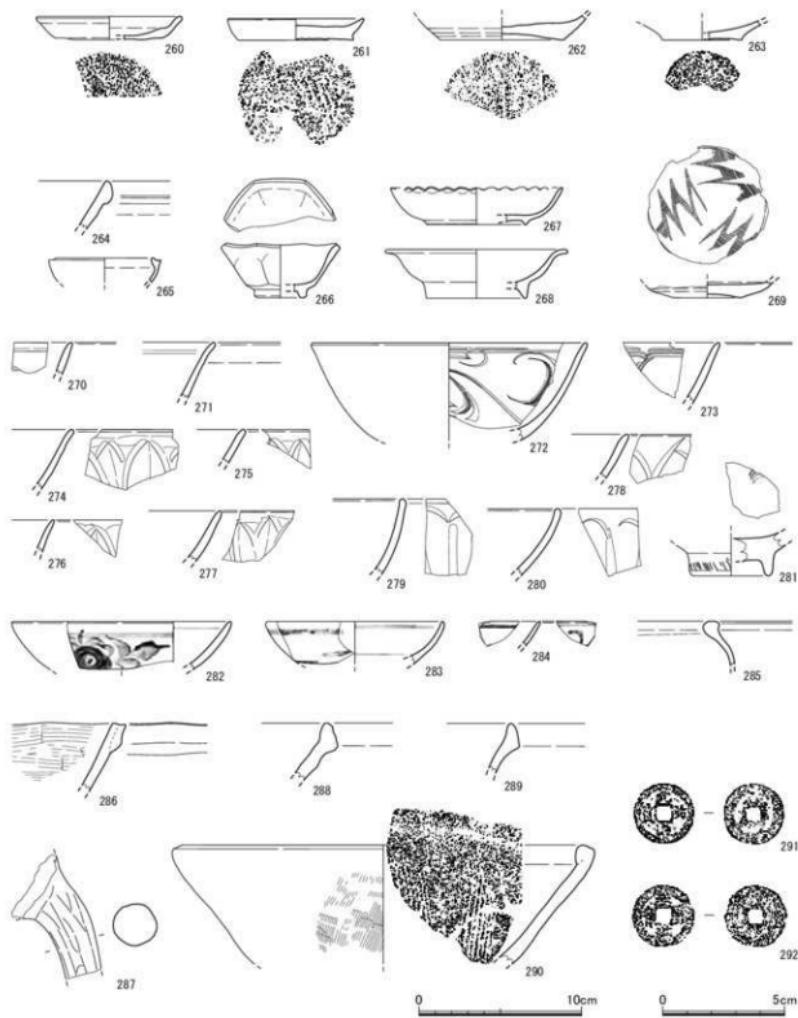


図91 中世の出土遺物 (291・292は1/2、他は1/3)

260～290は4・6A・8区などから出土した中世の遺物である。出土位置については、表を参照されたい。

260・261は底部糸切の土師器小皿で、内底ナデが施される。262・263は底部糸切の土師器杯で、262は内底ナデが施される。

264は白磁碗IV類、265は白磁もしくは青白磁の合子身である。266は白磁森田D群の八角杯である。267は景徳鎮窯系白磁皿、268は白磁森田E群の皿である。269は同安窯系青磁皿である。270～281は竜泉窯系青磁碗である。270・271は無文のI 1類、272は内面に片彫蓮花文を施すI 2類、273は内面を区画するI 4類、274は錦蓮弁文のII bc類、275～277は幅の細い錦蓮弁文のIII 2類、278は幅の広い蓮弁を片切形で表現する上田B II類、279・280は片切彫や丸彫で蓮弁を表現する上田B III類である。281は高台内が無釉である。282～284は福建系の青花皿である。285は陶器盤で、内面に黄釉が施される。

286は玉縁状口線の土師器銅III a類の系統と思われるが、瓦質焼成である。287は防長系の瓦質土器足鍋の脚部である。288・289は東播諸窯とみられる須恵器系陶器捏鉢である。290は防長系の瓦質土器捏鉢で、内面に磨滅痕がみられ、口縁外面に煤が付着している。

291・292は宋錢で、291が元祐通寶で、292が元豐通寶かと思われる。

表6 大野遺跡中世の出土遺物

図版・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図70-18 97002477	1B区 SD1835	土師器 小皿	9.6*	7.8*	1.2	にふい黄釉	底部糸切 板切直底?	写真図版 24-18 20112186
図70-19 97002472	1B区 SD1835	土師器 小皿	9.6*	7.2*	1.4	外:浅黄釉 内:にふい相	底部糸切	写真図版 24-19 20112187
図70-20 97002479	1B区 SD1835	土師器 杯	13.0*	10.4*	2.7	にふい黄釉	底部糸切	写真図版 24-20 20112187
図70-21 97002473	1B区 SD1835	瓦器 碗	-	-	-	浅黄		写真図版 24-21 20112182
図70-22 97002476	1B区 SD1835	青磁 皿	-	-	-	胎土:灰白	同安窯系	写真図版 24-22 20112185
図70-23 97002470	1B区 SD1835	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗 I 1類	写真図版 24-23 20112210
図70-24 97002481	1B区 SD1835	青磁 碗	-	5.8*	-	胎土:灰白	竜泉窯系	写真図版 24-24 20112212
図70-25 97002482	1B区 SD1835	青磁 碗	16.2*	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗 I 2類	写真図版 24-25 20112213
図70-26 97002471	1B区 SD1835	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗 I 4類	写真図版 24-26 20112211
図70-27 97002484	1B区 SD1835	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗 I 4類	写真図版 24-27 20112189
図70-28 11001800	1B区 SD1835	陶器 鉢	-	10.1*	-	胎土:にふい相	中国 12～14c 初輪	写真図版 24-28 20112397・2398
図70-29 97002474	1B区 SD1835	土師器 鍋	-	-	-	にふい相	鏡II c類	写真図版 24-29 20112183
図70-30 97002475	1B区 SD1835	須恵器系陶器 捏鉢	-	-	-	灰白	東播諸窯系	写真図版 24-30 20112184
図70-31 97002469	1B区 SD1835	須恵器系陶器 捏鉢	29.2*	-	-	灰	東播諸窯系	写真図版 24-31 20112151
図70-32 97002456	1B区 SD1851	土師器 小皿	8.0*	6.4*	1.4	相	底部糸切	写真図版 24-32 20112170
図70-33 97002457	1B区 SD1851	土師器 小皿	9.2*	7.6*	0.8	浅黄釉	底部糸切	写真図版 24-33 20112171
図70-34 97002464	1B区 SD1851	土師器 小皿	9.0*	7.3*	1.1	外:浅赤相 内:浅黄釉	底部糸切	写真図版 24-34 20112178
図70-35 97001424	1B区 SD1851	土師器 杯	-	11.0*	-	浅黄釉	底部糸切 板切直底	写真図版 24-35 20112205
図70-36 97002453	1B区 SD1851	白磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	鏡IV類	写真図版 24-36 20112167
図70-37 97002461	1B区 SD1851	青磁 碗	-	5.0	-	胎土:灰白	同安窯系 高台内に墨書	写真図版 24-37 20112220

表6 大野遺跡中世の出土遺物

特岡・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図70-38 97002459	1B区 SD1851	青磁 碗	10.4*	5.0*	2.3	胎土：灰白	同安窯系	写真図版 24-38 20112173
図70-39 97002463	1B区 SD1851	青磁 碗	-	4.7	-	胎土：灰白	同安窯系	写真図版 24-39 20112176 + 2177
図70-40 97002452	1B区 SD1851	青磁 碗	16.4*	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢I 1類	写真図版 25-40 20112207
図70-41 97002451	1B区 SD1851	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢I 2類	写真図版 25-41 20112166
図70-42 97002458	1B区 SD1851	青磁 碗	17.6*	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢I 4b類	写真図版 25-42 20112172
図70-43 97002460	1B区 SD1851	青磁 碗	16.2*	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢I 4類	写真図版 25-43 20112174
図70-44 97001425	1B区 SD1851	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢II bc類	写真図版 25-44 20112206
図70-45 97002462	1B区 SD1851	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢上田B II類	写真図版 25-45 20112175
図70-46 97002454	1B区 SD1851	陶器 盤口鉢	-	-	-	胎土：灰褐色	中国 12 ~ 14c 力 複輪	写真図版 25-46 20112168
図70-47 97002468	1区 SD1851	陶器 耳壺	-	-	-	胎土：灰白	中国	写真図版 25-47 20112180
図70-48 97002455	1B区 SD1851	須恵器系陶器 控鉢	-	-	-	灰・灰白	東播諸窯系	写真図版 25-48 20112169
図70-49 97002466	1B区 SD1851	滑石製品 石器	-	-	-	-	外面焼付着	写真図版 25-49 20112179
図70-50 97002467	1B区 SD1851	滑石製品	長 11.0	幅 6.6	厚 2.9	-	石器再加工未製品 煙付着	写真図版 25-50 20112208 + 2209
図71-51 97001354	1B区 包含層F	土師器 小皿	8.6*	7.3*	1.1	にぶい黄緑	底部糸切	写真図版 25-51 20112129
図71-52 97001367	1B区 包含層F	土師器 小皿	8.8*	6.7	1.2	にぶい黄緑	底部糸切 板状圧痕?	写真図版 25-52 20112146
図71-53 97001359	1B区 包含層F	土師器 杯	14.4*	8.4*	2.9	浅黄緑	底部糸切 板状圧痕	写真図版 25-53 20112144
図71-54 97001347	1B区 包含層F	瓦器 碗	16.6*	-	-	灰白		写真図版 25-54 20112125
図71-55 97001365	1B区 包含層F	白磁 皿	9.0*	5.5*	1.6	胎土：灰白	皿X類	写真図版 25-55 20112132
図71-56 97001344	1B区 包含層F	白磁 小皿	11.0*	-	-	胎土：灰白		写真図版 25-56 20112124
図71-57 97001353	1B区 包含層F	白磁 皿	-	-	-	胎土：灰白	皿Y類	写真図版 25-57 20112128
図71-58 97001345	1B区 包含層F	白磁 碗	-	6.2	-	胎土：灰白		写真図版 25-58 20112138
図71-59 97001352	1B区 包含層F	青磁 皿	10.4*	4.5*	2.2	胎土：灰白	同安窯系	写真図版 25-59 20112127
図71-60 97002497	1B区 包含層F	青磁 碗	17.6*	6.2	7.6	胎土：淡黄	同安窯系 高台内に墨書き	写真図版 25-60 20112214 + 2226
図71-61 97001348	1B区 包含層F	青磁 碗	16.7*	6.5*	6.9	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢I 4類	写真図版 25-61 20112224
図71-62 97001358	1B区 包含層F	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢II a類	写真図版 25-62 20112143
図71-63 97001357	1B区 包含層F	青磁 碗	16.4*	5.3*	6.6	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢II b類	写真図版 25-63 20112142
図71-64 97001364	1B区 包含層F	陶器 耳壺	-	-	-	胎土：にぶい黄	中国	写真図版 25-64 20112145
図71-65 97001349	1B区 包含層F	陶器 壺	-	8.3*	-	胎土：灰白	中国	写真図版 25-65 20112225
図71-66 97001350	1B区 包含層F	須恵器系陶器 壺	-	-	-	黄灰	桜瀬城・龜山窯系	写真図版 25-66 20112126
図71-67 97001351	1B区 包含層F	須恵器系陶器 壺	-	-	-	黄灰	桜瀬城・龜山窯系	写真図版 25-67 20112140
図71-68 97001361	1B区 包含層F	須恵器系陶器 控鉢	-	10.4*	-	外：灰白 内：灰	東播諸窯系 底部糸切	写真図版 26-68 20112130
図71-69 97001346	1B区 包含層F	須恵器系陶器 控鉢	-	-	-	灰白	東播諸窯系 底部糸切	写真図版 26-69 20112139

表6 大野遺跡中世の出土遺物

特岡・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図71-70 97001355	1B区 包合層F	土師器 鍋	-	-	-	に赤・黄褐	縁Ⅱb類 外面焼付着	写真図版 26-70 20112141
図71-71 97001369	1B区 包合層F	滑石製品 石鍋	-	-	-	-	外面焼付着	写真図版 26-71 20112147
図71-72 97001368	1B区 包合層F	滑石製品 石鍋	28.6*	22.8*	11.1	-	外面焼付着	写真図版 26-72 20112117
図71-73 97001363	1B区 包合層F	陶器 擂鉢	17.8*	-	-	胎土:灰褐色	肥前 1580～1610年代 タタ牛成形	写真図版 26-73 20112131
図72-74 97001372	1B区 包合層F	土製品 輪羽口	長 5.7+	幅 5.1	厚 1.9	外:灰・灰オリーブ 内:棕		写真図版 26-74 20112134・2135
図72-75 97001371	1B区 包合層F	滑石製品 バレン腔	長 6.7	幅 5.1	厚 1.9	-		写真図版 26-75 20112133
図72-76 97001373	1B区 包合層F	滑石製品	長 6.1	幅 2.4	-	-		写真図版 26-76 20112136
図76-77 97001402	1B区 SA1859 PK	土師器 杯	-	-	2.5	棕	底部系切	写真図版 26-77 20112160
図76-78 97001287	1A区 SK1014	白磁 合子カ小壺	-	3.4*	-	胎土:灰白		写真図版 26-78 20112059・2060
図76-79 97001276	1A区 SK1016	土師器 小皿	9.2*	7.0*	1.5	浅黄褐	底部系切	写真図版 26-79 20112228
図76-80 97001274	1A区 SK1016	青磁 皿	11.2*	-	-	胎土:灰白	同安窯系	写真図版 26-80 20112054
図76-81 97001282	1A区 SK1016	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰	竜泉窯系 瓢上田B IV類	写真図版 26-81 20112056
図76-82 97001273	1A区 SK1016	青磁 碗	-	6.2*	-	胎土:灰白	竜泉窯系	写真図版 26-82 20112052・2053
図76-83 97001278	1A区 SK1016	瓦質土器 擂鉢	-	-	-	灰白		写真図版 26-83 20112101
図76-84 97001277	1A区 SK1016	陶器 擂鉢	-	16.6*	-	胎土:浅黄褐	備前窯	写真図版 26-84 20112114
図76-85 97001279	1A区 SK1016	瓦質土器 火鉢	-	-	-	に赤・黄褐		写真図版 26-85 20112055
図76-86 97001271	1A区 SK1016	瓦質土器 茶釜	-	-	-	に赤・棕		写真図版 26-86 20112009
図76-87 97001272	1A区 SK1016	瓦質土器 茶釜	14.8*	-	-	に赤・黄褐	外面焼付着	写真図版 26-87 20112100
図76-88 97001267	1A区 SK1016	瓦質土器 鍋	-	-	-	棕		写真図版 26-88 20112096
図76-89 97001264	1A区 SK1016	瓦質土器 鍋	-	-	-	に赤・棕	外面焼付着	写真図版 26-89 20112094
図76-90 97001263	1A区 SK1016	瓦質土器 鍋	-	-	-	灰黄褐	外面焼付着	写真図版 26-90 20112093
図76-91 97001265	1A区 SK1016	瓦質土器 鍋	-	-	-	灰黄褐	外面焼付着	写真図版 26-91 20112095
図76-92 97001261	1A区 SK1016	瓦質土器 鍋	-	-	-	黄灰	外面焼付着	写真図版 26-92 20112112
図76-93 97001269	1A区 SK1016	瓦質土器 鍋	-	-	-	に赤・棕	外面焼付着	写真図版 26-93 20112098
図76-94 97001268	1A区 SK1016	瓦質土器 鍋	-	-	-	に赤・棕	外面焼付着	写真図版 26-94 20112097
図76-95 97001262	1A区 SK1016	瓦質土器 鍋	-	-	-	灰黄	外面焼付着	写真図版 26-95 20112113
図76-96 97001292	1A区 SK1018	青磁 皿	-	-	-	胎土:灰白	同安窯系	写真図版 26-96 20112063
図76-97 97001293	1A区 SK1018	陶器 皿	-	-	-	胎土:灰白	朝鮮王朝期 灰青陶器	写真図版 26-97 20112064
図76-98 97001294	1A区 SK1018	土師器 鍋	-	-	-	に赤・黄褐	縁Ⅱb類 外面焼付着	写真図版 26-98 20112065
図76-99 97001291	1A区 SK1019	土師器 小皿	8.5*	6.5*	1.1	浅黄褐	底部系切 板状注痕	写真図版 26-99 20112062
図76-100 97001283	1A区 SK1022	青磁 碗	16.6*	-	-	胎土:灰	竜泉窯系 瓢Ⅱa類	写真図版 26-100 20112057
図76-101 97001284	1A区 SK1022	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 瓢Ⅱbc類	写真図版 26-101 20112058

表6 大野遺跡中世の出土遺物

桝岡・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図76-102 97001289	1B区 SK1242	土師器 杯	-	8.4*	-	に赤・黄褐	底部系切 板状圧痕?	写真図版 26-102 20112061
図76-103 97001295	1B区 SK1727	土師器 鉢	-	-	-	に赤・黄褐		写真図版 26-103 20112066
図76-104 97001296	1B区 SK1727	瓦質土器 茶釜	-	-	-	外: 黒褐 内: 鮎灰	外面焼付着	写真図版 26-104 20112102
図77-105 97001335	1A区 SD1862	土師器 杯	12.4*	-	-	灰白		写真図版 27-105 20112108
図77-106 97001342	1A区 SD1862	土師器 杯	-	4.1*	-	灰白	底部系切	写真図版 27-106 20112077
図77-107 97001322	1A区 SD1862	土師器 杯	-	4.0	-	灰白	底部系切 内底螺旋状沈線	写真図版 27-107 20112069
図77-108 97001339	1A区 SD1862	青磁 碗	-	-	-	胎土: 灰白	竜泉窯系 碗上田B IV類	写真図版 27-108 20112075
図77-109 97001319	1A区 SD1862	青磁 碗	-	5.4	-	胎土: 灰白	竜泉窯系	写真図版 27-109 20112104・2218
図77-110 97001336	1A区 SD1862	青磁 盤	-	-	-	胎土: に赤・褐	竜泉窯系	写真図版 27-110 20112074
図77-111 97001320	1A区 SD1862	陶器 壺	-	-	-	胎土: 灰赤	朝鮮か中国 明代	写真図版 27-111 20112067
図77-112 97001332	1A区 SD1862	陶器 皿	-	3.9	-	胎土: 灰白	朝鮮王朝期 灰青陶器	写真図版 27-112 20112071・2072
図77-113 97001330	1A区 SD1862	須恵器系陶器 涅鉢	-	-	-	灰白	東播諸窯系	写真図版 27-113 20112070
図77-114 97001318	1A区 SD1862	陶器 涅鉢	-	-	-	胎土: 灰	備前窯	写真図版 27-114 20112103
図77-115 97001341	1A区 SD1862	土師器 鍋	-	-	-	に赤・褐	鍋目 a類 外面焼付着	写真図版 27-115 20112076
図77-116 97001343	1A区 SD1862	瓦質土器 鍋	-	-	-	に赤・黄褐	外面焼付着	写真図版 27-116 20112110
図77-117 97001329	1A区 SD1862	瓦質土器 鍋	-	-	-	に赤・褐	外面焼付着	写真図版 27-117 20112107
図77-118 97001328	1A区 SD1862	瓦質土器 鍋	-	-	-	灰褐	外面焼付着	写真図版 27-118 20112106
図77-119 97001325	1A区 SD1862	瓦質土器 火鉢	-	-	-	褐灰		写真図版 27-119 20112105
図77-120 97001334	1A区 SD1862	瓦質土器 火鉢	-	-	-	に赤・褐		写真図版 27-120 20112116
図77-121 97001324	1A区 SD1862	瓦質土器 茶釜	13.7*	-	-	に赤・黄褐		写真図版 27-121 20112115
図77-122 97001321	1A区 SD1862	陶器 皿	-	-	-	胎土: 灰白	肥前 1580~1610年代	写真図版 27-122 20112068
図77-123 97001376	1A区 SD1863	土師器 杯	-	3.3	-	灰白	底部系切 内底螺旋状沈線	写真図版 27-123 20112137
図77-124 97001377	1A区 SD1863	青磁 皿	-	5.8*	-	胎土: 灰白	竜泉窯系	写真図版 27-124 20112249
図77-125 11001799	1A区 SD1863	陶器 盤	-	-	-	胎土: 灰黄褐	中国 12~14c	写真図版 27-125 20112433
図77-126 97001374	1A区 SD1863	瓦質土器 插鉢	32.0*	-	-	に赤・褐	外面焼付着	写真図版 27-126 20112149
図77-127 97001375	1A区 SD1863	瓦質土器 鍋	41.0*	-	-	灰黄褐	外面焼付着	写真図版 27-127 20112150
図77-128 97001379	1区 包合層	陶器 插鉢	-	-	-	胎土: 灰	備前窯	写真図版 27-128 20112148
図78-129 11001798	1A区 P1378	土師器 杯	8.3	6.7	1.1	に赤・褐	底部系切	写真図版 27-129 20112445
図78-130 97001388	1A区 SX1007	土師器 杯	11.4*	7.0*	2.8	に赤・黄褐	底部系切	写真図版 27-130 20112109
図78-131 97001250	1A区 P1010	土師器 杯	7.2	3.5	2.0	浅黄・灰	底部系切	写真図版 27-131 20112221
図78-132 97001247	1A区 P1634	瓦器 小皿	10.0*	7.0*	1.4	外: 灰白 内: 灰	ハラ切り 板状圧痕	写真図版 27-132 20112083・2086
図78-133 97001238	1A区 P1156	瓦器 小皿	10.7*	8.0*	1.4	外: 灰白 内: 灰	ハラ切り 板状圧痕	写真図版 27-133 20112046・2047

表6 大野遺跡中世の出土遺物

特記・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図78-134 97001237	1A区 P1259	瓦器 碗	-	8.3*	-	灰白	質付に板状圧痕	写真図版 27-134 20112045
図78-135 97001226	1A区 P1020	白磁 皿	9.9*	3.6*	2.6	胎土：灰白	皿壁1枚	写真図版 27-135 20112215
図78-136 97001415	1B区 SD1246	白磁 皿	10.4*	4.1*	2.3	胎土：灰白	皿壁1枚 内底に付着物	写真図版 27-136 20112164
図78-137 97001227	1A区 P1020	白磁 皿	8.9*	5.6*	1.9	胎土：灰白	皿底鉢 壁？付着	写真図版 27-137 20112227
図78-138 97002488	1A区 SD1013	白磁 皿	-	4.6*	-	胎土：灰白	森田D群	写真図版 27-138 20112191・2192
図78-139 97001228	1A区 P1002	青磁 皿	9.8*	4.5*	2.1	胎土：灰白	同安窯系	写真図版 28-139 20112042
図78-140 97001232	1B区 P1801	青磁 皿	10.6*	4.8*	2.0	胎土：灰白	同安窯系	写真図版 28-140 20112080
図78-141 97001230	1B区 P1794	青磁 碗	16.0*	6.0*	7.6	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢I 2b類	写真図版 28-141 20112222
図78-142 97001414	1B区 SD1246	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢II bc類	写真図版 28-142 20112163
図78-143 97001413	1B区 SD1246	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢II bc類	写真図版 28-143 20112202
図78-144 97001390	1B区 SX1245	青磁 碗	16.6*	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢III類	写真図版 28-144 20112199
図78-145 97001419	1A区 SD1196	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 上田B II類	写真図版 28-145 20112165
図78-146 97002480	1A区 SD1157	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 上田C類	写真図版 28-146 20112168
図78-147 97001385	1A区 SX1007	青磁 碗？	-	-	-	胎土：浅黄褐	竜泉窯系 瓢上田D類	写真図版 28-147 20112152
図78-148 97001386	1A区 SX1007	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢上田D類	写真図版 28-148 20112153
図78-149 97001387	1A区 SX1007	青磁 碗	-	5.4*	-	胎土：灰白	竜泉窯系	写真図版 28-149 20112198
図78-150 97002487	1A区 SD1013	青磁 皿	12.4*	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系	写真図版 28-150 20112190
図78-151 97001241	1A区 P1658	粗釉陶器 小豆(茶人)	-	-	-	胎土：褐灰	中国 14・15c	写真図版 28-151 20112048・2049
図78-152 97001234	1A区 P1387	黑釉器 碗	11.6*	-	-	胎土：浅黄	中国 天目形	写真図版 28-152 20112083
図78-153 97001231	1B区 P1794	陶器 壺	-	8.1	-	胎土：に赤い褐	中国	写真図版 28-153 20112078・2079
図78-154 97001233	1A区 P1386	白磁 皿	11.8*	-	-	胎土：灰白	朝鮮平島 SB1854 出土破片と接合	写真図版 28-154 20112081・2082
図78-155 97001251	1A区 P1471	粉青沙器 碗	13.4*	-	-	胎土：灰白	朝鮮王朝期 刷毛粉青	写真図版 28-155 20112050・2051
図78-156 97001235	1A区 P1279	陶器 皿	19.3*	-	-	胎土：灰白	瀬戸・美濃系	写真図版 28-156 20112043
図78-157 97001236	1A区 P1631	須志器系陶器 絹跡	-	-	-	灰	東播諸窯系	写真図版 28-157 20112044
図78-158 97001380	1A区 P1008	陶器 插跡	28.0*	15.5*	9.7	胎土：灰褐色	備前窯	写真図版 28-158 20112118
図79-159 97002494	1A区 SD1250	土師器 鍋	-	-	-	灰黄褐	鍋II a類	写真図版 28-159 20112194
図79-160 97001240	1A区 P1273	土師器 鍋	40.2*	-	-	外：褐灰 内：に赤い褐	鍋II b類 外面保付着	写真図版 28-160 20112111
図79-161 97001411	1B区 SD1246	土師器 鍋	-	-	-	に赤い褐	鍋II b類	写真図版 28-161 20112161
図79-162 97002492	1A区 SD1013	土師器 鍋	-	-	-	に赤い褐	鍋III a類 外面保付着	写真図版 28-162 20112193
図79-163 97001245	1A区 P1386	瓦質土器 罐	-	-	-	淡黄・灰	外面保付着	写真図版 28-163 20112084
図79-164 97001412	1B区 SD1246	瓦質土器 足鍋	-	-	-	浅黄褐	防長系 外面保付着	写真図版 28-164 20112162
図79-165 97001254	1A区 P1646	滑石製品 石製	-	-	-	-	外面保付着	写真図版 28-165 20112087

表6 大野遺跡中世の出土遺物

特徴・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図79-166 97002496	IA区 SD1250	須恵器系陶器 甕	17.2*	-	-	灰	桜井城・地山窯系	写真図版 28-166 20112195
図79-167 97002499	IA区 P1023	銅製品 杓子状	3.5	高 1.3	長 5.5*	-	-	写真図版 28-167 20112196・2197
図79-168 97002500	IA区 P1025	銅貨 銅鏡	-	径 2.4	-	-	元元通寶 番号222 g	写真図版 28-168 20112493
図79-169 97001393	IA区 SX1007	石製品 石臼	径 15.8	-	13.3	-	-	写真図版 28-169 20112229
図79-170 97001252	IA区 P1685	石製品 石臼	径 17.3	-	10.9	-	黒色物付着	写真図版 28-170 20112230
図82-171 11001102	5E区 d層	青花 皿	-	-	-	胎土:灰白	崩落瓦窯系 小野B1群	写真図版 29-171 20112250・2251
図82-172 11001103	5E区 d層	土師器 小皿	6.4*	3.5	1.3	灰白	底部糸切	写真図版 29-172 20112295
図82-173 11001770	5E区 d層	陶器 皿	-	4.4*	-	胎土:灰白	肥前 17c末～18c前半	写真図版 29-173 20112422・2423
図82-174 11001769	5E区 d層	土師器 鍋	-	-	-	に赤い黄緑	硝田a類 外面焼付着	写真図版 29-174 20112358
図82-175 11001106	5E区 e層	須恵器系陶器 捏跡	-	-	-	褐色	東播諸窯系	写真図版 29-175 20112296
図82-176 11001605	5E区 8層	土師器 杯	13.3*	10.5*	2.7	外:灰黄褐 内:に赤い・暗・灰黄褐	底部糸切	写真図版 29-176 20112315
図82-177 11001603	5E区 8層	土師器 鍋	-	-	-	外:黒褐 内:灰黄褐・灰白	硝田a類 外面焼付着	写真図版 29-177 20112314
図82-178 11001604	5E区 8層	瓦質土器 茶釜	-	-	-	外:に赤い黄緑・に赤い・褐 内:に赤い黄緑	外面焼付着	写真図版 29-178 20112408
図82-179 11001608	5E区 9層	土師器 杯	-	9.3*	-	外:黒褐 内:に赤い・褐	底部糸切	写真図版 29-179 20112316
図82-180 11001607	5E区 9層	黒釉磁器 碗	-	5.6*	-	胎土:灰白	中国 天目形	写真図版 29-180 20112289
図82-181 11001606	5E区 9層	土師器 鍋	-	-	-	外:に赤い・黄緑・浅黄 内:に赤い・黄緑	硝田a類	写真図版 29-181 20112318
図82-182 11001609	5E区 9層	瓦質土器 鍋	-	-	-	外:灰褐 内:明褐・灰褐	外面焼付着	写真図版 29-182 20112317
図82-183 11001611	5E区 g1層	土師器 小皿	9.2	7.6	1.4	外:稍 内:稍・に赤い・褐	底部糸切 完形	写真図版 29-183 20112409・2410 ・2454
図82-184 11001610	5E区 g1層	土師器 小皿	9.0*	7.0*	12.5	浅黄	底部糸切 板沿直彎	写真図版 29-184 20112288
図82-185 11001612	5E区 g1層	土師器 杯	12.0*	7.2	3.7	外:に赤い・褐 内:灰褐・に赤い・褐	底部糸切	写真図版 29-185 20112319
図82-186 11001613	5E区 g1層	青磁 碗	15.8*	-	-	胎土:灰	竈泉窯系 滅Ⅲ類	写真図版 29-186 20112411
図82-187 11001615	5E区 g1層	瓦質土器 茶釜	-	-	-	外:灰黄褐・黒 内:褐灰	外面焼付着	写真図版 29-187 20112412
図82-188 11001614	5E区 g1層	瓦質土器 抹鉢	-	13.7*	-	灰	-	写真図版 29-188 20112478
図82-189 11001801	5E区 g1層	陶器 甕	-	-	-	胎土:に赤い・黄緑	常滑窯系	写真図版 29-189 20112442
図89-190 11001152	GB区 SB6003 PH	土師器 小皿	-	4.2*	-	に赤い・褐	底部糸切	写真図版 29-190 20112268
図89-191 11001119	GB区 SB6004 PG	土師器 杯	-	-	-	浅黄	底部糸切?	写真図版 29-191 20112255
図89-192 11001120	GB区 SB6004 PG	土師器 小皿	-	5.8*	-	褐	底部糸切	写真図版 29-192 20112256
図89-193 11001117	GB区 SB6004 PC	土師器 鍋	-	-	-	に赤い・褐	-	写真図版 29-193 20112297
図89-194 11001121	GB区 SB6004 PF	瓦質土器 鍋	-	-	-	外:褐灰・に赤い・黄緑 内:灰白・に赤い・黄緑	外面焼付着	写真図版 29-194 20112432
図89-195 11001122	GB区 SB6004 PB	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰	竈泉窯系 滅Ⅰ・Ⅳ類	写真図版 29-195 20112257
図89-196 11001151	GB区 SB6005 PH	土師器 杯	11.1*	-	-	外:灰黄 内:灰褐	-	写真図版 29-196 20112277

表6 大野遺跡中世の出土遺物

特徴・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図89-197 11001153	GB区 SBG005 PB	土師器 杯	-	8.7*	-	橙	底部系切	写真図版 29-197 20112304
図89-198 11001793	GB区 SBG005 PI	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰		写真図版 29-198 20112369
図89-199 11001154	GB区 SBG005 PE	青磁 碗	12.1*	5.2	5.8	胎土：灰白	竜泉窯系 14c末～15c中期	写真図版 29-199 20112303・2471
図89-200 11001156	GB区 P6057	土師器 小皿	7.6*	6.2*	1.1	にぶい黄橙	底部系切	写真図版 30-200 20112269
図89-201 11001160	GB区 P6059	土師器 杯	-	11.0*	-	橙	底部系切 板状圧痕	写真図版 30-201 20112271
図89-202 11001159	GB区 P6023	土師器 小皿	7.0*	4.4*	1.8	橙	底部系切	写真図版 30-202 20112306
図89-203 11001157	GB区 P6069	土師器 杯	-	4.5*	-	灰白	底部系切 外面保付着	写真図版 30-203 20112270
図89-204 11001155	GB区 P6069	土師器 杯	10.0*	-	-	橙		写真図版 30-204 20112305
図89-205 11001161	GB区 P6069	土師器 杯	-	4.5*	-	灰白	底部系切	写真図版 30-205 20112272
図89-206 11001158	GB区 P6069	土師器 小皿	5.6*	4.0*	1.3	橙	底部系切	写真図版 30-206 20112452
図89-207 11001149	GB区 焼出面	白磁 碗	-	5.5*	-	胎土：灰白	中国	写真図版 30-207 20112301
図89-208 11001164	GB区 P6071	白磁 瓶	-	4.7*	-	胎土：灰白	中国 明代	写真図版 30-208 20112453
図89-209 11001168	GB区 P6057	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰	竜泉窯系 碗 II a類	写真図版 30-209 20112276
図89-210 11001166	GB区 P6060	青磁 碗	-	-	-	胎土：オリーブ灰	竜泉窯系 碗上田 C類	写真図版 30-210 20112275
図89-211 11001165	GB区 P6025	青磁 皿	-	7.3*	-	胎土：オリーブ灰	竜泉窯系	写真図版 30-211 20112274
図89-212 11001150	GB区 焼出面	滑石製品 石鍋	-	-	-	-		写真図版 30-212 20112302
図89-213 11001795	GB区 表表	滑石製品 不明	-	径 2.7*	厚 0.6	-		写真図版 30-213 20112370
図89-214 11001129	6C区 SBG009 PE	土師器 小皿	-	4.5*	-	橙	底部系切	写真図版 30-214 20112258
図89-215 11001133	6C区 SBG009 PE	土師器 小皿	-	5.6*	-	橙	底部系切	写真図版 30-215 20112261
図89-216 11001791	6C区 SBG009 PE	白磁 盤	-	-	-	胎土：灰白	森田 D類	写真図版 30-216 20112367
図89-217 11001792	6C区 SBG010 PC	白磁 碗	-	-	-	胎土：灰黃	中国 元・明代か 白磁胎土を含す	写真図版 30-217 20112368
図89-218 11001130	6C区 P6102	土師器 小皿	-	5.2*	-	橙	底部系切?	写真図版 30-218 20112259
図89-219 11001131	6C区 P6102	土師器 杯	10.1*	6.8*	2.3	橙	底部系切	写真図版 30-219 20112260
図89-220 11001126	6C区 4 杯	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 碗 I類	写真図版 30-220 20112263
図89-221 11001124	6C区 P6072	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系 上田 E類	写真図版 30-221 20112262
図89-222 11001123	6C区 P6119	青磁 皿	11.8*	-	-	胎土：灰白	竜泉窯系	写真図版 30-222 20112298
図89-223 11001127	6C区 P6088	陶器 皿	-	-	-	胎土：灰白	朝鮮王朝期 灰青陶器	写真図版 30-223 20112264
図89-224 11001864	6C区 P6094	銭貨 銅錢	-	径 2.4	-	-	昭和元寶 量目 1.52 g	写真図版 30-224 20112487
図90-225 11001715	5B区 P5015	土師器 小皿	6.1*	4.5*	1.6	にぶい黄橙	底部系切	写真図版 30-225 20112346
図90-226 11001714	5B区 P5045	土師器 小皿	7.6*	6.0*	1.1	にぶい黄橙	底部系切 板状圧痕	写真図版 30-226 20112345
図90-227 11001713	5B区 P5040	瓦器 碗	17.8*	-	-	外：にぶい黄橙 内：浅黄		写真図版 30-227 20112380
図90-228 11001716	5B区 P5046	白磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	碗IV類	写真図版 30-228 20112347

表6 大野遺跡中世の出土遺物

特徴・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
図90-229 11001718	SB区 P5042	白磁 碗	-	3.8*	-	胎土:灰白	中国	写真図版 30-229 20112349・2350
図90-230 11001720	SB区 P5001	青磁 碗	16.2*	4.7	6.3	胎土:灰白	同安窯系	写真図版 30-230 20112472
図90-231 11001717	SB区 P5018	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 瓢 I 4類	写真図版 30-231 20112348
図90-232 11001589	SB区 P5043	滑石製品 石鍋	-	-	-	-	内加工未製品	写真図版 30-232 20112404・2405
図90-233 11001774	SB区 5a層	土師器 小皿	8.2	6.2	1.1	に赤い黄褐	底部糸切 板状圧痕	写真図版 30-233 20112444
図90-234 11001703	SB区 3tr8層	土師器 小皿	8.2*	6.2*	1.1	に赤い黄褐	底部糸切 板状圧痕	写真図版 30-234 20112341
図90-235 11001773	SB区 5a層	土師器 小皿	9.8*	7.0*	1.4	に赤い黄褐	底部糸切 板状圧痕	写真図版 30-235 20112361
図90-236 11001709	SB区 9tr2層	土師器 小皿	6.2*	4.3*	1.7	浅黄褐	底部糸切	写真図版 30-236 20112459
図90-237 11001708	SB区 9tr2層	土師器 小皿	8.0*	5.8*	1.4	外:に赤い橙 内:橙	底部糸切?	写真図版 30-237 20112343
図90-238 11001706	SB区 9tr	土師器 杯	10.1*	5.3*	2.0	外:に赤い橙 内:に赤い黄褐	底部糸切	写真図版 30-238 20112342
図90-239 11001787	SB区 5b層	土師器 杯	14.6*	11.6*	-	に赤い黄褐	底部糸切 板状圧痕	写真図版 30-239 20112430
図90-240 11001776	SB区 5a層	土師器 杯	15.6*	9.1*	3.2	外:に赤い黄褐 内:に赤い橙	底部糸切 板状圧痕	写真図版 30-240 20112425
図90-241 11001775	SB区 5a層	土師器 杯	15.9*	10.7*	2.6	浅黄褐	底部糸切 板状圧痕	写真図版 30-241 20112424
図90-242 11001777	SB区 5a層	瓦器 碗	-	6.7	-	外:に赤い黄褐 内:に赤い黄褐・褐灰		写真図版 30-242 20112426・2427
図90-243 11001778	SB区 5a層	瓦器 碗	-	7.3*	-	外:に赤い黄褐・灰黃褐 内:に赤い黄褐・褐灰		写真図版 30-243 20112392・2393
図90-244 11001779	SB区 5a層	瓦器 碗	16.0*	6.9*	6.2	外:に赤い黄褐 内:に赤い黄褐・灰黃褐		写真図版 30-244 20112475
図90-245 11001730	SB区 SX5015	白磁 碗	16.6*	-	-	胎土:灰白	碗V類	写真図版 31-245 20112418
図90-246 11001783	SB区 5a層	白磁 碗	16.8*	-	-	胎土:灰白	碗IV類	写真図版 31-246 20112394
図90-247 11001724	SB区 SX5011	白磁 碗	16.0*	-	-	胎土:白	碗IV類	写真図版 31-247 20112384
図90-248 11001782	SB区 5a層	白磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	碗IV類	写真図版 31-248 20112360
図90-249 11001698	SB区 3tr3層	白磁 碗	-	-	-	胎土:灰白		写真図版 31-249 20112339
図90-250 11001784	SB区 5a層	白磁 碗	15.8*	-	-	胎土:灰白	碗V類	写真図版 31-250 20112395
図90-251 11001700	SB区 5a層	白磁 碗	-	6.2*	-	胎土:灰白	碗Ⅳ類	写真図版 31-251 20112340
図90-252 11001786	SB区 5b層	白磁 碗	-	6.7	-	胎土:灰白	碗Ⅳ類	写真図版 31-252 20112428・2429
図90-253 11001712	SB区 9tr2層	青磁 碗	11.2*	5.4*	2.4	胎土:灰白	同安窯系	写真図版 31-253 20112379
図90-254 11001785	SB区 5a層	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 瓢 I 2類	写真図版 31-254 20112396
図90-255 11001710	SB区 9tr5層	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 瓢 I 4類	写真図版 31-255 20112344
図90-256 11001723	SB区 SX5011	青磁 碗	15.7*	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 瓢 II b類	写真図版 31-256 20112351
図90-257 11001711	SB区 9tr2層	青磁 碗	-	5.6*	-	胎土:灰白	竜泉窯系 瓢 II b類	写真図版 31-257 20112378
図90-258 11001725	SB区 SX5011	青磁 碗	-	5.6*	-	胎土:浅黄褐	竜泉窯系	写真図版 31-258 20112382・2383
図90-259 11001780	SB区 5a層	陶器 壺	-	-	-	胎土:灰白・に赤い橙	中国	写真図版 31-259 20112481
図91-260 11001147	8区 P8025・30	土師器 小皿	9.0*	6.6*	1.4	橙	底部糸切 板状圧痕	写真図版 31-260 20112300

表6 大野遺跡中世の出土遺物

桝岡・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	高さ			
国91-261 11001138	8区 P8003	土師器 小皿	8.4	7.1	1.3	橙	底部斜切 板状圧痕	写真図版 31-261 20112299
国91-262 11001752	4区 1tr7層	土師器 杯	-	7.6*	-	に赤い模様	底部斜切 板状圧痕	写真図版 31-262 20112390
国91-263 11001636	4B区 P4022	土師器 杯	-	4.9*	-	灰白	底部斜切	写真図版 31-263 20112334
国91-264 11001109	6A区 1tr4層	白磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	碗IV類	写真図版 31-264 20112252
国91-265 11001111	6A区 1tr4層	白磁 合子身	6.1*	受部 6.9*	-	胎土:灰白	青白磁力	写真図版 31-265 20112482
国91-266 11001594	4A区 16tr3層	白磁 杯	7.3*	3.2*	3.4	胎土:灰白	森田D群	写真図版 31-266 20112311
国91-267 11001749	4区 1tr7層	白磁 皿	10.6*	6.1*	2.3	胎土:白	累縫織窓系	写真図版 31-267 20112464
国91-268 11001619	4区 7tr2層	白磁 皿	11.2*	6.2*	3.0	胎土:白	森田E群	写真図版 31-268 20112292
国91-269 11001635	4B区 P4003	青磁 皿	-	4.1	-	胎土:灰白	同安窯系	写真図版 31-269 20112375・2376
国91-270 11001144	8区 P8015	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗I類	写真図版 31-270 20112267
国91-271 11001631	4B区 P4042	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰	竜泉窯系 碗I・II類	写真図版 31-271 20112330
国91-272 11001641	4B区 7層	青磁 碗	17.0*	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗I・II類	写真図版 31-272 20112377
国91-273 11001583	5D区 6層	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗I・4類	写真図版 31-273 20112278
国91-274 11001640	4B区 7層	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗II・bc類	写真図版 31-274 20112336
国91-275 11001110	6A区 1tr4層	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗III・2類	写真図版 31-275 20112253
国91-276 11001142	8区 P8004	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗III・2類	写真図版 31-276 20112266
国91-277 11001632	4B区 P4003	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗III・2類	写真図版 31-277 20112331
国91-278 11001113	6A区 P8004	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰	竜泉窯系 碗III・B II類	写真図版 31-278 20112254
国91-279 11001633	4B区 P4003	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗III・B III類	写真図版 31-279 20112332
国91-280 11001634	4B区 7層	青磁 碗	-	-	-	胎土:灰白	竜泉窯系 碗III・B III類	写真図版 31-280 20112333
国91-281 11001617	4区 7tr9層	青磁 碗	-	5.1	-	胎土:灰	竜泉窯系	写真図版 31-281 20112291
国91-282 11001747	4区 1tr7層	青花 皿	13.5*	-	-	胎土:白	福建系	写真図版 31-282 20112388
国91-283 11001590	4A区 16tr3層	青花 皿	11.0*	-	-	胎土:灰白	福建系	写真図版 31-283 20112281
国91-284 11001597	4A区 SX4006	青花 皿	-	-	-	胎土:棕	福建系	写真図版 31-284 20112283・2284
国91-285 11001584	5D区 6層	陶器 盤	-	-	-	胎土:灰白・淡黄	中国 黄釉	写真図版 31-285 20112279
国91-286 11001637	4B区 P4012	土師器 鍋	-	-	-	に赤い黄緑	鍋皿A類 直貢燒成	写真図版 31-286 20112335
国91-287 11001797	4区 6tr8層	瓦質土器 足鍋	-	-	-	灰	防長系	写真図版 31-287 20112431
国91-288 11001141	8区 P8001	須恵器系陶器 盤鉢	-	-	-	灰	東播諸窯系	写真図版 31-288 20112265
国91-289 11001588	5区 16tr3層	須恵器系陶器 盤鉢	-	-	-	灰	東播諸窯系	写真図版 31-289 20112280
国91-290 11001638	4B区 P4049	瓦質土器 盆鉢	26.0*	-	-	外:褐灰・灰黄 内:灰黄褐・黒褐	防長系 外面漆付着	写真図版 31-290 20112416
国91-291 11001646	4A区 16tr3層	残鉢	-	径 2.4	-	-	元高通寶 量目 3.69 g	写真図版 31-291 20112366
国91-292 11001643	4区 1tr7層	残鉢	-	径 2.55	-	-	元高通寶 量目 3.34 g	写真図版 31-292 20112363

4 近世以降の遺構と遺物

1・4～8区では、近世以降の遺構・遺物を検出した。このうち、1・4B・5B・6A・8区の遺構検出面は標高298～300mの同一の面と考えられる。また、大野代官所跡周辺の5C区では、代官所に関連するとみられる遺構・遺物が確認された。

1) 1・4・5・8区近世以降の遺構と遺物

1・4・5・8区では、主として近世前期の遺構を確認した。現地での所見では、遺構検出面を中世と認識していたため、多くの遺構を中世のものとしていた。ところが、整理段階において4B・5B・8区の検出面直上の層位から(図92)、数は多くないものの、近世の遺物が出土していることが確認された(図100)。また、5B区で近世前期のSB5013掘立柱建物が検出され、SB5013とほぼ主軸を同じくする建物が1区に存在することが分かった。

改めて調査状況をみてみると、1A区南端で中世後期のSD1862が堆積した後、SB1003掘立柱建物、SX1007石列・SD1009溝が形成されており(図93)、その検出面で肥前陶器などが出土していることや、掘立柱建物出土遺物にローリングを受けた戦国期の土師器杯があることが確認できた。このSX1007・SD1009には区画の意図がみられるが、多くの掘立柱建物の主軸はSX1007・SD1009の方向と近く、関連性が高いと考えられる。また、1区中世の項で述べたように1B区のSD1246・1247が近世のものとみられることもあり、このような状況を総合して、1・4B・5B・6A・8区で確認された同一の遺構検出面は近世であると判断した。現地表面から遺構面までの堆積層が1m以上と厚く、下層から中世の遺物が多数出土することが、現地での判断を難しくした原因であると思われる。

このため、中世の遺構と認識できるある程度の根拠がない遺構については、この項で報告することにした。
遺構面直上の包含層出土遺物(図100)

293は底部糸切の土師器小皿で、18世紀以降の資料とみられる。294は肥前陶器と思われる土瓶、295は肥前陶器碗で、内面見込みを蛇の目釉剥ぎしている。295は5B区5a層に対応する層位からの出土である。296は瀬戸・美濃窯系の陶器植木鉢で、灰釉を施している。

掘立柱建物

近世の掘立柱建物は、1A・5B区で検出した。掘立柱建物については、現地あるいは整理作業初期で認められたものをそのまま報告している。ただ、1間×2間のものが多く、中世の掘立柱建物としてはやや疑問が残る。1A区では数多くの小穴が確認され、遺構面の時期の変更もあることから、本来ならば掘立柱建物・柵列について再検討する必要があるが、期間の都合で断念した。主軸方位でみると、ほぼ真北のものと東傾するものとに大別され、新旧関係などから、東傾の群から真北の群へと変遷したことが想定できる。

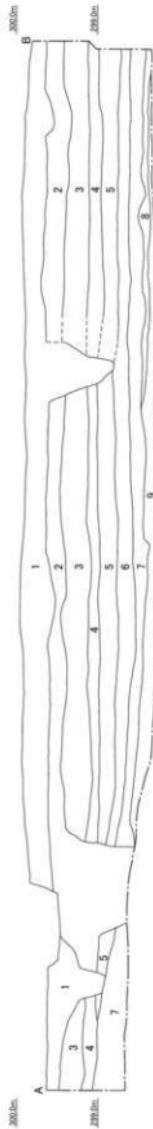
SB1003(図94)

1A区南東端に位置する掘立柱建物で、主軸をN1°Eにとる南北棟の側柱建物である。重複するSB1006より新しい。梁行1間(3.75m)×桁行4間(7.62m)で、床面積は13.9m²である。梁行柱間は3.71～3.75m、桁行柱間は1.68～2.12mで、建物を構成する柱穴は径0.35～0.75mの円形基調である。柱穴のうち、小礫が確認されたものがある。建物南西側に埋土が同じで、梁行に平行する3基の小穴があり、母屋に付属する構造があつたものと考えられる。遺物は土師器杯・小皿・鍋などが出土した。

SB1003出土遺物(図100)

297は底部糸切の土師器杯である。

4B区西壁



1. オリーブ褐色(2.574.4) 粗砂、細砂の中に礫が約3%含まれる。炭化物を含む。1層に比べかなり固くしまっている。
2. オリーブ褐色(2.574.4) 粗砂、細砂の中に礫が約2%含まれる。炭化物を含む。1層では比較的柔らかくなっている。
3. 白褐色(2.574.6) 粗砂、細砂の中に礫が約1%含まれる。炭化物を含む。2層では比較的柔らかくなっている。
4. 黄褐色(2.575.3) 粗砂、細砂の中に礫が約1%含まれる。2層と同様に柔らかくなっている。
5. にじみ黄褐色(10YR4/3) 粗砂、細砂によろぎ層で、4層同様弱くしまっている。
6. 黑褐色(10YR4/4) 粗砂、細砂の中に礫が約1%含まれている。炭化物を多く含む。3層と同じくらいしまっている。
7. 前述の(10YR3/3) 粗砂、細砂の中に礫が約1%含まれている。3層と同じくらいしまっている。
8. 黄褐色(10Y5.6) シルトの間に所産褐色(2.576.4)の薄い部分的に風化した層でややならぶ。遺構検出面。
9. 黑褐色(10YR4/4) 粗砂と細砂による層でややならぶ。遺構検出面。

5B区南壁



1. にじみ黄褐色(10YR5.6)砂質土。
 2. 黄褐色(10Y5.6)砂質土。
 3. にじみ黄褐色(10YR4/3)砂質土。
 4. 黄褐色(7.574.4)砂質土。
 - 5a. 黄褐色(10YR5.6)砂質土。
 - 5b. 黄褐色(10YR3.3)砂質土。
 6. 黑褐色(10YR4/4)砂質土。
- 上面が地盤表面
— 1 mm粒の砂を含む。

図 92 4B・5B 区の土層 (1/60)



図 93 1A 区近世の溝・石列 (1/100)、土層 (1/40)

SB1006 (図 94)

1A 区南西部に位置する掘立柱建物で、主軸を N68° W にとる東西棟の側柱建物である。重複する SB1003 より古い。梁行 1 間 (2.98 m) × 桁行 2 間 (5.68 m) で、床面積は 16.9 m² である。梁行柱間は 2.92 ~ 2.98 m、桁行柱間は 2.42 ~ 3.03 m で、建物を構成する柱穴は径 0.5 ~ 0.65 m の円形基調である。遺物は土師器杯・鍋、瓦質土器鍋、竜泉窯系青磁片が出土したが、小片であり図示していない。

SB1853 (図 95)

1A 区南西部に位置する掘立柱建物で、主軸を N22° E にとる南北棟の側柱建物である。梁行 1 間 (2.22 m) × 桁行 2 間 (4.41 m) で、床面積は 9.8 m² である。梁行柱間は 2.20 ~ 2.22 m、桁行柱間は 2.02 ~ 2.32 m で、建物を構成する柱穴は径 0.35 ~ 0.5 m の円形基調である。遺物は土師器小片が出土したが、小片であり図示していない。

SB1854 (図 95)

1A 区南西部に位置する掘立柱建物で、主軸を N24° E にとる南北棟の側柱建物である。梁行 1 間 (2.01 m) × 桁行 2 間 (3.90 m) で、床面積は 7.8 m² である。梁行柱間は 1.91 ~ 2.01 m、桁行柱間は 1.60 ~ 2.28 m で、建物を構成する柱穴は径 0.4 ~ 0.6 m の円形基調である。遺物は土師器杯・小皿、P1386 出土破片と接合する朝鮮半島産とみられる白磁皿 (図 78-154)、灰青陶器片が出土した。

SB1854 出土遺物 (図 100)

298 は底部糸切の土師器杯である。

SB1855 (図 96)

1A 区南西部に位置する掘立柱建物で、主軸を N37° W にとる東西棟の側柱建物である。梁行 1 間 (2.82 m) × 桁行 2 間 (3.16 m) としたが、PD を柱穴とすれば、梁行 2 間の可能性がある。床面積は 8.9 m² で、梁行柱間は 1.23 ~ 2.82 m、桁行柱間は 1.40 ~ 1.76 m で、建物を構成する柱穴は径 0.4 ~ 0.55 m の円形基調である。遺物は土師器杯・鍋、瓦質土器鍋、竜泉窯系青磁碗・皿が出土した。

SB1855 出土遺物 (図 100)

299 は土師器杯、300 は竜泉窯系青磁碗で、内面を区画する I 4 類である。

SB1856 (図 96)

1A 区中央南西寄りに位置する掘立柱建物で、主軸を N22° E にとる南北棟の側柱建物である。梁行 1 間 (1.66 m) × 桁行 2 間 (3.91 m) で、床面積は 6.3 m² である。梁行柱間は 1.60 ~ 1.66 m、桁行柱間は 1.78 ~ 2.03 m で、建物を構成する柱穴は径 0.35 ~ 0.45 m の円形基調である。遺物は瓦器碗、瓦質土器鍋・擂鉢が出土した。

SB1856 (図 100)

301 は瓦質土器擂鉢で、内面は擂目が消失するほど、使用による磨滅痕が著しい。

SB1857 (図 95)

1A 区中央南西寄りに位置する掘立柱建物で、主軸を N18° E にとる南北棟の側柱建物である。梁行 1 間 (1.88 m) × 桁行 2 間 (3.33 m) で、床面積は 6.2 m² である。梁行柱間は 1.80 ~ 1.88 m、桁行柱間は 1.32 ~ 1.98 m で、建物を構成する柱穴は径 0.25 ~ 0.35 m の円形基調である。遺物は土師器・瓦質土器片が出土したが、小片であり図示していない。

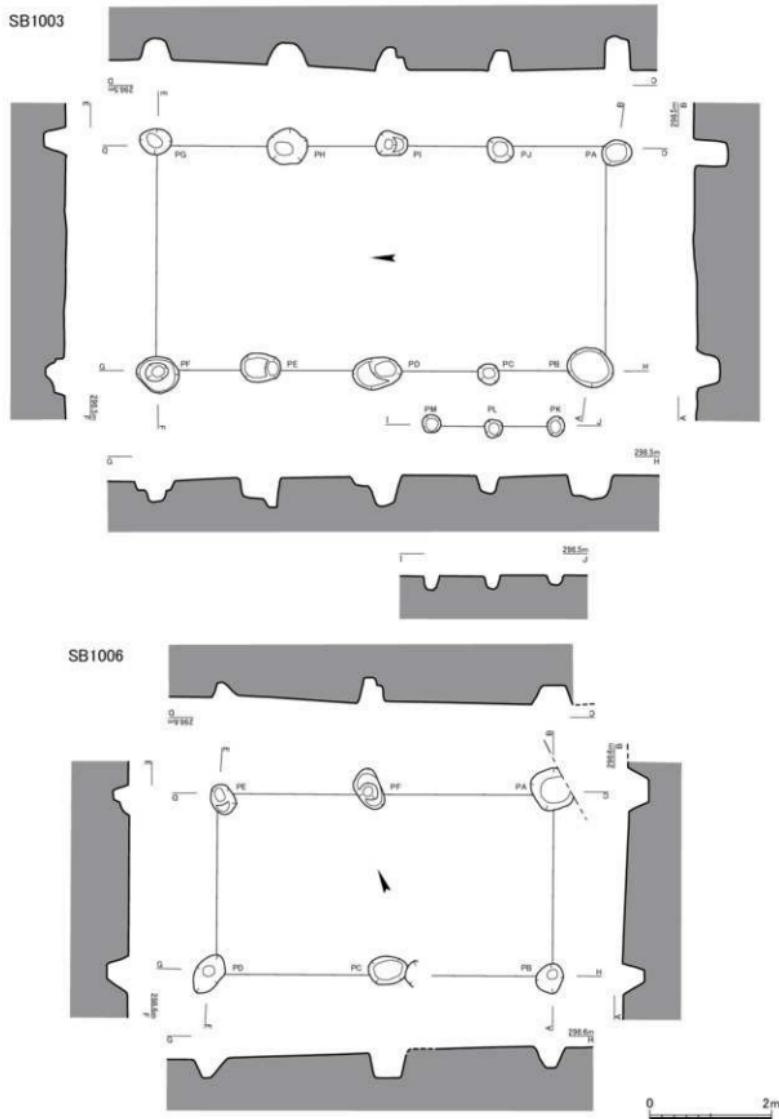


図94 1A区近世の掘立柱建物1 (1/80)

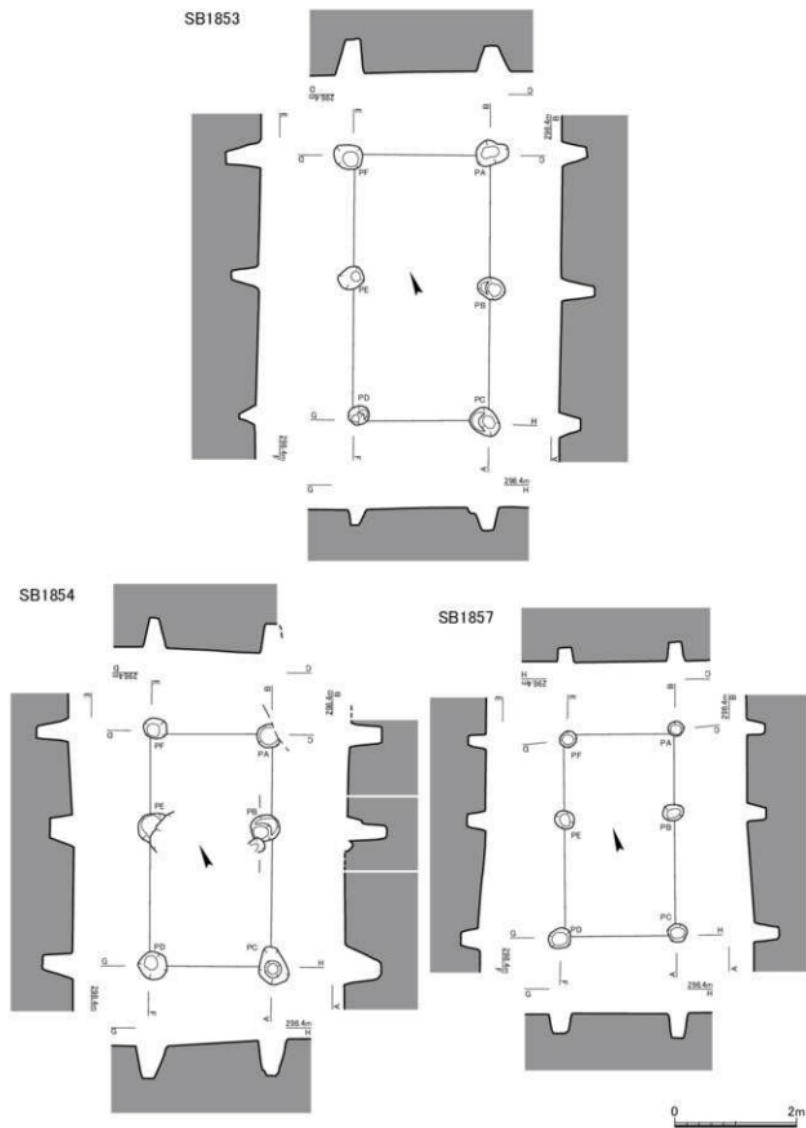


図 95 1A 区近世の掘立柱建物 2 (1/80)

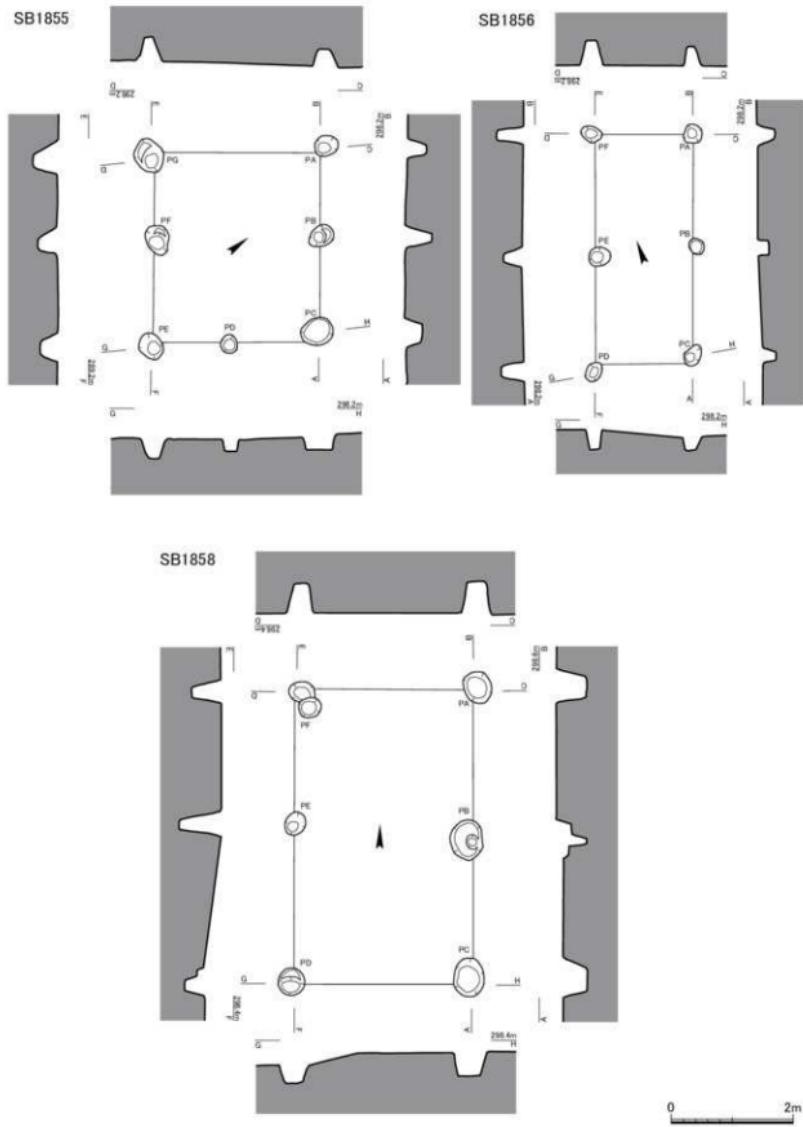


図 96 1A 区近世の掘立柱建物 3 (1/80)

SB1858 (図 96)

1A 区中央南西寄りに位置する掘立柱建物で、主軸を N 1° W にとる南北棟の側柱建物である。梁行 1 間 (2.87 m) × 桁行 2 間 (4.84 m) で、床面積は 13.8 m² である。梁行柱間は 2.87 ~ 2.94 m、桁行柱間は 2.18 ~ 2.59 m で、建物を構成する柱穴は径 0.4 ~ 0.65 m の円形基調である。遺物は竜泉窯系青磁碗が出土した。

SB1858 (図 100)

302 は竜泉窯系青磁碗で、幅の広い蓮弁を片切形で表現する上田 B II 類である。

SB5013

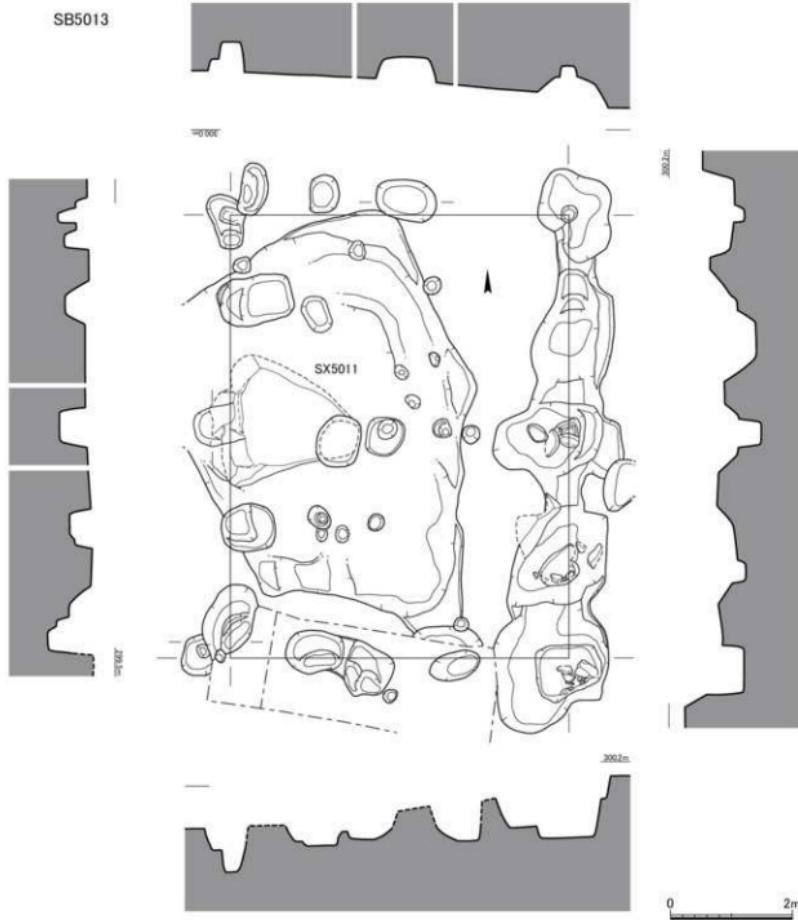


図 97 5B 区 SB5013 (1/80)

SB5013 (図 97)

5B 区北部に位置する掘立柱建物で、主軸を N 1° E にとる南北棟の側柱建物である。桁行 2 間 (5.56 m) × 梁行 4 間 (7.28 m) であるが、南側梁行の中央の柱穴は明確ではない。床面積は 40.5 m² で、梁行柱間は 2.68 ~ 2.88 m、桁行柱間は 1.40 ~ 2.24 m である。建物を構成する柱穴は、残存状況の良い東側桁行は布掘りであり、西側桁行も布掘りであった可能性が高い。底面付近で礫石が確認された柱穴があり、柱材を安定させるためのものと考えられる。なお、SB5013 より古い時期の遺構である SX5011 には巨石が埋められているようで、建物建築の際の整地に伴う遺構の可能性がある。

SB5013 出土遺物 (図 100)

303 ~ 306 は肥前陶器皿である。303 はいわゆる灰釉溝縁皿、305 は内面と高台置付に砂目痕が残る。307 は肥前陶器火入で、外面に白土の刷毛目を施し、口縁部から外面上半に緑釉を掛けた。308 ~ 310 は肥前染付磁器で、308・309 が碗、310 が皿である。311 ~ 313 は底部糸切の土師器小皿で、312 の内面に煤かと思われる炭化物、312 の口縁部には油煤が付着している。314 は鉄鑓、315 は銅錢の寛永通寶で、古寛永である。316 は SX5011 出土の瓦質土器火鉢である。

柵列

近世の柵列は、4B 区で確認した 1 基を報告する。

SA4007 (図 98)

4B 区南東部に位置する布掘り状の掘方と思われる柵列である。全長は 5.86 m、主軸は N11° E の南北方向で、布掘り状の部分に 2 間分とその北側に 1 間分、合わせて 3 間の柵列と考えられる。柱間は 1.85 ~ 2.0 m で、北側の柱穴は独立しているが、全体が布掘り状の掘方であった可能性もある。遺物は瓦質土器茶釜・鍋、竜泉窯系青磁片、鉄釘が出土したが、小片であり図示していない。

土坑

近世の土坑として、8 区で検出した 1 基を報告する。

SK8001 (図 99)

8 区南東部に位置し、長軸 1.60 m、短軸 1.18 m、深さ 0.49 m で、平面は不整長方形である。埋土は黒褐色粘質土で、人為的に埋め戻された可能性が高い。遺物は底面近くからほぼ完形の土師器小皿と瓦質土器火入、その他に防長系瓦質土器擂鉢が出土した。

SK8001 出土遺物 (図 100)

317 は底部糸切の土師器小皿である。318 は瓦質土器火入で、脚は 3 足で、底部に糸切痕が残る。

鍛冶関連遺構

鍛冶関連遺構は、1・4B・5B 区で確認した。鉄滓や轆羽口が出土し、確実に鍛冶関連遺構と認められるものだけではなく、焼土遺構すべきものもこの項で報告する。いずれも出土遺物では時期の特定が困難で、近世の検出面で確認したことから近世の項で報告するが、中世に遡る可能性はある。

SK1005 (図 99)

1A 区南東端に位置する土坑で、平面が長軸 1.79 m、短軸 1.43 m の長方形、深さ 0.42 m である。埋土に焼土・

灰・炭化物を多く含むことから鍛冶関連遺構とした。遺物は土師器杯・小皿、瓦質土器小片、竜泉窯系青磁碗、中國陶器、鉄滓?が出土したが、小片であり図示していない。

SX1024 (図 99)

1A 区北部に位置し、長軸 0.82 m、短軸 0.62 m、深さ 0.08 m で、平面が隅丸長方形の掘方である。掘方の西側から南側にかけて地山に近い黄褐色粘質土で壁状に構築しているような状況が確認された。上部構造などは明確ではないが、鉄滓が出土することと合わせて鍛冶炉である可能性が高い。遺物は土師器小皿（糸切）、鉄滓が出土

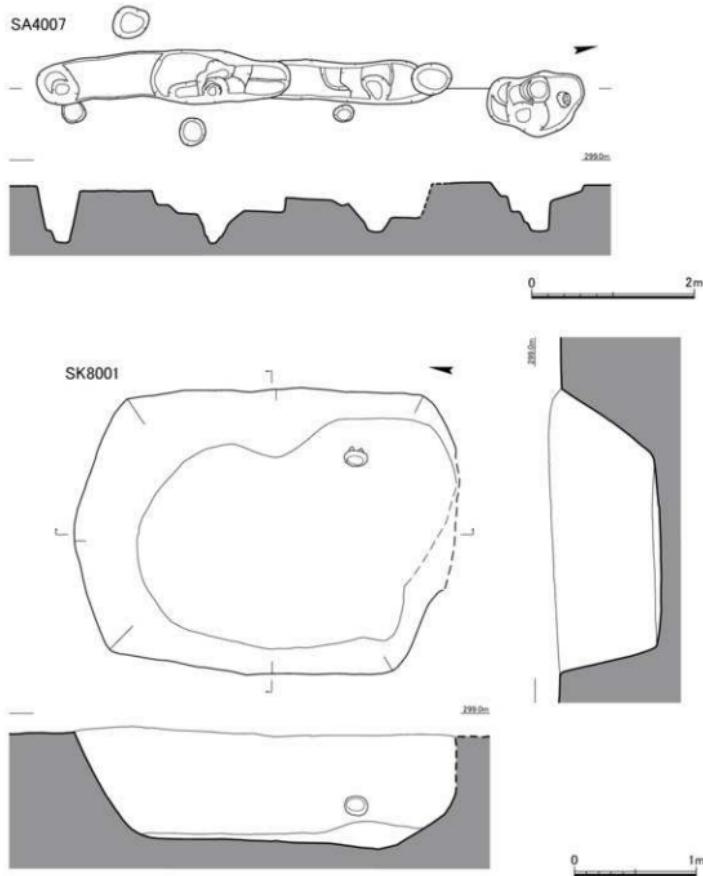


図 98 4B 区 SA4007 (1/60)、8 区 SK8001 (1/40)

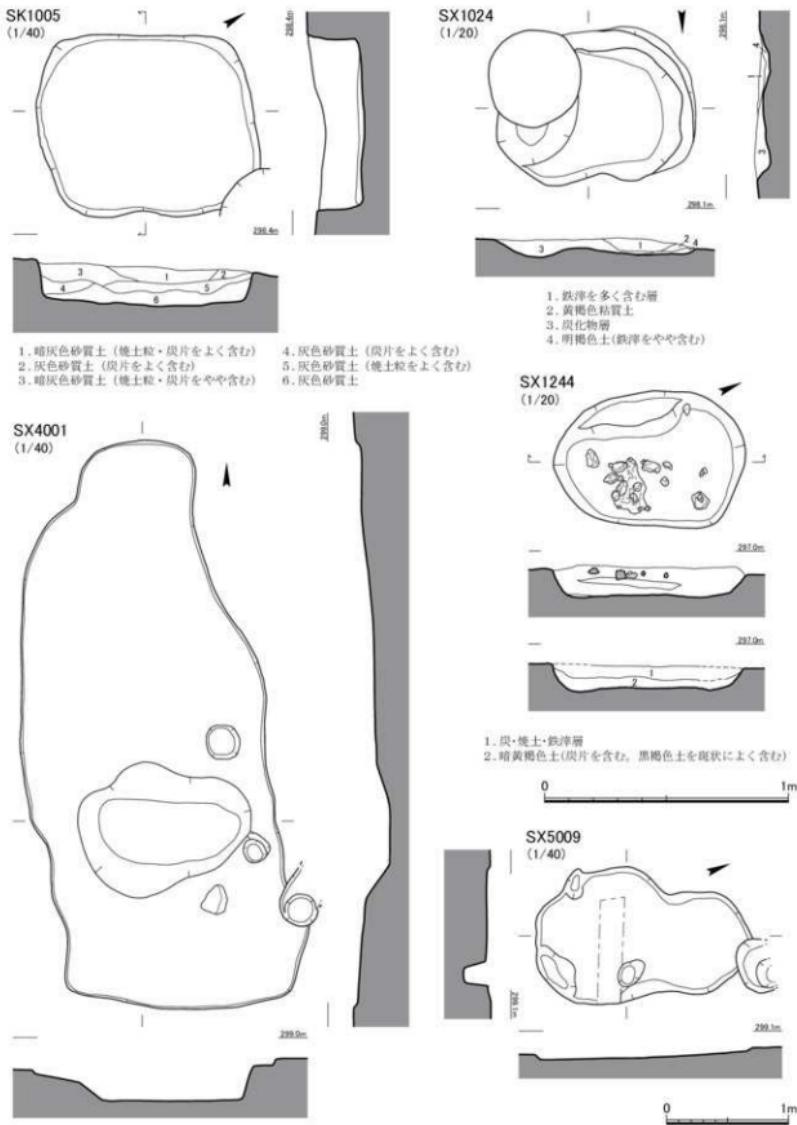


図99 1A・4B・5B区の銅冶関連遺構 (1/20・1/40)

したが、小片であることなどから図示していない。

SX1244 (図 99)

1B 区東部に位置する小穴で、長軸 0.79 m、短軸 0.56 m、深さ 0.15 m で、平面が不整梢円形である。埋土は、上層に輪羽口を含む炭化物、焼土、鉄滓からなる層がみられる。鍛冶に伴う鉄滓などの廃棄坑と考えられる。鍛冶関連以外の遺物は出土しなかった。

SX1244 (図 100)

319～322 は土製の輪羽口で、319・320 は外面の一部が被熱により黒色化している。

SX4001 (図 99)

4B 区南西部に位置する土坑である。長軸 4.7 m、短軸 2.0 m、深さ 0.05 m の浅い掘り込みも含めて図示しているが、この掘り込みの南側の長軸 1.42 m、短軸 1.11 m、深さ 0.28 m の部分のみを土坑とすべきかもしれない。遺物は土師器杯・小皿（糸切）、瓦質土器鍋・焰格把手、同安窯系青磁皿、竜泉窯系青磁碗、鉄滓が出土したが、小片であり図示していない。

SX5009 (図 99)

5B 区南西部に位置する焼土遺構である。長軸 1.76 m、短軸 1.12 m、深さ 0.03 m の平面が不整形のごく浅い掘り込みに焼土層が確認された。鍛冶関連遺構かどうかは不明である。遺物は土師器片が出土したが、小片であり図示していない。なお、SX5009 南東側に炭化物・焼土を埋土に多く含む SX5010 があり、関連するかもしれない。

1・4・5 区その他近世以降の出土遺物 (図 101・102)

323～366 は個別に説明しなかった遺構や包含層から出土した近世以降の出土遺物である。出土位置については、表を参照されたい。

323～325 は 1 区の遺構から出土した。323・324 は瓦質土器鍋、325 は底部糸切の土師器小皿である。

326～333 は 5B 区とその周辺から出土した。326 は肥前陶器皿で、外面に褐釉が施され、内面に當て具痕が残る。327 は瓦質土器火鉢である。328 は肥前陶器皿で、灰釉が施される。329 は肥前白磁小杯で、高台は無釉である。330 は肥前染付磁器小碗で、内面に焼成時の付着物がみられる。331 は肥前陶器皿で、鉄釉が施される。332 は肥前磁器碗で、鉄釉が施され、内面見込みに傷が顯著に見られる。333 は肥前染付磁器皿である。

334～342 は 4A 区、343～360 は 4 区試掘坑から出土した。334～336 は灰釉が施される肥前陶器皿で、335・336 は多久市唐人古場窯製とみられ、高台部に砂が付着している。337 は肥前青磁碗で、波佐見系の可能性がある。これらの資料は 16 世紀末～17 世紀前半のものが主体である。338 は瓦質土器火鉢で、外面に印刻文が施される。339 は瓦質土器鍋で、外耳をもつ IV a 類である。340 は瓦質土器焰格と考えられ、341・342 は瓦質土器捕鉢である。

343～345 は肥前陶器皿で、343・344 は薺灰釉、345 は灰釉が施される。346 は肥前陶器で、二つの製品が溶着したまま流通したものである。上の製品は円孔をもつ筒状の形状で、下の製品は皿と思われ、ともに灰釉が施される。347 は肥前陶器皿で、いわゆる灰釉溝縁皿である。348 は肥前青磁皿で、体部下半に付着物がみられる。4A 区同様 16 世紀末～17 世紀前半のものである。

349 は肥前陶器皿、350 は肥前陶器鉢で、ともに灰釉が施される。351 は肥前白磁もしくは染付磁器皿、352 は肥前白磁鉢である。353 は肥前染付磁器碗で、内面見込みにトンボと思われる文様が描かれる。これらは 17 世紀後半以降の資料である。

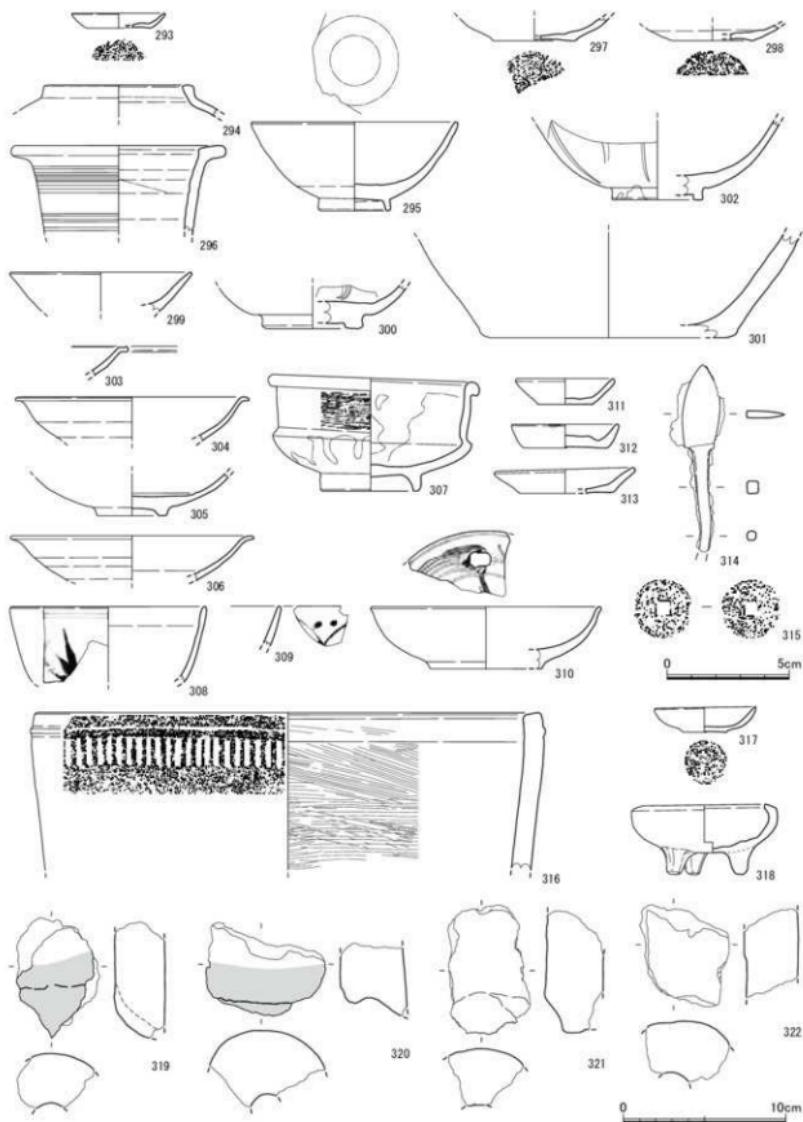


図 100 近世の出土遺物 1 (314・315 は 1/2、他は 1/3)

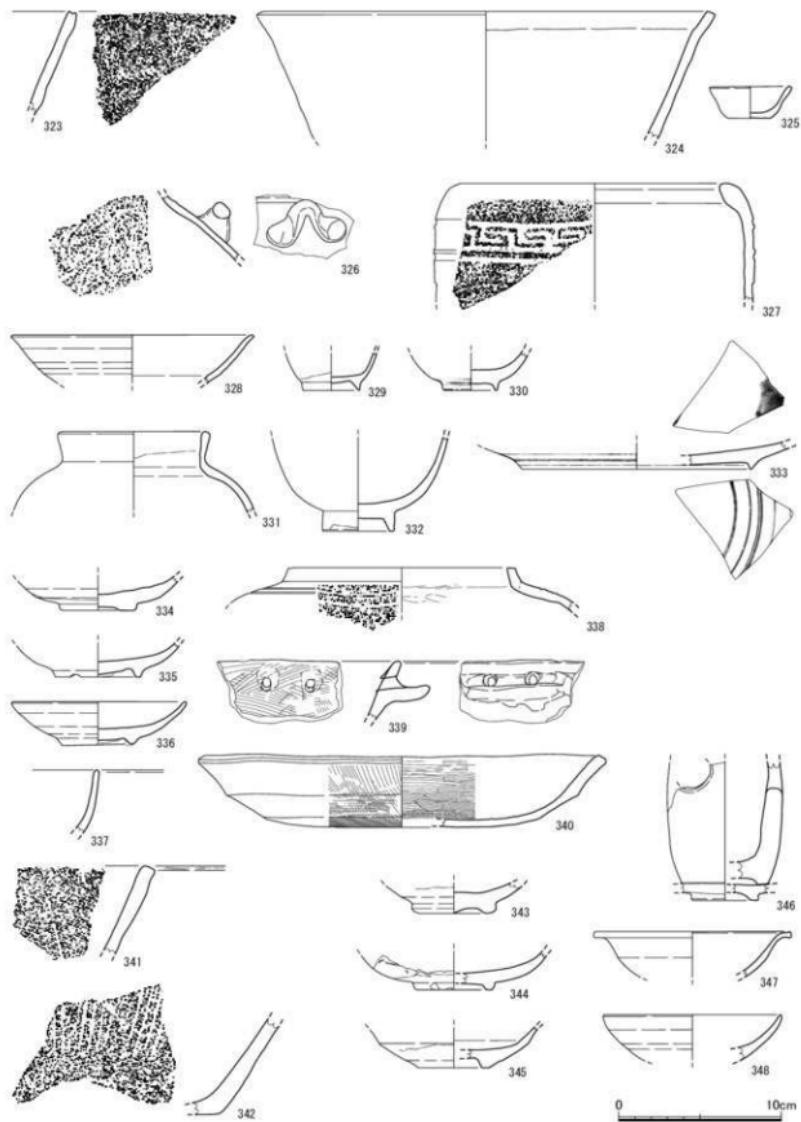


図 101 近世の出土遺物 2 (1/3)

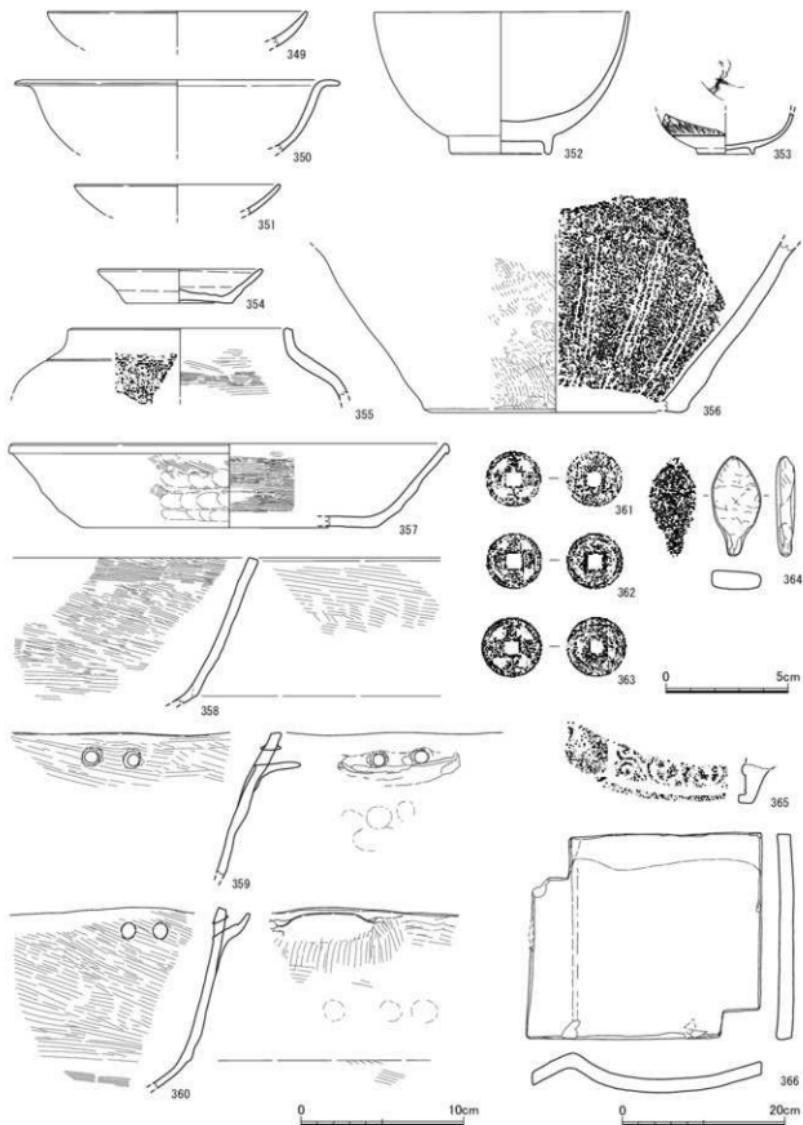


図102 近世の出土遺物3 (361～346は1/2、365・366は1/6、他は1/3)

354 は底部糸切の土師器杯で、外面に煤が付着している。355 は瓦質土器茶釜で、外面に印刻文が施される。356 は瓦質土器擂鉢で、内面の器面調整はハケメである。357 は瓦質土器焙烙と考えられる。358～360 は瓦質土器鍋で、358 は鉢形の V 類、359・360 は外耳をもつ IV a 類である。

361～363 は銅錢の寛永通寶で、361・362 が新寛永、363 が古寛永である。364 は滑石製品で、扁平な楕円形に短い柄状の部分が付く。

365・366 は近代と考えられる瓦である。365 は焼瓦の軒棟瓦、366 は首無瓦窯（第 6 章参照）製の棟瓦で、上面など屋根を葺いた時に外から見える部分にのみ黒褐色の釉が施される。

2) 代官所跡周辺の遺構と遺物

大野代官所跡周辺では、代官所跡前面（西側）の道路を中心に試掘坑を設定して調査を行った（図 103）。調査の結果、前面で盛土により造成された道路遺構を確認した。

道路遺構は、調査時点ではスロープであった代官所出入口の南側（5CS 区）においては、幅約 4 m の平坦面に造成され、道路縁石と思われる石列や、雨樋のためと考えられる幅 0.2～0.3 m の溝を伴っている。整地は入り口に行われ、路面は踏み固められて硬化していた。これに対し、出入口北側（5CN 区）では路面が幅約 2.5 m しか確認できず、石列や溝も伴っておらず、路面の硬化もやや弱かった（図 104）。このように、道路遺構は出入口の南北で異なる状況で検出されたが、この差異が、道路造成当時から何らかの違いがあったことによるものなのか、北側が代官所跡にあった民家への道路として最近まで機能していたため、削平や変更が著しいことに原因があるのかは明らかにできない。

道路遺構と代官所石垣との関係は、現地表から 0.3 m、路面から 0.1 m 下で石垣の根石が確認され、根石を据えた後に粘質土で叩き締めて固定し、その上に路面を造成していることが判明した（図 105）。したがって、現存する石垣と検出された道路遺構は同時に構築されたことになる。

道路遺構の時期は、路面造成土などから 19 世紀前半の遺物が出土していることから、19 世紀中頃以降と推定するのが妥当であろう。注目すべき点として、造成土中から丸瓦（389・390）が出土しており、現存する代官所石垣以前に本瓦葺きの建物があったことを推定できる。なお、図示していないが、周辺の試掘坑から中世に遡る遺物も散見されるので、代官所跡周辺は中世から何らかの開発の手が入っていることをうかがわせる。

また、本書では掲載しなかったが、代官所跡の石垣を含めた周辺の石垣については測量を実施している。

代官所周辺の出土遺物（図 106）

367～369 は路面以前の包含層と思われる 9 層から出土した。367 は福岡産の可能性がある陶器小碗で、鉄軸や藁灰軸を施した後、藁灰軸を流し掛ける。368 は肥前陶器で、瓶などの類であろう。369 は土師器鉢である。

370～372 は路面造成土の 3 層から出土した。370 は肥前染付磁器もしくは白磁小杯で、内面に焼成時の付着物がみられる。371 は肥前白磁紅皿、372 は肥前染付磁器小皿である。

373～376 は表土から出土した。373・374 は肥前陶器で、373 は藁灰軸が施される皿、374 は灰軸が施される碗である。375・376 は肥前染付磁器で、375 は小杯、376 は猪口である。

377～382 は代官所周辺の試掘坑から出土した。377 は肥前青磁小碗である。378 は肥前陶器火入で、外面に刷毛目が施される。379 は瓦質土器火鉢で、脚が付く可能性がある。380～382 は肥前染付磁器碗である。

383 は犬かと思われる動物形の土製品である。384 は鉄製の鉄砲玉と思われ、合わせて鋳型で鋳造された痕跡が残る。385・386 は石臼で、385 は路面の縁石に使用されていた。387～390 は焼瓦である。387 は軒棟瓦、388 は棟瓦である。389・390 は路面造成土中から出土した丸瓦で、いずれも凹面にヘラによる縱方向の調整が施される。このほか、図示していないが、銘入りの瓦も出土している。



図 103 大野代官所跡周辺調査区の位置 (1/500)

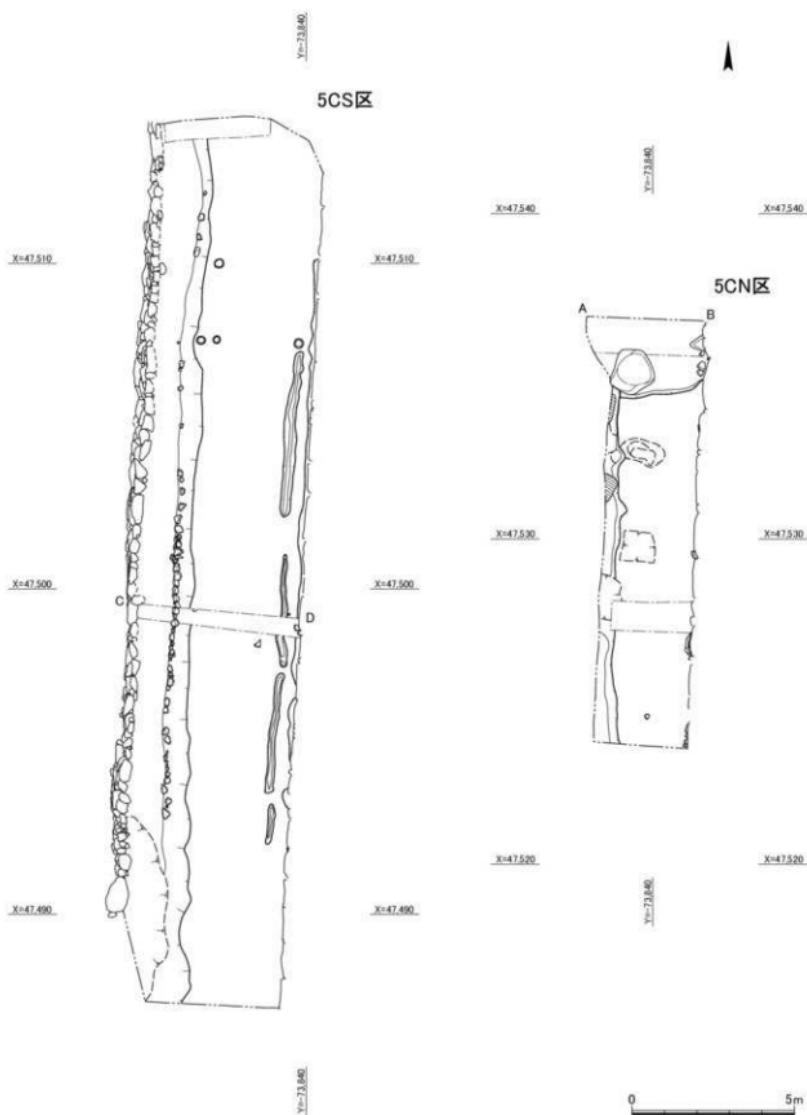


図 104 5C 区の遺構分布 (1/150)

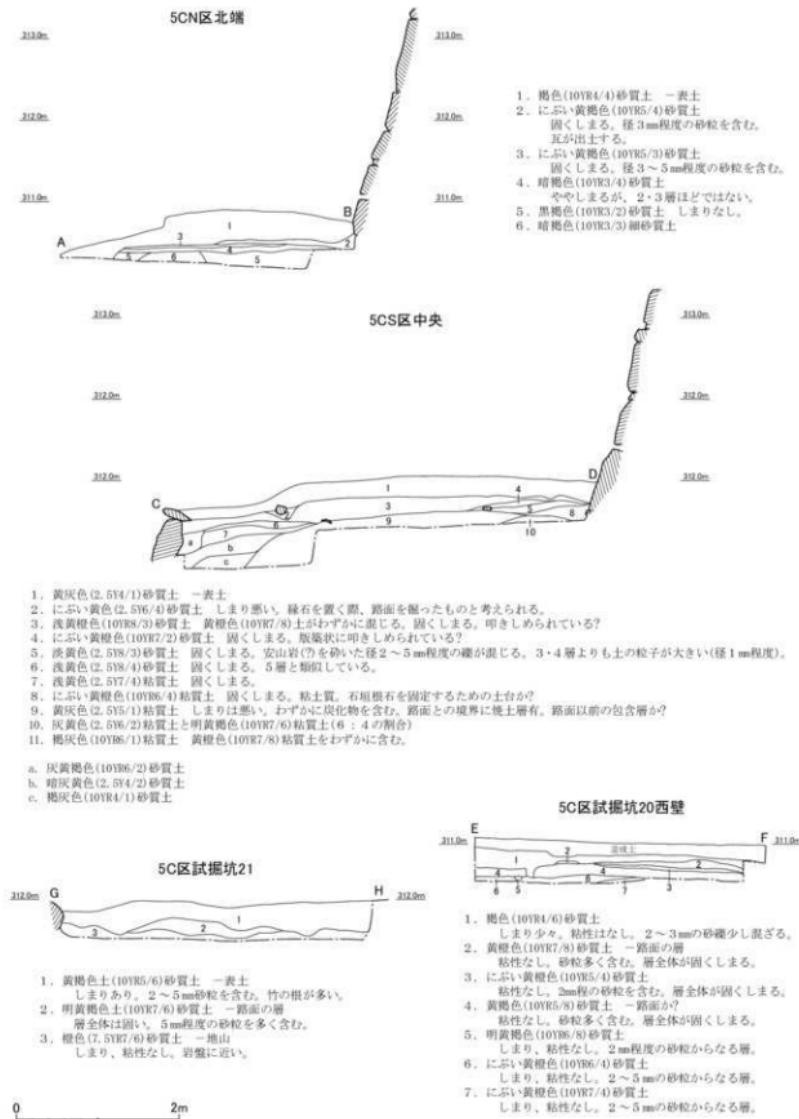


図 105 5C 区の土層 (1/60)

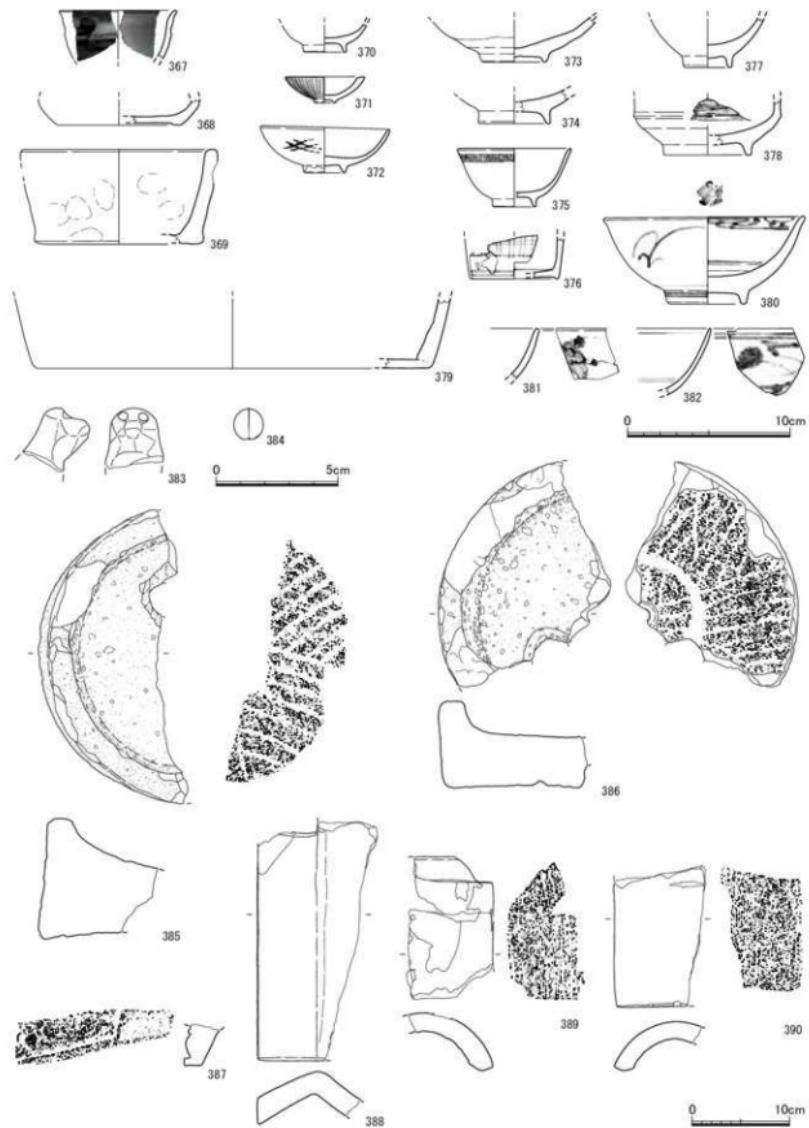


図 106 5C 区近世の出土遺物 (367～382 は 1/3、383・384 は 1/2、385～390 は 1/5)

表7 大野跡近世以降の出土遺物

件名、番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図100-293 11001772	5B区 5a層	土師器 小皿	5.8*	4.0*	0.9	浅黄橙	底部系切	写真図版 34-293 20112359
図100-294 11001642	4B区 7層	陶器 土瓶	8.4*	-	-	胎土：に赤い粒	肥前丸 19c	写真図版 34-294 20112337
図100-295 11001788	5B区 8層	陶器 碗	12.7*	4.4	5.5	胎土：に赤い黄橙	肥前 18c 前半	写真図版 34-295 20112476
図100-296 11001920	8区 4層	陶器 植木鉢	13.2*	-	-	胎土：淡黄	廻転・美濃系 18c 後半～19c 前半	写真図版 34-296 20112339
図100-297 97001395	1A区 SB1003 PK	土師器 杯	-	5.0*	-	灰白	底部系切	写真図版 34-297 20112155
図100-298 97001396	1A区 SB1854 PE	土師器 杯	-	5.0*	-	灰白	底部系切	写真図版 34-298 20112156
図100-299 97001398	1A区 SB1855 PF	土師器 杯	11.2*	-	-	に赤い粒		写真図版 34-299 20112157
図100-300 97001399	1A区 SB1855 PE	青磁 碗	-	6.2*	-	胎土：灰白	竜泉窯系 瓢14類	写真図版 34-300 20112158・2159
図100-301 97001400	1A区 SB1856 PE	瓦質土器 盆鉢	-	15.9*	-	灰白	外面保付着	写真図版 34-301 20112200
図100-302 97001401	1A区 SB1858 PE	青磁 碗	-	5.6*	-	胎土：明オーリーブ灰	竜泉窯系 上田B II類	写真図版 34-302 20112201
図100-303 11001727	5B区 SB5013	陶器 皿	-	-	-	胎土：灰白	内野山窯 17c 前半	写真図版 34-303 20112352
図100-304 11001728	5B区 SB5013	陶器 皿	14.3*	-	-	胎土：灰白	内野山窯 17c 前半	写真図版 34-304 20112353
図100-305 11001729	5B区 SB5013	陶器 皿	-	4.2*	-	胎土：灰白	内野山窯 17c 前半	写真図版 34-305 20112385
図100-306 11001733	5B区 SB5013	陶器 皿	15.0*	-	-	胎土：灰白	肥前 17c 前半	写真図版 34-306 20112386
図100-307 11001731	5B区 SB5013	陶器 火入	12.8	6.0	7.2	胎土：に赤い赤褐色	武雄系 17c 後半	写真図版 34-307 20112473
図100-308 11001919	5B区 SB5013	染付磁器 碗	12.1*	-	-	胎土：灰白	有田周辺域 17c 後半	写真図版 34-308 20112362
図100-309 11001918	5B区 SB5013	染付磁器 碗	-	-	-	胎土：灰白	波佐見系 18c	写真図版 34-309 20112371
図100-310 11001734	5B区 SB5013	染付磁器 皿	14.2*	6.8*	3.8	胎土：灰白	肥前 17c 中～後半	写真図版 34-310 20112387
図100-311 11001732	5B区 SB5013	土師器 小皿	6.1*	3.4*	1.6	外：に赤い黄橙 内：灰黃褐色	底部系切 内面炭化物付着	写真図版 34-311 20112461
図100-312 11001735	5B区 SB5013	土師器 小皿	6.6*	5.1*	1.5	に赤い黄橙	底部系切 油焼付着	写真図版 34-312 20112462
図100-313 11001726	5B区 SB5013	土師器 小皿	8.7*	5.8	1.6	に赤い粒	底部系切	写真図版 34-313 20112460
図100-314 11001857	5B区 SB5013	鉄製品 鐵鑼	長 7.7*	-	-	-		写真図版 34-314 20112490
図100-315 11001861	5B区 SB5013	鉄貨 銅錢	-	2.4	-	-	寛永通寶（古寛永） 2.7g	写真図版 34-315 20112485
図100-316 11001721	5B区 SK5011	瓦質土器 火鉢	31.1*	-	-	外：に赤い黄橙 内：灰黃褐色	煤付着	写真図版 34-316 20112438
図100-317 11001136	8区 SK8001	土師器 小皿	6.2	2.7	2.1	浅黄橙	底部系切	写真図版 34-317 20112451
図100-318 11001135	8区 SK8001	瓦質土器 火鉢	8.9	-	4.3	褐灰	三星	写真図版 34-318 20112450
図100-319 97001256	1B区 SX1244	土製品 輪羽口	-	-	-	外：灰黃褐色 内：浅黄橙		写真図版 34-319 20112088
図100-320 97001257	1B区 SX1244	土製品 輪羽口	-	-	-	外：灰白色・黒褐色 内：浅黄橙		写真図版 34-320 20112089
図100-321 97001260	1B区 SX1244	土製品 輪羽口	-	-	-	外：に赤い黄橙 内：赤		写真図版 34-321 20112092
図100-322 97001258	1B区 SX1244	土製品 輪羽口	-	-	-	外：に赤い黄橙 内：に赤い粒		写真図版 34-322 20112090
図100-323 97001420	1A区 SD1009	瓦質土器 鍋	-	-	-	灰黃褐色	外面保付着	写真図版 34-323 20112203
図100-324 97001422	1A区 SD1589	瓦質土器 鍋	28.2*	-	-	明褐色	外面保付着	写真図版 34-324 20112204
図100-325 97001249	1A区 P1426	土師器 杯	4.8	2.6	2.0	浅黄橙	底部系切	写真図版 34-325 20112217

表7 大野遺跡近世以降の出土遺物

件名、番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図101-326 11001719	5B区, P5035	陶器 壺	-	-	-	胎土：灰黄	肥前 16c末～17c初 タケ牛成形	写真図版 34-326 20112480
図101-327 11001705	5B区 3tr3層	瓦質土器 火鉢	16.4*	-	-	に赤・黄橙	煤付着	写真図版 34-327 20112417
図101-328 11001697	5B区 3tr3層	陶器 壺	14.9*	-	-	胎土：灰白	肥前 17c前半	写真図版 34-328 20112338
図101-329 11001699	5B区 3tr3層	白磁 小杯	-	3.6*	-	胎土：灰白	肥前 17c後半	写真図版 34-329 20112457
図101-330 11001701	5B区 5tr3層	染付磁器 小瓶	-	3.4	-	胎土：灰白	肥前 18c	写真図版 34-330 20112458
図101-331 11001580	5区 17tr1層	陶器 壺	9.4*	-	-	胎土：に赤い粒	肥前 17c後半～18c前半	写真図版 34-331 20112401
図101-332 11001582	5区 17tr5層	磁器 碗	-	4.4	-	胎土：灰白	肥前 17c中頃 武袖	写真図版 34-332 20112456
図101-333 11001581	5区 17tr5層	染付磁器 皿	-	14.0*	-	胎土：灰白	肥前 18c前半	写真図版 34-333 20112402・2403
図101-334 11001592	4A区 16tr3層	陶器 皿	-	4.6*	-	胎土：に赤い黄橙・灰黄褐	肥前 16c末～17c初	写真図版 35-334 20112310
図101-335 11001591	4A区 16tr3層	陶器 皿	-	5.2*	-	胎土：灰白	唐人古窯窓 1590～1600年代	写真図版 35-335 20112309
図101-336 11001593	4A区 16tr3層	陶器 皿	10.8*	4.5*	2.7	胎土：灰白	唐人古窯窓 1590～1600年代	写真図版 35-336 20112455
図101-337 11001598	4A区 SX4002	青磁 碗	-	-	-	胎土：灰白	肥前 17c前半か 波佐見の可能性あり	写真図版 35-337 20112286
図101-338 11001600	4A区 SX4003	瓦質土器 茶釜	14.0*	-	-	外：青 内：赤・浅黄橙		写真図版 35-338 20112312
図101-339 11001602	4A区 SX4004	瓦質土器 硝	-	-	-	外：青 内：灰白・灰黄	硝IVa類 外面煤付着	写真図版 35-339 20112313
図101-340 11001596	4A区 16tr3層	瓦質土器 焰灯	25.0*	17.1*	-	外：銀鏡・黒褐 内：灰灰	外面煤付着	写真図版 35-340 20112436
図101-341 11001599	4A区 SX4002	瓦質土器 擂鉢	-	-	-	外：灰白 内：灰		写真図版 35-341 20112329
図101-342 11001595	4A区 16tr3層	瓦質土器 擂鉢	-	-	-	外：灰 内：に赤い黄橙		写真図版 35-342 20112406
図101-343 11001630	4区 6tr3層	陶器 皿	-	5.1	-	胎土：灰黄	山瀬窯か 16c末～17c初	写真図版 35-343 20112327・2328
図101-344 11001629	4区 6tr3層	陶器 皿	-	4.7*	-	胎土：淡黄	肥前 16c末～17c初	写真図版 35-344 20112326
図101-345 11001628	4区 6tr6層	陶器 皿	-	4.4*	-	胎土：に赤い黄	肥前 16c末～17c初	写真図版 35-345 20112324・2325
図101-346 11001621	4区 7tr2層	陶器 皿	-	4.1*	-	胎土：灰黄	肥前 胎土目～砂目段階 二つの製品が溶着	写真図版 35-346 20112413
図101-347 11001626	4区 6tr7層	陶器 皿	12.2*	-	-	胎土：淡黄	肥前 1610～30年代	写真図版 35-347 20112294
図101-348 11001616	4区 7tr8層	青磁 皿	11.0*	-	-	胎土：灰白	肥前 1610～17c中頃	写真図版 35-348 20112290
図102-349 11001620	4区 7tr2層	陶器 皿	16.0*	-	-	胎土：灰	肥前 17c後半～18c前半	写真図版 35-349 20112322
図102-350 11001627	4区 6tr1層	陶器 皿	20.0*	-	-	胎土：灰黄	肥前 17c末～18c前半	写真図版 35-350 20112323
図102-351 11001625	4区 6tr1層	白磁 皿	12.7*	-	-	胎土：白	肥前 17c後半 染付力	写真図版 35-351 20112414
図102-352 11001748	4区 1tr1層	白磁 皿	15.7*	6.2	8.8	胎土：白	有田周辺域 17c末～18c前半	写真図版 35-352 20112474
図102-353 11001618	4区 7tr9層	染付磁器 碗	-	3.6	-	胎土：灰白	有田周辺域 18c前半～中頃	写真図版 35-353 20112320・2321
図102-354 11001742	4区 1tr2層	土師器 杯	10.2*	6.6	2.1	に赤い黄橙	底部系外 外面煤付着	写真図版 35-354 20112463
図102-355 11001743	4区 1tr2層	瓦質土器 茶釜	13.8*	-	-	黒褐	煤付着	写真図版 35-355 20112419
図102-356 11001623	4区 7tr3層	瓦質土器 擂鉢	-	16.2*	-	外：銀鏡・从周 内：に赤い褐・灰黄褐	外面煤付着	写真図版 35-356 20112437
図102-357 11001624	4区 6tr6層	瓦質土器 擂鉢	27.1*	18.2*	5.2	外：銀鏡・黒褐 内：灰	外面煤付着	写真図版 36-357 20112415
図102-358 11001744	4区 1tr3層	瓦質土器 硝	-	-	-	外：灰黄褐・に赤い褐 内：黒褐	硝V類 外面煤付着	写真図版 36-358 20112439

表7 大野跡近世以降の出土遺物

件名、番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図102-359 11001745	4区 1tr2層	瓦質土器 網	-	-	-	黄灰	網N/a類 外面環付着	写真図版 36-359 20112440
図102-360 11001746	4区 1tr3層	瓦質土器 網	-	-	-	黄灰	網N/a類 外面環付着	写真図版 36-360 20112441
図102-361 11001863	5区 19tr	銭貨 銭銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶(新寛永) 3.2g	写真図版 36-361 20112486
図102-362 11001645	44区 16tr3層	銭貨 銭銭	-	径 2.3	-	-	寛永通寶(新寛永) 2.1g	写真図版 36-362 20112365
図102-363 11001644	4区 1tr5層	銭貨 銭銭	-	径 2.4	-	-	寛永通寶(古寛永) 2.8g	写真図版 36-363 20112264
図102-364 11001622	4区 7tr1層	酒石調晶	長 4.1	幅 2.0	厚 0.8	-	-	写真図版 36-364 20112293
図102-365 11001790	58区 3tr 鏡丸	瓦 軒瓦	-	-	-	灰	焼瓦	写真図版 36-365 20112449
図102-366 11001789	58区 3tr 鏡丸	瓦 棟瓦	長 25.5	幅 29.0	厚 1.9	に赤・褐	音無瓦窯製	写真図版 36-366 20112479
図106-367 11001921	5CS区 9層	陶器 小瓶	7.2*	-	-	胎土:灰白	福岡力 19c 前半	写真図版 36-367 20112372・2373
図106-368 11001761	5CS区 9層	陶器 瓶	-	7.8*	-	胎土:明褐色	肥前 17c 後半～18c 前半	写真図版 36-368 20112355
図106-369 11001760	5CS区 9層	土師器 鉢	12.1*	10.4*	5.9	に赤・褐・黒褐	-	写真図版 36-369 20112421
図106-370 11001758	5CS区 3層	白磁 小杯	-	2.6	-	胎土:灰白	肥前 19c 前半	写真図版 36-370 20112466
図106-371 11001759	5CS区 3層	白磁 紅皿	4.9*	0.9	1.6	胎土:白	肥前 19c 前半	写真図版 36-371 20112354
図106-372 11001757	5CS区 3層	染付磁器 小皿	8.0	2.6	2.9	胎土:灰白	肥前 19c 前半	写真図版 36-372 20112465
図106-373 11001764	5CN区 1層	陶器 皿	-	4.0*	-	胎土:に赤い黄緑	山瀬就力 16c 末～17c 初	写真図版 36-373 20112391
図106-374 11001762	5CN区 1層	陶器 碗	-	4.4*	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半	写真図版 36-374 20112356
図106-375 11001765	5CN区 1層	染付磁器 小杯	-	-	-	胎土:灰白	肥前 19c 前半	写真図版 36-375 20112469
図106-376 11001767	5CN区 1層	染付磁器 柄口	-	5.4*	-	胎土:灰白	肥前 19c 前半	写真図版 36-376 20112357
図106-377 11001756	5区 21tr1層	青磁 小瓶	-	3.0	-	胎土:白	肥前 17c 末～18c 以降	写真図版 36-377 20112467
図106-378 11001755	5区 21tr1層	陶器 火入	-	5.4*	-	胎土:に赤い赤褐	肥前 17c 末～18c 前半	写真図版 36-378 20112468
図106-379 11001754	5区 21tr1層	瓦質土器 火鉢	-	24.1*	-	外:褐灰 内:灰黃褐色	底部糸切	写真図版 36-379 20112420
図106-380 11001796	5区 8tr	染付磁器 碗	12.4	4.8	5.4	胎土:灰白	肥前 18c 後半～19c 初	写真図版 36-380 20112477
図106-381 11001570	5A区 7tr1層	染付磁器 碗	-	-	-	胎土:灰白	肥前 18c 前半～中頃	写真図版 36-381 20112307
図106-382 11001571	5A区 7tr1層	染付磁器 碗	-	-	-	胎土:灰白	肥前 17c 後半	写真図版 36-382 20112308
図106-383 11001741	5区 21tr1層	土製品 動物型	-	-	-	に赤い黄緑	犬	写真図版 36-383 20112489
図106-384 11001859	5区 16tr	鉄製品 鍛錠玉	-	径 1.2	-	-	-	写真図版 36-384 20112484
図106-385 11001865	5CS区	石製品 石臼	径 30.5*	-	12.6	-	石刃に使用	写真図版 36-385 20112491
図106-386 11001866	5C区 20tr7層	石製品 石臼	径 33.0*	-	8.8	-	-	写真図版 36-386 20112492
図106-387 11001740	5C区 21tr1層	瓦 軒瓦	-	-	-	灰	焼瓦	写真図版 36-387 20112448
図106-388 11001736	5C区 21tr1層	瓦 棟瓦	長 24.4*	幅 12.3*	厚 2.4	灰	焼瓦	写真図版 36-388 20112443
図106-389 11001738	5CS区 3層	瓦 丸瓦	長 14.6*	幅 8.9*	厚 2.2	灰	焼瓦	写真図版 36-389 20112447
図106-390 11001737	5CS区 3層	瓦 丸瓦	長 14.5*	幅 9.4*	厚 1.9	灰	焼瓦	写真図版 36-390 20112446

5　まとめ

大野遺跡 1・4～8区では、縄文～古墳時代の遺物、中世～近世の遺構・遺物を調査した。このうち、中世と近世前期の様相、また大野代官所跡に関連することについてまとめておきたい。

中世における大野遺跡の様相

大野遺跡 1・4～8区では、中世の明確な遺構は少ないものの、出土遺物は多く、大野地区に中世の遺跡が展開していたことは明らかである。

中世前期については、1B・5B 区からまとまって遺物が出土している。白磁や青磁など 12 世紀代の陶磁器も多く出土するが、土師器杯・小皿では明確な底部ヘラ切のものは確認できなかつたので、主として鎌倉時代の 13 世紀代を中心とする時期のものとみられる。恐らく、5B 区東側の斜面地を中心に鎌倉時代前期の集落などが営まれていたと考えられる。

5E 区で確認された石敷遺構は、明確な時期を特定できないものの、鎌倉時代の可能性がある。遺構の性格も特定できなかつたが、このような石敷遺構が一般的な集落に伴うものとは考えにくいので、在地領主クラスの館や寺院など階層の高い集落などが存在したことが推測される。

中世後期については、1B・5B 区で遺物があまりみられなくなるのに対して、その他の地区で出土量が増加する。特に、6B・C 区で掘立柱建物・柵列を構成する小穴群が検出され、1A 区南部や 4 区で遺物がまとまって出土した。6B・C 区の建物群は、布掘りの建物が考えうことや、柱穴に敷石をもつものがあることから、階層の高い建物群の可能性があり、出土遺物から 15 世紀代を中心とする時期であろう¹⁾。また、1A 区南部の SD1862 からまとまって中世後期の遺物が出土していることから、4 区やその東側の斜面地を中心とした地区にも集落が展開していたことが推測される。

出土遺物のうち陶磁器類では、12 世紀～13 世紀前半の白磁碗IV類、同安窯系青磁、竜泉窯系青磁碗 I・II 類が多く、14・15 世紀代のものが一定量あり、16 世紀代のものは少ないという印象である。個々の資料では、茶入と思われる褐釉陶器小壺（151）や黒釉磁器の天目碗（152）が出土しており、喫茶が受容されていたことをうかがわせる。28 は褐釉陶器鉢で、この地域ではあまり類例がないものである。156 は瀬戸・美濃系の灰釉陶器皿で、大窯以前の古瀬戸段階のものとみられる。また、中世に限定できない資料ではあるが、仏具と思われる杓子状銅製品（167）が出土した。在地系土器では、防長系瓦質土器が出土する一方、佐賀平野東部を中心に分布する土師器鍋 II・III a 類もあり、この地域の煮炊具の様相が複雑であることを示している。

このように、大野遺跡の中世については不明な点も多いものの、ある程度階層が高い集落などの存在が推測される。ただ、遺物の面からすると、大野遺跡での主体的な時期と重複する西畠瀬遺跡（佐賀県教委 2008）と比較して、優劣の差が顕著であるとは言い難い。戦国期にはなるが、大野地区では確実な山城が確認されておらず、山内^{さんない}の実質的総括者であった戦国武将神代勝利に関する記録の中に「大野氏」はほとんどみられないことから、在地有力者の拠点であった可能性は低いのではないかと思われる。これは、包含層 F や SD1862 などの短時間に堆積したと考えられる層位、4 区の土石流を思わせる巨石を含む堆積層や、近世の堆積層が非常に厚いことに表れるように、土砂災害が頻発する地区であった可能性があることに起因するのではないかろうか。

さて、大野地区には確実な史料はないものの、正応 3（1290）年創建と伝えられる金福寺が所在する。これまでの調査で、金福寺に直接的に関わる遺構・遺物は確認されていないが、隣接する 6B・C 区の建物群が関連する可能性はある。しかし、15 世紀代とみられる建物群であり、創建とされる時期とは隔たりがある。13 世紀末に近い可能性がある遺構として 5E 区の石敷遺構があり、これが創建時の金福寺と関連する可能性はないであろうか。現在の金福寺が立地する西側の調査区である 2 区を含め、周辺では鎌倉時代後期の遺物が少なく、金福寺が現在の

位置で創建されたかは、間接的ながら疑問が残る状況である。前述のように、土砂災害が頻発する地区であった可能性があり、地区内での移転は充分に考えられることである。現時点での調査成果では不十分な点が多いものの、当初大野代官所跡が所在する地区に金福寺があり、後に移転したことを考慮しておく必要がある。なお、正応3年は弘安4（1281）年に起こった弘安の役の後であり、元寇と関連して創建された寺院である可能性があろう。

近世前期における大野遺跡の様相

大野遺跡1・4B・5B・8区などで確認された遺構検出面は近世と考えられ、遺構としては掘立柱建物や柵列などが確認され、遺物は少ないものの、17世紀代のものが主体を占めると思われる。

掘立柱建物には、主軸方位が東傾するものとほぼ真北のものがみられ、SB1003（真北）がSB1006（東傾）より新しいことから、東傾の建物群から真北の建物群へと変遷したことが推測される。真北の群であるSB5013出土遺物は、18世紀代の遺物もわずかにみられるが17世紀後半のものが多く、真北の建物群は17世紀後半～末を中心とした時期であろう。SB5013は布掘りの掘方の建物で、蔵など土壁をもつ建物であった可能性がある²¹⁾。東傾の群は出土遺物が少なく、明確な時期は不明であるが、周辺から16世紀末～17世紀前半の遺物が出土していることから、17世紀前半に主体があるものと思われる。

また、明確な遺構はないものの4A区で16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土し、周辺の試掘坑でも17世紀前半の遺物がみられるので、4区周辺にこの時期の集落が展開していたことが考えられる。中世の項で報告した4区出土の16世紀代の中国磁器は、この集落に伴うものであったかもしれない。

近世の建物群については、再検討を行えば、さらに掘立柱建物や柵列が増える可能性が高く、その後に性格などを考察すべきであるが、現時点での考えを提示しておく。まず、布掘りの建物があることから、一般的な村落ではなく、階層が高い建物群であることが想定される。遺跡北側の2・3区で近世初期の役所的な施設と考えられる企画的に配置された建物群が確認されていることは、1区を中心とした建物群の性格を考える上で示唆的である。また、神代勝利の菩提寺である宗源院跡（東畠遺跡6G区）では、18世紀代の第2面で真北を意識した寺域が造営されており（佐賀県教委2011b）、寺院など上位階層の建物に真北を意識したものが山内に出現する時期と、布掘りの建物を含む真北の群の時期が近いことも指摘できる。

このように、1区を中心とした掘立柱建物は上位階層の建物群であった可能性がある。時期はやや新しいが、宝永5（1708）年大野村に目代屋敷が設置され（吉浦家文書）、享保4（1719）年に「御用がないため」廃止されたという記録²²⁾があり、関連するかもしれない。大野地区は、2・3区の建物群、1区を中心とした建物群、目代屋敷、そして大野代官所と続く山内を支配する拠点となっていたことが推測される。これは、この地が交通の要衝であることとともに、有力な在地勢力がいなかったことも要因となっているのではなかろうか。

大野代官所跡について

今回の調査では、大野代官所跡前面（5C区）で道路遺構を検出した。ただ、他に明確に代官所に関連すると思われる遺構は確認できなかった。

道路遺構は、現存する石垣と同時に構築されたと考えられ、整地は急入りに行われており、縁石などを伴っている。造成土やその下層から19世紀前半の遺物が出土しており、19世紀中頃以降に構築されたものと考えられる。また、造成土中から丸瓦が出土しており、石垣構築以前に本瓦葺きの建物が存在したことをうかがわせる。

大野代官所の設置について正確な史料はないが、文政12（1829）年の小城藩主による山内巡見の史料には代官所がみられないことを考え合わせると、天保9（1838）年に小城支藩領内の山内郷に目代が置かれたことに関連付けるのが妥当であろう。また、「小城郡山内郷大野村見取絵図」には代官所の前に幅広い道が描かれている。

このようなことから、道路遺構は代官所整備の一環として19世紀中頃の幕末期に構築されたと考えられる。道

路遺構以前の本瓦葺きの建物については明確ではないが、寺院などの伝承はないことから、代官所に関連するものと考えるのが自然であろう。したがって、代官所は少なくとも 1 回は改修を行ったことが示唆される。

大野代官所跡については佐賀市教育委員会によって史跡整備が進行中であり、それに伴う発掘調査で、出入口は石段であったこと、石垣天端石の上に石列があること、石垣裏側の礎石がないことなど⁴⁾、これまで明らかではなかった代官所の姿が徐々に判明しつつある。今後、大野代官所について様々な視点からの議論に期待したい。

注

- 1) ただ、すべての小穴が中世後期ではないので、注意が必要である。
- 2) 宮武正登氏の御教示による。
- 3) 平成 23 年 5 月 21 日に開催された講演会での野口理隆氏の発表による。
- 4) 現地説明会資料などによる。

第 4 章 引用・参考文献

- 上田秀夫 (1982) 「14～16 世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
小野政敬 (1982) 「15、16 世紀の枕付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会 (2000) 「意瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書」富士町教育委員会
九州近世陶磁学会 (2000) 「九州陶磁の編年」
佐賀県教育委員会 (2007) 「東堀瀬遺跡 1・大野遺跡 1」佐賀県文化財調査報告書第 170 集
佐賀県教育委員会 (2008) 「西堀瀬遺跡 1」佐賀県文化財調査報告書第 176 集
佐賀県教育委員会 (2009) 「西堀瀬遺跡 2・大中遺跡」佐賀県文化財調査報告書第 180 集
佐賀県教育委員会 (2010) 「東堀瀬遺跡 2・祇園城跡」佐賀県文化財調査報告書第 185 集
佐賀県教育委員会 (2011a) 「小ヶ官遺跡・入道遺跡・九郎遺跡」佐賀県文化財調査報告書第 186 集
佐賀県教育委員会 (2011b) 「東堀瀬遺跡 3」佐賀県文化財調査報告書第 190 集
佐賀県教育庁文化財課 (1998) 「大野遺跡 (1区)」佐賀県文化財年報 3
佐賀県教育委員会 (2007) 「中原遺跡 2・3 区の調査」佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 19 集
太宰府市教育委員会 (2000) 「太宰府塙坊跡 X・Y 陶磁器分類編」太宰府市の文化財第 49 集
全国神代ゆかりの会 (1980) 「神代家伝記」「神代家とその一族」1 号
德永真紀 (1990) 「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会
富士町誌編さん委員会 (1968) 「富士町誌」富士町教育委員会
富士町史編さん委員会 (2000) 「富士町史」富士町
富士町教育委員会 (2003a) 「富士町内遺跡発掘調査報告書 平成 7 年～13 年度」富士町文化財調査報告書第 2 集
富士町教育委員会 (2003b) 「中原遺跡 1 区」富士町文化財調査報告書第 3 集
森田 勉 (1982) 「14～16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
森木朝子・片山まび (2000) 「博多出土の高輪・朝鮮陶磁の分類試案－生産地編年を視座として－」『博多研究会誌』第 8 号 博多研究会
山本信夫 (1990) 「統計上の土器－歴史時代上師器の編年研究によせて－」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

第5章 フルタ遺跡

第5章 フルタ遺跡

1 フルタ遺跡の概要

フルタ遺跡は、佐賀市富士町大字大野字二本松に所在する（図107）。

遺跡は、嘉瀬川支流神水川の中流域右岸に位置し、移転前の北山中学校の校舎や田畠として利用されていた。遺跡北側には大野地区の氏神である春日神社が隣接し、延徳・明応年間（1490年頃）に小城郡14ヶ山の地頭野辺田豊前守藤原朝臣政房が勧請したと伝えられる。川を挟んだ東側には、正応3（1290）年創建と伝えられる宝瑞山金福寺が所在している。また、北側の中原地区の薬師堂には平安時代後期の作とみられる薬師如来像（佐賀県重要文化財）が安置されており、薬師堂周辺には中世後期の宝篋印塔や板碑が置かれている。藩政期には小城鍋島家（小城支藩）領の山内郷に属しており、遺跡対岸には山内支配のための大野代官所が江戸時代後期に設置されている。遺跡周辺は、江戸時代後期の「大野村見取図」において今回の調査で1・3区にあたる部分に「フルタ」、2区にあたる部分に「甚兵衛ヤシキ」という名が記されている。また、中原地区は絵図などで「中原宿町」と呼ばれており、佐賀・小城山内郷で唯一「宿」の名をもつ集落であり、中原・大野地区が交通の要衝であったことが分かる。

フルタ遺跡は、嘉瀬川ダム建設に伴い実施された確認調査で周知化された遺跡であるが、春日神社周辺からは石器などが採集されており、遺跡の存在は知られていた。遺跡は、標高約298mの河岸段丘上と、その西側の一段高くなった標高約302～317mの谷部先端の範囲である。北側には中原遺跡が隣接し、神水川を挟んだ対岸には大野遺跡が所在している。中原遺跡では、当時の富士町教育委員会が調査した1区で、縄文時代早期を中心とした遺物包含層が確認され、早水台式・下菅生B式・田村式・手向山式・平桙式・塞ノ神式・阿高式・三万田式土器などが出土しており、佐賀市教育委員会が調査した2・3区で中世前期の掘立柱建物や祭祀遺構、中世後期の水田跡などが確認されている。大野遺跡では、縄文時代後期後葉・中世～近世の遺跡が調査されており、大野・中原地区の歴史が徐々に明らかになりつつある。

今回の調査では、縄文時代・中世～近世の遺跡を確認した。調査にあたって北山中学校敷地内を1区、その西側の一段高くなった部分を2区、1区東側を3区としているが、本書では特に区分して報告は行わない。

縄文時代では、遺構や遺物包含層は確認されなかったが、1区中世の包含層から縄文時代晩期末の刻目突甃土器とそれに伴うと考えられる石器が出土した。出土量は少ないが、当地における弥生時代開始期の様相を知る上で貴重な遺物である。

中世では、1区で自然流路と思われる溝状遺構2条を確認し、西側の谷部から続くものとみられる。出土遺物が少なく、明確な時期は不明であるが、中世後期に埋没したと思われる。遺物は平安時代末期の12世紀代のものが多く、隣接した地区にこの時期の集落などが営まれたことを推測できる。また、戦国期の遺物が少量出土しており、周辺に遺跡が存在したことをうかがわせる。

近世では、2区で柱穴を含む小穴群を検出した。調査区が狭小なため、建物等の全体像は不明であるが、谷部に造成された17世紀代の屋敷地の一部であると考えられる。絵図に記された「甚兵衛ヤシキ」と関連がある屋敷地の可能性がある。

以上のことから、フルタ遺跡のうち神水川の河岸段丘上では縄文時代末に一時的な集落、平安時代末に小規模な集落が営まれ、中世後期に埋没して以降水田となり、谷部先端においては江戸時代前期に屋敷地が造営されていたものと推測される。

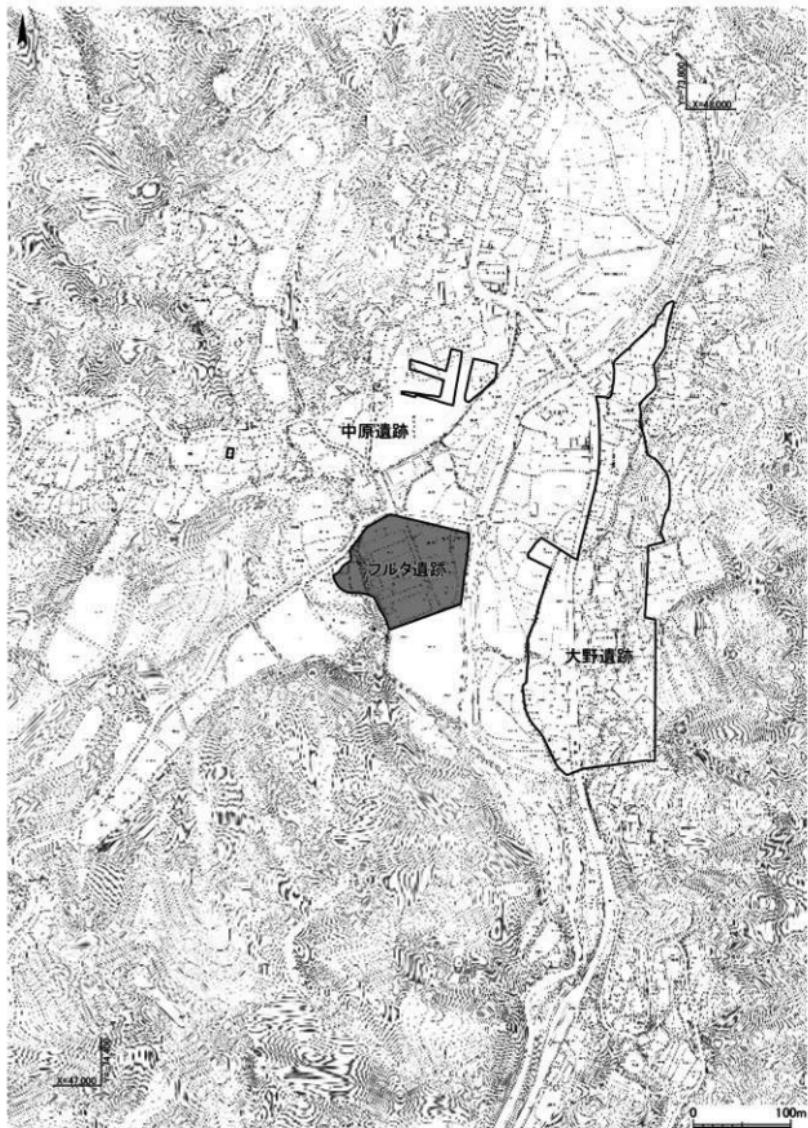


図 107 フルタ遺跡周辺の地形 (1/5,000)

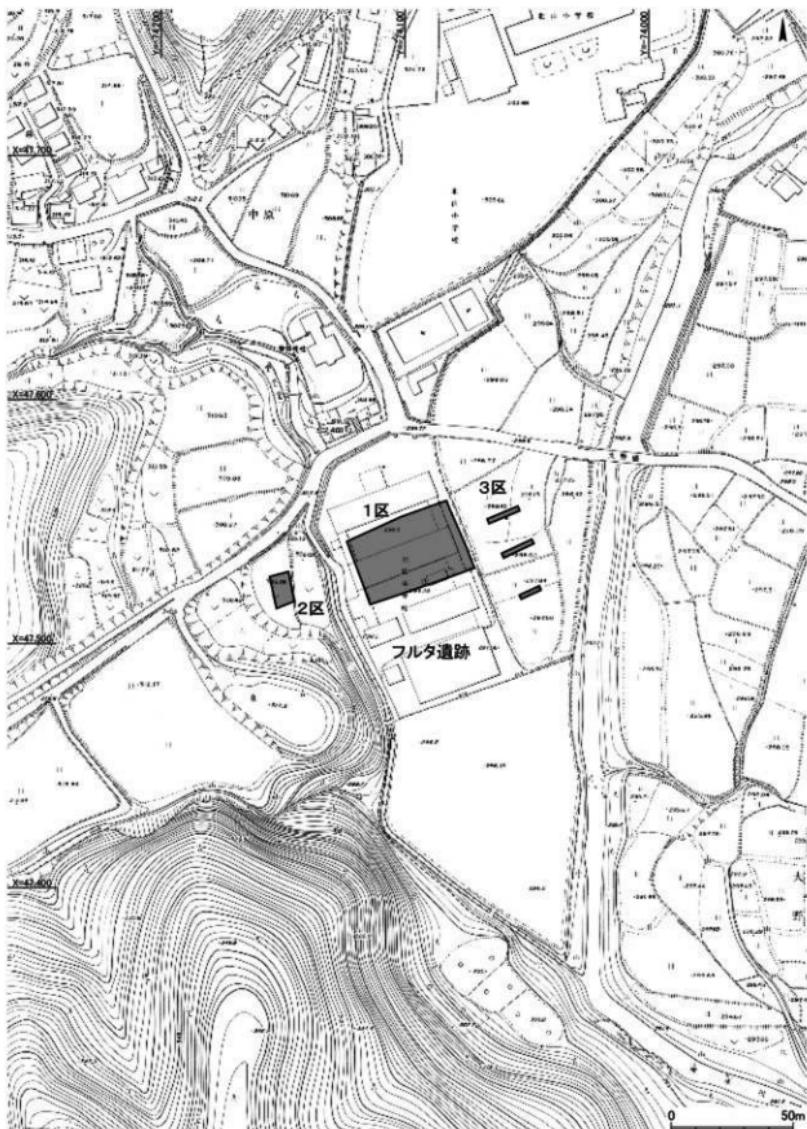


図108 フルタ遺跡1～3区の位置 (1/2,000)

2 繩文時代の遺物

繩文時代の遺物は、主に1区試掘坑の下層から出土しているが、層位的には中世の遺物と混在しており、繩文時代の一次的な遺物包含層は確認されていない。土器は、小片のため図示していない早期中葉の押型文土器が1点あるが、それ以外はすべて晩期末の刻目突帯文土器を中心としたものと考えられる。図示したのは深鉢・鉢のみであるが、この他に壺と思われる丹塗土器片がある。ただ、浅鉢は確認できない。石器はすべて打製石器で、磨製石器は出土しなかった。定形石器として石鏃・削器があるが、大部分は剥片類である。なお、繩文時代の遺構は検出されなかった。

縄文土器（図109）

1は刻目突帯をもたない深鉢口縁部で、器面調整は条痕である。2～6は刻目突帯文土器の深鉢で、2～5はいわゆる「屈曲形」で、6は「單純形」になるものと思われる。口縁部突帯は端部に接するように貼り付けられており、刻目は大きなものがほとんどである。器面調整は、内面がナデで、外面に条痕を残すものが多いが、4は外面にナデを施している。7は深鉢の底部で、器面調整はナデである。8は鉢かと思われる底部で、器面調整は外面ナデ、内面条痕のちナデである。

打製石器（図109）

9～18は石鏃で、両面に丁寧な調整剥離を施すものがほとんどである。9～16は基部が平基のもので、平面の形状は二等辺三角形であるが、正三角形に近い形状のものが一定量を占め、10・13のように左右がやや非対称なものもある。14は片面の一部に自然面を残している。17・18は平面の形状が二等辺三角形で、基部が微凹基のものである。図示していないが石鏃未製品も出土しており、使用された石材は無斑品質安山岩に比べ、黒曜岩の比率が高い。

19・20は無斑品質安山岩製の削器で、ともに縁部に両面から調整剥離を施し、刃部を作出している。

表8 フルタ遺跡縄文時代の出土土器

井戸番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	深さ			
図 109-1 11001849	1区 3tr4 層	縄文土器 深鉢	-	-	-	黒		写真図版 40-1 20111991
図 109-2 11001851	1区 4tr5 層	縄文土器 深鉢	-	-	-	棕	外面剥付着	写真図版 40-2 20111993
図 109-3 11001852	1区 4tr5 層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外：黒・棕 内：黒		写真図版 40-3 20111994
図 109-4 11001853	1区 3tr4 層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外：棕 内：黄灰	外面剥付着	写真図版 40-4 20111995
図 109-5 11001854	1区 2+3tr3 層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外：にぶい黄棕・赤棕 内：にぶい黄褐		写真図版 40-5 20111996
図 109-6 11001850	1区 4tr5 層	縄文土器 深鉢	-	-	-	外：にぶい黄棕・棕 内：褐灰		写真図版 40-6 20111992
図 109-7 11001856	1区 4tr5 層	縄文土器 深鉢	-	6.6	-	外：棕・黒褐 内：暗灰		写真図版 40-7 20111998
図 109-8 11001855	1区 4tr5 層	縄文土器 鉢	-	10.0*	-	外：灰褐・にぶい赤褐 内：灰	外面剥付着	写真図版 40-8 20111997

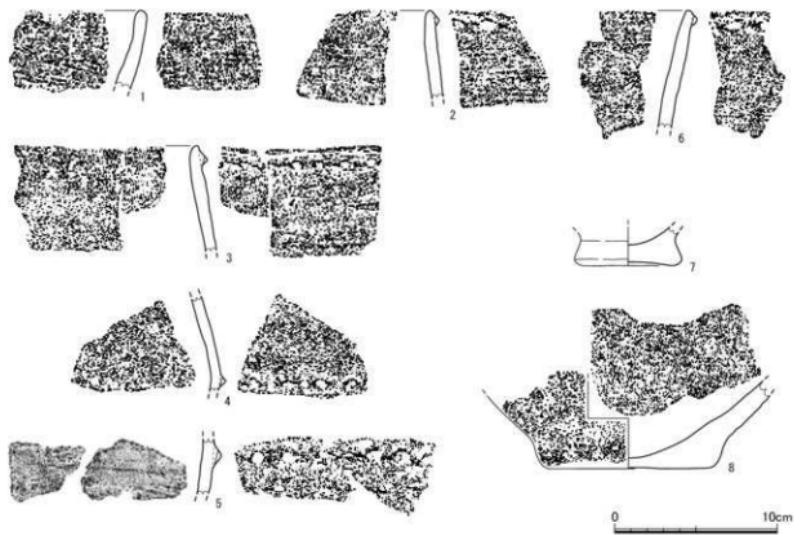


図109 織文時代の遺物 (1~8は1/3、9~18は2/3、19・20は1/2)

表9 フルタ遺跡縄文時代の出土石器

特徴・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 mm			重 量 g	石 材	備 考	写真図版 写真登録番号
			長さ	幅	厚さ				
岡109-9 10001604	1区 4tr4層	打製石器 石鏃	1.5	1.2	0.3	0.4	黒曜岩	完形	写真図版 40-9 20111057
岡109-10 10001610	1区 4tr5層	打製石器 石鏃	1.5	1.2	0.2	0.4	無斑品質安山岩	完形	写真図版 40-10 20111063
岡109-11 10001609	1区 4tr5層	打製石器 石鏃	1.6	1.6+	0.2	0.6	無斑品質安山岩	ほぼ完形	写真図版 40-11 20111062
岡109-12 10001608	1区 4tr5層	打製石器 石鏃	1.8	1.6+	0.2	0.8	無斑品質安山岩	ほぼ完形	写真図版 40-12 20111061
岡109-13 10001606	1区 2tr1層	打製石器 石鏃	1.9	1.6	0.4	1.0	黒曜岩	完形	写真図版 40-13 20111059
岡109-14 10001607	1区 2tr1・2層	打製石器 石鏃	1.9+	1.4	0.3	0.8	無斑品質安山岩	頭部先端欠損	写真図版 40-14 20111060
岡109-15 10001605	1区 2tr1層	打製石器 石鏃	2.0	1.8	0.3	1.0	黒曜岩	完形	写真図版 40-15 20111058
岡109-16 10001612	1区 4tr5層	打製石器 石鏃	2.3	1.4	0.4	1.0	黒曜岩	完形	写真図版 40-16 20111065
岡109-17 10001611	1区 4tr5層	打製石器 石鏃	2.4	1.4	0.4	1.0	黒曜岩	完形	写真図版 40-17 20111064
岡109-18 10001613	1区 4tr5層	打製石器 石鏃	2.1	1.4	0.3	0.8	黒曜岩	ほぼ完形	写真図版 40-18 20111066
岡109-19 10001614	1区 2tr3層	打製石器 削器	6.2	3.5	1.4	30.6	無斑品質安山岩	完形	写真図版 40-19 20111067
岡109-20 10001615	1区 3tr4層	打製石器 削器	6.8	3.7	1.6	36.2	無斑品質安山岩	完形	写真図版 40-20 20111068

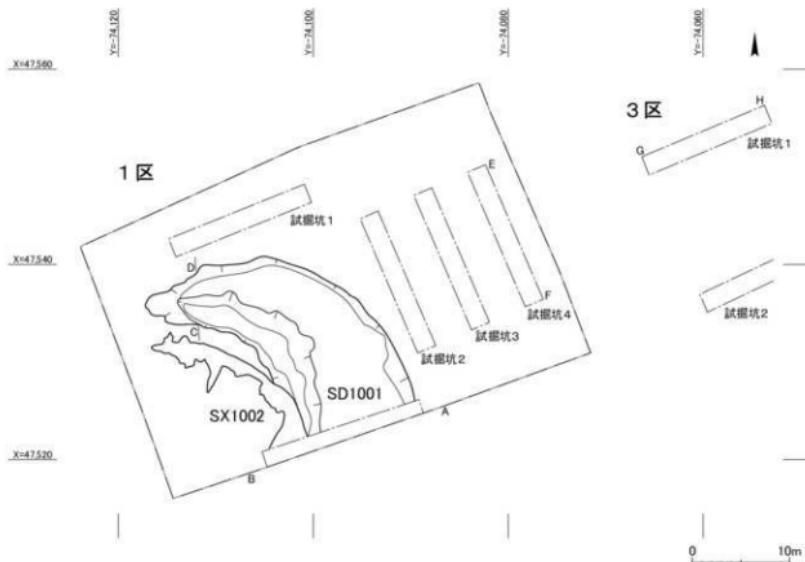


図110 1区の遺構分布 (1/500)

3 中世の遺構と遺物

1) 遺構と遺構に伴う遺物

中世の遺構としては、中世後期の自然流路と思われる溝状遺構2条を1区で確認した。

SX1001 (図 110・111)

1区西部に位置し、調査区北西部から東へ延び、緩やかに屈曲して、南へと続く溝状遺構である。SX1002 よりも古い。長さ 25 mほど確認され、最大幅 12.5 mで、西から南へ行くほど深くなり、検出面からもっとも深いところで 0.7 mである。遺構の形状からみて、人為的に掘削されたものではなく、土層観察で流水や滌水の痕跡がないことから、短期間に形成、埋没した自然流路の可能性がある。遺物は白磁小片、瓦質土器鍋が出土した。

SD1001 出土遺物 (図 114)

21 は瓦質土器鍋で、内面にハケメが施される。

SX1002 (図 111・113)

1区西部に位置し、SD1001 西側に沿うように屈曲しながら南へ続く溝状遺構である。SD1001 よりも新しい。長さ 15 mほど確認でき、幅 0.4 ~ 0.8 m、検出面からの深さ約 0.3 mで、SD1001 と同じように南に行くほど深くなる。遺構の形状から人為的に掘削したものとは考えにくく、SD1001 と同様の自然流路であった可能性が高いが、内部に礫石が多数確認される。礫石は丁寧に敷き詰めたというものではないので、意図的なものか、あるいは自然作用によるものか、判断が付かない。遺物は瓦質土器鍋・茶釜・擂鉢が出土した。

SX1002 出土遺物 (図 114)

22 は瓦質土器擂鉢で、内面と口縁端部にハケメが施される。

2) 遺構に伴わない遺物

中世の遺物は、1区遺物包含層の下層を中心出土しており、1区では中世前期のものが大部分を占めるが、2区では戦国期のものもみられる。2区の遺物のうち、小穴から出土したものもあるが、2区の状況から近世初期に伴うもの、あるいは混入したものと思われる。

1区中世の出土遺物 (図 114)

23 ~ 25 は白磁碗で、23 は碗IV類、24 は碗V ~ VII類、25 は内面を縱白堆線で分割する碗VII 4類である。24 の口縁外側には、別個体の破片が溶着している。26 は白磁皿で、口禿のIX類と考えられる。底面の軸は板状の工具でのぼしているが、釉が掛かっていない部分がある。

27 は外面に無輪蓮弁文が施される竜泉窯系青磁碗II a類である。図示しなかったが、他に竜泉窯系青磁碗では、外面無文のI類、鍋蓮弁文のII bc類が出土している。

28 は中国産の灰釉陶器壺の底部である。29 は中国産の褐釉陶器の合子蓋である。

30 は常滑窯系の片口鉢で、口縁端部に自然軸が掛かる。31・32 は東播諸窯系とみられる須恵器系陶器捏鉢の口縁部である。

33・34 は中世後期の陶磁器である。33 は白磁森田 E 群の皿である。34 は朝鮮半島産の灰青陶器皿で、内外面に砂目がみられる。

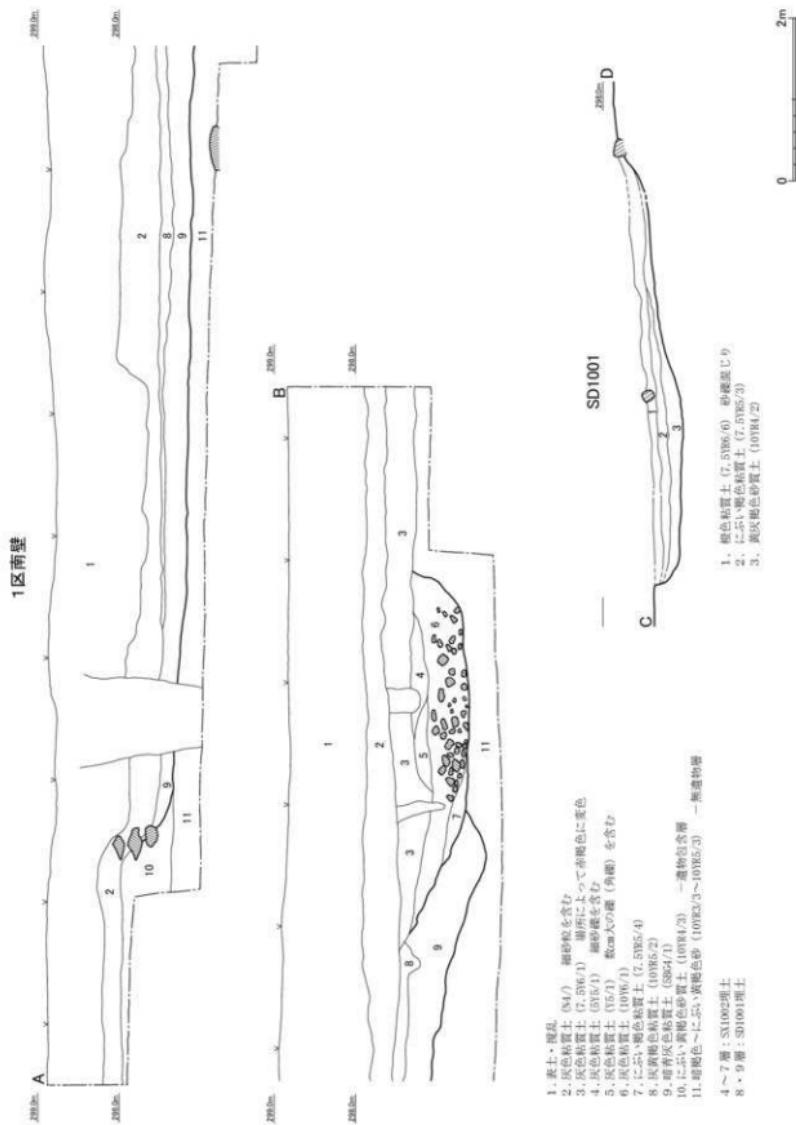
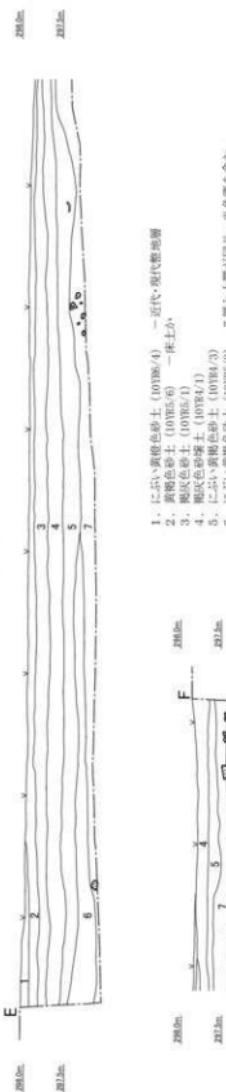


図 111 1区・SD1001の土層 (1/60)

1区試掘坑4



3区試掘坑1

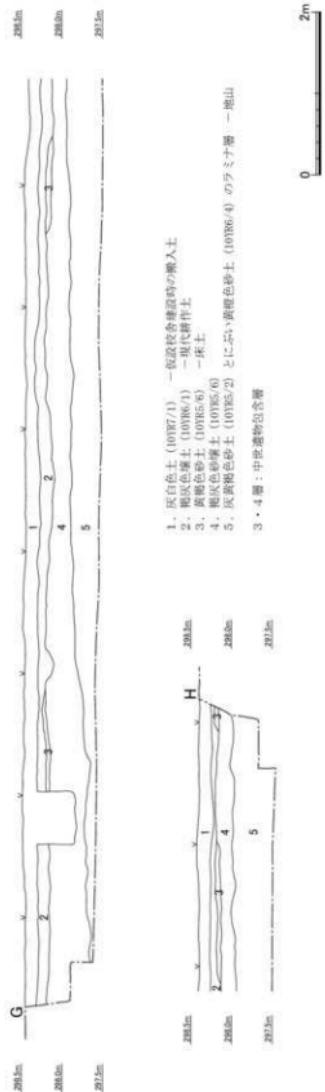


図 112 1・3区の土層 (1/60)



図 113 SX1002 (1/60)

2区中世の出土遺物（図114）

35・36は竜泉窯系青磁碗で、35は外面に線描蓮弁文が施される上田B IV類、36は内面見込みにスタンプ文が施され、高台内は無釉である。37・38は青花で、37は景德鎮窯系の皿小野B1群、38は福建系の碗である。39は朝鮮半島産の灰青陶器皿で、内外面に砂目がみられる。

40は防長系の瓦質土器足鍋である。図示していないが、防長系の擂鉢も出土している。

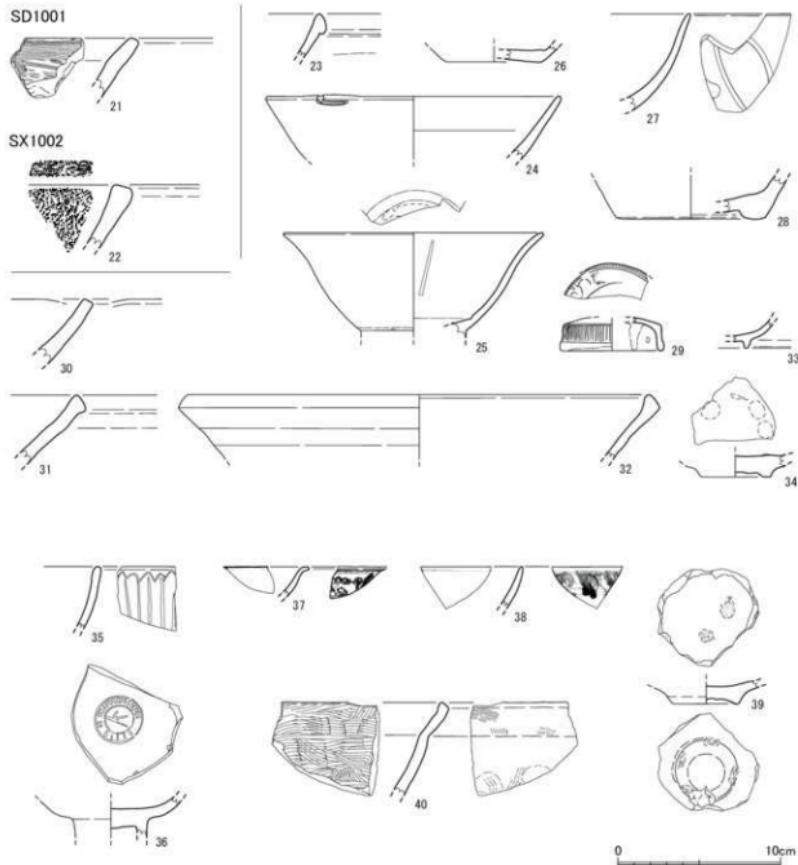


図114 中世の遺物（1/3）

表 10 フルタ遺跡中世の出土遺物

排列・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色 調	備 考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 114-21 11001040	1区 SD1001	瓦質土器 罐	-	-	-	外：灰・暗灰黄 内：灰		写真図版 40-21 20111299
図 114-22 11001039	1区 SX1002	瓦質土器 罐	-	-	-	灰		写真図版 40-22 20111298
図 114-23 11001036	1区 3tr3 割	白磁 碗	-	-	-	灰白	鏡IV類	写真図版 40-23 20111296
図 114-24 11001046	1区 3tr3 割	白磁 碗	18.2*	-	-	胎土；灰白	鏡V~VI類	写真図版 40-24 20111339
図 114-25 11001041	1区 3tr4 割	白磁 碗	16.0*	-	-	灰白	鏡VI~VII類	写真図版 40-25 20111338
図 114-26 11001043	1区 3tr3 割	白磁 皿	-	5.8*	-	灰白	鏡IX類	写真図版 40-26 20111301+1302
図 114-27 11001037	1区 4tr4 割	青磁 碗	-	-	-	胎土；褐灰	竜泉窯系 鏡II a類	写真図版 40-27 20111337
図 114-28 11001044	1区 2tr3 割	陶器 壺	-	9.2*	-	胎土；灰白・にぶい緑	中国	写真図版 40-28 20111303+1304
図 114-29 11001048	1区 4tr4 割	陶輪陶器 合子蓋	6.4*	-	-	胎土；灰白	中国	写真図版 40-29 20111307
図 114-30 11001042	1区 2tr1+2 割	陶器 片口鉢	-	-	-	外：灰赤 内：泥・赤褐色	常滑窯系	写真図版 40-30 20111300
図 114-31 11001038	1区 2tr3 割	須恵器系陶器 鉢	-	-	-	灰白・灰	東播諸窯系	写真図版 40-31 20111297
図 114-32 11001047	1区 4tr5 割	須恵器系陶器 鉢	29.6*	-	-	灰	東播諸窯系	写真図版 40-32 20111348
図 114-33 11001049	1区 3tr1 割	白磁 皿	-	5.6*	-	胎土；灰白	森田E群	写真図版 40-33 20111308
図 114-34 11001045	1区 表深	陶器 皿	-	4.3	-	胎土；灰	朝鮮王朝期 灰青陶器	写真図版 40-34 20111305+1306
図 114-35 11001052	2区 4 割	青磁 碗	-	-	-	胎土；灰白	竜泉窯系 鏡上田B IV類	写真図版 40-35 20111311
図 114-36 11001050	2区 5 割	青磁 碗	-	-	-	胎土；灰白	竜泉窯系	写真図版 40-36 20111309+1310
図 114-37 11001054	2区 3 割	青花 碗	-	-	-	胎土；白	景德镇窯系 小野B1群	写真図版 41-37 20111314+1315
図 114-38 11001053	2区 P2045	青花 碗	-	-	-	胎土；灰白	福建系	写真図版 41-38 20111312+1313
図 114-39 11001056	2区 P2021	陶器 皿	-	3.8	-	胎土；にぶい黄緑	朝鮮王朝期 灰青陶器	写真図版 41-39 20111316+1317
図 114-40 11001078	2区 4 割	瓦質土器 足罐	-	-	-	外：灰黄褐 内：黄灰	防長系 外面煤付着	写真図版 41-40 20111346

4 近世の遺構と遺物

1) 遺構

近世の遺構としては、2区で柱穴を含む小穴群を確認した（図115）。調査区が狭小であるため、掘立柱建物や柵列を確定することはできないが、柱材や柱痕跡が残存するものがあり、屋敷地の一部であったことは確実であり、「甚兵衛ヤシキ」という絵図の記載に関連するものと思われる。2区南部には造成土が確認され、造成土中に近世の遺物が含まれるため、近世に斜面地を平坦に造成して屋敷地としていることが判明する。小穴は重複して多数検出されており、複数時期の建物の存在が推定され、調査時の所見では、柱穴埋土は硬くしまっていた。出土遺物からみて、屋敷地は17世紀代のもので、それ以前は田畠に変遷したものと推測される。

また、明確な遺構は確認できないが、1区上層から近世の陶磁器が出土していることと、「フルタ」という地名などから、1・3区は近世以降水田として利用されたものと考えられる。

2) 遺物

近世の遺物は、2区を中心に出土しており、1区堆積層の上部からも出土している（図117）。在地土器については、中世に遡る可能性があるものもあるが、分別が困難なためこの項で報告する。なお、器種ごとに記述しているため、出土位置については表を参照されたい。

41～54は肥前陶器である。41は山瀬窯製とみられる皿である。42・43は内野山窯製と思われるいわゆる灰釉溝縁皿である。44は天目形の碗で、鉄軸が施される。45は碗で、灰釉が施される。46～53は内野山窯製の碗である。46は灰釉、47・48は内外面とも銅緑釉、49～51は外面銅緑釉、内面透明釉、52・53は鉄軸が施される。54は擂鉢で、口縁部にのみ鉄軸が施される。41は16世紀末～17世紀初頭、42～46は17世紀前半、47～54は17世紀後半を中心とする時期のものである。この他実測図は掲載していないが、17世紀後半～18世紀代とみられる肥前陶器の牛形置物が出土している（写真図版41）。

55・56は磁器に近い胎土の陶器である。55は青磁もしくは白磁を意識した灰軸が施された碗で、費付内側付近に砂目痕がみられる。56は小壺で、黒色の釉が外面に掛かる。

57は肥前青磁の碗で、高台無軸の可能性がある。58は肥前白磁もしくは青磁皿で、内面見込みは蛇の目軸剥ぎされ、鉄漿が塗られている。

59～61は肥前染付磁器碗である。59の口縁端部は釉がはじけており、60の内面には一部釉が掛かっていない部分がみられる。61は外面に草花文を描いている。59・60は17世紀後半、61は17世紀前半のものである。62は肥前色絵磁器碗で、素地は乳白色に近い色調で、青・緑・赤・黒の色絵が施される。

63は底部糸切の土師器杯で、戦国期に遡る可能性がある。64は瓦質土器茶釜で、外面に印刻文が施される。65～67は瓦質土器鍋で、口縁内面に比較的明確な稜をもつ屈折があることが特徴である。

68は磁石で、長側面の4面すべて使用している。



図 115 2区の遺構分布 (1/100)

2区西壁

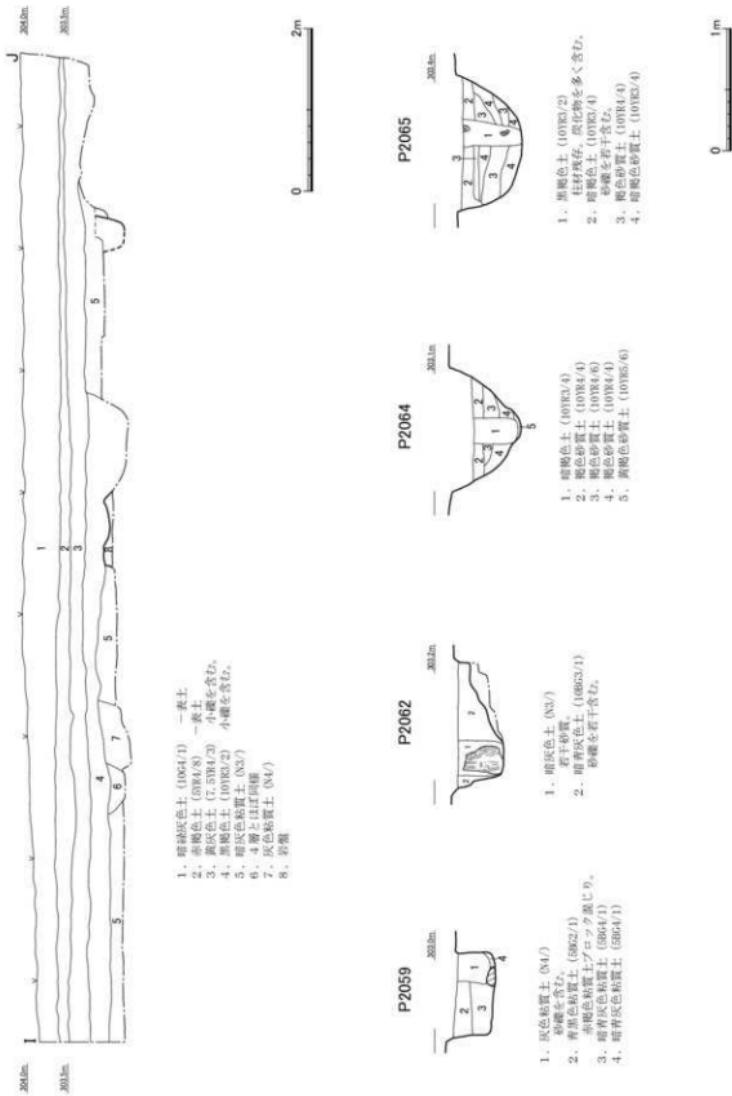


図 116 2区の土層 (1/60)

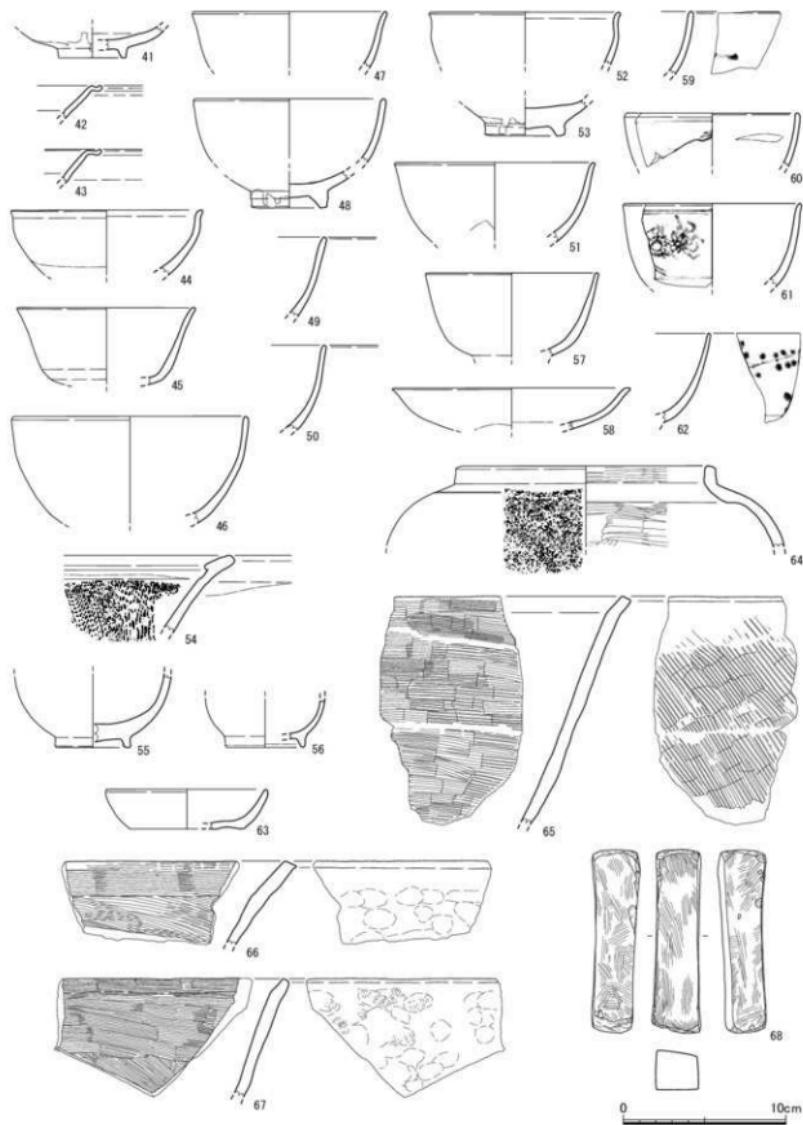


図117 近世の遺物 (1/3)

表 11 フルタ遺跡近世の出土遺物

掲図・番号 登録番号	出土位置	種別 器種	寸法 cm			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径	底径	器高			
図 117-41 11001058	2区 4層	陶器 皿	4.1*	-	-	胎土；淡黄	山瀬窯 16c末～17c初頭	写真図版 41-41 20111318-1319
図 117-42 11001064	2区 P2034	陶器 皿	-	-	-	胎土；灰黄	肥前 17c 前半	写真図版 41-42 20111325
図 117-43 11001067	2区 試掘坑2	陶器 皿	-	-	-	胎土；灰	肥前 17c 前半	写真図版 41-43 20111328
図 117-44 11001059	2区 5層	陶器 碗	11.8*	-	-	胎土；灰黄	肥前 16c末～17c初頭	写真図版 41-44 20111320
図 117-45 11001060	2区 P2062	陶器 碗	11.0*	-	-	胎土；灰白	肥前 17c 前半	写真図版 41-45 20111321
図 117-46 11001055	2区 4層	陶器 碗	14.6*	-	-	胎土；灰白	内野山窯 17c 前半	写真図版 41-46 20111341
図 117-47 11001066	2区 P2052	陶器 碗	11.8*	-	-	胎土；灰	内野山窯 17c 後半	写真図版 41-47 20111327
図 117-48 11001075	2区 4層	陶器 碗	11.6*	4.7	-	胎土；灰白	内野山窯 17c 後半	写真図版 41-48 20111335
図 117-49 11001062	2区 5層	陶器 碗	-	-	-	胎土；灰白	内野山窯 17c 後半～18c 初頭	写真図版 41-49 20111323
図 117-50 11001063	2区 5層	陶器 碗	-	-	-	胎土；灰白	内野山窯 17c 後半	写真図版 41-50 20111324
図 117-51 11001061	2区 5層	陶器 碗	12.3*	-	-	胎土；灰白	内野山窯 17c 後半	写真図版 41-51 20111322
図 117-52 11001068	2区 P2052	陶器 碗	11.6*	-	-	胎土；灰白	内野山窯 17c 後半 53と同一側体	写真図版 41-52 20111329
図 117-53 11001069	2区 5層	陶器 碗	-	4.9	-	胎土；灰白	内野山窯 17c 後半 52と同一側体	写真図版 41-53 20111330
図 117-54 11001071	2区 P2019	陶器 擂鉢	-	-	-	胎土；灰	肥前 17c 前頃～後半	写真図版 41-54 20111343
図 117-55 11001057	2区 P2042	陶器 碗	-	4.7*	-	胎土；灰白	肥前 17c 後半～18c 前半	写真図版 41-55 20111342
図 117-56 11001070	2区 4層	陶器 小壺	-	4.8*	-	胎土；灰	肥前 18c	写真図版 41-56 20111331
図 117-57 11001065	2区 試掘坑2	青磁 碗	10.6*	-	-	胎土；灰白	肥前 17c 前頃	写真図版 41-57 20111326
図 117-58 11001051	2区 4層	白磁力青磁 皿	14.6*	-	-	胎土；灰白	肥前 17c 前頃～末	写真図版 41-58 20111340
図 117-59 11001073	2区 P2044	染付磁器 碗	-	-	-	胎土；灰白	肥前 17c 後半	写真図版 41-59 20111333
図 117-60 11001072	2区 4層	染付磁器 碗	10.8*	-	-	胎土；灰白	肥前 17c 後半	写真図版 41-60 20111332
図 117-61 11001074	2区 5層	染付磁器 碗	10.9*	-	-	胎土；灰白	肥前 17c 前半	写真図版 41-61 20111334
図 117-62 11001081	2区 P2050	色絵磁器 碗	-	-	-	胎土；白	有田 1660～70年代	写真図版 41-62 20111336
図 117-63 11001080	2区 4層	土師器 杯	9.8*	7.0*	-	外：明赤褐 内：褐	底部系切	写真図版 41-63 20111353
図 117-64 11001082	2区 P2029	瓦質土器 茶釜	15.6*	-	-	内：灰・黄褐	内外面削付着	写真図版 41-64 20111347
図 117-65 11001083	2区 P2047	瓦質土器 鍋	-	-	-	外：灰黄・灰褐 内：灰黄・黄褐	外面削付着	写真図版 41-65 20111351
図 117-66 11001077	2区 P2021	瓦質土器 鍋	-	-	-	外：黒 内：褐色	外面削付着	写真図版 41-66 20111345
図 117-67 11001076	2区 上層	瓦質土器 鍋	-	-	-	外：暗灰 内：灰	外面削付着	写真図版 41-67 20111344
図 117-68 11001079	2区 4層	石製品 砥石	長 11.3	幅 3.0	厚 3.0		球状完形	写真図版 41-68 20111349-1350

5　まとめ

フルタ遺跡では、縄文時代の遺物、中世～近世の遺構・遺物を調査した。ここでは、時代ごとに遺跡の様相を簡単にまとめておきたい。

縄文時代

縄文時代の遺物は、晩期末の土器・石器がほとんどを占めるものと考えられる。土器では、刻目突帯文土器が主体を占め、外面に条痕を残すことや刻目が大きいことなどから、板付1式に並行する時期に降るものと可能性はあるが、大部分は板付1式並行期直前の段階とみられる。土器はローリングを受けていないものがほとんどであることから、調査区に隣接してこの時期の遺跡が存在したものと推測される。

石器は、刻目突帯文土器に伴うものが大多数であると考えられる。出土量が多くないため、組成などは確実ではないが、立地が周辺の縄文時代の遺跡と変わらないことや大陸系磨製石器が出土していないことから、水稻耕作などの農耕は行われておらず、それ以前と変わらない生活様式であったものと推測される。石器の形態は平基のものが大部分で、黒川式新段階のものが主体の東畠瀬遺跡1区で微凹基の石器が多数を占める状況とは異なっており、フルタ遺跡出土の石器は晩期末の特徴を示す可能性がある。

フルタ遺跡周辺では、大野遺跡で後期後葉、中原遺跡で早期中葉～後葉を中心とした遺跡などが確認されているが、晩期のまとめた資料は今回が初めてであり、弥生時代開始期の脊振山山脚部の様相を知る上で貴重な資料を加えることとなった。

中世

中世では、多くはないものの、1区を中心に遺構・遺物を確認した。中世後期とみられる2条の溝状遺構は自然流路と推測されるが、SD1001は當時水が流れた河川跡ではないようで、北西と南西からの谷が開けた場所という地形からすると、土砂災害の痕跡ということを考えられよう。このような状況と、明確な集落跡などが検出できなかったことから、中世には安定した土地ではなかった可能性がある。ただ、1区下層の遺物には平安時代末期の12世紀代の白磁・青磁が多いが、遺跡北側の中野遺跡2・3区で白磁は報告されておらず、単に流れ込みとも思えない。フルタ遺跡1区と中原遺跡2・3区の間に12世紀代の小規模な集落が存在した可能性があり、あるいは春日神社の起源と関連するかもしれない。

この他、2区を中心として戦国期の遺物も散見され、周辺には明確な中世城館跡は発見されていないが、何らかの施設があった可能性がある。

近世

近世では、2区で17世紀代の屋敷地の一部を確認した。調査区が狭小のため、全体像は不明であるが、この部分には江戸時代後期の「大野村見取絵図」に「甚兵衛ヤシキ」という名が記されており、後世に伝承されるような階層が高い屋敷地であった可能性が高い。

遺物では、陶器からみると17世紀代のものがほとんどで、わずかに16世紀代に遡るものもみられる程度であり、時期がある程度限定できる資料といえる。陶器では、内野山窯製の銅線軸を施した碗類が目立つが、周辺の遺跡では少量でも出土している京焼風陶器がないという特徴があり、肥前国内における消費地の様相の一端を示す事例としても注目されよう。多くの図示できなかったが、瓦質土器鍋などの在地土器についても年代を知る手掛かりとなる資料であろう。

第5章 参考・引用文献

- 上山秀夫 (1982) 「14～16世紀の青磁様の分類」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 (1982) 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会 (2000) 「嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書」 富士町教育委員会
- 九州伝世陶磁学会 (2000) 「九州陶磁の編年」
- 佐賀県教育委員会 (2007) 「東鍋瀬道跡1・大野道跡1」 佐賀県文化財調査報告書第170集
- 佐賀市教育委員会 (2007) 「中原道跡－2・3区の調査－」 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第19集
- 太宰府市教育委員会 (2000) 「大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一」 太宰府市の文化財第49集
- 富士町教育委員会 (2003) 「中原道跡1区」 富士町文化財調査報告書第3集
- 富士町誌編さん委員会 (1968) 「富士町誌」 富士町教育委員会
- 富士町史編さん委員会 (2000) 「富士町史」 富士町
- 森田 勉 (1982) 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 森本朝子・片山まび (2000) 「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案」『博多研究会誌』第8号 博多研究会

第 6 章 音無瓦窯跡

第6章 音無瓦窯跡

1 音無瓦窯跡の概要

音無瓦窯跡は、佐賀市富士町大字大野字古賀に所在する（図118）。

遺跡周辺は、嘉瀬川とその支流神水川が合流する地点からやや北西側で神水川に流れ込む小河川によって形成された谷が南西から北東に向かって伸び、その周囲を丘陵が囲んでいる。この谷は音無と呼ばれており、山間部では比較的広く水田が確保できる地形であり、米がよく取れる地区であった。藩政期には小城鍋島家（小城支藩）領の山内郷に属していたが、湿地が広がっていたことから、集落は展開していなかったようで、古くから田畠など生産地として利用されていたと考えられる。

音無瓦窯跡は、北の丘陵地から南に向かって伸びる尾根の南端（標高296～304m）に位置し（図119）、近世～近代の瓦窯跡として周知化されている。遺跡の東には大野古賀遺跡（縄文時代の遺物散布地）、北には入道遺跡（旧石器時代の遺物散布地、縄文時代の集落跡）がそれぞれ位置している。

音無瓦窯跡では、嘉瀬川ダム建設事業に伴い平成22年度に発掘調査を実施し、近代の瓦窯跡や物原・瓦溜を確認した。また、調査区からは旧石器～縄文時代の石器が出土した。

調査区は、北側の斜面部と南側の平坦部に大別される。北側の斜面部は丘陵の裾部にあたり、斜面部のうち西側は若干緩やかで、東側は急峻である。このうち窯は、西側の標高297～301mにかけての緩やかな箇所に位置する。また、南側の平坦部は、窯跡操業時からあったと推定される南北方向の通路により東西に二分されている。

調査に着手する際、窯跡の位置はもちろん残存しているかどうかも不明で、重機を用いて表土除去を行った場合、遺構を破壊する恐れがあったため、表土は全て人力で除去した。調査の結果、北側の斜面部から窯跡とこれに関連する物原・瓦溜が確認された。

窯は、煉瓦造りの階段状複式登窯で、斜面部西側に築かれている。現況では、燃焼室及び第1～4焼成室が面的に確認され、さらに調査区北壁に第5焼成室の焚窓が確認できる。焼成室はロストル構造である。各焼成室の出入口は窯の東側面に設けられており、不要な瓦や砾で土留した通路に繋がっている。

窯跡に関連する遺物としては、煉瓦や瓦、窯道具が大量に出土した。出土した瓦は、全て陶質の釉薬瓦である。瓦は計12種類で、I軒の屋根を葺く際に必要な種類が揃っている。瓦の釉薬は瓦を葺く際の上面に施されており、全体的に厚い。釉調はぼらつきがあるものの、黒褐～暗赤褐色である。窯道具としては、ハセ・モミツチが出土した。これらは、瓦を窯詰めする際に、瓦と瓦の溶着を防ぐために使用されるものである。

窯の構造や出土した瓦、窯道具、さらにそこから想定される焼成方法を検討すると、音無瓦窯跡は石見地方（現在の島根県）の石州瓦との関係が深いことが推定される。また、第2焼成室からは窯廐業時の祭祀に用いられたと考えられる磁器が出土しており、その年代から、窯跡の操業時期は明治時代後半であると考えられる。

南側の平坦部では、主に窯関連諸施設の確認のために、2ヶ所に試掘坑を設けた。試掘坑では窯跡に関連する遺構は確認できなかったが、旧石器～縄文時代の石器が出土した。石器は176点出土したが、そのほとんどは剥片・石核類である。製品としては、旧石器時代のナイフ形石器・台形石器がそれぞれ1点、縄文時代の石鏃が8点出土した。これらの石器類は、音無瓦窯跡の斜面上位、すなわち入道遺跡から流出し堆積したものと考えられる。

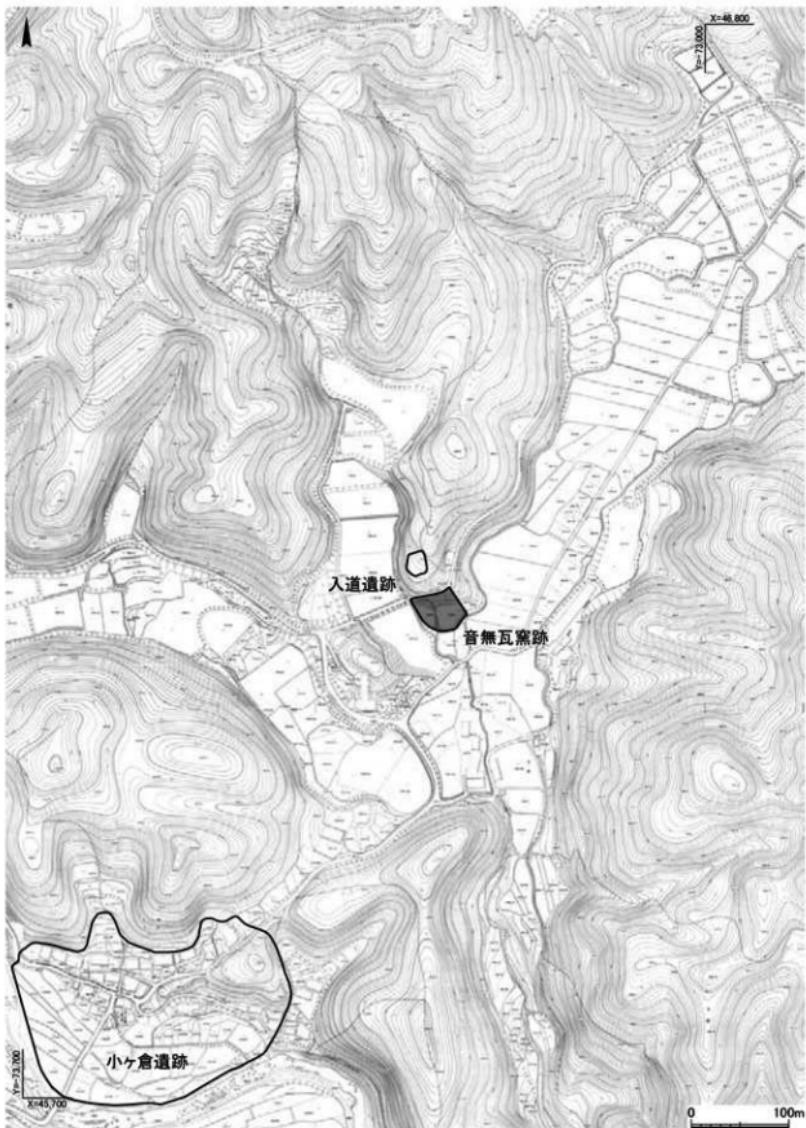


図 118 音無瓦窯跡周辺の地形 (1/5,000)

音無瓦窯跡

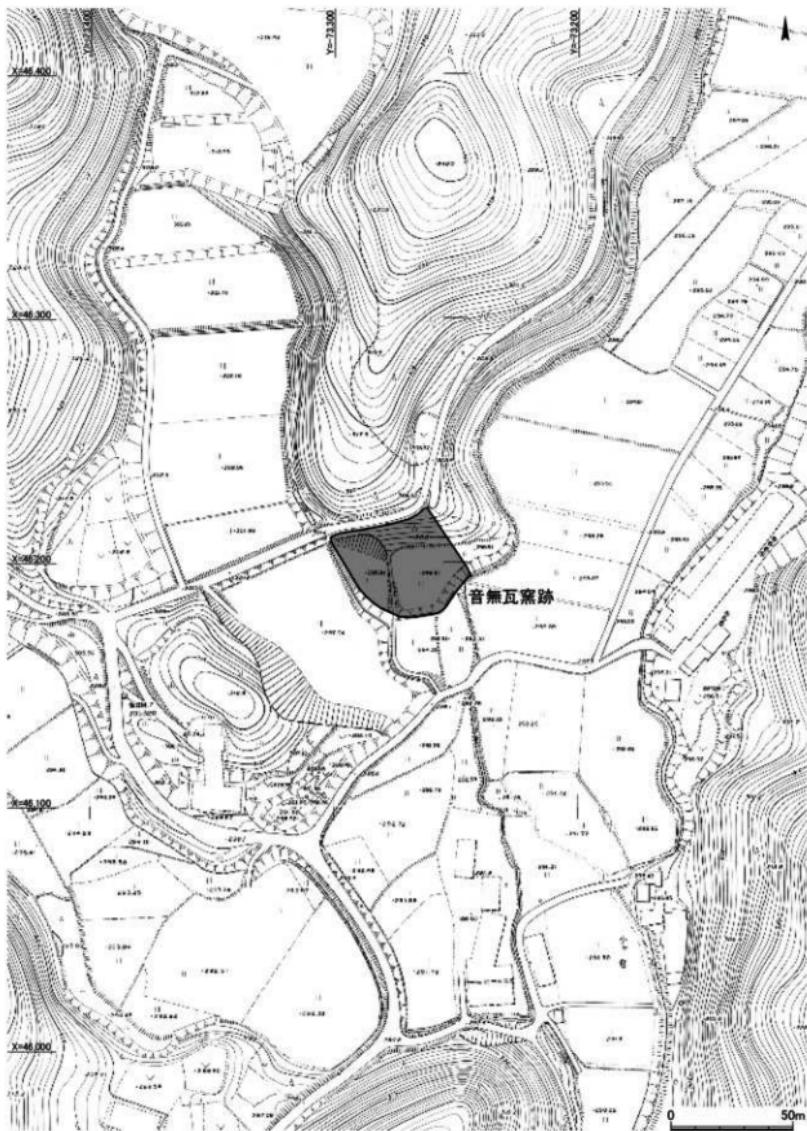


図 119 音無瓦窯跡の位置 (1/2,000)

2 近代の遺構と遺物

音無瓦窯跡では、調査区北側の斜面部において窯跡1基（SX001）、物原4ヶ所（SX004～007）及び瓦溜2ヶ所（SX002・003）が確認された。また、窯跡関連諸施設の有無を確認するため、調査区南側の平坦部に試掘坑2・3を設定したが、遺構は確認されなかった（図120）。遺物としては、窯跡及び物原から大量の瓦、窯道具、煉瓦等が出土した。

なお、報告に際し、焼成室は窯の下位から順番に第1焼成室、第2焼成室…と番号を付している。焼成室内の各部名称及び計測値については、図124、表12の通りである。

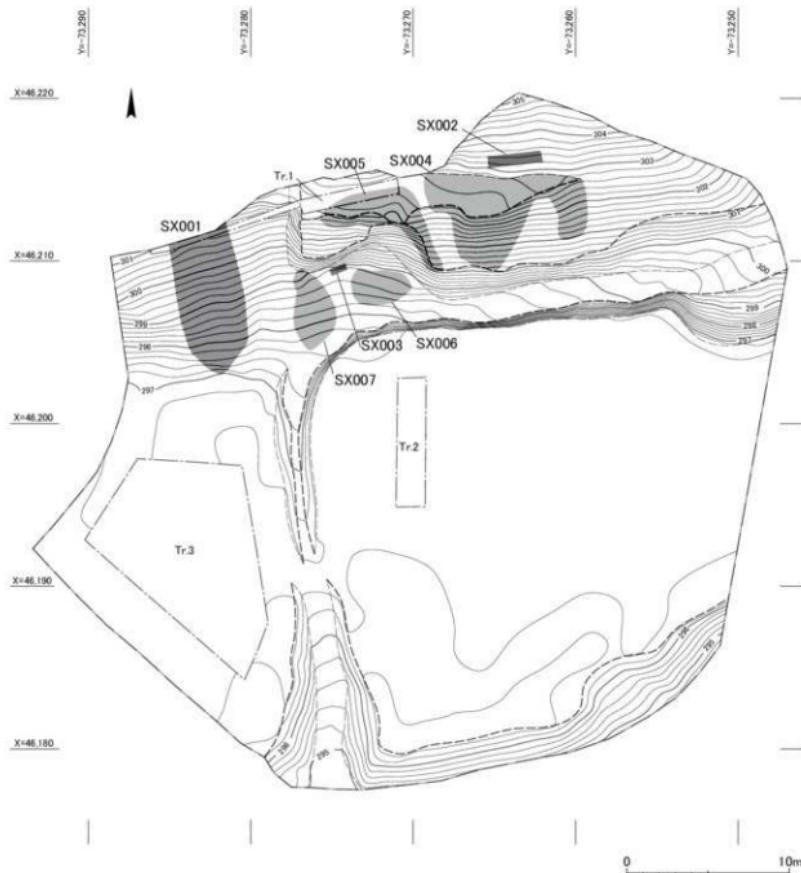
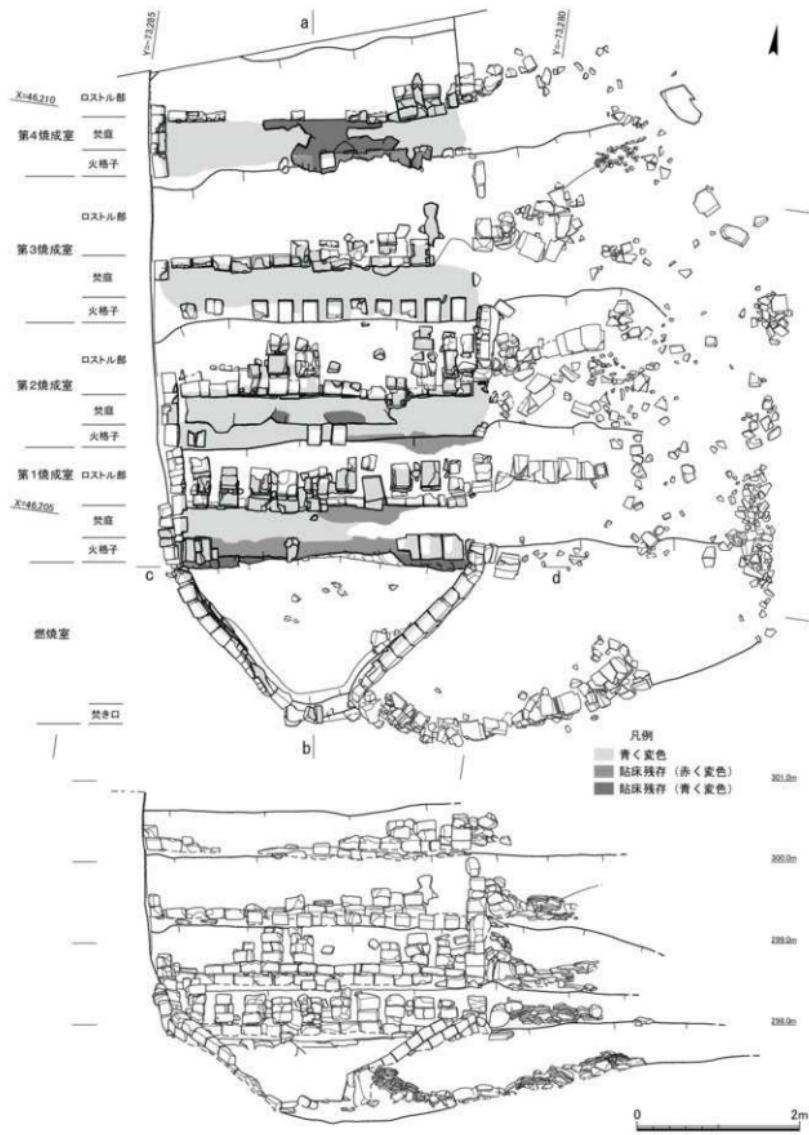


図120 音無瓦窯跡遺構の分布（1/300）



SX001南北土層

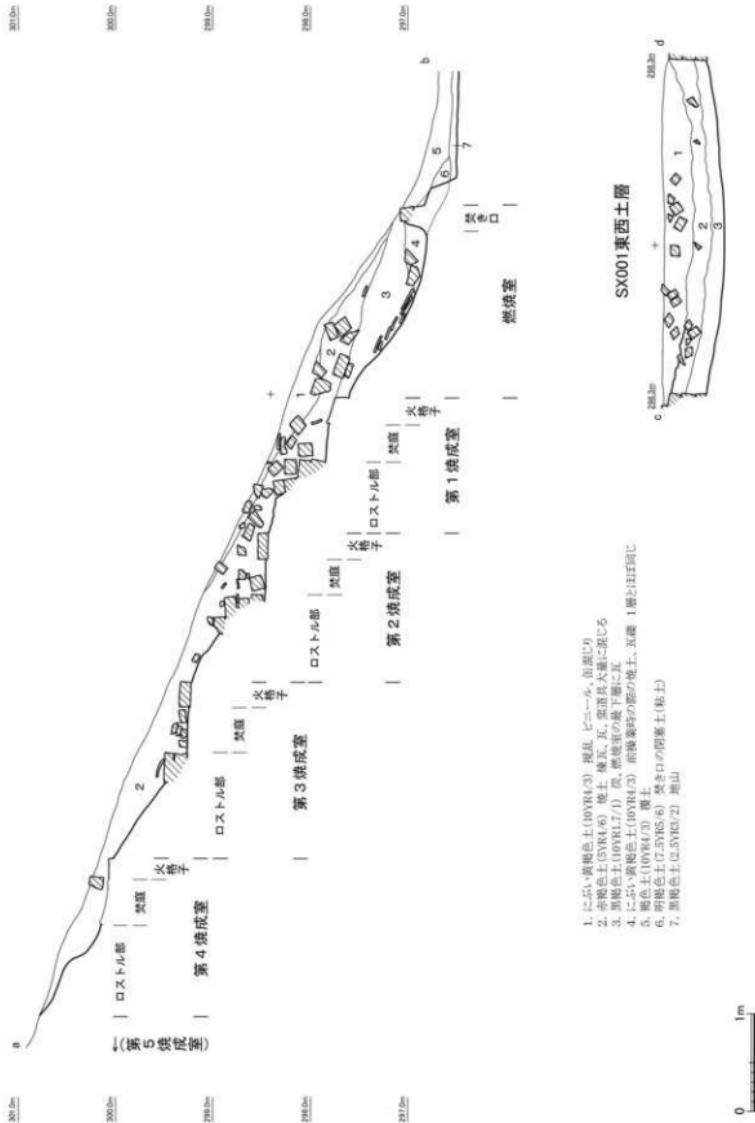


図 122 SX001 の土層 (1/50)

調査区北壁・試掘坑1土層



図 123 調査区北壁・試掘坑1の土層 (1/100)

SX001 (図 121 ~ 124)

SX001 は、煉瓦造りの階段状連房式登窯で、斜面部西側（傾斜約 25°）に築かれている。水平長は 8.66 m まで確認されたが、北側が調査区外であるため全容は不明である。窯の主軸は N11° W、最大幅 3.78 m で、第 1 焼成室の焚庭から第 4 焼成室の奥壁を結んだ傾斜角度は 26° である。

窯は、燃焼室及び第 1 ~ 4 焼成室（房）が面的に確認され（図 121）、さらに、調査区北壁の断面には第 5 焼成室の焚庭が確認できる（図 123）。各焼成室の出入口は、窯の東側面にそれぞれ設けられており、不要な瓦や礫で土留した通路に繋がっている。各焼成室の出入口の外側には人頭大の自然石が積み上げられていたが、これは出入口周辺が構造的に弱点で、焼成時の熱で窯が膨張し崩壊することを防ぐためのものであると考えられる。なお、窯周辺からは窯跡を覆う建物の痕跡等は確認されなかった。

調査区北壁土層の 16・18 層は地山、15 層が敷き詰められた砂質土、13 層が貼床にそれぞれあたる。窯は地山を掘り込み、その中に砂質土を敷き詰めた上に形成されており、砂質土の直上には焚庭の貼床がみられる（図 123）。この貼床は一部硬化していた。

各焼成室の規模は若干の違いがあるが、平均すると長さ 1.64 m、幅 3.68 m、傾斜角度は 28.5° である（表 12）。焼成室は、焼台を階段状に 1 列に積み並べ、これを 10 列並べたロストル構造である。焼台最下段は煉瓦を 2 段積み、それより上位の段では煉瓦を 2 ~ 3 段ずつ積み階段状にする。第 2 焼成室のロストル部の焰道の延長線上には、第 3 焼成室の火格子の通焰孔は位置しておらず、焰道と通焰孔は一直線に並ばない。つまり、焰道と通焰孔は互い違いに配置されているわけで、このような状況は他の焼成室間でも見てとれる。焰道を通った焰がストレートに次の焼成室に向かわず、焼成室内で循環するように工夫されているように見受けられる。ちなみに、ここで用いる通焰孔とは火格子孔のことを指す。また、火格子を構成する煉瓦については、少なくとも 2 段以上積まれ柱状になっていたことから、分焰柱として表記する。

なお、言うまでもなく窯の内部は被熱しており、全体に赤色を呈しているわけだが、これは調査の際、特にロストル部において原位置を保っていない焼台を除去したため、赤く変色した砂質土が露出したことによる。また、焚庭には赤く変色した部分と青く変色した部分がある（図 121）。

遺物は、遺構検出面や遺構埋土から大量の煉瓦や瓦が出土した。

燃焼室

全体に残存状態は良好で、長さ 1.78 m、最大幅 3.36 m、平面形は逆三角形、傾斜角度は約 25° である。焼き口の床面（最低部）と第 1 焼成室の焚庭の床面とは、0.8 m の高低差がある。側壁は煉瓦が 3 段まで残存しており、煉瓦の内側は被熱により青色に変色していた。

窯の南北土層のうち、燃焼室部分を見みると、煉瓦や窯道具を含む瓦礫（2 層）の下に焼成時の炭層（3 層：石炭の燃えカスと考えられる）が堆積しており、さらに 3 層の下に焼土や瓦礫（4 層）が堆積している。3 层の下位に瓦礫があるということは、3 层が堆積する以前にも瓦を焼いていたことを示しており、音無瓦窯跡では少なくとも 2 回以上操業されていたことが分かる（図 122）。

第 1 焼成室

火格子の残存状況は悪いが、焼成室全体の残存状況は良好である。長さ 0.63 m、幅 1.78 m で、確認された焼成室の中では最も規模が小さい。傾斜角度は約 28° である。原位置を保っていた火格子の分焰柱は 2 個である。焚庭の床面の大部分は、被熱で変色し硬化していた。ロストル部の長さは、他の焼成室のものに比べ短い。ロストル部では、階段状に並べられた焼台が 10 列残存していた。

第 2 焼成室

火格子の残存状況は悪いが、焼成室全体の残存状況は良好である。長さ 1.42 m、幅 3.64 m で、傾斜角度は約 32° である。原位置を保っていた火格子の分焰柱は 3 個であり、火格子の通焰孔の幅は 0.12 m である。焚庭は、

表 12 焼成室各部の計測表

	A	B	C	B+C	D	E	F	G	E+F	H
燃焼室	3.36	-	-	1.78 (全長)	-	-	-	-	0.80 (全長)	25°
第1焼成室	3.66	0.60	0.82	1.42	-	-	0.30	0.33	0.63	28°
第2焼成室	3.64	0.60	0.92	1.52	0.20	0.12	0.44	0.34	0.78	32°
第3焼成室	3.78	0.62	1.20	1.82	0.20	0.12	(0.26)	[0.52]	0.78	27°
第4焼成室	3.62	(0.64)	(1.18)	(1.8)	0.20	0.12	-	-	(0.72)	(27°)

() 内は残存値 [] 内は最大値

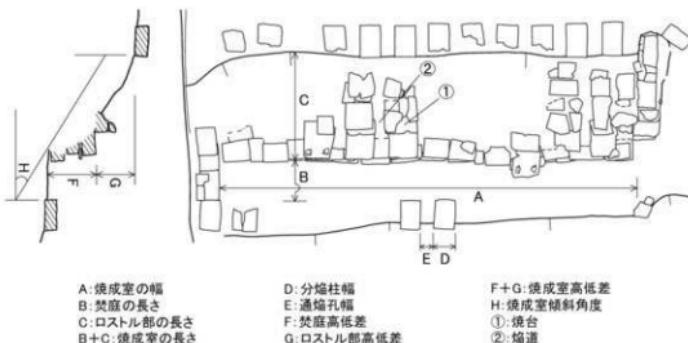


図 124 焼成室計測箇所・各部の名称

全体が被熱し青く変色しており、中央付近には貼床が残存していた。ロストル部では、階段状に並べられた焼台が7列残存していた。なお、瓦以外の遺物として焚窓から3個体、ロストル部から2個体の磁器が出土した。

第3焼成室

焼成部の焼台は東側しか残存しないが、火格子は良好に残存する。長さ1.82m、幅3.78mで、傾斜角度は約27°である。火格子の分煙柱は9個確認でき、火格子の通煙孔の幅は0.12mである。焚窓は、全体が被熱により青く変色していた。ロストル部では、階段状に並べられた焼台が5列残存していた。瓦以外の遺物として、焚窓からは陶器火鉢が出土した。火鉢は窯廃棄後に置かれたと考えられるが、理由は不明である。

第4焼成室

中央～東側の一部で火格子、焼成部の焼台が残存する。第1～3焼成室に比べ、主軸はやや西に傾く。残存長1.80m、幅3.62mで、傾斜角度は27°である。原位置を保っていた火格子の分煙柱は2個であり、火格子の通煙孔の幅は0.12mである。焚窓は、全体が被熱し青く変色しており、中央付近には貼床が残存していた。ロストル部では、階段状に並べられた焼台が2列残存していた。

SX001出土遺物(図126～128)

出土遺物のうち、煉瓦については、窯跡各所から出土したものを5点図示した。また、瓦については、第3焼成室の床面直上から出土した軒丸瓦(7・8)の他は、検出面や遺構の埋土(特に燃焼室の第3層)から出土したものと図示した。

1～5は瓦窯を構成する煉瓦で、4種類の規格がある。1は燃焼室の側壁に、2は第2焼成室の火格子の分煙柱

に用いられた煉瓦である。3は第3焼成室の焼台の最下段に用いられた煉瓦で、特に焚庭側の面が強く被熱している。4は第1焼成室の焼台の中位に用いられた煉瓦で、2個の煉瓦が溶着した状態（積まれた状態）で出土した。煉瓦の上面には窯道具のモミツチの一部が溶着しており、モミツチには瓦が並べられた型が残っている。5は第2焼成室の焼台に用いられた煉瓦で、特に焚庭側の面が強く被熱している。上面には、モミツチの一部が2ヶ所に溶着している。

6は陶器火鉢である。格子部分が一部欠損するが、割れ口に煤が付着していることから、欠損した状態で使用されたと考えられる。調整は非常に粗く、内面には粘土組の輪積み痕がみられる。モミツチと同じ胎土が用いられている。

7・8は瓦当裏側に顎がつく軒丸瓦である。屋根の最高所の大棟や、寄棟造や入母屋造の屋根の隅降棟・妻降棟などの先端部で棟止瓦の下に葺かれるものである。7と8は施釉範囲、形態、瓦当文様が同じ特徴を持つ。瓦当文様は連珠三巴文で、小型の巴をもち、連珠の間隔は広い。また、顎の縁に沿って沈線が施される。尻には釘穴が1孔認められ、瓦当から筒部の釘穴付近まで施釉されている。玉縁については、筒部との間に段差がないため明確に分別できない。筒部の凹面には、コビキ痕・布目・叩き痕などは観察できない。また、凸面2ヶ所、凹面2ヶ所の計4ヶ所に窯道具の一部がわずかに溶着している。10も同じく軒丸瓦で、瓦当部分が欠損している。凹面2ヶ所に窯道具の一部が溶着し、離れ砂が残存する。玉縁は、筒部との間に段差がないため明確に分別できないが、凹面にはわずかな屈曲部がある。

9は棟に積む輪違い（熨斗瓦の一種）である。尻部分には、製作時における分割のためのナイフの切り込み痕が残る。凹凸面共に約半分が施釉され、尻には釘穴が1孔認められる。

11～14は棟止瓦である。この瓦は、棟の頂部に付く鳥伏間瓦と鬼板瓦が一体となったもので、11・12は鳥伏間瓦に相当する部分、13・14は鬼板瓦に相当する部分である。11の瓦当文様は連珠三巴文である。釉薬は全面に施されている。瓦当面の周縁に窯道具の一部が溶着していることから、瓦当面を下にして焼成したと考えられる。12は上半分が欠損しているが、瓦当文様は11と同様である。瓦当面の周縁に窯道具の一部が溶着している。釉薬は、凹面を除いて全面に施される。13は棟止板の破片で、鳥伏間の一部が付く。表面には連珠三巴文が配され、その外側にモミツチの一部が溶着している。裏面はほとんど施釉されない。14は棟止板に相当する部分の破片である。下端は軒丸瓦と組み合わせるために、弧状に歪む。表面中央には連珠三巴文が配されるが、釉薬が厚く、文様は明瞭さを欠く。文様の両側には、モミツチの一部が溶着する。釉薬は、一部を除いて板の両面に施される。

15は破片のため判別が難しいが、形態・文様から考えると、鬼瓦か立浪型鳥伏間瓦の一部と考えられる。表面のみ施釉される。

16は軒桟瓦の破片である。瓦当文様は均等唐草が退化したものと考えられ、2対の三日月形の文様と、その外側に子葉と思われる文様が配置される。釉薬は、凹面及び瓦当の表裏に施される。凹面の2ヶ所に瓦の一部が溶着している。

17・18は桟瓦である。17は桟が一部欠損する。尻端部の袖側の端とその逆側の端付近の2ヶ所に、モミツチを剥がした際の表面の剥離痕が認められる。釘穴はない。18は凹面の2ヶ所にハセが溶着しており、ハセが溶着した箇所の頭端部にもモミツチを剥がした際の剥離痕が認められる。

この他、磁器が第2焼成室の焚庭（19・20・22）とロストル部（21・23）から出土した。19・20は肥前系の染付磁器碗で、内面見込みを蛇の目釉剥ぎしている。21は肥前産の染付磁器皿で、蛇の目凹形高台である。22は肥前産の袖下彩磁器小杯である。23は產地不明の色絵磁器小杯で、見込みの蛇の目釉剥ぎ部分には青色の釉薬が施され、その横には亀甲繋ぎと「男山」という文字が描かれている。和歌山県男山焼、あるいは日本酒の男山に関連するかもしれない¹⁾。これらは全て口縁部の一部が欠損しており、祭祀の際に打ち欠かれた可能性があり、時期は明治時代後半と考えられる。

SX002 (図 125)

SX002 は瓦溜で、斜面部北東端近くの緩斜面の東西 3.5 m、南北 0.85 m の範囲に、棟瓦・軒棟瓦を中心として計 171 枚が集積されていた。瓦は全て凸面を上に向け、10 枚を 1 単位として、単位ごとに互い違いに積まれていた。この集積された瓦は、ほとんどが歪みのあるものばかりであるため、焼け損じを積んだものと考えられる。

SX002 出土遺物 (図 128)

24 は軒棟瓦である。瓦当文様は均等唐草が退化したものと考えられ、円形の中心飾りの両側には三日月形の文様が 2 対、その外側に子葉が 2 枚ずつ配置される。釉薬は、瓦当部分と尻を除く凹面部分に施される。尻に釘穴が 1 孔認められるが、貫通していない。凹面 2 ヶ所、凸面 2 ヶ所の計 4 ヶ所に瓦の一部が溶着する。

25 は棟瓦である。頭端部の 2 ヶ所にモミツチを剥がした際の表面の剥離痕が認められる。釘穴はない。

26 は袖瓦である。釉薬は、尻を除く凹面全体と凸面の袖側と頭側にのみ施される。凸面中央部には板状の圧痕が残る。尻に釘穴が 1 孔認められるが、貫通していない。凹面の 3 ヶ所に瓦の一部が溶着している。

27 は棟頂部に並べられる雁振瓦である。横断面はゆるい山形である。釉薬は、凸面全面に施される。釘穴は中央部に 1 孔認められるが、貫通していない。

SX003 (図 125)

SX003 は瓦溜で、窯の南東側にある狭小な平坦面に、東西 1.2 m、南北 0.55 m の範囲で製斗瓦が計 118 枚集積されていた。瓦は、20 枚を 1 単位として積まれていた。集積された瓦は、歪みのあるものは多くなかったものの、大きさにばらつきがあり、SX002 同様焼け損じを積んだものと考えられる。

SX003 出土遺物 (図 129)

28・29 は輪違いである。28 は尻に釘穴が 1 孔認められるが、貫通していない。凸面の 1 ヶ所に瓦の一部が溶着している。29 は厚さ 1.5cm で、他の多くの物が厚さ 2.0cm の中で、薄い印象をうける。尻に釘穴が 1 孔認められるが、貫通していない。凸面頭両端に瓦の一部が溶着している。

30・31 は棟に積む割削斗瓦である。48 (SX006) の製斗瓦を 2 つに分割したものと考えられる。凹面の 1 ヶ所に瓦の一部が溶着している。30 は横断面がほとんどカーブしておらず、幅は 10cm 前後と狭い。尻に釘穴が 1 孔認められるが、貫通していない。凸面の約半分と頭端部のみ施釉される。31 の施釉箇所・形態は、30 と同じ特徴をもつ。凸面の 2 ヶ所に瓦の一部が溶着している。

SX004 (図 120)

SX004 は調査区最大の物原で、北側斜面部の地形に沿って東西約 9.9 m、南北約 6.0 m の範囲で形成されており、焼成時の不良品である瓦や使用済みの窯道具が大量に捨てられていた。瓦は棟瓦がほとんどだが、若干ではあるが軒棟瓦・軒隅瓦・袖瓦・雁振瓦・窯道具のハセ等がみられる。

SX004 出土遺物 (図 129・130)

32 は袖瓦で、一部が欠損する。形態や施釉範囲の特徴は 26 (SX002) と同じである。凹面の 3 ヶ所に瓦の一部が溶着している。

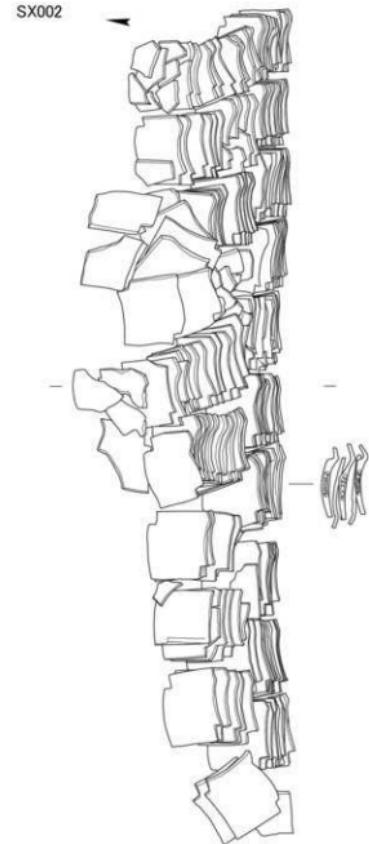
33 は雁振瓦で、約半分が欠損する。釘穴が貫通している点を除くと、27 (SX002) と形態や施釉範囲の特徴が同じである。凸面の 2 ヶ所に瓦の一部が溶着している。

34・35 は棟瓦である。34 は、頭端部の 2 ヶ所にモミツチを剥がした際の剥離痕が認められる。釘穴はない。

35 は凹面 2 ヶ所、凸面 1 ヶ所の計 3 ヶ所にハセの一部が溶着している。釘穴はない。焼成は非常に良好である。

36 は軒棟瓦で、約半分が欠損する。破片のため、釘穴の有無はわからない。形態や施釉範囲の特徴は 24 (SX002) と同じである。凸面の 3 ヶ所に瓦の一部が溶着している。

SX002



SX003

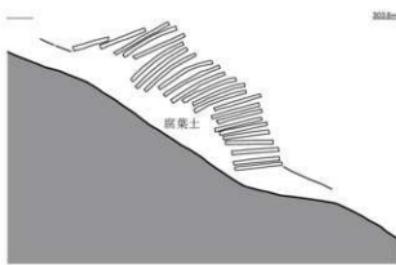
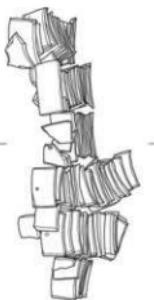


図 125 SX002・SX003 (1/20)

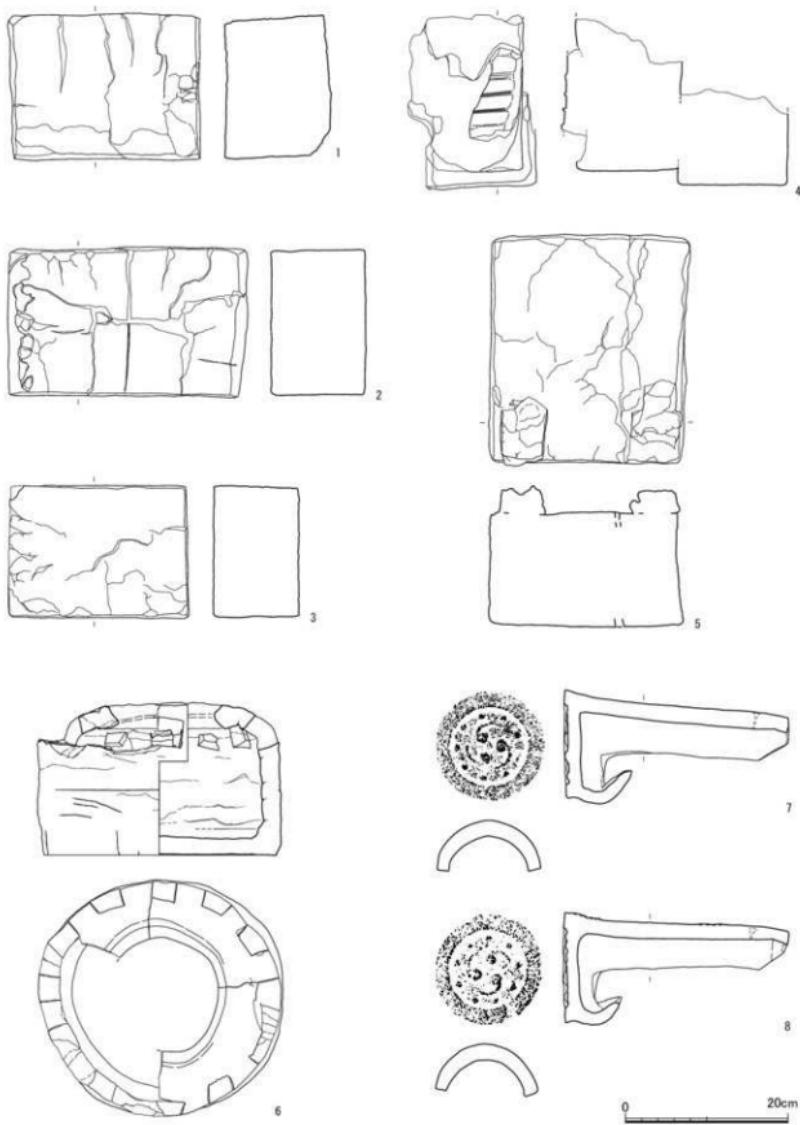


図 126 出土遺物 1 (1/6)

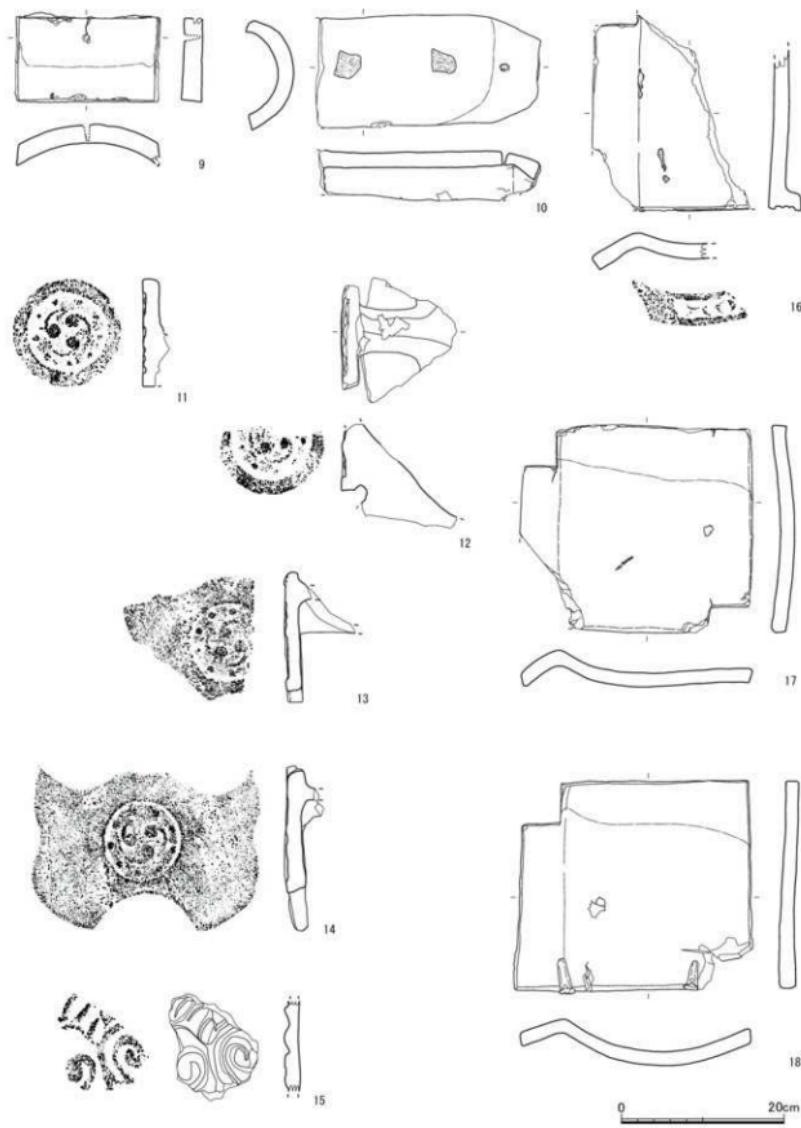


图 127 出土遗物 2 (1/6)

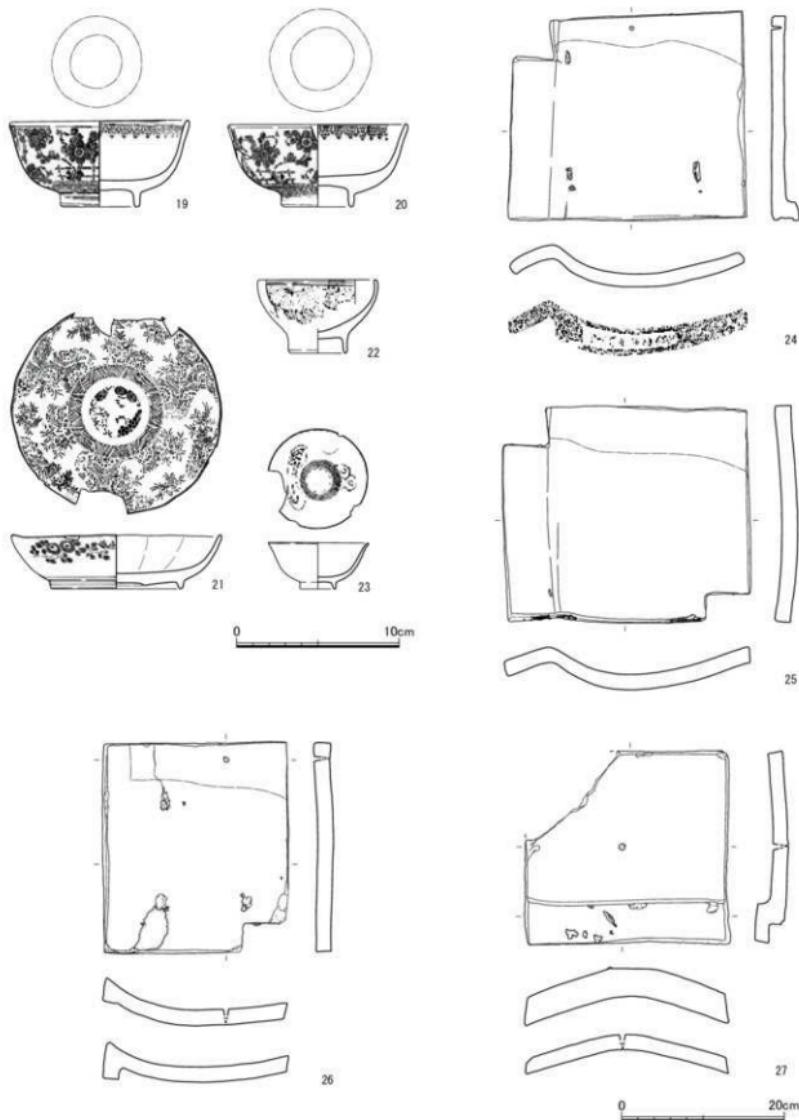


図128 出土遺物3 (19～23は1/3、24～27は1/6)

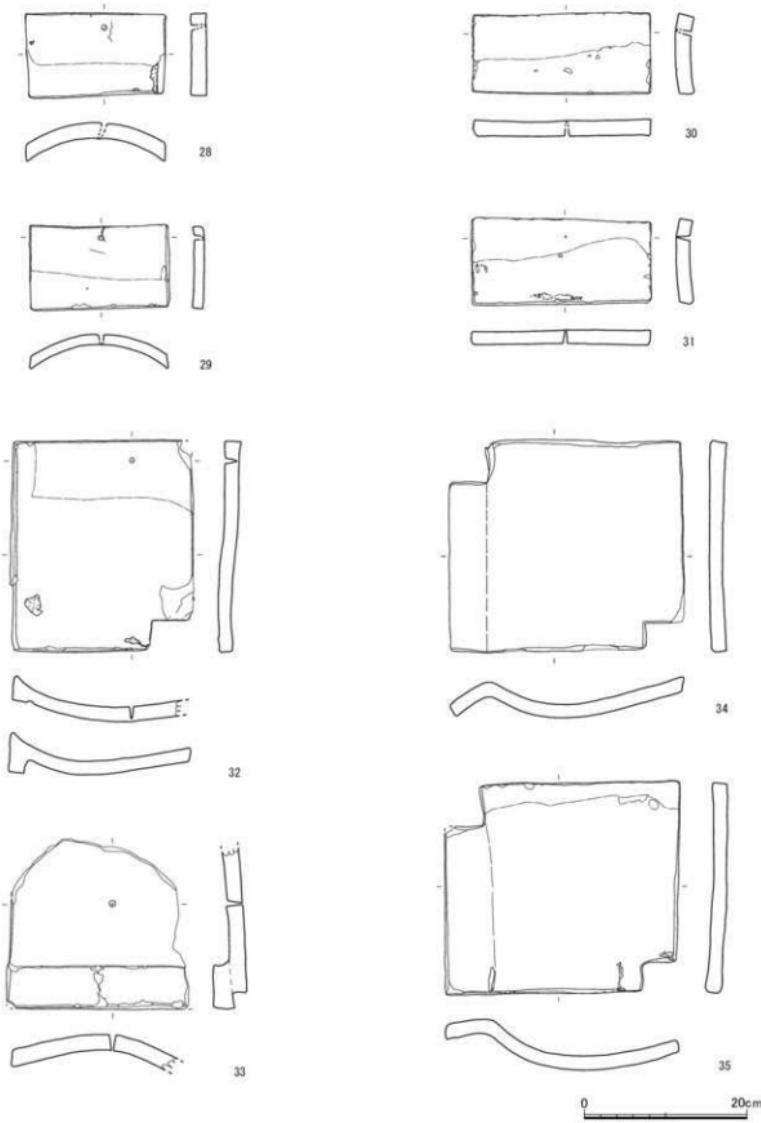


图 129 出土遗物 4 (1/6)

37は棟部分に使われる軒隅瓦である。軒桟瓦の約半分をナイフ等で斜めに切り落としたものである。釘穴はない。軸葉は、凹面の尻及び切り口、瓦当部分を除く凸面には施されない。瓦当文様は中心飾りがなく、2対の三日月及び子葉で構成される。

38～40は窯道具のハセである。38・39の脚には1対2ヶ所に瓦が溶着しており、そのうち1ヶ所に瓦を剥がした際の剥離痕が認められる。40は脚の1対2ヶ所に瓦が溶着しており、他の物よりもやや細長い形態を呈す。

SX005（図120）

SX005は物原である。この物原はSX006と一緒に物原と考えられるが、両者の間に急斜面により2ヶ所に分断されて検出したため、便宜的に別々の遺構番号を付した。SX005は急斜面の上に位置し、東西約6.0m、南北約5.6mの範囲で広がる。窯道具が大半を占める。

SX005出土遺物（図130）

41～44は窯道具のモミツチである。41は半分以上が欠損し、上面には瓦が4枚立て並べられた型が残り、下面にはハセ頭の痕跡が3個並んで残る。42は上面に瓦が6枚立て並べられた型が残り、下面にはハセ頭の痕跡が5個並んで残る。43は上面に瓦が7枚立て並べられた型が残り、下面にはハセ頭の痕跡が6個並んで残る。モミは付着していない。44は一部欠損し、上面には瓦が6枚立て並べられた型が残り、下面にはハセの凹凸を粘土で補修した痕跡が認められ、さらにその上に瓦の軸葉が付着している。表面の全体にはモミの圧痕が残っている。

SX006（図120）

SX006は、SX005の急斜面の下に東西約3.2m、南北約2.4mの範囲で広がる。急斜面に分断されただけで、SX005と同一の物原と認識されるが、SX005は窯道具が大半を占めるのに対し、SX006は桟瓦や軒桟瓦が大半を占めるなど、若干の差異が認められる。これは、窯道具に比べ重く大きい瓦などが斜面下まで流れ落ちたためと考えられる。

SX006出土遺物（図130・131）

45は削削斗瓦で、一部欠損する。形態や施釉範囲の特徴は30・31（SX003）と同じである。

46・47は雁振瓦である。46は桟と体部の一部のみ残存し、残存する桟の端付近には径3cmほどの粘土塊が溶着する。47は形態や施釉範囲の特徴が27（SX002）と同じである。

48は熨斗瓦で、横断面はわずかにカーブする。尻に釘穴が1孔認められる。軸葉は、凸面の3分の2と頭端部及び一方の側辺にのみ施される。

49・50は軒桟瓦である。49は一部欠損しており、焼き歪みのため、瓦当文様が不鮮明である。凹面の3ヶ所と凸面の1ヶ所に瓦が溶着している。施釉範囲については24（SX002）と同様である。尻に釘穴が認められる。50は約半分が欠損する。形態や施釉範囲、釘穴、瓦当文様等は24（SX002）と同様である。凹面の1ヶ所に瓦が溶着する。

51は桟瓦である。頭端部の2ヶ所と尻端部の2ヶ所にモミツチを剥がした際の剥離痕が認められる。釘穴はない。

52はハセで、頭が欠損する。脚の表面2対4ヶ所に瓦を剥がした際の剥離痕が認められる。黒褐色の軸葉が付着する。53はモミツチで、約半分が欠損する。上面には瓦が3枚立て並べられた型が残り、下面にはハセ頭の痕跡が3個並んで残り、その横には瓦の一部が溶着している。

SX007（図120）

SX007は物原である。窯跡南東の緩斜面に東西約2.4m、南北約5.1mの範囲で形成されており、瓦や窯道具等が捨てられていた。瓦は桟瓦がほとんどだが、他に熨斗瓦、組み合わせ式鬼瓦がみられる。

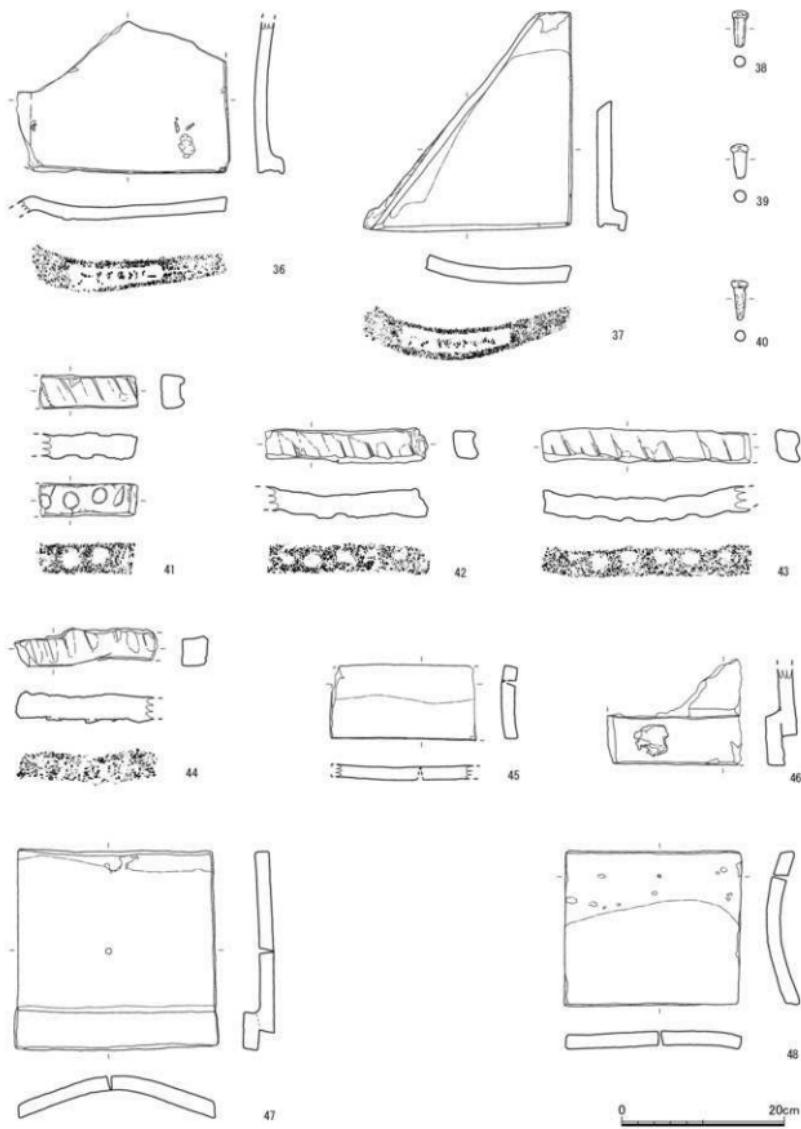


图 130 出土遗物 5 (1/6)

SX007 出土遺物（図 131・132）

55・56は輪違いである。55は、窯道具は溶着していないが、形態や施釉範囲の特徴が29（SX003）と同じである。

56は、窯道具は溶着していないが、形態や施釉範囲の特徴が28（SX003）と同じである。

57は焼斗瓦である。瓦の溶着痕の位置が違う他は、形態や施釉範囲の特徴が48（SX005）と同じである。凸面の1ヶ所に瓦が溶着している。

58は大棟の両端に葺く組み合わせ式鬼瓦である。向かって右側の足（雲形）の部分のみの破片で、ほとんどが欠損している。裏側には、成形時に施されたナデや櫛状の工具痕が残る。

59は袖瓦である。形態や施釉範囲の特徴は26（SX002）と同様である。約3分の1が欠損する。凹面の1ヶ所に瓦が溶着する。凸面には、凹板の板状の圧痕が残る。

54はモミツチで、約半分が欠損する。上面には瓦が3枚立て並べられた型が残る。下面にはハセ頭が4個並んで残り、うち一つはハセ頭が折れ溶着している。表面全体にモミの圧痕が残っている。60はハセである。脚の表面の2対4ヶ所には、瓦が溶着した痕跡及び瓦を剥がした際の剥離痕が認められる。

61は移動式の窓で、約半分が欠損する。底部が僅かに残存しており、からうじて器高が判る。焚口の形状は台形に近いと想定されるが、幅は不明である。胎土は、モミツチと同じである。煤などの痕跡はみられない。

その他の出土遺物（図 132）

遺構以外から出土した遺物としては、南側の平坦面で採集した瓦がある。62は2枚の棟瓦が溶着したもので、ハセが残存し、さらにモミツチが溶着している。モミツチの上面には、瓦が立て並べられた型が残る。63は63と同じように2枚の棟瓦が溶着したもので、瓦と瓦の間にハセが残存している。

3 旧石器～縄文時代の遺物

調査区南側平坦部で伐採を行った際に、旧石器～縄文時代の石器が採集された。また、平坦部西側の試掘坑3の表土及び搅乱土と思われる層（図122の5層に相当する）から、縄文時代の石器が出土した。なお、平坦部東側の試掘坑2から遺物は出土しなかった。

窯跡北側の尾根筋に位置する入道遺跡1区では、縄文時代早期前葉を主体とした石鏃等の石器が出土している他、調査前の踏査で細石刃核が採集され、角錐状石器など旧石器時代の石器も少量出土している（佐賀県教委2011）。音無瓦窯跡と入道遺跡1区の位置的な関係を考えれば、音無瓦窯跡出土の石器は入道遺跡から流出し堆積したと考えられる。

石器（図 132）

石器は、176点出土した。ほとんどは剥片で、他に定形石器、石核がある。製品が非常に少なく、剥片が多く、定形石器の中では石鏃が大部分であるなどの特徴は、流出元の入道遺跡1区と同様の傾向を示していると推察できる。剥片石器に用いられた石材は、黒曜岩が約8割を占めており、無斑品質安山岩は約2割にすぎない。

64は基部のみ残存し、両側辺に二次加工が施されることから、ナイフ形石器の可能性が高い。65は台形石器で、右側縁には急角度調整が施される。66・67は石鏃で、66は平面が二等辺三角形で基部が平基のもの、67は平面が二等辺三角形で凹基のものである。この他にも、石鏃では基部が微凹基の小型のもの、側辺が鋸歯状のもの、長脚のものが出土した。64～66は採集したもの、67は試掘坑3から出土した。

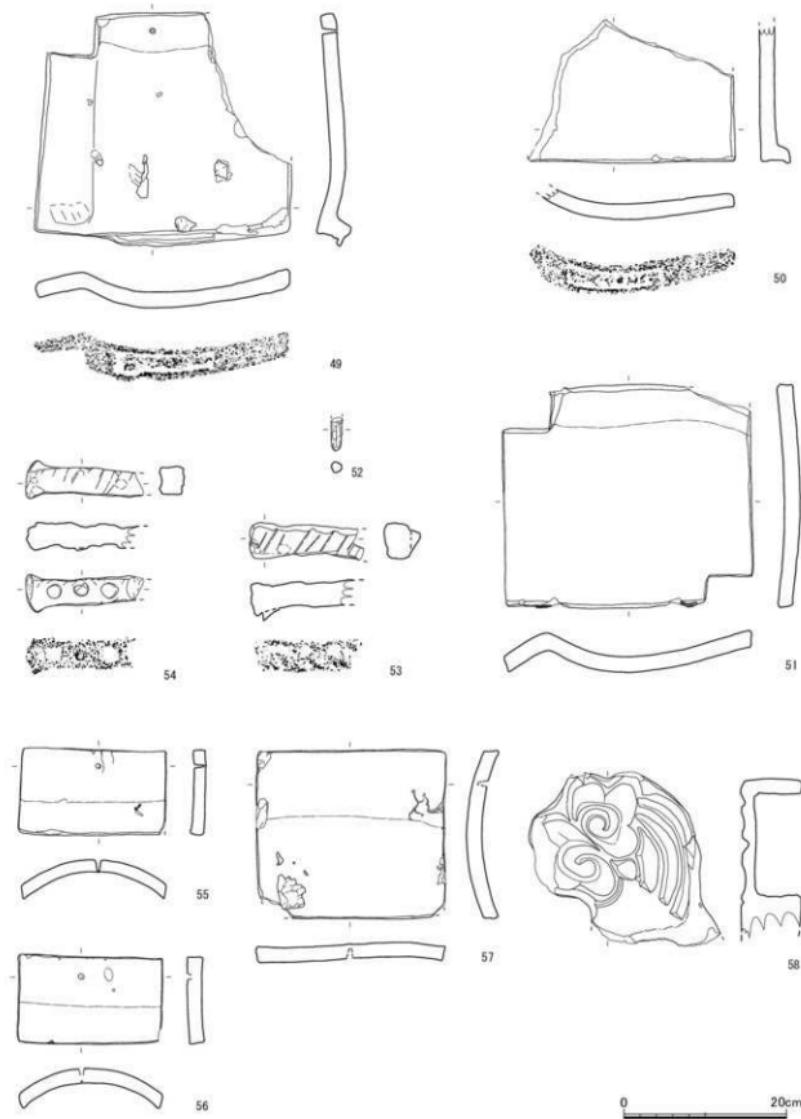


图 131 出土遗物 6 (1/6)

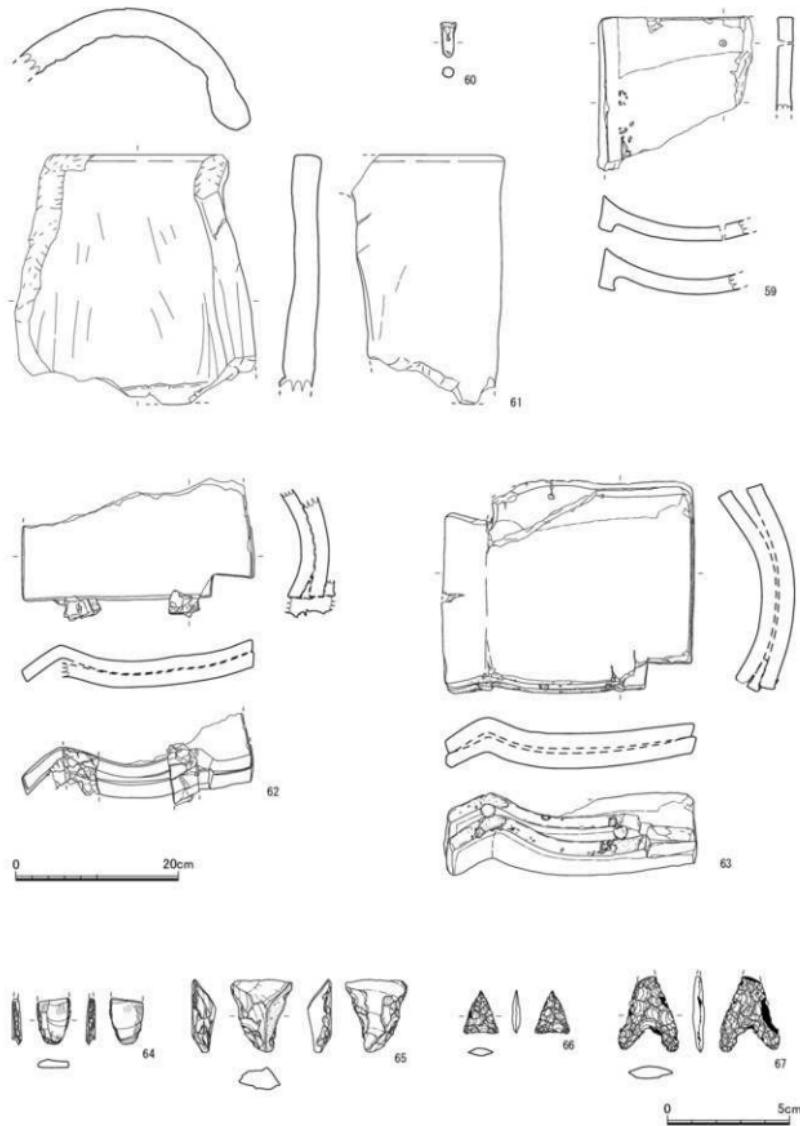


図 132 出土遺物 7 (59～63 は 1/6, 64～67 は 1/2)

表13 音無瓦窯跡近代の出土遺物

件名・番号 採取番号	出土位置	種別 器種	寸法			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 直 底径 / 幅 高さ / 厚					
国126-1 11000433	SX001	土製品 焼瓦	23.0	18.0	13.0	非被熱：白・淡赤褐 被熱：赤褐・赤		写真図版 49-1 20111195
国126-2 11000435	SX001	土製品 焼瓦	29.5	17.9	12.0	非被熱：赤褐・明褐 被熱：黒褐		写真図版 49-2 20111198
国126-3 11000436	SX001	土製品 焼瓦	22.0	16.0	10.5	非被熱：暗赤褐 被熱：赤褐・褐色赤褐		写真図版 49-3 320111199
国126-4 11000434	SX001	土製品 焼瓦	19.0	13.5	28.0	非被熱：にぶい赤褐 被熱：褐色赤褐	モミツチ浴着	写真図版 49-4 20111196・1197
国126-5 11000437	SX001	土製品 焼瓦	28.0	24.0	15.0	非被熱：白 被熱：褐色赤褐・黒褐	モミツチ浴着	写真図版 49-5 20111200
国126-6 11000438	SX001	陶器 火鉢	19.0	30.4	29.2	非被熱：黄褐 被熱：黒褐	保付着	写真図版 49-6 20111201
国126-7 11000439	SX001	瓦 軒丸瓦	27.5	11.8～ 14.0	1.7～ 2.0	胎土：白・明褐 釉面：赤褐・褐色赤褐	瓦当直徑：13.3	写真図版 49-7 20111202
国126-8 11000440	SX001	瓦 軒丸瓦	28.0	12.0～ 13.5	1.5～ 2.0	胎土：明赤褐 釉面：赤褐・暗化褐	瓦当直徑：13.3	写真図版 49-8 20111203
国127-9 11000441	SX001	瓦 輪違い	11.0	17.8	2.6	胎土：にぶい赤褐 釉面：暗赤褐		写真図版 49-9 20111204
国127-10 11000450	SX001	瓦 軒丸瓦	27.7	13.5	1.3～ 1.9	胎土：白・明赤褐 釉面：灰黄褐・黒褐		写真図版 49-10 20111217
国127-11 11000873	SX001	瓦 棟止瓦	高 13.0	13.0	3.3	胎土：明赤褐・赤褐 釉面：赤褐・褐色赤褐		写真図版 49-11 20111218
国127-12 11000449	SX001	瓦 棟止瓦	14.0+	13.5+	8.24	胎土：にぶい赤褐 釉面：黒褐	瓦当直徑：13.0+	写真図版 49-12 20111216
国127-13 11000447	SX001	瓦 棟止瓦	高 16.0+	16.0+	1.5～ 2.0	胎土：白・にぶい白・明赤褐 釉面：暗赤褐・赤褐	モミツチ浴着	写真図版 49-13 20111214
国127-14 11000446	SX001	瓦 棟止瓦	高 20.5	28.5	1.7～ 2.5	胎土：明赤褐 釉面：褐色赤褐・暗赤褐	モミツチ浴着	写真図版 49-14 20111212
国127-15 11000448	SX001	瓦 曳瓦[力立瓦]	高 13.1	11.2	1.3～ 2.0	胎土：明赤褐・にぶい白・白 釉面：暗赤褐・赤褐		写真図版 49-15 20111215
国127-16 11000443	SX001	瓦 軒棧瓦	24.0+	19.4+	平：1.9 軒：4.0	胎土：にぶい白 釉面：暗赤褐		写真図版 49-16 20111206
国127-17 11000442	SX001	瓦 棧瓦	25.5	28.6	1.95	胎土：暗赤褐 釉面：暗赤褐		写真図版 50-17 20111205
国127-18 11000444	SX001	瓦 棧瓦	26.0	29.5	2.0	胎土：白 釉面：赤褐	ハセ浴着	写真図版 50-18 21001208
国128-19 11001174	SX001	染付磁器 碗	11.0	4.9	5.3	胎土：灰白	肥前系 型紙唐 明治後半～大正	写真図版 50-19 20111284
国128-20 11001175	SX001	染付磁器 碗	11.1	4.5	5.1	胎土：灰白	肥前系 型紙唐 明治後半～大正	写真図版 50-20 20111285
国128-21 11001176	SX001	染付磁器 皿	13.0	8.1	3.3	胎土：白	肥前 型紙唐 明治	写真図版 50-21 20111286・1287
国128-22 11001177	SX001	釉下彩器 小杯	7.3	3.5	4.5	胎土：白	肥前 錫阪転写 明治	写真図版 50-22 20111288
国128-23 11001178	SX001	色絵磁器 小杯	6.1	2.2	2.9	胎土：白	瀬戸・美濃力簡西 明治	写真図版 50-23 20111289・1290
国128-24 11000874	SX002	瓦 軒棧瓦	25.8	29.4	平：1.6 軒：4.0	胎土：にぶい赤褐 釉面：黒褐	瓦の一部浴着	写真図版 50-24 20111222

表 13 音無瓦窯跡近代の出土遺物

排岡・番号 採取番号	出土位置	種別 西種	寸法			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	高 / 厚			
図 128-25 11000876	SX002	瓦 棟瓦	26.8	30.5	2.1	胎土：に赤い粒 釉調：黒褐		写真図版 50-25 20111225
図 128-26 11000875	SX002	瓦 袖瓦	26.0	22.9	平：2.0 袖：4.9	胎土：赤褐色 釉調：黒褐	瓦の一部溶着	写真図版 50-26 20111224
図 128-27 11000877	SX002	瓦 雁脛瓦	23.8	25.4	平：1.9 ・棟：3.6	胎土：明赤褐色 釉調：に赤い黄褐		写真図版 50-27 20111226
図 129-28 11000878	SX003	瓦 輪違い	10.5	17.2	2.0	胎土：に赤い粒 釉調：暗褐	瓦の一部溶着	写真図版 50-28 20111227
図 129-29 11000879	SX003	瓦 輪違い	10.5	17.2	1.5	胎土：に赤い黄褐色 釉調：黒褐	瓦の一部溶着	写真図版 50-29 20111228
図 129-30 11000880	SX003	瓦 割廻斗	10.1	22.0	2.3	胎土：に赤い粒 釉調：黒	瓦の一部溶着	写真図版 50-30 20111229
図 129-31 11000881	SX003	瓦 割廻斗	10.9	22.1	2.1	胎土：に赤い粒 釉調：暗赤褐色	瓦の一部溶着	写真図版 50-31 20111230
図 129-32 11000882	SX004	瓦 棟瓦	26.0	22.5	平：1.9 袖：4.9	胎土：に赤い粒・橙 釉調：暗褐	瓦の一部溶着	写真図版 51-32 20111131
図 129-33 11000883	SX004	瓦 雁脛瓦	210+	224+	平：2.1 ・棟：4.1	胎土：に赤褐色・に赤い粒 釉調：暗褐	瓦の一部溶着	写真図版 51-33 20111232
図 129-34 11000884	SX004	瓦 棟瓦	26.0	29.0	1.6	胎土：に赤い粒 釉調：赤褐色		写真図版 51-34 20111233
図 129-35 11000885	SX004	瓦 棟瓦	26.2	28.9	1.7	胎土：に赤褐色 釉調：輪廓赤褐色	ハセ溶着	写真図版 51-35 20111234
図 130-36 11000886	SX004	瓦 軒棟瓦	18.7+	1.5+	平：1.7 軒：4.0	胎土：褐・黒褐色 釉調：に赤い赤褐色	瓦の一部溶着	写真図版 51-36 20111236
図 130-37 110001017	SX004	瓦 軒頭瓦	27.0	25.5	平：1.0 軒：4.0	胎土：赤褐色・粒 釉調：暗褐		写真図版 51-37 20111282
図 130-38 11000887	SX004	窯道具 ハセ	4.4	頭：1.9 先：1.1	-	に赤い粒・明褐	瓦溶着	写真図版 51-38 201112038
図 130-39 11000888	SX004	窯道具 ハセ	4.3	頭：2.1 先：1.0	-	赤褐色・暗赤褐色・に赤い褐	瓦溶着	写真図版 51-39 20111239
図 130-40 11000889	SX004	窯道具 ハセ	4.9	頭：2.0 先：0.8	-	粒・に赤い粒・に赤い黄褐	瓦溶着	写真図版 51-40 20110440
図 130-41 11000893	SX005	窯道具 モミヅチ	12.0+	4.1	3.1	粒・淡赤褐色		写真図版 51-41 20111247・1248
図 130-42 11000891	SX005	窯道具 モミヅチ	20.0+	4.0	3.5	灰褐色・に赤い黄褐		写真図版 51-42 20111243・1244
図 130-43 11000892	SX005	窯道具 モミヅチ	25.7	4.0	3.3	に赤い褐・明赤褐色		写真図版 51-43 20111245・1246
図 130-44 11000890	SX005	窯道具 モミヅチ	17.5+	4.0	3.3	褐色・明褐		写真図版 51-44 20111241・1242
図 130-45 11000896	SX006	瓦 割廻斗	18.0	9.0	1.7	胎土：に赤い粒 釉調：黒褐・黒		写真図版 51-45 20111251
図 130-46 11000899	SX006	瓦 雁脛瓦	12.3+	16.3+	平：1.8 ・棟：3.8	胎土：に赤い粒 釉調：黒褐・暗赤褐色・暗褐色	粘土塊溶着	写真図版 51-46 20111255・1256
図 130-47 11000894	SX006	瓦 雁脛瓦	25.5	4.0	平：1.7 ・棟：3.8	胎土：明赤褐色 釉調：暗赤褐色・灰赤		写真図版 51-47 20111249
図 130-48 11000895	SX006	瓦 熨斗瓦	21.6	19.0	1.7	胎土：に赤い赤褐色 釉調：黒		写真図版 51-48 20111250

表13 音無瓦窯跡近代の出土遺物

持団・番号 図版番号	出土位置	種別 器種	寸法			色調	備考	写真図版 写真登録番号
			口径 / 長	底径 / 幅	器高 / 厚			
図131-49 11000900	SX006	瓦 軒瓦	30.0	31.5	平:1.9 軒:4.0	胎土:にふい褐色・相 軒:赤褐色	瓦溶着	写真図版 51-49 20111257・1258・ 1259
図131-50 11000901	SX006	瓦 軒瓦	17.5+	25.5+	平:4.0 軒:1.8	胎土:にふい赤褐色 軒:灰褐色・黒褐色	瓦溶着	写真図版 51-50 20111262
図131-51 11000902	SX006	瓦 棟瓦	27.4	30.4	2.2	胎土:にふい褐色・にふい赤褐色 軒:暗褐色		写真図版 52-51 20111263
図131-52 11000897	SX006	窯道具 ハセ	4.2	頭:1.6+ 先:1.4	-	にふい褐色		写真図版 51-52 20111252
図131-53 11000898	SX006	窯道具 モミツチ	14.0+	4.3	4.2	明赤褐色・にふい褐色・相	瓦の一部溶着	写真図版 51-53 20111253・1254
図131-54 11000908	SX007	窯道具 モミツチ	14.5+	4.6	3.4	相		写真図版 52-54 20111271・1272
図131-55 11000904	SX007	瓦 輪窓い	18.2	10.8	1.5	胎土:褐色・にふい褐色 軒:暗褐色		写真図版 52-55 20111267
図131-56 11000906	SX007	瓦 輪窓い	17.9	11.0	1.7	胎土:褐色 軒:暗褐色		写真図版 52-56 20111269
図131-57 11000907	SX007	瓦 突斗瓦	20.8	23.3	2.0	胎土:相 軒:暗褐色	瓦溶着	写真図版 52-57 20111270
図131-58 11000903	SX007	瓦 鬼瓦	高 21.4+	23.5+	7.5	胎土:明赤褐色・相 軒:黒褐色		写真図版 52-58 20111265
図132-59 11000905	SX007	瓦 被瓦	19.0+	18.9+	平:1.8 軒:4.7	胎土:相 軒:暗褐色	瓦溶着	写真図版 52-59 20111268
図132-60 11000909	SX007	窯道具 ハセ	4.3	頭:1.9+ 先:1.3	-	にふい褐色		写真図版 52-60 20111278
図132-61 11000910	SX007	陶器 壺	高 30.7	29.6+	4.4	明赤褐色・にふい褐色・相	移動式の壺	写真図版 52-61 20111274
図132-62 110001015	南側 平坦面	瓦 棟瓦	17.0+	28.3+	11.3	胎土:黄褐色 軒:暗赤褐色 モミツチ・ハセ:にふい褐色	棟瓦2枚とモミツチ ハセが溶着	写真図版 52-62 20111275・1276 ・1277・1280
図132-63 11001016	南側 平坦面	瓦 棟瓦	26.2	31.1	5.5	胎土:にふい赤褐色 軒:暗赤褐色 モミツチ:相	棟瓦2枚とハセが溶着	写真図版 52-63 20111279・1281

表14 音無瓦窯跡旧石器→縄文時代の出土石器

持団・番号 図版番号	出土位置	種別 器種	寸法			重量 g	石材	備考	写真図版 写真登録番号
			長さ	幅	厚さ				
図132-64 11000698	表採	打製石器 ナイフ形石器	1.9+	1.4+	0.4+	1.2	黒曜岩	基部のみ残存	写真図版 52-64 20111055
図132-65 11000699	表採	打製石器 台形石器	3.0	2.5	1.0	5.6	無斑品質安山岩	完形	写真図版 52-65 20111056
図132-66 11000696	表採	打製石器 石鏃	1.8	1.4	0.3	0.6	黒曜岩	完形	写真図版 52-66 20111053
図132-67 11000697	試掘坑3	打製石器 石鏃	3.1+	2.4	0.5	2.8	無斑品質安山岩	先端部欠損	写真図版 52-67 20111054

4 まとめ

音無瓦窯跡では、近代の瓦窯跡の調査を行い、関連する遺構・遺物を検出した。また、旧石器～縄文時代の遺物も出土した。このうち、佐賀県で初の調査例となった近代の瓦窯に関してまとめておきたい。

遺構と遺物の特徴

音無瓦窯跡で確認された窯跡(SX001)は、煉瓦造りの階段状連房式登窯で、焼成室はロストル構造である。窯は、調査区北側の斜面に築かれている。調査では、燃焼室と第1～4焼成室が面的に確認され、さらに、調査区北壁に第5焼成室の焚室が確認された。窯の傾斜角度についてみると、音無瓦窯跡の第1焼成室の焚室から第4焼成室の奥壁を結んだ傾斜角度は 26° であるが、肥前陶磁器の窯の角度はおよそ $10^{\circ} \sim 20^{\circ}$ 前後のものが多く、傾斜角度が 25° を超えるものは稀であることから（佐賀県肥前古陶磁窯跡保存対策連絡会 1999）、音無瓦窯跡はこの種の窯の中では急傾斜の部類であるといえよう。

物原は調査区内で4ヶ所確認されたが、このうち物原SX007は、位置的に第1～第4焼成室の物原と考えてよさそうである。また、物原SX004～006は第1～4焼成室より高い位置にあることから、第4焼成室より上位の焼成室の物原であったと考えられるが、調査区外側に別の窯が存在し、その窯の操業によって形成された可能性がないわけではない。

次に、遺物についてだが、本書に掲載したものは出土した遺物の一部にすぎないので、必要に応じて未掲載のものも併せて述べる。音無瓦窯跡で出土した瓦は、全て陶質の釉薬瓦である。種類としては、桟瓦、軒桟瓦、軒隅瓦、輪違い、割腹斗瓦、熨斗瓦、袖瓦、軒丸瓦、雁振瓦、鬼瓦もしくは立浪形鳥伏間瓦、組み合わせ式の鬼瓦、棟止瓦の計12種類であり、1軒の屋根を葺く際に必要な種類が揃っている。瓦の釉薬は瓦を葺く際の上面に施されており、全体的に厚い。釉調はばらつきがあるものの、黒褐～暗赤褐色である。

瓦当文様についてみると、軒丸瓦の文様は連珠三巴文で、小型の巴をもち、連珠の間隔は広い。また、軒桟瓦の文様は均等唐草が退化したものと考えられるが、円形の中心飾を中央に配し、その左右に三日月形の文様が2対、さらにその外側に子葉が2枚ずつ配置される。ただし、中には円形の中心飾を持たないものもある。

窯道具としては、ハセとモミツチがある。ハセは長さ4.3cm前後のものが多い。SX005出土の38～40のように、通常ハセの側面には瓦の溶着痕が2ヶ所に認められるが、52(SX006)・60(SX007)のように溶着痕が4ヶ所認められるものもある。これは、ハセを再利用した際に生じたものであると考えられる。

モミツチは断面方形の棒状で、長さは25cm前後である。上面に瓦を立て並べた型が連続して残り、下面にはハセ頭の圧痕が残る。圧痕だけでなく、ハセ頭が折れて溶着しているものもある。中には44(SX005)のように、下面のハセ頭の圧痕を粘土で埋めているものがあるが、これも再利用する際の細工であると考えられる。また、モミツチには、粗い胎土で表面にモミの圧痕があるものと、細かい胎土で表面にモミの圧痕がないものがある。このような2種類のモミツチがあるということは、上述した窯道具の再利用と併せ、窯の操業が複数回であったことを表しているといえよう。

その他の道具としては、火鉢や移動式の竈がある。これらの胎土は、上記したモミの圧痕のあるモミツチと同様で、この窯で焼かれたものと考えられる。

音無瓦窯の操業時期については、第2焼成室から出土した明治時代後半の磁器（19～23）が、窯を廃業する際、祭祀で用いられたものとも考えられる。また、窯は2回以上操業していたことが判るだけで、出土した瓦を種類ごとに比較しても、大きさや形態に差異がなく、操業が長期間に及んだとは考えにくい。地元の古老への聞き取りや地誌類の情報を総合すれば、窯の操業時期は明治時代とみられ、焼成室から出土した磁器の年代と矛盾しない。また、窯の操業期間は短期間だったらしいが、これも調査成果とは矛盾しない²⁾。

窯詰めの方法

瓦の窯詰めの方法は、煉瓦や窯道具に残された痕跡から推定すると、次の通りとなる。

桟瓦の場合、階段状に並んだ各焼台の上に、窯の長軸に対し直角に立て並べられる。その際、瓦は焼台と焼台をまたいで（焰道をまたいで）立て並べられる。瓦を立てる際には、焼台と瓦の溶着を防ぐためにモミツチが（4・5、写真図版49）、瓦と瓦の溶着を防ぐためにハセがそれぞれ用いられる（63、写真図版52）。立て並べた瓦の上にはさらにモミツチが敷かれ、その上に同じように瓦が立て並べられる。

軒桟瓦（49）や袖瓦（26）についてみると、瓦の凹面平の中央部の2ヶ所に瓦の溶着が認められる。この溶着痕の幅は、割腹斗瓦や熨斗瓦の幅と一致することから、これらを挟んで立て並べられたと推定される。軒桟瓦や袖瓦は瓦当や袖の部分が張り出し、並べた際に隙間が生じるため、空間の無駄を省き、かつ、安定的に瓦を並べるためにこれらを挟んだのだろう。なお、軒桟瓦の瓦当にはモミツチの溶着痕はみられないが、これはこの上に瓦を積まなかったことを表しており、軒桟瓦は焼成室の中で最上段に立て並べたことが推定される。

ちなみに、石見地方の窯詰方法を参考にして、第1焼成室をモデル（焼台3段×10列）に窯詰めされた瓦数を試算すると、1つの焼成室で桟瓦ならば約351枚が焼くことができ、第1～5焼成室だけでも1,755枚の瓦が焼けたことになる。ただし、第3・4焼成室についてはロストル部の長さが若干長いことから、焼台が4段あった可能性もあり、さらに多くの瓦が焼けたことがあり得よう。

音無瓦窯跡と石州瓦

江戸～明治時代にかけての釉薬瓦には、越前系、瀬戸美濃系、南加賀系、石州系という4系統があり、これらの地域及びその影響を受けた限られた地域でしか生産されていない（久保1994・2005）。さらに九州においても、少なくとも戦後間もなくまでは焼瓦の生産が基本であったことから、その点で音無瓦窯の釉薬瓦は特異なものであるといえるだろう³⁾。したがって、音無瓦窯跡は、他地域からもたらされた技術により営まれたと考えるのが自然であろう。

音無瓦窯跡の特徴は、①棟の頂部に付く鳥伏間瓦と鬼板瓦が合体した棟止瓦が出土すること、②基本的には瓦を葺く際の上面のみに施釉すること、③モミツチ・ハセ等の窯道具を使った窯詰技術をもつこと、④焼成室がロストル構造をもつ階段状房式登窯であることの4点である。この4点は、上述した4系統のうち石州系の特徴と合致する⁴⁾。このように、製品・技術・窯構造をみると、音無瓦窯跡には石州系の技術が取り入れられているといえるだろう⁵⁾。

石見地方（現在の島根県西部）を中心に生産される釉薬瓦は一般に「石州瓦」と呼ばれ、出雲地域で採れる来待石と呼ばれる凝灰岩を溶かした「来待釉」というやや光沢のある暗褐色の釉薬が厚く施されることが特徴である。石州瓦は、明治期には廻船問屋や北前船による運搬・販売によって北陸や山陰などの日本海側だけでなく、九州にもたらされたとされる（内藤編1998、江津市文化財研究会1988）。

また、石見地方の「石見焼」の職人は、明治時代以降日本海側を中心に渡り歩き、各地の陶磁器や瓦の生産に関わりをもっており⁶⁾、九州においても北部九州を中心に宮崎や熊本などでも陶磁器生産に従事し、玄界灘沿岸部では瓦生産にも従事していたとされる⁷⁾。これに加え、各地の窯窓に携わった石見地方の窯窓師も九州で窯を築いたとされる（平田1996）。このような職人達の動きをみると、九州（特に北部九州）において、石州瓦生産に必要な技術は十分に伝えられていたことがうかがえる。

以上のように、製品・技術・窯構造、さらに石州瓦の広がりや職人達の動態等々を総合すると、音無瓦窯跡の釉薬瓦は、上記した「石見焼」職人や、彼らの系譜を引く職人によって焼かれたと考えるのが妥当であろう。

音無瓦窯で釉薬瓦が生産された理由は、一義的には、この地が九州では降雪量の多い寒冷地であり、寒さに強い釉薬瓦の需要が見込まれたということであろうが⁸⁾、その背景には、上述したような北部九州、特に玄界灘方面に

おける「石州瓦」の影響の大きさを想定せざるを得ない。

明治時代の釉薬瓦生産については、石見地方をはじめとする瓦生産の盛んな地域を除くと不明な点が多く、今回の調査事例は明治時代の瓦の生産やその伝播の一端を明らかにする上で重要であるといえる。佐賀県は陶磁器生産の盛んな地域でもあり、今後は瓦生産と陶磁器生産との関係も併せて考慮する必要があるだろう。

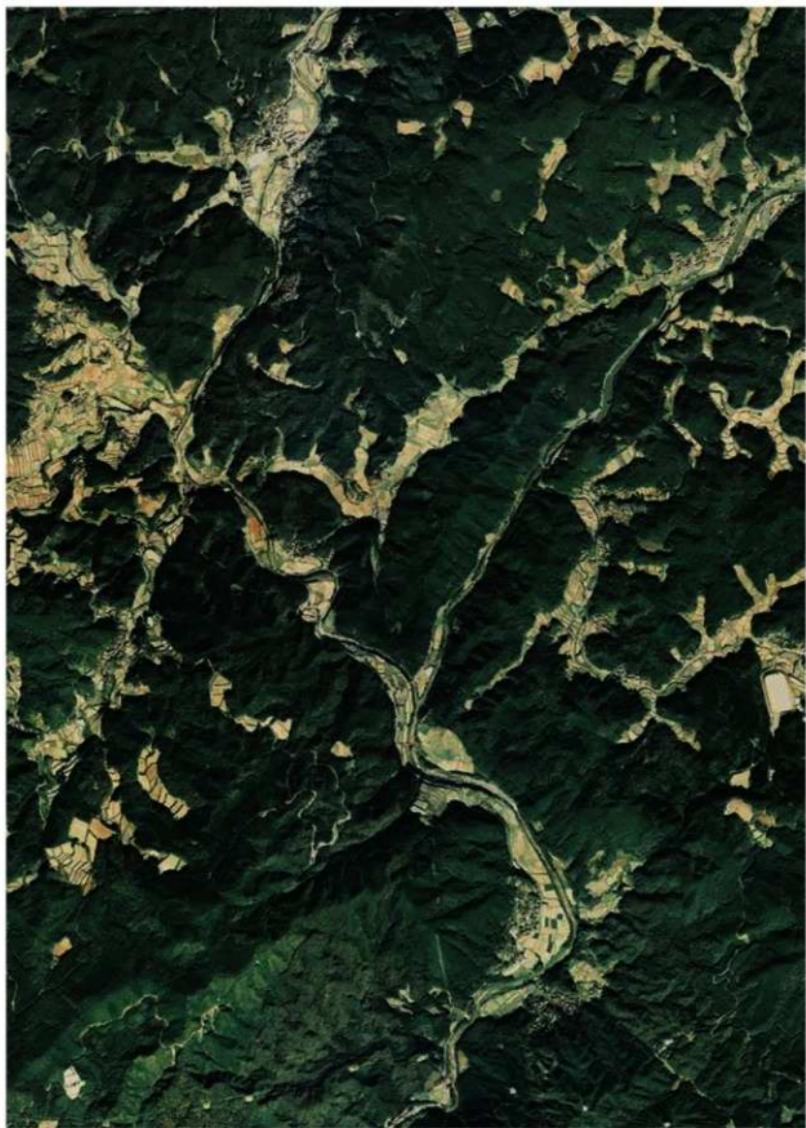
注

- 九州陶磁文化館大橋康二氏の御教示による。
- 地元の古著（1930年生まれ）によると、古者の相次ぐ代に窯業のため土地を貸していたが、瓦は不良品が多く、ほとんど流通せず、更に操業期間は2~3年であったという。「富士山史」では、財北山村（現在は佐賀市）を中心に出版されていた地誌『北山公論』（大正14~昭和14年刊）を参考に、当時の北山村の産業をまとめているが、セメント瓦業者らが軒記載されているのみで、音無瓦窯に該当すると思われる瓦製造業の記述はない。つまり、瓦窯は少なくとも大正14年以前には操業されていなかった可能性が高い。ちなみに、現在周辺に音無瓦窯製の瓦が屋根に残されているのは、大野の金福寺本堂正面の軒部分のみで、他には中庭にある中原音頭館の南落の埋め並べられた瓦戸や、境内に納められている舎門型や獅子頭の瓦戸間瓦がみられるだけである。
- 九州において在地の技術による釉薬瓦生産を示す例及び瓦の出土は下記のようなものがあるが、いずれも近代以前に限られる。
- 熊本八代市「その谷窯跡：17世紀中期に釉薬瓦が生産される（八代市教育委員会1996）、ロスト模造を持たない通房式登場。
- 佐賀県多久市多久聖廟：宝永5（1708）年廟造営の際に、肥前で焼かれた釉薬瓦が置かれた（佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏の御教示による）。
- 長崎県諫早市諫早御厨敷：石見地方の影響を受けていると考えられる釉薬瓦が出土しているが、幕末以降の層からの出土であり、時期の詳細は不明である。出土した軒瓦の瓦当には、諫早家の家紋である上り鰐文様が刻まれている（長崎県教委2011）。
- 4) 島根県教育厅熱田豊臣氏、江津市教育委員会木本茂徳氏の御教示による。
- 5) 音無瓦窯跡と島田窯（島根県大田市に所在する石州瓦の窯：大正時代～1991年操業）の構造を比較してみても、窯の傾斜が25°前後であること、各施窯室の傾斜が上の焼成室ほどわずかに急であること、ロスト模造であること、焼成室出入り口付近の外壁に崩壊防止のための「押え」を施すことなどの共通点がみられる。これには、島根県教育厅熱田豊臣氏の御教示による。
- 6) 石見焼の職人は、陶器生産だけでなく、瓦生産にも従事していたとされる（平田1979）。
- 7) 石見焼の職人には、瓦や掃除などの生活器物を多く「丸物師」と専ら石州瓦だけを焼く「瓦師」があり、このうち「丸物師」は瓦を焼く技術も持ち合わせており、瓦生産にも従事したとされる。「丸物師」は、陶磁器生産が盛んだった九州地方にも多く出向いており、北部九州では福岡県の小山窯、上野窯などの陶器生産ではなく、福岡市臨山などの磁器生産でもわり、中には新たに窯を開き永住するものもいたとされる（平田1979）。また、玄界灘沿岸部の福岡市西部の小倉や糸島地区では、石見地方の職人が焼瓦生産に従事したとされる例もある（前田2002）。このよう九州地方への石見焼の職人の進出は、昭和50年代まで続いているとされる（平田前掲）。これら九州地方に出向く、瓦焼生産に関わった石見焼の職人とは、上記の「丸物師」であったと推測したいが、「瓦師」の関与を否定する材料はない。
- 8) 石見焼の職人が関与し瓦生産を行ったとはい、必ずしも釉薬瓦が作られたわけではない。九州地方で石見焼の職人が関与し釉薬瓦が生産されたと考えられるのは、現時点では音無瓦窯跡を除くと、福岡県東峰村に所在する奥須原瓦窯跡の例があるだけである。窯跡からは、釉薬瓦と併せてセラモチツなど「石州系」で用いられるものと同様の窯道具が採集されており（同村教育委員会日高正幸氏御教示）、さらに同村内には、石見焼の職人が陶器生産に従事したとされる小石原焼の窯があることを考えると、奥須原瓦窯跡における釉薬瓦生産に石見焼の職人の関与があったことは十分肯定されよう。音無瓦窯跡と奥須原瓦窯は、九州では降雨量の多い畠地に所在する点で共通する。

第6章 引用・参考文献

- 熱田豈保（1993）「石見地方における近世の窯業生産」『八戸立つ風土記の丘』NO.122・123 島根県八戸立つ風土記の丘
嘉瀬川山田建設記念調査委員会（2000）『嘉瀬川山田建設記念調査報告書』富士山町教育委員会
久保智樹（1989）「近世から後醍醐天皇における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』第7号：福井考古学会
久保智樹（1992）「近世後醍醐天皇における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』第10号：福井考古学会
久保智樹（1994）「近世赤瓦の技術系譜—「吉備瓦」の歴史と発展—」『八戸立つ風土記の丘』NO.124 島根県八戸立つ風土記の丘
久保智樹（2005）『日本古窯をめぐる赤瓦』『日本海防史大系』第4巻「近世編」：清文館出版
江津市教育委員会（2003）『矢頭田跡』
江津市文化財研究会（1988）『石見器 第十二号 石見焼（丸物と瓦）』
佐賀県教育委員会（2011）『小ヶ倉遺跡・大遺跡・九郎遺跡：佐賀県文化財調査報告書第186集
佐賀県肥前古窯跡窯跡保全対策整備計画（1999）『肥前古窯跡窯跡基盤調査・基本方針策定報告書』
島根県教育委員会（1992）「石見空港建設予定地内道路」理藏文化財発掘調査報告書
島根県教育委員会（2001）「石見焼開祖遺跡調査報告書」1『飯田A遺跡・長束坊跡窯跡』一般国道9号建設予定地内理藏文化財発掘調査報告書V
長崎県教育委員会（2011）「諫早家御厨敷跡：長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第2集
内藤中編（1997）『福岡の歴史』河出書房新社
平田正典（1979）『石見焼陶器史考』石見地方研究会
平田正典（1996）『篠窯2代記』抄
富士町史編さん委員会（2000）『富士町史』上巻 富士町
前田一郎（2002）『街道筋のサンキモノー博多瓦町と今宿の瓦飾物語』
八代市教育委員会（1996）『篠師堂跡・うその谷窑跡』八代市文化財調査報告書第8集
山崎信二（2008）『近世瓦の研究』同成社

写真図版



嘉瀬川ダム予定地周辺（真俯瞰合成）（平成4年10月撮影 嘉瀬川ダム工事事務所提供）

写真図版2



平畠遺跡遠景（南から）（平成4年10月撮影 嘉瀬川ダム工事事務所提供）

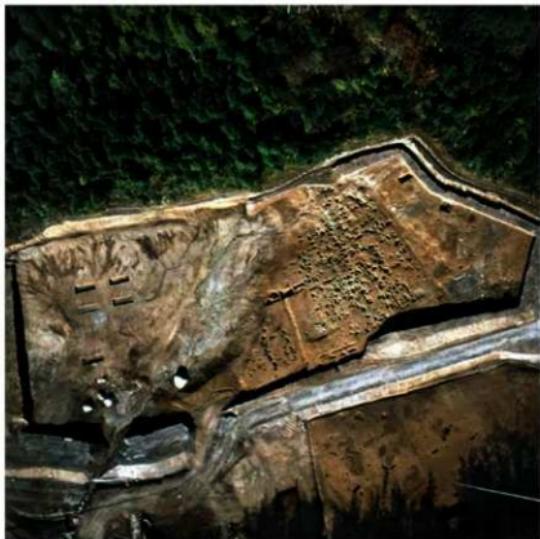


平畠遺跡全景（南西から）



平畠遺跡全景（上が北東）

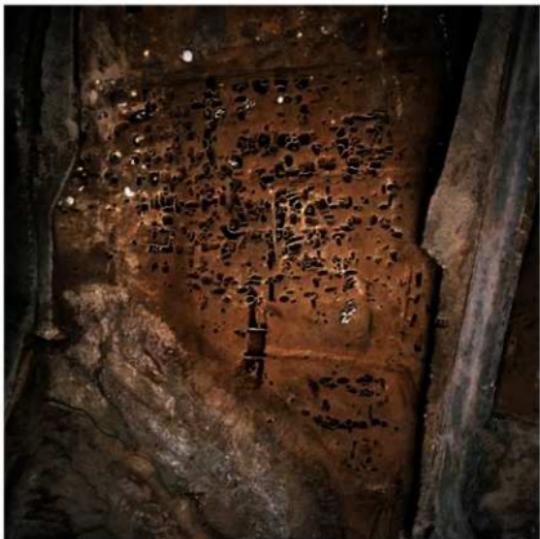
写真図版 4



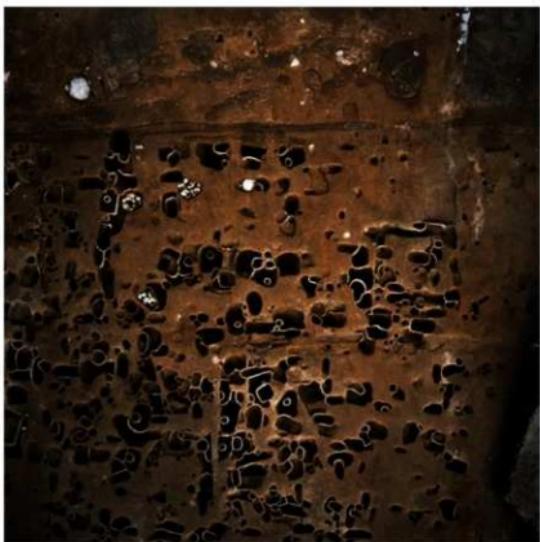
1区全景（上が西）



1区北半部（南東から）



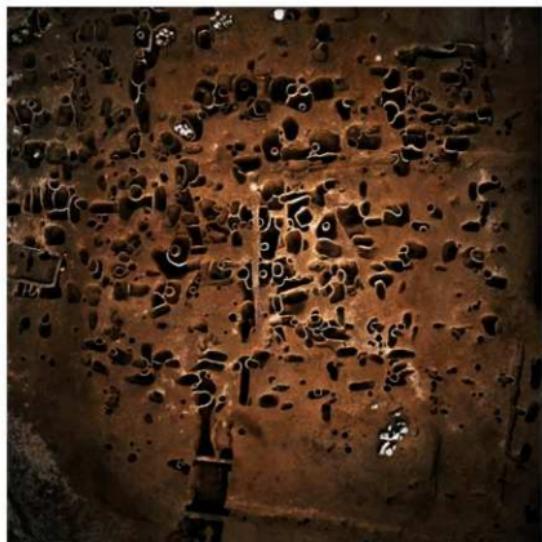
遺構集中部（上が北東）



遺構集中部 中央から東側（上が北東）



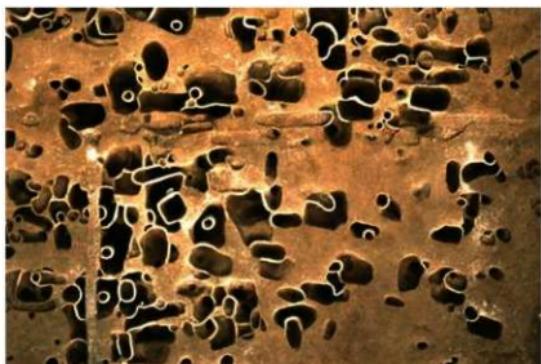
遺構集中部 中央から西側（上が北東）



遺構集中部 中央から南側（上が北東）



SB3001・SB3007 周辺 (上が北東)



SB3018 周辺 (上が北東)



SB3040 周辺 (上が北東)

写真図版 8



SB3046 周辺（上が北東）



SX1874、SD1001・1002、SB3052 周辺（南東から）



SB3052 周辺（上が北東）



SX1874 (東から)



SD1001・SD1002 (南東から)



SB3010PG 碓出土状況 (北から)



1区東壁の土層 (北から)



試掘坑 3 の土層 (南東から)



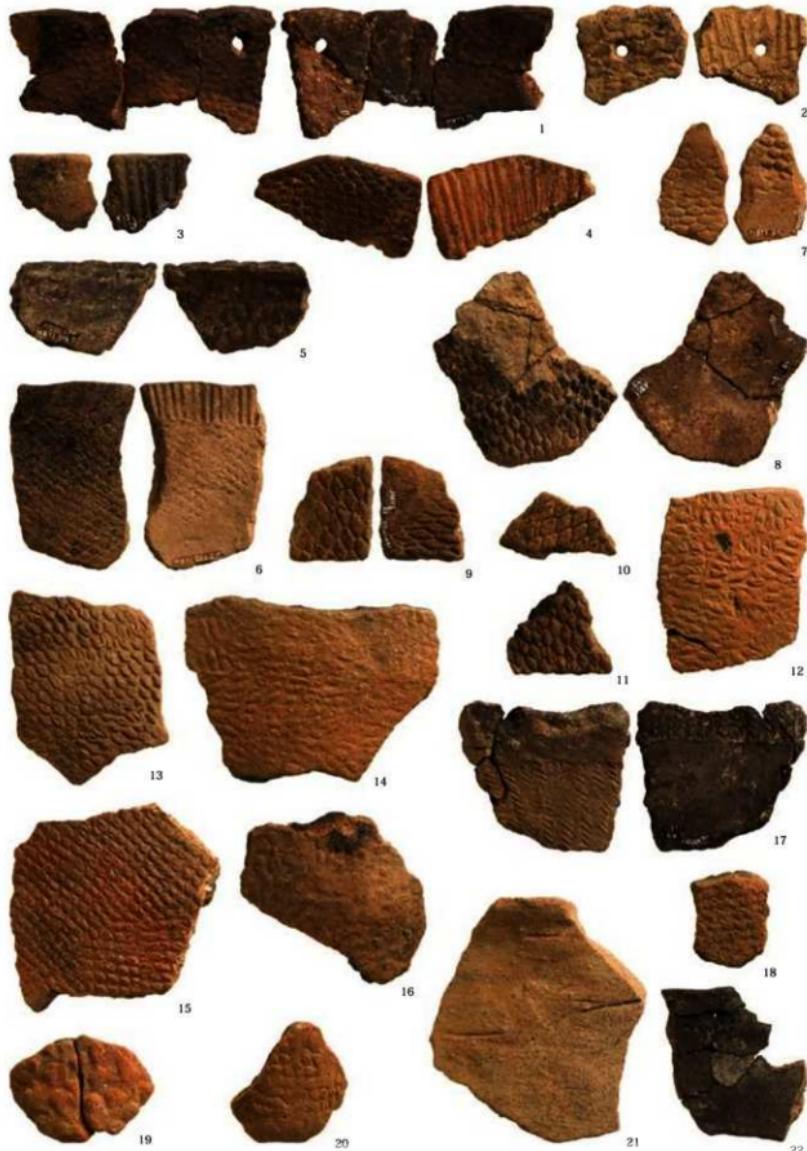
試掘坑 8 の土層 (北から)



試掘坑 11 の土層 (北から)



試掘坑 14 の土層 (東から)



平畠遺跡縄文時代の出土遺物 1

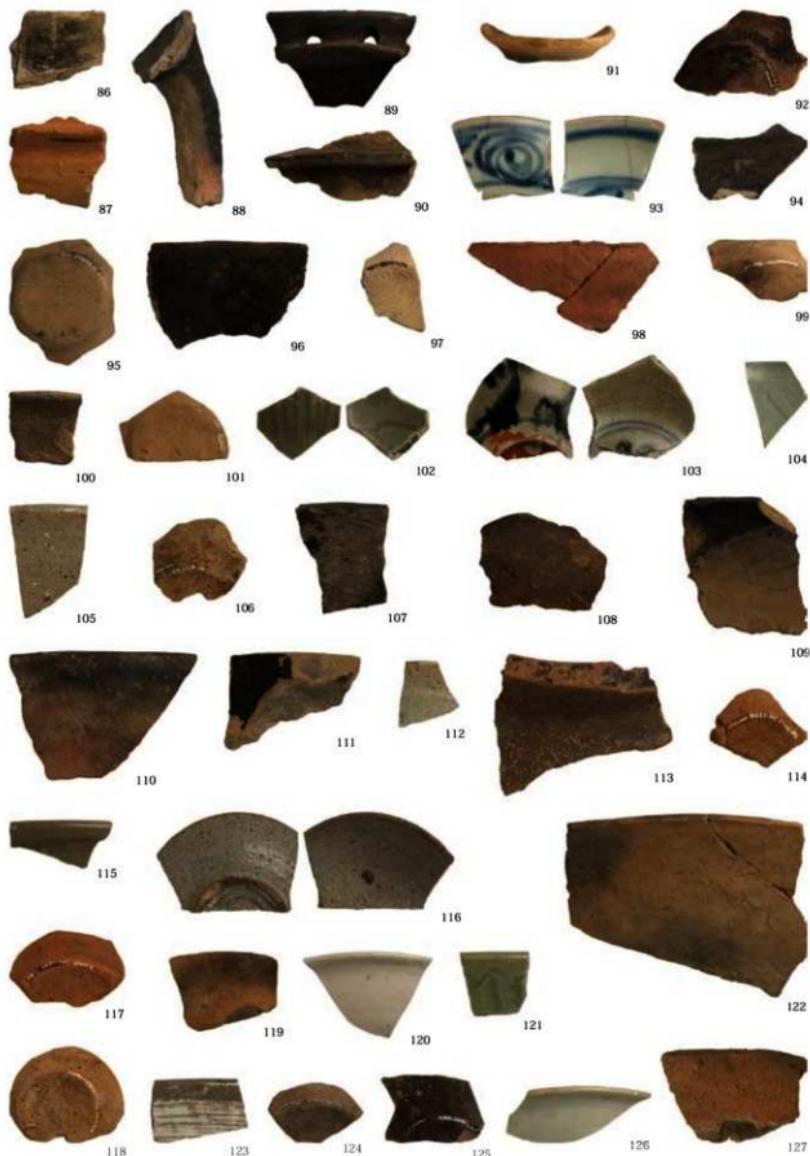


平畠遺跡縄文時代の出土遺物 2

写真図版 12



平畠道跡中世の出土遺物 1



平畠通跡中世の出土遺物 2

写真図版 14



平畠道路中世の出土遺物 3



大野遺跡遠景（南から）　（平成4年10月撮影　嘉瀬川ダム工事事務所提供）

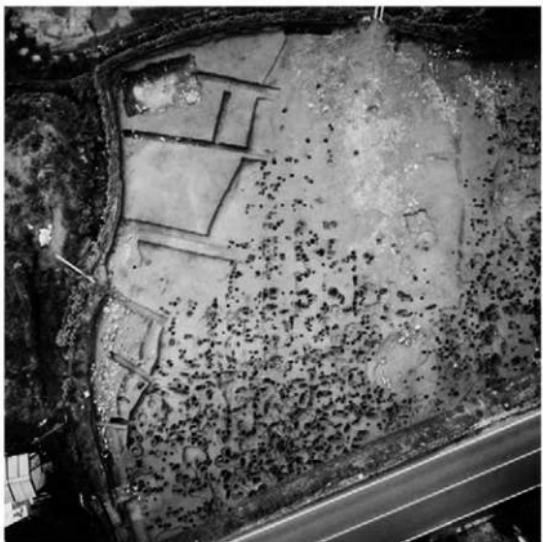
写真図版 16



1区 遠景（北から）



1区 遠景（北西から）

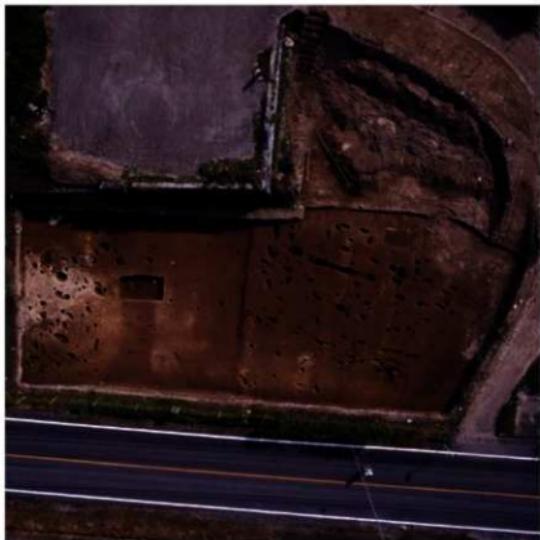


1A区 南半部（真上から）



1B区 全景（真上から）

写真図版 18



4B 区 全景（真上から）



4A 区 全景（真上から）



5B 区 全景 (北東から)



8 区 全景 (北から)



6A 区 全景 (北から)

写真図版 20



1B 区 SD1835 (北東から)



1B 区 SD1246 (北東から)



1B 区 SD1246 + 1835 土層 (南西から)



1B 区 SD1246 + 1835 + SD1851 土層 (南東から)



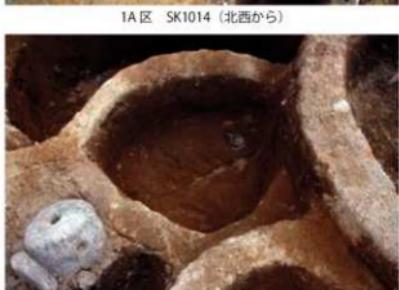
1A 区 SK1016 (東から)



1A 区 SK1014 (北西から)



1B 区 SK1727 (南西から)



1A 区 P1023 約子状銅製品出土状況 (北から)



5E区 全景（南東から）



5E区 SX5008（東から）



5E区 東壁土層（西から）

写真図版 22



SE 区 西壁土層（東から）



SE 区 SX5008 と東壁土層（北西から）



SE 区 SX5008（西から）



SE 区 SX5008 土師器小皿出土状況（北から）



6B・C 区 遠景（南西から）



6B 区 棱出状況（北東から）



6B 区 SA6008（東から）



6B 区 SB6004 敷石出土状況（東から）



6B 区 全景（北から）



6C 区 全景（北から）

写真図版 24



大野遺跡縄文～古墳時代の出土遺物、中世の出土遺物 1



大野遺跡中世の出土遺物 2

写真図版 26



大野遺跡中世の出土遺物 3



大野遺跡中世の出土遺物 4

写真図版 28



大野遺跡中世の出土遺物 5



大野遺跡中世の出土遺物 6

写真図版 30



大野遺跡中世の出土遺物 7



大野遺跡中世の出土遺物 8

写真図版 32



4B 区 西壁土層（東から）



5B 区 南壁土層（東から）



1A 区 SD1009・1862（東から）



1A 区 SD1009・1862 土層（南から）



5B 区 SB5013（北から）



8 区 SK8001（北から）



1A 区 SK1005（南東から）



1A 区 SX1244（東から）



1A 区 SX1024 土層（北西から）



1A 区 SX1024 (北から)



5B 区 SX5009 (南から)



5C 区 全景（北西から）



SCN 区 全景(南から)



SCS 区 全景(南西から)



SCS 区 道路構造土層（南西から）



SC 区 試掘坑 20 (南から)

写真図版 34



大野遺跡近世以降の出土物 1



大野遺跡近世以降の出土物 2

写真図版 36



大野遺跡近世以降の出土物 3



フルタ遺跡遠景（南から）（平成4年10月撮影 嘉瀬川ダム工事事務所提供）

写真図版 38



遺跡 遠景（北東から）



遺跡 全景（東から）



1区 全景（北東から）



1区 試掘坑4土層（北西から）



1区 南壁土層（西から）



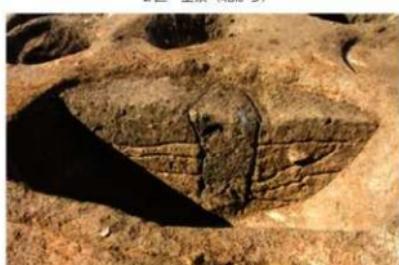
1区 SX1002（西から）



2区 全景（北から）



2区 P2062土層（北から）



2区 P2065土層（南から）



3区 試掘坑1土層（から）

写真図版 40



フルタ遺跡縄文時代・中世の出土物



フルタ遺跡縄中世・近世の出土遺物



調査区全景 調査前（南西から）



調査区全景 伐採後（南から）



SX001 全景 棲出時（南から）

写真図版 43



調査区全景（南から）



SX001 全景（南から）



SX001 全景（東から）



SX001 南北土層断面（南西から）



調査区北壁・試掘坑1土層断面（南西から）

写真図版 45



SX001 焚き口土層断面（南西から）



SX001 燃焼室土層断面（南西から）



SX001 東西土層断面西側（南から）



SX001 東西土層断面東側（南西から）



調査区北壁土層断面西側（南東から）



調査区北壁土層断面（南東から）



調査区北壁土層断面東側（南東から）



試験坑1 土層断面（南東から）



第1・第2焼成室のロストル構造（南から）



SX001 燃焼室・第1焼成室出入口（南東から）



SX001 第2～第4焼成室出入口（南東から）

写真図版 47



SX001 燃焼室（南から）



SX001 燃焼室内側の煉瓦積（東から）



SX001 第1焼成室（南東から）



SX001 第1焼成室口ストル部（東から）



SX001 第2焼成室（南東から）



SX001 第2焼成室口ストル部（東から）



SX001 第2焼成室染付磁器出土状況（南東から）



SX003 第3焼成室口ストル部（東から）



SX001 第3焼成室（南東から）



SX001 第4焼成室（南東から）



SX002（南西から）



SX003（南東から）



SX004・SX005・SX006 全景（南から）



SX004 近景（北東から）



SX005 近景（北東から）



SX006・SX007 全景（南西から）



音無瓦窯跡の出土遺物 1



17



19



20



18



21



22



23



26



29



27



25



28



24



31



30

音無瓦窯跡の出土遺物 2

写真図版 51



音無瓦窯跡の出土遺物 3



音無瓦窯跡の出土遺物 4

報告書抄録

ふりがな	ひらばたけいせき・おおのいせき 2・ふるたいせき・おとなしかわらがまと						
書名	平岳遺跡・大野遺跡 2・フルタ遺跡・音無瓦窯跡						
副書名	嘉瀬川ダム建設に伴う理歴文化財発掘調査報告書						
巻次	7						
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第195集						
編著者名	渡谷 格・徳永貞昭・西野元勝・吉田大輔						
発行機関	佐賀県教育委員会						
所在地	〒840-8570 佐賀市城内一丁目1番59号						
発行年月日	平成24(西暦2012)年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度分分分	東経 度分分分	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
平岳遺跡	佐賀市富士町 大字大野	412045 0014	33° 25' 13" 世界測地系 33° 25' 25"	130° 12' 11" 世界測地系 130° 12' 3"	20070302 ~ 20080205	13,000	嘉瀬川ダム建設に 伴う事前調査
大野遺跡	佐賀市富士町 大字大野	412045 0012	33° 25' 32" 世界測地系 33° 25' 44"	130° 12' 18" 世界測地系 130° 12' 10"	20050712 ~ 20090331 19960509 ~ 19960930	4~8区 29,200 1区 3,500	
フルタ遺跡	佐賀市富士町 大字大野	412045 0011	33° 25' 33" 世界測地系 33° 25' 45"	130° 12' 10" 世界測地系 130° 12' 2"	20080515 ~ 20081016	11,700	
音無瓦窯跡	佐賀市富士町 大字大野	412045 0082	33° 24' 51" 世界測地系 33° 25' 3"	130° 12' 43" 世界測地系 130° 12' 35"	20100609 ~ 20100824	1,500	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
平岳遺跡	集落跡	縄文	-	繩文土器・石器			
	集落跡	中世	掘立柱建物 55 櫛列 6 溝 2 性格不明遺構 1	在地系土器 防長系瓦質土器 田舎陶器 中国・朝鮮陶磁	中世後期の領主居 館をほぼ全掘		
大野遺跡	集落跡	縄文～古墳	掘立柱建物 櫛列 溝 上坑 石敷道構	土器・石器			
	集落跡	中世	掘立柱建物 櫛列 溝 上坑 石列 石敷道構	在地系土器 防長系瓦質土器 須恵器系陶器 田舎陶器 中国・朝鮮陶磁 滑石製品	階層の高い建物群 か		
	集落跡	近世	自然流路 2 柱穴・小穴	在地系土器 鐵治閏進遺物 石製品 瓦			
フルタ遺跡	集落跡	縄文	-	繩文土器・石器			
	集落跡	中世	自然流路 2	在地系土器 防長系瓦質土器 須恵器系陶器 中国・朝鮮陶磁			
	集落跡	近世	柱穴・小穴	在地系土器 国産陶磁			
音無瓦窯跡	集落跡	旧石器～縄文	-	石器			
	窯跡	近代	窯跡 I 原瓦窯	施釉瓦 国産陶磁 窯道具 煉瓦	近世前後の投棄的 な建物群の可能性 がある		

佐賀県文化財調査報告書第 195 集

平畠遺跡・大野遺跡 2・フルタ遺跡・音無瓦窯跡

-嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7 -

平成 24 年（2012）年 3 月 31 日

発行 佐賀県教育委員会

〒 840-8570 佐賀県佐賀市城内 1 丁目 1 番 59 号

印刷 大同印刷株式会社

〒 849-0902 佐賀県佐賀市久保原町大字上和泉 1848-20

